

楽師長 J. G. ピゼンデルの時代（1731～1755）におけるドレスデン宮廷楽団
——奏者たちの合奏形態に関する考察——

2011 年度入学

学籍番号 2311907

新林 一雄

凡例

1. 略号

図書館及び資料館

- D-Bga Berlin, Stiftung Preußischer Kulturbesitz, Geheimes Staatsarchiv
- D-Dl Dresden, Sächsische Landesbibliothek - Staats- und Universitätsbibliothek
- D-Dla Dresden, Sächsisches Hauptstaatsarchiv

資料名

- JunP Hans Rudolf Jung, *Johann Georg Pisendel: 1687-1755: Leben und Werk: Ein Beitrag zur Geschichte der Violinmusik der Bach-Zeit* (Ph. D. diss., Jena, 1956).
- LWV Herbert Schneider, *Chronologisch-thematisches Verzeichnis sämtlicher Werke von Jean-Baptiste Lully (LWV)* (Tutzing: Schneider, 1981).
- MG2 *Die Music in Geschichte und Gegenwart*, 20 vols., 2nd ed., edited by Ludwig Finscher (Kassel: Bärenreiter; Stuttgart: Metzler, 1994-2008).
- NG2 *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, 29 vols., 2nd ed., edited by Stanley Sadie, executive editor, John Tyrrell (London: Macmillan, 2001).
- RV Peter Ryom, *Antonio Vivaldi: Thematisch-systematisches Verzeichnis seiner Werke* (1st ed., Leipzig: Deutscher Verlag für Musik, 1974; 3rd ed., Wiesbaden: Breitkopf und Härtel, 2007).
- ZWV Wolfgang Reich, *Jan Dismas Zelenka: Thematisch-systematisches Verzeichnis der musikalischen Werke (ZWV)*, 2 vols. (Dresden: Sächsische Landesbibliothek, 1985).

楽器名

Vl	violin
Vla	viola
Vlc	violoncello
Cb	contrabass
Vdg	viola da gamba
Fl	flute
Ob	oboe
Fg	bassoon
Hr	horn
Cem	cembalo
Org	organ
Key	keyboard instrument
Lut	lute
Pan	pantaleon
Bas	bass instrument

2. 楽器の名称

本論文が参照する年俸表や名簿、手稿譜において、リュート族には「リュート **Lute**」と「テオルボ **Tiorba**」、低音弦楽器には「コントラバス **Contre Basse**」と「ヴィオローネ **Violone**」、ファゴットには「バッソノーノ **Bassono**」や「バソン **Basson**」、「ファゴット **Fagott**」の名称が用いられている。こうした種々の名称は、同じ種類の楽器を指す場合もあれば、異なる種類の楽器を意味する場合もあったと考えられている。しかしこれらの資

料において、上記の名称がいずれの意味で用いられたかは解明されていない。従って本論文においては便宜的に、これらの楽器の総称としてリュート、コントラバス、ファゴットを用いる。また、資料に記載された名称を原文のまま記す必要がある場合は、「バソン Basson」のように、その表記を鍵括弧によって括り、初出の場合は原文の綴りを併記する。

3. 人名及び生没年の表記

ドレスデンの音楽家の名前は、綴りが必ずしも統一されていない。本論文における彼らの名前の綴りは、原則として、ラントマンが編纂した人名目録に記載された表記に従う¹。また、本論文において言及するドレスデンの音楽家の大半は、生没年が不明である。本来ならば各人の初出時にそのことを記すべきであるが、彼らは多数に上るため、生没年不明と明記することは省略した。

¹ Ortrun Landmann, *Namenverzeichnisse der sächsischen Staatskapelle Dresden: Eigene Benennungen, Namen der Administratoren, der Musicalischen Leiter und der ehemaligen Mitglieder von 1548 bis 2013, in systematisch-chronologischer Folge.* (2017), accessed September 5, 2017, http://www.staatskapelle-dresden.de/fileadmin/home/pdf/diverses/Historische_Verzeichnisse__Stand_Juli_2017.pdf.

目次

凡例.....	i
序.....	1
第 1 章 楽師長ヴォリュミエとドレスデン宮廷楽団の奏者たち.....	14
第 1 節 ヴォリュミエが楽師長を務めた時代のドレスデン宮廷楽団.....	15
第 2 節 12 点の年俸表と名簿の説明.....	23
第 1 項 ドレスデン宮廷楽団の年俸表と名簿.....	24
第 2 項 年月日が明記された年俸表.....	25
第 3 項 年月日が明記されていない年俸表.....	26
第 4 項 各資料が書かれた時期について.....	30
第 3 節 1709 年の「オーケストラの年俸表」.....	30
第 4 節 1711 年の「宮廷楽団の年俸表」.....	34
第 5 節 1717 年の「宮廷楽団の年俸表」.....	41
第 1 項 「チェロ奏者」と「ヴィオロン奏者」.....	47
第 2 項 1718 年と 1719 年の出張と若手奏者たち.....	50
第 6 節 1717 年から 1729 年までの年俸表と名簿.....	57
第 1 項 1717 年頃の「宮廷音楽家の年俸表」.....	59
第 2 項 1718 年頃の「音楽家の年俸表」.....	62
第 3 項 1719 年の「音楽家の年俸表」.....	66
第 4 項 1720 年 5 月の「音楽家の年俸表」.....	69
第 5 項 1720 年 9 月の「音楽家の年俸表」.....	71
第 6 項 1721 年頃の「宮廷音楽家の年俸表」.....	75
第 7 項 1725 年頃の「宮廷音楽家の年俸表」.....	79
第 8 項 1729 年の「宮廷楽団の名簿」.....	82

第 9 項	楽器の種類を変更した奏者たち	85
第 7 節	第 1 章の総括	88
第 2 章	楽師長ピゼンデルとドレスデン宮廷楽団の奏者たち	99
第 1 節	ピゼンデルが楽師長を務めた時代のドレスデン宮廷楽団	101
第 2 節	「宮廷楽団の名簿」に記載された奏者たち	110
第 1 項	1731 年と 1732 年	125
第 2 項	1733 年から 1744 年	125
第 3 項	1745 年から 1755 年	131
第 4 項	1731 年と 1755 年の比較	135
第 3 節	フベルトゥスブルクに向かったドレスデン宮廷楽団の奏者の特定	138
第 1 項	対象とする資料の確認	139
第 2 項	1736 年の「オーケストラの項目」	143
第 3 項	1737 年の「オーケストラの項目」	146
第 4 項	1739 年の「楽団の項目」	148
第 5 項	1741 年の「明細」	151
第 6 項	1742 年の「オーケストラの項目」	154
第 7 項	1743 年の「オーケストラの項目」	157
第 8 項	1736 年から 1743 年までのフベルトゥスブルクへの出張	160
第 9 項	1747 年の「オーケストラの項目」	165
第 10 項	1749 年の「オーケストラの項目」	168
第 11 項	1751 年の「オーケストラの項目」	170
第 12 項	1753 年の「オーケストラの項目」	173
第 13 項	1755 年の「オーケストラの項目」	175
第 14 項	1747 年から 1755 年までのフベルトゥスブルクへの出張	178

第 4 節 第 2 章の総括.....	184
第 3 章 年俸表や名簿から算出される奏者の数とその配分	190
第 1 節 年俸表や名簿に記載された奏者の数の算出	190
第 2 節 楽師長ヴォリュミエの時代の年俸表や名簿に記された奏者の数.....	194
第 1 項 1709 年の「オーケストラの年俸表」	194
第 2 項 1711 年から 1717 年までの年俸表	199
第 3 項 1717 年頃の「宮廷音楽家の年俸表」	202
第 4 項 1718 年頃から 1720 年 9 月までの「音楽家の年俸表」	210
第 5 項 1721 年頃と 1725 年頃の「宮廷音楽家の年俸表」	211
第 6 項 1729 年の「宮廷楽団の名簿」	212
第 7 項 1709 年から 1729 年までの年俸表と名簿に記載された奏者の数	214
第 3 節 楽師長ピゼンデルの時代の名簿に記された奏者の数	215
第 1 項 1731 年から 1735 年までの「宮廷楽団の名簿」	216
第 2 項 1735 年から 1745 年までの「宮廷楽団の名簿」	221
第 3 項 1746 年から 1755 年までの「宮廷楽団の名簿」	223
第 4 項 1731 年から 1755 年までの「宮廷楽団の名簿」に記された奏者の数	226
第 4 節 オペラ上演に関する 3 点の「明細」と「記録」との比較	229
第 1 項 奏者の数とその割合の比較	230
第 2 項 比較結果に対する考察	234
第 5 節 第 3 章の総括.....	235
第 4 章 ドレスデン宮廷楽団におけるファゴットの用いられ方	242
第 1 節 楽師長ヴォリュミエの下におけるフランス舞曲	245
第 1 項 パート譜 D-DI, Mus.1827-F-6.....	252
第 2 項 パート譜 D-DI, Mus.1827-F-8.....	255

第 3 項	パート譜 D-DI, Mus.1827-F-13	259
第 4 項	パート譜 D-DI, Mus.1827-F-15	263
第 5 項	パート譜 D-DI, Mus.1827-F-17	266
第 6 項	パート譜 D-DI, Mus.1827-F-21	269
第 7 項	パート譜 D-DI, Mus.1827-F-30	271
第 8 項	パート譜 D-DI, Mus.1827-F-35	273
第 9 項	パート譜 D-DI, Mus.1827-F-36	274
第 10 項	組曲におけるファゴットとヴァイオリン協奏曲	276
第 2 節	ピゼンデルが監修したヴァイオリン協奏曲	281
第 1 項	パート譜 D-DI, Mus.2389-O-49	289
第 2 項	パート譜 D-DI, Mus.2421-O-1a	292
第 3 項	パート譜 D-DI, Mus.2421-O-1b	295
第 4 項	パート譜 D-DI, Mus.2421-O-3a	299
第 5 項	パート譜 D-DI, Mus.2421-O-5a	303
第 6 項	パート譜 D-DI, Mus.2421-O-6b	307
第 7 項	パート譜 D-DI, Mus.2421-O-7b	311
第 8 項	パート譜 D-DI, Mus.2421-O-10	314
第 3 節	第 4 章の総括	318
結び	321
参考資料表	332

序

ヨーハン・ゲオルク・ピゼンデル **Johann Georg Pisendel** (1687-1755) は、1731 年から 1755 年まで、正式にドレスデン宮廷楽団の楽師長を務めた²。本論文の目的は、合奏形態、すなわち合奏に携わった者と彼らの人数配分を明らかにすることにより、ピゼンデルの時代におけるこの楽団の特徴を解明することにある。このことは、未だに不明な部分が多い黎明期におけるオーケストラの演奏習慣を、これまでよりも明確に示すことに繋がると考えられる。

次項の「オーケストラの歴史とドレスデン宮廷楽団の位置付け」において述べるように、17 世紀初頭から 18 世紀末まではオーケストラが誕生した時期にあたり、その中で、ドレスデン宮廷楽団は 18 世紀前半のドイツを代表するオーケストラと位置付けることができる。特にピゼンデルが楽師長を務めていた 1731 年から 1755 年までのこの楽団には、オペラ作曲家として成功していたヨーハン・アードルフ・ハッセ **Johann Adolf Hasse** (1699-1783) が楽長として在籍しており、ヨーハン・ゼバスティアン・バッハ **Johann Sebastian Bach** (1685-1750) によって高く評価された作曲家の一人であったヤン・ディースマス・ゼレンカ **Jan Dismas Zelenka** (1679-1745) も教会作曲家として所属していた³。この楽

² ピゼンデルが楽師長として在籍したこの楽団の正式名称は「ポーランド王兼ザクセン選帝侯宮廷楽団 **Kgl. Pohnische und Churf. Sächßische Capell- und Cammermusique**」であった。この名称は、ドレスデン宮廷に居を構えた二人のザクセン選帝侯フリードリヒ・アウグスト 1 世 **Friedrich August I.** (1670-1733、選帝侯在位 1694-1733) とフリードリヒ・アウグスト 2 世 **Friedrich August II.** (1696-1763、選帝侯在位 1733-1763) がポーランド王を兼ねたことに基づいており、ピゼンデルが楽師長に就任する以前の 1710 年から彼が亡くなった後の 1763 年まで使用された。この楽団はドレスデン宮廷を拠点に活動したため、本論文ではこの楽団を便宜的にドレスデン宮廷楽団と呼ぶ。

³ **Carl Philipp Emanuel Bach, "Biographische Mitteilungen über Johann Sebastian Bach," in *Dokumente zum Nachwirken Johann Sebastian Bachs*, edited by Hans-Joachim Schulze (Kassel: Bärenreiter, 1972), p. 289 (Bach-Dokumente, vol. 3).**

団は、彼らが作曲したオペラや教会音楽を上演し、さらにドレスデン宮廷外の著名な作曲家による室内楽も演奏した。このようにドレスデン宮廷楽団は、ピゼンデルの時代に第一級の音楽家によって作られた多様な音楽の演奏に従事した。

オーケストラの歴史とドレスデン宮廷楽団の位置付け

オーケストラの歴史を研究したスピッツァーとザスローは、1600年から1791年の間に、オーケストラが組織されるようになったと指摘した⁴。17世紀初頭には、オーケストラと呼ばれる楽団は存在しなかったが、18世紀末にはヨーロッパ各地において、この名称を持った楽団が実在するようになっていた。

17世紀末までには、フランス王ルイ14世 Louis XIV (1638-1715、在位 1643-1715)の配下や、イタリアの音楽家アルカンジェロ・コレリ Arcangelo Corelli (1653-1713)の下にオーケストラは存在した。17世紀末から18世紀初頭までのドイツにおいては、各地の宮廷がフランスのオーケストラを模倣して「宮廷楽団 Hofkapelle」を組織していた。

この17世紀初頭から18世紀末に渡るオーケストラの黎明期において、18世紀前半のドレスデン宮廷楽団は、高い評価を得たオーケストラの一つであった。バッハをはじめとする18世紀前半の音楽家たちは、この宮廷楽団の演奏を聞くためにドレスデンを訪れていた。ジャン=ジャック・ルソー Jean-Jacques Rousseau (1712-1778)による『音楽辞典 *Dictionnaire de musique*』は1768年に出版され、その「オーケストラ Orchestre」の項目には、彼が1754年に記した文章が掲載された⁵。その文において、ドレスデン宮廷楽

⁴ John Spitzer and Neal Zaslaw, *The Birth of the Orchestra: History of an Institution, 1650-1815* (Oxford: Oxford University Press, 2004), p. 14.

⁵ Jean-Jacques Rousseau, *Dictionnaire de musique* (Paris, 1768; reprint ed. Hildesheim: Georg Olms, 1969), p. 354.

団はナポリの楽団と共にヨーロッパにおける最良のオーケストラに挙げられた。これらのことから、ドレスデン宮廷楽団は 18 世紀前半のドイツを代表するオーケストラと位置付けられる。

18 世紀前半におけるドレスデン宮廷楽団の特徴

18 世紀及び 19 世紀におけるオーケストラの演奏習慣を研究したケップは、18 世紀前半のドレスデン宮廷楽団が、当時はまだ珍しかった一糸乱れぬ合奏を実現し、このことがヨハン・アーブラハム・ビルンバウム Johann Abraham Birnbaum (1702-1748) によって評価されたことを指摘した⁶。以下に引用したように、ビルンバウムは 1738 年に記した「シャイベの攻撃に対するバッハ擁護 *Verteidigung Bachs gegen Scheibes Angriffe*」において、ドレスデン宮廷楽団の奏者を兵士と比較し、少しも乱れることなく揃って合奏したことを特筆している。

軍隊では、合図に基づく幾千人の動きがたった一人の動きのように見えるほどになり得る。従ってそのように正確であることは、はるかに少ない人数から成る楽団において、一層可能であるに違いない。楽団においてさえ、このようにできる最たる証拠は、よく整えられた [ポーランド] 王兼 [ザクセン] 選帝侯の宮廷楽団に見られる。ザクセンの大きな宮廷の有名な楽団が合奏するところを見るという幸いを得た者は、このことが真実であることをもはや疑わないであろう。⁷

⁶ Kai Köpp, *Handbuch historische Orchesterpraxis: Barock, Klassik, Romantik* (Kassel: Bärenreiter, 2009), p. 113.

⁷ Johann Abraham Birnbaum, “Verteidigung Bachs gegen Scheibes Angriffe,” in *Fremdschriftliche und gedruckte Dokumente zur Lebensgeschichte Johann*

このように奏者たちが乱れなく合奏することは、ルイ 14 世時代のフランスのオーケストラによって始められた。フランスの宮廷に勤めた経験を持つジャン＝バティスト・ヴォリュミエ Jean-Baptiste Volumier [Woulmyer] (ca. 1670-1728) は、1709 年にドレスデン宮廷楽団の楽師長になり、彼の指導によって奏者はこの合奏を行うようになった。さらに、この合奏を評価したビルンバウムによる先の文章が 1738 年に発表されたことに基づく、ヴォリュミエの後任として 1731 年に正式に楽師長に就任したピゼンデルの下においても、一糸乱れぬ合奏は行われていたと考えられる。オーケストラの歴史において、このように統制がとれた合奏を特徴としたドイツの楽団は、18 世紀後半のマンハイムの宮廷楽団であったと説明されてきた⁸。従って、すでに 18 世紀前半においてこの合奏を実現していたことは、ドレスデン宮廷楽団の特色といえる。

また、18 世紀のオーケストラにおける各楽器の人数は地方ごとに異なったことをスピッツァーとザスローは指摘し、この時期のドレスデン宮廷楽団には、他のオーケストラよりも多くの木管楽器奏者が在籍していたことを示した⁹。そのため、ドレスデン宮廷楽団は多くの木管楽器を伴った独自の楽器編成によって、独特な音響を生み出していた可能性がある。

Sebastian Bachs 1680-1750, edited by Bach-Archiv Leipzig (Leipzig: Deutscher Verlag für Musik, 1969), p. 304 (Bach-Dokumente, vol. 2); Kai Köpp, *Handbuch historische Orchesterpraxis: Barock, Klassik, Romantik* (Kassel: Bärenreiter, 2009), p. 113.

⁸ Bärbel Pelker, “Musikalische Akademien am Hof Carl Theodors in Mannheim,” in *Die Mannheimer Hofkapelle im Zeitalter Carl Theodors*, edited by Ludwig Finscher (Mannheim: Palatium, 1992), p. 50.

⁹ John Spitzer and Neal Zaslaw, *The Birth of the Orchestra: History of an Institution, 1650-1815* (Oxford: Oxford University Press, 2004), pp. 316-334.

以上のことに基づくと、一糸乱れぬ合奏と独自の楽器編成が、18世紀前半のドレスデン宮廷楽団の大きな特徴を成したと考えられる。

一糸乱れぬ合奏に関する先行研究の状況

ドレスデン宮廷楽団の特徴であった統率のとれた合奏を実現するために、楽師長ヴォリュミエと彼の後任となったピゼンデルが行った指導の一端をケップは解明した¹⁰。しかし、この合奏には楽団員を指導する楽師長だけでなく、彼の指示に忠実に従い、かつ互いに協調して合奏する楽団員が不可欠である。それにも関わらず、この合奏を実現した奏者たちは特定されてこなかった。

18世紀前半のドレスデン宮廷楽団に所属した音楽家のうち、著名であった者を指摘することは繰り返し行われた¹¹。そして、2003年に発表されたミュッケの論文においても、下に引用したように、楽師長ピゼンデルと共に多数の奏者が名手として列挙されている¹²。

[1734年から1763年のドレスデン宮廷楽団に在籍した]奏者の中で名を成した者は、当時の著名なヴァイオリン奏者であり、1728年から亡くなる1755年までこの楽団の楽師長を務めたヨーハン・ゲオルク・ピゼンデルであった。彼の他にも、フルート奏者にはピエール・ガブリエル・ビュッフアルダン（1715年から1749年まで宮廷楽団

¹⁰ Kai Köpp, *Handbuch historische Orchesterpraxis: Barock, Klassik, Romantik* (Kassel: Bärenreiter, 2009).

¹¹ Ortrun Landmann, “Die Dresdener Hofkapelle zur Zeit Johann Sebastian Bachs,” *Concerto: Das Magazin für Alte Musik* 51 (March 1990): 10; Wolfgang Hochstein, “Hasses Beiträge zur Hofkirchenmusik in Dresden,” in *Hasse-Studien. IV (1998)*, edited by Wolfgang Hochstein and Reinhard Wiesend, (Stuttgart: Carus-Verlag, 1999), p. 84.

¹² 以下の引用文における括弧内の文章は原文に従っている。角括弧内の文章は本論文の筆者が追加した。

に雇用される)とヨーハン・ヨーアヒム・クヴァンツ(フルート奏者として1727年から1741年までドレスデン宮廷楽団に、その後ベルリン宮廷楽団に)のような卓越した名手があり、オーボエ奏者にはアントニオ・ベソッツィ(1738年から1757年及び1759年から1774年まで宮廷楽団所属)や彼の息子カルロ・ベソッツィ(1755年から1757年及び1759年から1792年までドレスデン宮廷楽団に所属)がいた。またボヘミア出身のドレスデン宮廷楽団のホルン奏者であったアントン・ヨーゼフ・ハンペル(1737年から1771年まで宮廷楽団に所属)やヨーハン・アーダム・シンドラー(1721年から1733年まで宮廷楽団に所属)、アンドレアス・シンドラー(1723年から1737年)、ヨーハン・ゲオルク・クネヒテル(1735年から1756年)、カール・ハウデク(1747年から1796年までドレスデンのオーケストラに所属)も第一級であった。¹³

このように多数の奏者が名手として挙げられたことに基づくと、ドレスデン宮廷楽団には有能な多くの独奏者が在籍し、技巧を披露していたと推察される。しかし、一つの声部を一人の奏者が演奏する独奏と、一つの声部を複数の奏者が演奏する合奏においては、全く異なる演奏技術が要求されたことをケップは明らかにした¹⁴。独奏の場合、演奏する声部に装飾やテンポの変化などを付加する即興の技術が求められたが、合奏の場合、即興ではなく、反対に指導者や楽譜に書かれている指示に忠実に従い、そのことによって他の奏者と同じように演奏できることが求められた。さらに、オーボエ奏者アントニオ・ベソッツィ Antonio Besozzi (1714-1781) は、先に引用したミュッケによる文章において名手の

¹³ Panja Mücke, *Johann Adolf Hasses Dresdner Opern im Kontext der Hofkultur* (Laaber: Laaber, 2003), p. 42.

¹⁴ Kai Köpp, *Handbuch historische Orchesterpraxis: Barock, Klassik, Romantik* (Kassel: Bärenreiter, 2009), pp. 32-36.

一人に数えられていたが、楽師長ピゼンデルはベソツツィの横柄な態度に苦言を呈していた¹⁵。従って、先行研究が名手として名前を挙げた奏者の中には、ピゼンデルの指示に従わず、乱れのない合奏を阻害した奏者が含まれている可能性がある。よって、独奏者として活躍したと考えられるドレスデン宮廷楽団の名手を、無批判にこの合奏に貢献した奏者と見なすことはできないため、この合奏を実現した奏者を改めて特定する必要がある。

そのためには、年俸表や名簿に基づき、18世紀前半のドレスデン宮廷楽団に在籍した奏者を確認する必要がある。なぜなら、名手以外にどのような奏者がこの楽団に在籍したかは解明されていないからである。その上で、彼らの中から頻繁に出張した奏者を明らかにすることにより、一糸乱れぬ合奏に不可欠であった奏者を特定できると考えられる。その理由は、この楽団の本拠地であったドレスデン宮廷と同様に、出張先においても乱れのない合奏を披露するために、この合奏に不可欠であった先鋭が出張に選出された可能性が高いからである。

楽師長ヴォリュミエの名前が記された資料の中には、ドレスデン宮廷楽団に所属した者を示した年俸表や名簿が少なくとも12点現存するため、ヴォリュミエの時代にドレスデン宮廷楽団に在籍した奏者を特定できる。さらに、ヴォリュミエの時代に出張を命じられた奏者を記録した資料は、少なくとも4点現存する。よって、頻繁に出張した奏者を特定することも可能である。

ヴォリュミエに続くピゼンデルの時代において、ドレスデン宮廷楽団に所属した奏者は、『ポーランド王国及びザクセン選帝侯国宮廷年鑑 *Königlich-Polnischer und Churfürstlich-Sächsischer Hoff- und Staats-Calender*』（以下『宮廷年鑑』と略記）に記

¹⁵ Kai Köpp, *Johann Georg Pisendel (1687-1755) und die Anfänge der neuzeitlichen Orchesterleitung* (Tutzing: Schneider, 2005), p. 316.

載された¹⁶。『宮廷年鑑』はヴォリュミエが亡くなった 1728 年から、ピゼンデルが亡くなった 2 年後の 1757 年にかけてほぼ毎年出版され、1728 年と 1730 年、1734 年を除く合計 27 巻は、ザクセン州立兼大学図書館に保管されている。ピゼンデルが楽師長を務めた 1731 年から 1755 年までの『宮廷年鑑』は 24 巻に上り、各巻にはこの楽団に所属した者の名簿が記載されているため、ピゼンデルが楽師長を務めた時代にこの楽団に所属した奏者を把握できる。

これらの奏者の中から選び出された者とピゼンデルは、ザクセン選帝侯フリードリヒ・アウグスト 2 世に随伴して、秋に狩猟用別邸フベルトゥスブルクに滞在した。ピゼンデルをはじめとする音楽家は、この別邸においてオペラ、室内楽、教会音楽を演奏した。特にオペラ上演は、君主の誕生日である 10 月 7 日を祝うための重要な任務であった。

ドレスデン中央公文書館には、このフベルトゥスブルクへの秋旅行に関する資料が保管されている¹⁷。この資料に基づくと、秋旅行は 1736 年から 1755 年までの間に合計 11 回行われており、この期間は、ピゼンデルが正式に楽師長を務めた 1731 年から 1755 年までの時期とほぼ一致している。

秋旅行に関する資料は、主に別邸において上演されたオペラの演目やその上演日を特定することに用いられてきたのみであった¹⁸。ラントマンの論文において、この資料は以下のように説明されている。

¹⁶ *Königlich-Polnischer und Churfürstlich-Sächsischer Hoff- und Staats-Calender* (Leipzig, 1728-1757; D-Dl, Hist.Sax.I.0179).

¹⁷ フベルトゥスブルクへの秋旅行に関する一連の資料は、その名称が様々であり統一されていない。そのため本論文では、この資料群に対して「秋旅行に関する資料」の総称を用いる。

¹⁸ Ortrun Landmann, “Musikpflege in der Herbstresidenz Hubertusburg,” in *Schloß Hubertusburg: Werte einer sächsischen Residenz*, edited by Vereins für sächsische Landesgeschichte (Dresden: Vereins für sächsische Landesgeschichte, 1997), pp. 59-66; Panja Mücke, “Die Festopern im Jagdschloß Hubertusburg: J.A. Hasses

[秋] 旅行の資料や特にフベルトゥスブルクの人々に関連する興味深い情報について、ここで少し触れておこう。オペラ上演に関する「会計伝票 *Fourierzeddel*」や宿泊の名簿からは、実際に生じた費用と共に、人々と荷物の輸送や宿泊など〔別邸に滞在するために〕必要であった事柄の規模〔が分かる〕だけでなく、〔君主に〕随行した歌手や踊り手、ドレスデン宮廷楽団の音楽家や楽長、バレ・マイスター、演出家、舞台芸術家、楽器職人、写譜家、衣装係、さらに〔彼らに〕協力した楽団や劇場の世話係などの名前について具体的な情報が得られる。¹⁹

このようにラントマンは、別邸に派遣されたドレスデン宮廷楽団の音楽家の名前が秋旅行に関する資料に記録されていることを説明した²⁰。この資料に記録された奏者を把握することは、頻繁にフベルトゥスブルクに遣わされた奏者を特定することに繋がる。

以上のことに基づくと、一糸乱れぬ合奏に不可欠であった奏者を明らかにすることは可能であると考えられる。

楽器編成に関する先行研究の状況

この序においては、楽器編成が一糸乱れぬ合奏と共に 18 世紀前半のドレスデン宮廷楽団の特徴を成したと指摘したが、当時のこの楽団の楽器編成を示した資料や、実際に合奏

Ipermestra am 7.10.1751,” in *Johann Adolf Hasse in seiner Zeit: Bericht über das Symposium vom 23. bis 26. März 1999 in Hamburg*, edited by Reinhard Wiesend (Stuttgart: Carus-Verlag, 2006), pp. 97-104.

¹⁹ Ortrun Landmann, “Musikpflege in der Herbstresidenz Hubertusburg,” in *Schloß Hubertusburg: Werte einer sächsischen Residenz*, edited by Vereins für sächsische Landesgeschichte (Dresden: Vereins für sächsische Landesgeschichte, 1997), p. 63.

²⁰ しかし、彼女は論文において秋旅行の資料に記された音楽家の名前を示さなかった。

を行った奏者のみを記載した演奏記録は発見されてこなかった。そのため、ラントマンをはじめとする研究者たちは、この楽団の年俸表や名簿から奏者の数を算出し、その人数に基づいて楽器編成の特徴を論じてきた²¹。しかし、彼らによって提示された人数の情報は約 10 年ごとであり、年代の間隔が非常に広がったため、人数が変化した過程を把握することはできなかった。その上、スピッツァーとザスローは、当時の年俸表や名簿から奏者の数を算出する研究方法の問題点を次のように指摘した。

歴史家は、しばしばこれらの「楽団の人数を示した」表を、17 世紀と 18 世紀におけるオーケストラの発展を明らかにするために用いてきた。また演奏家は、時折、演奏習慣の拠り所としてこれらの表を用いる。これらの用法にはいずれも問題がある。こうした表は、しばしば宮廷楽団や歌劇場の名簿及び給料表—すなわち、「実際に」演奏を行った合奏団ではなく、音楽を司った組織の資料に基づいている。これらの資料は、しばしばオーケストラを実際よりも大きく見せている。退職した音楽家は、演奏「の現場」から離れた後も、長く給料表に載せられ、名簿に見られる音楽家の中には、実際には旅行中や休暇中の者もいた。さらに「楽団に」在籍し、活動していた奏者全員が、演奏に参加したとは限らない。作品においてその楽器が必要ではなかった時や、小さいオーケストラで事足りた場合、奏者は「演奏から」除外されたであろう。また歌劇場のオーケストラは、オペラ・ブッフアを上演した際、しばしば通常の半分程度の規模に縮小されていた。これらの論に基づくと、給料表や名簿における奏者の数は、「演奏を行った」実際のオーケストラのものではなく、むしろ最大の数—「すなわち」

²¹ Ortrun Landmann, “Die Dresdener Hofkapelle zur Zeit Johann Sebastian Bachs,” in *Concerto: Das Magazin für Alte Musik* 51 (March 1990): 7-16.

より小さいオーケストラを編成するために動員できた奏者の総数と見なされるべきである。²²

この指摘からは、当時のオーケストラの年俸表や名簿には、退職者をはじめ実際には演奏に携わっていなかった者が含まれることがあったため、これらの資料から算出した人数が、実際の演奏における人数よりも多い場合があったことが分かる。このことに基づくと、ラントマンたちがドレスデン宮廷楽団の年俸表や名簿から算出した人数と、演奏におけるこの楽団の楽器編成の関連には疑念が生じるため、この関連を検証する必要がある。

この検証を行うためには、実際の演奏に携わった者のみを示した記録や、演奏する予定であった奏者のみを記した計画書を新たに発見することが不可欠である。これらの資料から奏者の数を算出することができた場合、演奏におけるドレスデン宮廷楽団の楽器編成を直に把握できるからである。さらに、その人数を楽団の年俸表や名簿から算出される人数と比較することにより、実際の楽器編成とその人数の関連の有無を確認できる。

本論文の筆者は、2014年から2016年までのドレスデンにおける調査において、フベルトゥスブルクへの秋旅行に関する資料の中に、オペラ上演に携わる予定であった者のみを示した項目を発見した。それらの項目は、1737年と1741年の「王の慈悲深い命令によりオペラ上演のためフベルトゥスブルクに派遣された人々の明細」(以下「明細」と略記)と、1742年の「王の楽団からフベルトゥスブルクにおけるオペラ、ディドのために必要な人々の記録」(以下「記録」と略記)である²³。この3点の「明細」や「記録」には、オペラ上

²² John Spitzer and Neal Zaslaw, *The Birth of the Orchestra: History of an Institution, 1650-1815* (Oxford: Oxford University Press, 2004), p. 27.

²³ “Specificatio Dererjenige Persohnen, welche auf aller gnädigsten Befehl Ihre Königl. Maje: zu reppresentirung derer Opern nach St: Hubertsburg beordert

演のために選び出された者のみが列挙されているため、実際の演奏のために計画された各楽器の人数を特定できる²⁴。よってこの3点からは、ドレスデン宮廷楽団のオペラ上演のための楽器編成を把握できる。さらに、その人数を基準とすることにより、演奏しなかった奏者を含む可能性がある年俸表や名簿から算出される人数が、楽器編成と関連したかを検証できる。

本論文の構成

ピゼンデルの時代においてドレスデン宮廷楽団の特徴であった一糸乱れぬ合奏を実現した奏者を特定することと、この合奏と同様にドレスデン宮廷楽団の特色を成したと考えられる楽器編成を解明することは、前項に示した研究方法により可能であると考えられた。この研究方法に基づき、本論文はこれらの研究課題に取り組む。また、乱れない合奏は先代の楽師長ヴォリュミエによって確立されたことに基づくと、ヴォリュミエ時代におけるこの楽団の状況を把握することは、次のピゼンデル時代の実態をより深く理解することに繋がると考えられる。よって本論文は、この二人の楽師長の時代を研究対象とする。

worden”, D-Dla, 10006 Oberhofmarschallamt I, Nr. 53a (Herbstreise beider Königlicher Majestäten und des Kurprinzen sowie des Prinzen Xaver und der Prinzessinnen Amalia und Maria Anna nach Hubertusburg 1737), fols. 99r-100r; “Specification dererjenigen Personen, welche auf aller gnädigsten Befehl Ihre Königl. Mait. zu reäsentirung derer Opern nach Hubertusburg beordert worden”, D-Dla, 10006 Oberhofmarschallamt I, Nr. 83a (Königl. Herbst=Reise von Dreßden nach Hubertusburg Anno 1741), fols. 219r-220v; “Aufsatz derer Personen die aus der Königlichen Orchestre zur Opera Didone in Hubertusburg nöthig sind”, D-Dla, 10006 Oberhofmarschallamt I, Nr. 91a (Königl. Herbst: Reise von Dreßden nach Hubertusburg. 1742), fol. 205r-v.

²⁴ この3点の「明細」や「記録」に記されたドレスデン宮廷楽団の奏者の特定と彼らの人数の算出は、日本音楽学会学会誌『音楽学』へ投稿中の論文において詳しく行っている(2017年9月現在、掲載可否審議中)。この3点のうち1742年の「記録」の内容をピゼンデル研究者のカイ・ケップ氏に検証してもらった結果、その筆跡は楽師長ピゼンデルのものであったことが判明した。

第 1 章では、ヴォリュミエが楽師長を務めた時代において、合奏に不可欠であった奏者を特定する。はじめに、この時代に書かれた先述の 12 点の年俸表や名簿に基づき、この楽団に所属した奏者を明らかにする。次に、当時の出張記録 4 点に基づき、奏者のうち頻繁に出張した者を示し、合奏に必要とされた者を指摘する。

第 2 章では、ヴォリュミエの時代に続くピゼンデルの時代において、合奏に不可欠であった奏者を特定する。本章では、この時代に出版された『宮廷年鑑』に掲載された名簿 24 点に基づき、この楽団に所属した奏者を確認する。その上で秋旅行に関する資料から、この別邸にしばしば出張した奏者を特定することにより、合奏に欠かせなかった奏者を示す。

第 3 章では、ドレスデン宮廷楽団の楽器編成の解明を試みる。はじめに、第 1 章と第 2 章において使用した合計 36 点のこの楽団の年俸表と名簿から各楽器の人数を求める。次に、フベルトゥスブルクにおけるオペラ上演に選出された者の「明細」と「記録」3 点から算出される各楽器の人数を確認することにより、このオペラ上演のために組まれた楽器編成を把握する。この人数を基準として、36 点の年俸表や名簿から算出された人数が、どの程度、演奏のための楽器編成に類似していたかを検証する。その上で、ドレスデン宮廷楽団の楽器編成の特徴を指摘する。

第 4 章では、第 3 章において明らかにした楽器編成の特徴が形成された要因を探る。

本論文の結びでは、各章の結論に基づき、ピゼンデルが楽師長を務めた時代のドレスデン宮廷楽団の合奏形態を総括することにより、この楽団の特徴を指摘する。

第1章 楽師長ヴォリュミエとドレスデン宮廷楽団の奏者たち

本章は、ヴォリュミエが楽師長を務めた 1709 年から 1728 年までのドレスデン宮廷楽団を研究対象として、この楽団の一糸乱れぬ合奏に不可欠であった奏者を特定することを目的とする。

序においては、一糸乱れぬ合奏が、先代の楽師長ヴォリュミエによってドレスデン宮廷楽団に持ち込まれ、次の楽師長ピゼンデルの時代に継承され、ヴォリュミエとピゼンデルが楽師長を務めた時代において、ドレスデン宮廷楽団の大きな特徴の一つとなっていたことを指摘した。しかし、この合奏を実現した奏者は特定されていなかった。

先代の楽師長ヴォリュミエの時代に、ピゼンデルやオーボエ奏者オーボエ奏者ヨーハン・クリスティアン・リヒターJohann Christian Richter (?-1744) などは、すでにドレスデン宮廷楽団に在籍していたため、ヴォリュミエの時代が終わった後も、ピゼンデルやこれらの奏者が中心となってこの合奏を継続した可能性がある。従って、ヴォリュミエの時代に一糸乱れぬ合奏に不可欠であった奏者を特定することは、次のピゼンデルの時代にこの合奏を実現した奏者を特定することを容易にすると考えられる。

フルステナウをはじめとする研究者たちは、ドレスデン宮廷楽団の歴史を記すことによって、ヴォリュミエの時代の奏者が置かれていた状況を明らかにした²⁵。そのため、彼らが示した歴史からは、奏者たちがこの楽団に雇用された経緯を把握できる。

一方、フルステナウたちが、この楽団の歴史を記す中で名を挙げた奏者は、評判を博した名手のみに限られたため、彼らを書いた歴史に基づいて、ヴォリュミエの時代にこの楽団に所属した奏者全員を把握することは不可能である。しかし、この奏者たちを特定するという課題は、序において述べたように、ヴォリュミエの名前が記載された 12 点の年

²⁵ Moritz Fürstenau, *Zur Geschichte der Musik und des Theaters am Hofe zu Dresden* (Dresden: 1861-1862 in 2 vols; reprint ed. Leipzig: Peters, 1971 in 1 vol.), vol. 2, pp. 1-179.

俸表や名簿に記された人物を解明することによって克服できる。さらに序においては、頻繁に出張に選ばれた奏者を確認することによって、一糸乱れぬ合奏に不可欠な奏者を特定できると考えられた。その理由は、出張先において乱れない合奏を行うために、出張にはこの合奏に必要な者が選出された可能性が高かったことにあった。ヴォリュミエの時代には、少なくとも 1714 年にパリ、1716 年にイタリア、1718 年にヴィーン、1719 年にモーリツブルクへ奏者たちが出張を命じられた。この奏者たちの名簿は現存しているため、頻繁に出張した者を特定することは可能である。

これらのことに基づき、本章では、はじめにヴォリュミエが楽師長を務めた 1709 年から 1728 年までのドレスデン宮廷楽団の歴史を概観し、この楽団を取巻いた状況がどのように変化したかを確認する。次に、先述の 12 点に上るドレスデン宮廷楽団の年俸表と名簿それぞれの情報を確認する。12 点の中には、書かれた時期が明記されていない資料も含まれるため、その内容を残りの年俸表や名簿に記載された情報と比較することにより、その資料が書かれた時期を特定する。その上で、年代に沿ってそれぞれの年俸表や名簿に記載された奏者を確認しつつ、楽団の状況に応じて奏者が入れ替わったかを検証する。さらに、出張記録に基づいてこの楽団の奏者のうち頻繁に出張した者を特定し、最後に彼らを一糸乱れぬ合奏に不可欠であった奏者として指摘する。本章の終わりでは、12 点の年俸表や名簿に記載された奏者と彼らが演奏したと考えられる楽器の種類を一覧表に提示する。その理由は、ドレスデン宮廷楽団の楽器編成を論じる第 3 章において、これらの資料から各楽器の人数を算出することを容易にするためである。

第1節 ヴォリュミエが楽師長を務めた時代のドレスデン宮廷楽団

フリードリヒ・アウグスト 1 世は、1694 年から 1733 年までザクセン選帝侯を務めた。彼の下には、ドレスデン宮廷楽団の他にフランス喜劇団、イタリア喜劇団、木管楽器奏者のみから成る「オーボエ・バンド Die Bande Hauboisten」が置かれていた。フランス・バ

レの踊り手、イタリア・オペラに関わる作曲家や歌手、プロテスタント教会音楽に携わる者、フランス人歌手、トランペット奏者なども彼の配下に置かれていた。さらに、この君主がポーランドに滞在した時のために、当地には「ポーランド楽団」(小宮廷楽団)が組織されていた²⁶。

ドレスデン宮廷楽団の奏者たちは、イタリア・オペラに関わる作曲家や歌手と共に上演を行い、フランス・バレの踊り手を伴奏した。彼らは、カトリック礼拝堂において教会音楽を演奏することや、宮廷の内外において器楽を演奏することをも担っていた。

フリードリヒ・アウグスト 1 世は、ザクセン選帝侯に即位する以前に諸国を遊学している。この外国を巡る旅行は 1687 年から 1689 年までの 2 年に渡って行われており、フランスを訪れた際、彼はこの国の音楽に魅了された²⁷。1709 年、フリードリヒ・アウグスト 1 世は、すでに楽長としてヨーハン・クリストフ・シュミット Johann Christoph Schmidt (1664-1728) を擁していたが、フランスの宮廷に勤めた経験を持つヴォリュミエを新たに楽師長として配下に置いた。ヴォリュミエは、フランスの奏法に基づいて運弓やアーティキュレーションを揃えて演奏するように奏者たちを指導することにより、乱れのない合奏を実現した²⁸。

1731 年にヴォリュミエの後任としてドレスデン宮廷の楽師長となるピゼンデルは、彼が書いた履歴書に基づくと、1712 年にヴァイオリン奏者としてドレスデン宮廷に就職し

²⁶ ザクセン選帝侯フリードリヒ・アウグスト 1 世の配下にあった楽団や音楽家たちは、次の文献において詳細に説明されている。荒川恒子、「ザクセン選帝侯国における 1719 年の音楽事情に関する考察—皇太子フリードリヒ・アウグスト 2 世の結婚祝典行事を通じて」、『山梨大学教育人間科学部紀要』第 13 巻 20 号、2011 年、288～301 頁。

²⁷ Ortrun Landmann, “Französische Elemente in der Musikpraxis des 18. Jahrhunderts am Dresdener Hof,” in *Der Einfluss der französischen Musik auf die Komponisten der ersten Hälfte des 18. Jahrhunderts: Konferenzbericht der 9. Wissenschaftlichen Arbeitstagung Blankenburg/Harz, 26. Juni bis 28. Juni 1981* (Magdeburg: Rat der Stadt, 1981), p. 48.

²⁸ Kai Köpp, *Handbuch historische Orchesterpraxis: Barock, Klassik, Romantik* (Kassel: Bärenreiter, 2009), pp. 109-113; Dieter Härtwig, “Volumier, Jean Baptiste,” in *NG 2*, vol. 26, p. 891.

ていた²⁹。彼は、楽長シュミットや楽師長ヴォリュミエ、オーボエ奏者リヒター、オルガン奏者クリスティアン・ペツォルト Christian Petzold (1677-1733) と共に、パリに派遣された。この出張は、1714年5月から同年10月に及んだ³⁰。ピゼンデルについて研究したケップは、これらの音楽家がパリに遣わされた理由を、ザクセン選帝侯フリードリヒ・アウグスト1世の息子であり、当時パリを訪問していた侯子フリードリヒ・アウグスト2世に随伴し、さらに「フランスにおける最新の音楽の動向」に関する情報を、ドレスデンに持ち帰ることであったと推測している³¹。

侯子フリードリヒ・アウグスト2世は、後述するように、1716年からヴェネツィアに滞在した。ヒラーが記したピゼンデルの伝記に基づく、このヴェネツィアに滞在した侯子に、ピゼンデルは9か月に渡って仕えた³²。ケップは、このイタリアへの渡航に必要であった旅券の草稿の内容を検証し、ピゼンデルの名前だけでなく、先に彼と共にフランスへ行ったオーボエ奏者リヒターの名前も、この草稿に記されていることを指摘した³³。そして、ピゼンデルとリヒターは、共にイタリアに旅行したと推定している。ケップによると、この旅券の草稿には、「1716年2月5日」と記されている。

この1716年に、イタリアの作曲家アントニオ・ヴィヴァルディ Antonio Vivaldi (1687-1741) は、ヴェネツィアのピエタ養育院の楽師長となった。ケップは、ピゼンデルがヴィヴァルディによる楽曲を少なくとも28作品筆写したことや、さらにそのうちの13作品にはヴィヴァルディの筆跡も見られることに基づき、ピゼンデルがヴィヴァルディに師事した可能性を指摘している³⁴。またヘインズは、ピゼンデルと共にイタリアに渡航したと推

²⁹ D-Dla, 10006 Oberhofmarschallamt, K II, Nr. 5 (Königl: Poln: und Churfülst Sächß: Hof=Buch von 1717 biß 1720), fols. 92r.

³⁰ Kai Köpp, *Johann Georg Pisendel (1687-1755) und die Anfänge der neuzeitlichen Orchesterleitung* (Tutzing: Schneider, 2005), p. 82.

³¹ *Ibid.*, pp. 83-84.

³² Johann Adam Hiller, *Lebensbeschreibungen berühmter Musikgelehrten und Tonkünstler neuerer Zeit* (Leipzig, 1784; reprint ed. Leipzig: Edition Peters, 1975), p. 188.

³³ Kai Köpp, *Johann Georg Pisendel (1687-1755) und die Anfänge der neuzeitlichen Orchesterleitung* (Tutzing: Schneider, 2005), pp. 89-90 and 438.

³⁴ *Ibid.*, p. 93.

定されたオーボエ奏者リヒターが、イタリアの楽器をドレスデンに持ち帰ったと推察している³⁵。

しかし、ドレスデン宮廷はこのように音楽家を外国に遣わしただけではなく、1717年にイタリアのヴェネツィアから多くの音楽家を招いた。このことには、侯子フリードリヒ・アウグスト2世が関与している。彼は父が行ったように諸国を遊学した時、1716年春から1717年秋までヴェネツィアに滞在し、イタリア音楽、特にオペラに傾倒したのである³⁶。ドレスデン宮廷は、オペラを上演するために、ドイツに生まれイタリアにおいて研鑽を積んだ作曲家ヨーハン・ダーヴィット・ハイニヒェン Johann David Heinichen (1683-1729) や、イタリア人作曲家アントニオ・ロッティ Antonio Lotti (1667-1740)、イタリア人歌手を雇った³⁷。この1717年に、ロッティのオペラ《アルゴスのオーヴェ Giove in Argo》がドレスデンにおいて上演された³⁸。

こうした1717年に、ドレスデン宮廷楽団の奏者が置かれた状況は一変した。彼らは、新たにイタリアから赴任した音楽家たちと共にこの宮廷に在籍するようになり、その中で、ヴォリュミエの下で体得したフランスの奏法に加え、新たにイタリアの奏法をも習得しなければならなかった。なぜなら、彼らはフランス音楽の演奏だけでなく、新たにイタリア・オペラの上演にも携わる必要が生じたからである。フランスとイタリアでは、演奏に用いられる楽器の構造やピッチが異なっていたことが判明している³⁹。弦楽器は調弦法や弓の

³⁵ Bruce Haynes, *The Eloquent Oboe: A History of the Hautboy 1640-1760* (Oxford: Oxford University Press, 2001), pp. 327-328.

³⁶ Janice B. Stockigt, "The Court of Saxony-Dresden," in *Music at German Courts, 1715-1760: Changing Artistic Priorities*, edited by Samantha Owens et al. (Woodbridge: Boydell, 2011), p. 23; 荒川恒子、「ザクセン選帝侯フリードリヒ・アウグスト2世宮廷における音楽事情」、『山梨大学教育人間科学部紀要』第12巻、2010年、135頁。

³⁷ Gustav Adolph Seibel, *Das Leben des Königl. Polnischen und Kurfürstl. Sächs. Hofkapellmeisters Johann David Heinichen: Nebst chronologischem Verzeichnis seiner Opern* (Leipzig: Breitkopf & Härtel, 1913), pp. 19-20.

³⁸ Alina Zórawska-Witkowska, "Das Ensemble der italienischen Oper von Antonio Lotti am Hof des Königs von Polen und Kurfürsten von Sachsen August II. Des Starken (1717-1720)," *Musica Antiqua* 9/1 (1991), p. 488.

³⁹ 荒川恒子、「ザクセン選帝侯国における1719年の音楽事情に関する考察—皇太子フリードリヒ・アウグスト2世の結婚祝典行事を通じて」、『山梨大学教育人間科学部紀

持ち方が異なり、運弓の向きが反対になる場合もあった。木管楽器もリードの形や運指が違ったため、異なる演奏技術が要求された。

このようにフランスとイタリアにおいて奏法が全く異なったことを踏まえると、フランスの奏法に従ってきたドレスデン宮廷楽団の奏者たちの中には、イタリアの奏法に対応できなかった者がいた可能性は十分に考えられる。ヒラーによって編集され、1767年に出版された『音楽に関する週報と論評 *Wöchentliche Nachrichten und Anmerkungen die Musik betreffend*』に基づく、フランスの奏法をドレスデン宮廷に持ち込んだ楽師長ヴォリュミエとイタリア人カストラートの間には、以下のような問題が生じた。

かつて1719年に、ドレスデンにおいてロッティのオペラが試演された際、[カストラートの]セネジーノ氏と[楽師長]ヴォリュミエ氏の間には伴奏の方法をめぐって諍いが生じた。前者は、アリアにおいてあまりに粗野に演奏したとして後者を非難したのである。⁴⁰

この挿話の真偽は定かではない。しかし、ヴォリュミエが熟知していた奏法はフランスのものであったことに基づくと、彼がイタリアの奏法に則ってカストラートを伴奏できなかったことは十分に考えられるだろう。さらにフェルステナウは、1862年に出版された『ドレスデン宮廷における音楽と歌劇場の歴史 *Zur Geschichte der Musik und des Theaters am Hofe zu Dresden*』の第2巻において、イタリア人作曲家ロッティとコントラバス奏者に関して次のように説明している。

要』第13巻20号、2011年、8～12頁。See also Bruce Haynes, *A History of Performing Pitch: The Story of "A"* (Lanham: Scarecrow Press, 2002); Kai Köpp, *Handbuch historische Orchesterpraxis: Barock, Klassik, Romantik* (Kassel: Bärenreiter, 2009).

⁴⁰ Johann Adam Hiller ed., *Wöchentliche Nachrichten und Anmerkungen die Musik betreffend*, vol. 1, (Leipzig, 1766; reprint ed. Hildesheim: Georg Olms, 1970), pp. 287-288.

コントラバス奏者ペルヅネッリとガッギは、ロッティのたつての望みにより、[ドレスデン宮廷に] 雇われた。彼 [ロッティ] は、おそらくドレスデンにいたこの楽器の奏者たちに、伴奏に必要な器用さが備わっていないと思ったのだろう⁴¹。

この記述に基づくと、ロッティはイタリアの奏法を習得した奏者を、ヴォリュミエの下でフランスの奏法を学んできた「コントラバス奏者」の中に見出せなかった可能性がある。このように、イタリアの奏法を習得することから始めなければならなかったドレスデン宮廷楽団の奏者にとって、この不慣れな奏法において一糸乱れぬ合奏を実現することは非常に困難であったと考えられる。

しかし、クヴァンツは自伝において 1718 年から 1719 年を回想した際に、ピゼンデルのことを以下のように記した。

彼 [ピゼンデル] の [音楽に関する] 趣味は、当時すでにイタリアのものとフランスのものを混合したものとなっていた。なぜなら、彼はこの二つの地を、深い判断力をもって旅していたからだ。⁴²

このクヴァンツの説明からは、ピゼンデルがフランス音楽とイタリア音楽の両方を理解し、それらの特徴を織り交ぜて演奏したことを読み取ることができる。よって、ピゼンデルはこれらの両方の国の奏法を熟知していたと考えられる。さらに、先述のようにオーボ

⁴¹ Moritz Fürstenau, *Zur Geschichte der Musik und des Theaters am Hofe zu Dresden* (Dresden: 1861-1862 in 2 vols; reprint ed. Leipzig: Peters, 1971 in 1 vol.), vol. 2, p. 113; see also, Janice B. Stockigt, *Jan Dismas Zelenka: A Bohemian Musician at the Court of Dresden* (Oxford: Oxford University Press, 2000), p. 54.

⁴² Johann Joachim Quantz, “Hrn. Johann Joachim Quanzens Lebenslauf, von ihm selbst entworfen,” in Friedrich Wilhelm Marpurg, *Historisch-kritische Beyträge zur Aufnahme der Musik* (Berlin, 1755; reprint ed. Hildesheim: Georg Olms, 1970), vol. 1, p. 211.

エ奏者リヒターは、ピゼンデルと共にフランスとイタリアに遣わされていた。そのためリヒターも、ピゼンデルと同様にフランス音楽だけでなく、イタリア音楽の演奏にも対応できた可能性が高い。これらのことに基づくと、ピゼンデルやリヒターは、イタリアの奏法に従って一糸乱れぬ合奏を実現するための要となる奏者であったと考えられる。

このようにドレスデン宮廷楽団の奏者たちは、1717年にフランス音楽だけでなく、イタリア音楽も演奏しなくてはならない状況に直面した。その翌年の1718年には、ドレスデン宮廷楽団から選出された音楽家がヴィーンに派遣された。この地に滞在していた侯子フリードリヒ・アウグスト2世に仕えるためである。続く1719年には、ザクセン選帝侯の別邸が建っていたモーリツブルクに、この楽団の音楽家が遣わされた⁴³。

モーリツブルクへの出張が行われた1719年には、ドレスデン宮廷において侯子フリードリヒ・アウグスト2世とオーストリア皇女であったマリア・ヨゼファ Maria Josepha von Österreich (1699-1757) の結婚祝賀行事が開催された。この行事は1719年9月2日からこの月の30日までの約一か月に及んだ。荒川は、この期間に開催された音楽の「出し物」の一覧表を提示した⁴⁴。この表は、祝賀行事が行われた約一か月の間、フランス・バレ及びフランス喜劇、イタリア喜劇、イタリア・オペラがほぼ連日上演されたことを示している。そのため、楽師長ヴォリュミエの配下においてフランスの奏法を学んできた奏者たちが、フランス音楽だけでなく、イタリア音楽をも演奏しなくてはならなかった状況を如実に示している。

1720年代においても、ドレスデン宮廷楽団の奏者が置かれた状況は、様々に変化した。結婚祝賀行事が行われた翌年の1720年2月1日に、ザクセン選帝侯フリードリヒ・アウグスト1世は、オペラに従事したイタリア人を解雇する命令を発する。ケップは、彼らが

⁴³ これらの出張に携わった奏者は10名を超える大人数であるため、ここでは彼らの名前を提示せず、後の第5節第2項において示す。

⁴⁴ 荒川恒子、「ザクセン選帝侯国における1719年の音楽事情に関する考察—皇太子フリードリヒ・アウグスト2世の結婚祝典行事を通じて」、『山梨大学教育人間科学部紀要』第13巻20号、2011年、2～4頁。

解雇された理由として、侯子の結婚祝賀行事が終わったことや、オペラ上演に携わるイタリア人たちに高給を支払わなくてはならなかったことを挙げている⁴⁵。

この解雇により、ドレスデン宮廷におけるオペラ上演は 1720 年以降下火になったが、フランス喜劇やフランス・バレは依然として上演された。さらに 1720 年代には教会音楽が多数作曲されるようになった⁴⁶。このことには、侯子妃マリア・ヨゼファが関わったと考えられる。彼女は、熱心なカトリック教徒であったことが指摘されているからである⁴⁷。教会音楽の作曲には、本来イタリア・オペラを上演するために雇用された楽長ハイニヒェンが従事した⁴⁸。彼はイタリアに渡っていたため、この国の様式に沿って教会音楽を作曲する機会があっただろう。これらのことに基づくと、イタリア人歌手たちが解雇されたことによってオペラは上演されなくなったが、1720 年代も依然として、フランスとイタリアの奏法に従ってこれらの国の音楽を演奏することが、ドレスデン宮廷楽団の奏者には求められた可能性が考えられる。

さらに 1720 年代のドレスデン宮廷においては、オペラ上演を再開するための準備も行われ、多額の費用を投じることなくオペラを上演するために、イタリア人の若手歌手たちを彼らの母国において教育し、その後ドレスデンに召し出すことが企てられた⁴⁹。1723 年、ザクセン選帝侯フリードリヒ・アウグスト 1 世の名によって一つの命令が出された。それは、ヴェネツィアに滞在したザクセンの特使エミーリオ・デ・ヴィッリオ伯 Graf Emilio

⁴⁵ Kai Köpp, *Johann Georg Pisendel (1687-1755) und die Anfänge der neuzeitlichen Orchesterleitung* (Tutzing: Schneider, 2005), pp. 125-126.

⁴⁶ Wolfgang Horn, *Die Dresdner Hofkirchenmusik, 1720-1745: Studien zu ihren Voraussetzungen und ihrem Repertoire* (Stuttgart: Carus-Verlag, 1987), pp. 71-81; Wolfgang Reich, *Zwei Zelenka-Studien* (Dresden: Sächsische Landesbibliothek, 1987), p. 1.

⁴⁷ Watanabe-O'Kelly Helen, "Religion and the Consort: Two Electresses of Saxony and Queens of Poland (1697-1757)," in *Queenship in Europe 1660-1815: The Role of the Consort*, edited by Clarissa Campbell Orr (Cambridge: Cambridge University Press, 2004), p. 268.

⁴⁸ Wolfgang Reich, *Zwei Zelenka-Studien* (Dresden: Sächsische Landesbibliothek, 1987), p. 7.

⁴⁹ Moritz Fürstenau, *Zur Geschichte der Musik und des Theaters am Hofe zu Dresden* (Dresden: 1861-1862 in 2 vols; reprint ed. Leipzig: Peters, 1971 in 1 vol.), pp. 159-160.

de Villio に、三人の若手女性歌手と四人の若いカストラートを運び出し、教育するよう命じるものであった⁵⁰。若手歌手たちは、1730年にドレスデンに向かった。翌年の1731年には、ナポリからハッセがドレスデン宮廷に召され、オペラ《クレオーフィデ Cleofide》がドレスデン宮廷歌劇場において上演された。

以上のように、ドレスデン宮廷楽団の奏者たちはヴォリュミエが赴任した1709年から、彼が指導したフランスの奏法に従って一糸乱れぬ合奏を行うようになった。しかし、1717年に新たにイタリア人音楽家が雇用されたことによって、この楽団の奏者たちはフランスの奏法だけでなく、それとは全く異なったイタリアの奏法に従うことも求められるようになった。1720年代にはイタリア人音楽家の解雇、教会音楽の台頭、オペラ上演再開の準備が見られ、奏者が置かれた状況は様々に変化していたが、彼らがフランス音楽とイタリア音楽の両方に対応しなくてはならない状況は変わらなかった可能性があった。1717年以降、奏者たちはイタリアの奏法を新たに習得することから始めなければならなかったため、彼らがこの奏法に基づいて一糸乱れぬ合奏を実現することは大変難しかったことは明らかであった。しかし、少なくともイタリアに留学したピゼンデルやオーボエ奏者リヒターはこの国の奏法に精通しており、この奏法に従って乱れない合奏を行うための要となる奏者であった可能性が高いことを確認した。

第2節 12点の年俸表と名簿の説明

本章において取り上げる12点の年俸表や名簿は、いずれも単体で現存するのではなく、ドレスデン宮廷において記録された資料の中に含まれている。これらの年俸表や名簿のうち3点は、見出しにドレスデン宮廷楽団の表記が見られる。それらは、1711年と1717年

⁵⁰ Panja Mücke, “Kulturtransfer und Sängermigration zur Dresdner Oper um 1730,” in *Venedig-Dresden: Begegnung zweier Kulturstädte*, edited by Andreas Henning and Barbara Marx (Leipzig: Seemann Henschel, 2010), p. 140; see also Sebastian Biesold, “Experiment Musikerprotektion: Die Geschwister Maria Santina und Francesco Maria Cattaneo am sächsisch-polnischen Hof im 18. Jahrhundert,” in *ibid.*, pp. 154-175.

の年俸表、1729年の名簿となっている。残りの9点の年俸表には、見出しにドレスデン宮廷楽団の表記がないが、ヴォリュミエの名前が他の音楽家と共に記載されている。この9点は、年月日が記された4点と、それが書かれていない5点に分類される。

本節では、これらの資料の内容を概説し、年月日が記載されていない5点に関しては、書かれた時期の特定を試みる。さらに各資料の見出しは長いため、本論文における略称を規定する。

第1項 ドレスデン宮廷楽団の年俸表と名簿

3点のドレスデン宮廷楽団の年俸表や名簿は、以下のものである。

1711年の「宮廷楽団の年俸表」

「[ザクセン] 選帝侯のオーケストラとその維持費」と題された資料の中には、「ポーランド王兼ザクセン選帝侯の音楽家とオーケストラ」、すなわちドレスデン宮廷楽団の見出しを持つ年俸表が収められており、1711年12月1日付けとなっている⁵¹。そして、年俸額と人名、その人物の肩書が順に書かれている。本論文では、これを1711年の「宮廷楽団の年俸表」と呼ぶ。

1717年の「宮廷楽団の年俸表」

「フランス喜劇団とオーケストラ」と題された資料の中には、見出しに「ポーランド王兼ザクセン選帝侯の音楽家とオーケストラ」、すなわちドレスデン宮廷楽団と記された年

⁵¹ “Die Königl: Poln: und Churfürstl: Sachß: Music und Orchestra”, D-Dla, 10026 Geheimes Kabinett, Loc. 910/1 (Das Churfurst: Orchestre und deßen Unterhaltung), fols. 1r-2r.

俸表が見られ、1717年8月1日付となっている⁵²。そして、年俸額、人名、肩書が記されている。本論文では、これを1717年の「宮廷楽団の年俸表」と呼ぶ。

1729年の「宮廷楽団の名簿」

1729年の『宮廷年鑑』には、「[ポーランド] 王の宮廷楽団」、すなわちドレスデン宮廷楽団の構成員を示した名簿が見られる。この名簿には、「ヴァイオリン奏者 Violinist」などの項目が見られ、各項目の下に人名が列挙されている⁵³。本論文では、これを1729年の「宮廷楽団の名簿」と呼ぶ。

第2項 年月日が明記された年俸表

残りの9点の年俸表のうち、4点には年月日が明記されていた。その資料を記載された年月日が古い順に記す。

1709年の「オーケストラの年俸表」

「フランス喜劇団とオーケストラ」と題された資料には、「オーケストラ」の見出しを持つ、1709年11月20日付の年俸表が見られる⁵⁴。そこには、肩書、人名、年俸額が順に記されている。本論文では、これを1709年の「オーケストラの年俸表」と呼ぶ。

⁵² “Die königl. Pohl- und Churfürstl. Sächß. Music und Orchestra”, D-Dla, 10026 Geheimes Kabinett, Loc. 383/4 (Die Bande Französischer Comoedianten und Orchestra), fol. 182r-v.

⁵³ “Die Königl. Capelle und Cammer=Musique,” in *Königlich-Polnischer und Churfürstlich-Sächsischer Hoff- und Staats-Calender* (Leipzig, 1729; D-Dl, Hist.Sax.I.0179), pages without number.

⁵⁴ “Orchestra”, D-Dla, 10026 Geheimes Kabinett, Loc. 383/4 (Die Bande französischer Comoedianten und Orchestra), fols. 110r-111r.

1719年の「音楽家の年俸表」

1719年4月25日と明記された「王の音楽家と彼らの年間契約の明細」は、「劇場に所属する者の雇用契約」と題された資料に見られる⁵⁵。この「明細」には、年俸額、肩書、人名がこの順序によって記載されている。本論文では、これを1719年の「音楽家の年俸表」と呼ぶ。

1720年5月の「音楽家の年俸表」

同じ「劇場に所属する者の雇用契約」の資料には、「王の音楽家と彼らの年間契約の明細」が、もう1点収められている⁵⁶。この「明細」には1720年5月16日と記されており、順に年俸額、肩書、人名が記載されている。本論文では、これを1720年5月の「音楽家の年俸表」と呼ぶ。

1720年9月の「音楽家の年俸表」

また「1720年の王の歌手、踊り手、喜劇役者及び音楽家の年俸目録」の資料には、「王の音楽家とその年間契約の明細」が記載されており、それは1720年9月29日付となっている⁵⁷。そして、順に年俸額、肩書、人名が書かれている。本論文では、これを1720年9月の「音楽家の年俸表」と呼ぶ。

第3項 年月日が明記されていない年俸表

以下に示す5点の年俸表は、年月日が明記されていないものである。

⁵⁵ “Specification derer Königl. Musicorum und Ihre jährlichen Tractament”, D-Dla, 10026 Geheimes Kabinett, Loc. 383/2 (Acta Die Engagements einiger zum Theater gehöriger Personen), fols. 138r-139r.

⁵⁶ “Specificatio derer Königl. Musicorum und Ihre jährlichen Tractament”, D-Dla, 10026 Geheimes Kabinett, Loc. 383/2, fol. 162r-v.

⁵⁷ “Specificatio derer Königl. Musicorum und Ihre jährl. Tractament”, D-Dla, 10077 Kollektion Schmid Amt Dresden Vol. XIb Nr. 306 (Verzeichniß des Gehalt der Königlichen Sänger, Tänzer, Komödianten und Musicker, im Jahr 1720), fol. 2r-v.

1712 年頃の「その他の年俸表」

「1680 年、1690 年、1694 年及び 1712 年の [ドレスデン] 宮廷会計簿」には、「その他」の項目が見られ、人名、肩書、勤続年数、年俸額が順に記載されている⁵⁸。そして、「ジャン・バティスト・ヴォリュミエ Jean Bapt: Woulmeyer」と「ヨーハン・ゲオルゲ・ピゼンデル Johann George Pisendel」の勤続年数は、それぞれ 3 年と半年になっている。楽師長ヴォリュミエは 1709 年にドレスデン宮廷に赴任し、ピゼンデルは 1712 年にこの宮廷に雇われたことを履歴書に明記していた。そのため、この年俸表は 1712 年頃に書かれたと推定されよう。よって本論文では、これを 1712 年頃の「その他の年俸表」と呼ぶ。

1717 年頃の「宮廷音楽家の年俸表」

「1717 年から 1720 年までのポーランド王兼ザクセン選帝侯宮廷会計簿」と題された資料には、「宮廷音楽家」の項目が見られる⁵⁹。この項目には、奏者の名前、年齢、出身地、肩書、年俸額が記されている。

この「宮廷音楽家」の年俸表の間には、各音楽家の履歴が短く書き連ねられた葉が 4 枚差し挿まれている。そして、各人の出身地や年齢、ドレスデン宮廷に就職した年が記されている⁶⁰。各音楽家の履歴は、それぞれ明らかに異なる筆跡によって書かれており、「ヨーハン・ゲオルク・ピゼンデル Johann Georg Pisendel」に関するものは、ピゼンデル自身の筆跡となっている⁶¹。さらに、それぞれの音楽家の文章は彼らの出身地の言語によって記されている。その例として、「ローマ Romano」出身の「アゴスティーノ・アントーニ

⁵⁸ “Ferner”, D-Dla, Oberhofmarschallamt, K II, Nr. 4 (Hof=Bücher de annis 1680. 1690. 1694. et 1712), fols. 258v-261r.

⁵⁹ “Capell Musici”, D-Dla, 10006 Oberhofmarschallamt, K II, Nr. 5 (Königl: Poln: und Churfülst Sächß: Hof=Buch von 1717 biß 1720), fols. 87r-94v.

⁶⁰ 音楽家によっては、これら以外の情報も記載されている。一例として、ヴォリュミエの履歴書には、彼がフランスの宮廷に勤めたことが記されている。

⁶¹ 先述のピゼンデルの短い履歴書は、この履歴のことである。

オ・デ・ロッシ Agostino Antonio De Rossi」の文章はイタリア語で書かれ、「マルセイユ Marseille」出身の「ピエール・ガブリエル・ビュッフアルダン Pierre Gabriel Buffardin」の情報はフランス語によって記されている。これらのことは、この短い履歴書が、音楽家自身によって書かれたことを強く示唆しているといえる。

先述のように、この履歴書が差し插まれた「宮廷音楽家」の年俸表には、各音楽家の年齢が記されていた。その年齢は、履歴書に記載されたものと完全に一致している。従って、「宮廷音楽家」の年俸表に記された奏者の年齢は、音楽家自身の申告に基づく可能性が高いと考えられる。

この「宮廷音楽家」において、1687年生まれのピゼンデルは30歳、1677年生まれのペツォルトは40歳と表記されている。従って、この資料は、音楽家たちの1717年頃の年齢を示しているといえよう。さらにフルステナウは、リュート奏者ジルビウス・レーオポルト・ヴァイス Silvius Leopold Weiss (1687-1750) が、1718年8月23日にドレスデン宮廷に雇用されたと指摘している⁶²。ヴァイスの名前は、この「宮廷音楽家」の年俸表に見られない。これらのことから、この「宮廷音楽家」の年俸表は、1717年頃に書かれたと推定できよう。そのため本章では、これを1717年頃の「宮廷音楽家の年俸表」と呼ぶ。

1718年頃の「音楽家の年俸表」

「劇場に所属する者の雇用契約」と題された資料には、「王の音楽家と彼らの年間契約の明細」が見られ、順に年俸額と肩書、人名が併記されている⁶³。この「明細」には年月日が記されており、8月1日と読み取ることができるが、年の部分は判読不能であった。

⁶² Moritz Fürstenau, *Zur Geschichte der Musik und des Theaters am Hofe zu Dresden* (Dresden: 1861-1862 in 2 vols; reprint ed. Leipzig: Peters, 1971 in 1 vol.), vol. 2, p. 126; see also Douglas Alton Smith, "A Biography of Silvius Leopold Weiss," in *Journal of the Lute Society of America* 31 (1998): 1-48.

⁶³ "Specificatio der Königl. Musicorum und Ihre jährlichen Tractamente", D-Dla, 10026 Geheimes Kabinett, Loc. 383/2 (Acta Die Engagements einiger zum Theater gehöriger Personen), fol. 121r-v.

この「明細」の直後には、同じ筆跡によって「フランス喜劇役者とそれに属する者の年間契約の明細」が記されている⁶⁴。このフランス喜劇役者の「明細」には、1718年8月1日と明記されている。

以上のことから、「王の音楽家と彼らの年間契約の明細」の年月日は、フランス喜劇役者の「明細」と同じ1718年8月1日であると推定されるだろう。そのため本論文では、これを1718年頃の「音楽家の年俸表」と呼ぶ。

1721年頃の「宮廷音楽家の年俸表」

「1721年から1725年までのポーランド王兼ザクセン選帝侯宮廷会計簿」には、「宮廷音楽家」の項目が見られ、人名と年齢、出身地、肩書、年俸額が順に記載されている⁶⁵。そして、1687年生まれのピゼンデルは34歳、1677年生まれのペツォルトは44歳となっている。従って、この年俸表は1721年頃のものと推定できよう。よって本論文では、これを1721年頃の「宮廷音楽家の年俸表」と呼ぶ。

1725年頃の「宮廷音楽家の年俸表」

同じ「1721年から1725年までのポーランド王兼ザクセン選帝侯宮廷会計簿」には、「宮廷音楽家 Capell Musici」の年俸表がもう一つ記載されている⁶⁶。そこには人名、年齢、出身地、肩書、年俸額がこの順に書かれている。そしてピゼンデルは38歳、ペツォルトは48歳となっているため、この年俸表は1725年頃のものと推測されるだろう。そのため本論文では、これを1725年頃の「宮廷音楽家の年俸表」と呼ぶ。

⁶⁴ “Specification derer Französische Comoedianten und dazu gehörigen Personen, nebst Ihren Jährl. Tractament, D-Dla, 10026 Geheimes Kabinett”, Loc. 383/2, fol. 122r.

⁶⁵ “Capell Musici”, D-Dla, 10026 Oberhofmarschallamt, K II, Nr. 6 (Königl. pohlnisches und kurfürstl. Sächßisches Hoff-Buch von 1721 usg 1725), fols. 73v-78r.

⁶⁶ D-Dla, 10026 Oberhofmarschallamt, K II, Nr. 6, fols. 1v-4r.

第4項 各資料が書かれた時期について

以上のように、ヴォリュミエの名前が見られ、年月日が明記されていなかった5点の年俸表は、その内容から、それぞれが書かれたおよその時期を特定できた。改めて合計12点の年俸表と名簿を概観すると、最も古いものは、ヴォリュミエが楽師長に就任した1709年の「オーケストラの年俸表」となっている。

またドレスデン宮廷楽団の3点の年俸表と名簿は、ヴォリュミエが楽師長に就任した2年後の1711年と、彼が楽師長を務めた期間のほぼ中頃にあたる1717年、さらに彼が亡くなった翌年の1729年のものとなっている。これら三つの年のうち、1711年から1717年までの7年の間に記録された資料には、1712年頃の「その他の年俸表」がある。そして1717年から1729年までは12年もの開きがあるが、この間に書かれた資料として、1717年頃の「宮廷音楽家の年俸表」、1718年頃、1719年、1720年5月、1720年9月の4点の「音楽家の年俸表」、1721年頃と1725年頃の2点の「宮廷音楽家の年俸表」を挙げることができる。

従って、この12点の資料を参照することにより、ヴォリュミエが楽師長を務めた時期のドレスデン宮廷楽団に所属した奏者を、ある程度詳細に把握できると考えられる。以下では、これまでに確認したドレスデン宮廷楽団の歴史を踏まえつつ、この12点の資料に記された奏者を確認する。

第3節 1709年の「オーケストラの年俸表」

1709年の「オーケストラの年俸表」には、楽師長ヴォリュミエの他に25名の人名が記載されている。彼らのうちヴォリュミエの肩書は「楽師長 Concertmeister」となっており、楽器の種類を示していない。しかし、彼はフランスの奏法を体得したヴァイオリンの名手であった。残りの25名のうち、23名の肩書は楽器の種類を示したものとなっている。

その他の2名のうち、カルロ・フィオレッリ Carlo Fiorelli は「宮廷作曲家 Compositor di Camera」となっており、「シュテファン・リンク Stephan Ringt[?]」には、肩書が記されていない⁶⁷。このうち、「宮廷作曲家」のフィオレッリは、ヴァイオリン奏者を兼務したと考えられる。なぜなら、ドレスデン宮廷において筆写されたヴァイオリン譜には、フィオレッリの名前が記されているため、彼がこのヴァイオリン譜を演奏したと考えられるからである⁶⁸。

また、ラントマンはドレスデン宮廷楽団に所属した音楽家の目録を作成しており、この目録においてシュテファン・リンク Stephan Ringk は、1680年頃から1709年頃まで在籍したヴァイオリン奏者となっている⁶⁹。先の肩書を持たなかった「シュテファン・リンク」とこのヴァイオリン奏者は、名前の綴りが酷似している。さらに、「オーケストラの年俸表」は1709年のものであるため、この年俸表が書かれた年は、ヴァイオリン奏者シュテファン・リンクがドレスデン宮廷に在籍した期間に含まれるといえるだろう。従って、肩書が記されていなかった「シュテファン・リンク」は、ヴァイオリン奏者リンクを指したと考えられる。

以上のことから、「オーケストラの年俸表」に現れる奏者は、楽師長ヴォリュミエ、肩書から明らかな25名、カルロ・フィオレッリ、シュテファン・リンクであると判断できる。

⁶⁷ この二人のうち、後者の姓を示す5文字は、その最後の文字を明確に判読できなかった。

⁶⁸ Nicola Matteis, *Concertos in B-Dur* (D-Dl, Mus.2045-O-1), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212001396>.

⁶⁹ Ortrun Landmann. *Namenverzeichnisse Der sächsischen Staatskapelle Dresden: Eigene Benennungen, Namen der Administratoren, der Musicalischen Leiter und der ehemaligen Mitglieder von 1548 bis 2013, in systematisch-chronologischer Folge.* (2017), accessed September 5, 2017, http://www.staatskapelle-dresden.de/fileadmin/home/pdf/diverses/Historische_Verzeichnisse__Stand_Juli_2017.pdf; Andreas Schreiber, *Von der churfürstlichen Cantorey zur Sächsischen Staatskapelle Dresden: Ein biographisches Mitgliederverzeichnis: 232¹ 1548-2003* (Dresden, 2003); see also Moritz Fürstenau, *Beiträge zur Geschichte der königlich-sächsischen musikalischen Kapelle: Großentheils aus archivalischen Quellen* (Dresden: Meser, 1849), pp. 110-111.

表 1-1 は、これらの奏者の名前を、彼らが演奏したと考えられる楽器の種類ごとに提示している⁷⁰。

表 1-1 1709 年の「オーケストラの年俸表」に記載された奏者

楽器の種類と奏者の名前	資料に記された肩書
VI	
ヴォリュミエ、ジャン＝バティスト Woulmyer, Jean-Baptiste	楽師長 <i>Concertmeister</i>
フィオレッリ、カルロ Fiorelli, Carlo	宮廷作曲家 <i>Compositor di Camera</i>
リビツキ、アーダム Rybizki, Adam	第 2 ヴァイオリン <i>Sec: Violino</i>
リンク、シュテファン Ringk, Stephan	[記載なし]
ロッティ、ヨーハン・フリードリヒ Lotti, Johann Friedrich	第 2 ヴァイオリン <i>Second: Violino</i>
Vla	
ゴルデ、マルティン ⁷¹ Golde, Martin	ターユ <i>Taille</i>
プレトーリウス、ヨーハン・ハインリッヒ Praetorius, Johann Heinrich	オート・コントル <i>Haute contre</i>
ペツシュマン、ミヒャエル Petzschmann, Michael	ヴィオラ奏者 <i>Braccista</i>
レーナイス、ヨーハン・ゲオルク Lehneis, Johann Georg	オート・コントル <i>Haute contre</i>
ローター、クリスティアン Rother, Christian	ターユ <i>Taille</i>
Vlc	
オロンデル、ジャン・バティスト・ジョゼフ・デュ Haulondel, Jean Baptiste Joseph Du	チェロ <i>Violoncell</i>
ヘリング、ダニエル Herring, Daniel	チェロ <i>Violoncell</i>
Cb	
ヘリング、ゴットフリート Herring, Gottfried	コントラバス <i>Contre Basse</i>

⁷⁰ この表の左の列には、各人の名前を示した。その名前の綴りは、参照している一次資料、すなわち 1709 年の「オーケストラの年俸表」に記されたものではなく、本論文の「凡例」において設定した原則に従って、ラントマンの目録のものを記載している。一方、この表の右の列には、参照している一次資料に記された各人の肩書を原文のまま記載した。肩書は、各人を楽器の種類ごとに区分するための基準の一つとなったおり、明記する必要があると考えたからである。本論文では、一次資料である名簿や年俸表から奏者を抽出し、彼らを楽器の種類ごとに分類して表に示す場合、特に断らない限り、この表 1-1 の書式に従う。

⁷¹ ヴィオラ的一种であった「ターユ」の奏者の一人は、「クリスティアン・ゴルデ Christian Golde」となっている。1711 年以降の年俸表や名簿には「マルティン・ゴルデ Martin Golde」がヴィオラ奏者として記載されている。これらの人物は同一であると判断した。

楽器の種類と奏者の名前	資料に記された肩書
Fl	
D. ウイス D. Huisse	フルート <i>Flute Allemande</i>
父ル・コント Le Conte père	フルート <i>Flute Allemande</i>
Ob	
アンリオン、シャルル Henrion, Charles	第 1 オーボエ <i>Hautbois pr:</i>
アンリオン、ジャン＝バティスト Henrion, Jean-Baptiste	第 2 オーボエ <i>Hautb: 2. do</i>
リヒター、ヨーハン・クリスティアン Richter, Johann Christian	第 1 オーボエ <i>Hautbois pr:</i>
レヒ、クリスティアン Rech, Christian	第 2 オーボエ <i>Hautb: s. do</i>
Fg	
リビツキ、アントン Rybizki, Anton	バスン <i>Basson</i>
子ル・コント Le Conte le Fils	バスン <i>Basson</i>
Lut	
アリゴーニ、フランチェスコ Arigoni, Francesco	テオルボ奏者 <i>Tiorbista</i>
ベントレー、ゴットフリート Bentley, Gottfried	テオルボ奏者 <i>Tiorbista</i>
Org	
コスモフスキ、ペトルス Cosmovsky, Petrus	オルガン奏者兼教会作曲家 <i>Organista e Compos di Chiesa</i>
ペツォルト、クリスティアン Petzold, Christian	オルガン奏者兼宮廷作曲家 <i>Organ: e Compos di Camera</i>
ルパリーニ Luparini	オルガン奏者兼教会作曲家 <i>Organista e Compos di Chiesa</i>

表 1-1 からは、ヴィオラ奏者が「オート・コントル」、「ターユ」、「ヴィオラ奏者」の三つに区分されていることが分かる。「オーケストラの年俸表」において、ヨーハン・ゲオルク・レーナイスとヨーハン・ハインリッヒ・プレトリーウスは「オート・コントル」の奏者として記載されており、クリスティアン・ローターとマルティン・ゴルデは「ターユ」、ミヒャエル・ペッチュマンは「ヴィオラ奏者」として表記されているのである。

このように 3 種類のヴィオラを用いることは、すでにフランスの楽団において行われていた⁷²。スピッツァーとザスローは、フランスの楽団である「王の 24 のヴァイオリン Les

⁷² Mary A. Oleskiewicz, *Quantz and the Flute at Dresden: His Instruments, his Repertory and their Significance for the Versuch and the Bach Circle* (Ph. D. diss., Duke University, 1998), pp. 41-43. 荒川恒子、「ザクセン選帝侯フリードリヒ・アウグス

Vingt-quatre Violons du Roy]、「王の小さなヴァイオリン Les Petits Violons du Roy」、オペラ座の楽団の人数表を示した⁷³。彼らの表に基づく、「王の24のヴァイオリン」は1636年から、「王の小さなヴァイオリン」は1664年から、オペラ座の楽団は1704年から、「オート・コントル hautes contres」、「ターユ tailles」、「カント quintes」の奏者を擁している。

フランスの宮廷に勤めたヴォリュミエは、この国の奏法をドレスデン宮廷の奏者たちに教えていた。さらに「オーケストラの年俸表」に基づく、ヴォリュミエがドレスデン宮廷に赴任した年に、この宮廷においてフランスの楽団を模した「オーケストラ」が組織されていたと考えられる。

第4節 1711年の「宮廷楽団の年俸表」

1711年の「宮廷楽団の年俸表」には、楽師長ヴォリュミエの他に34名の人名が見られ、この34名のうち29名の肩書は楽器の種類を示している。残りの5名の名前と肩書は表1-2に示した。彼らのうちリヒターは、先の「オーケストラの年俸表」において「第2オーボエ」の奏者として記載されていた。一方、残りの4名は肩書から奏者ではなかったと考えられよう。

表 1-2 奏者の肩書を持たない者（1711年の「宮廷楽団の年俸表」）

資料に記された肩書	名前
「楽長 der Capellmeister」	ヨーハン・クリストフ・シュミット Johann Christoph Schmidt
「写譜家 Copialien」	「ヨーハン・ヤーコプ・リントナー Johann Jacob Lindner」
「チェンバロの調律 die Clavicimbel zu Stimmen」	「グレープナー Gräbner」

ト 1 世宮廷における音楽事情」、『山梨大学教育人間科学部紀要』第12巻19号、2010年、130頁。

⁷³ John Spitzer and Neal Zaslaw, *The Birth of the Orchestra: History of an Institution, 1650-1815* (Oxford: Oxford University Press, 2004), pp. 76, 79, 188 and 189.

資料に記された肩書	名前
「楽器庫管理人 Inspector der Instrument Kammer」	「ゲオルク・アウグスティン・キュメルマン Georg Augustin Kummelmann」
〔記載なし〕	ヨーハン・クリスティアン・リヒター Johann Christian Richter

以上のことから、この 1711 年の「宮廷楽団の年俸表」から抽出される奏者は、楽師長
ヴォリュミエ、奏者の肩書を持った 29 名、リヒターになる。表 1-3 は、これらの奏者を
彼らが演奏したと考えられる楽器の種類ごとに示している。また、1709 年の「オーケスト
ラの年俸表」に見られた者には、「○」印を付けている。

表 1-3 1711 年の「宮廷楽団の年俸表」に記載された奏者

楽器の種類と奏者の名前	資料に記された肩書	「オーケ ストラの 年俸表」 に現れた者
VI		
ヴォリュミエ、ジャン＝バティスト Woulmyer, Jean-Baptiste	楽師長 <i>Maistre des Concerts</i>	○
ピゼンデル、ヨーハン・ゲオルク Pisendel, Johann Georg	ヴァイオリン奏者兼宮廷音楽家 <i>Violiste und Cammer Musicus</i>	
フント、フランチェスコ Hunt, Francesco	ヴァイオリン奏者 <i>Violiste</i>	
リビツキ、アーダム Rybizki, Adam	ヴァイオリン奏者 <i>Violiste</i>	○
ロッティ、ヨーハン・フリードリヒ Lotti, Johann Friedrich	ヴァイオリン奏者 <i>Violist</i>	○
Vla		
ゴルデ、マルティン Golde, Martin	ヴィオラ奏者 <i>Bracciste</i>	○
プレトーリウス、ヨーハン・ハインリッヒ Praetorius, Johann Heinrich	ヴィオラ奏者 <i>Bracciste</i>	○
ペツチュマン、ミヒャエル Petzschmann, Michael	ヴィオラ奏者 <i>Bracciste</i>	○
ヘリング、ゴットフリート Herring, Gottfried	ヴィオラ奏者 <i>Bracciste</i>	
ライン、カール・ヨーゼフ Rhein, Carl Joseph	ヴィオラ奏者 <i>Bracciste</i>	
レーナイス、ヨーハン・ゲオルク Lehneis, Johann Georg	ヴィオラ奏者 <i>Bracciste</i>	○
Vlc		
オロンデル、ジャン・バティスト・ジョゼフ・デュ Haulondel, Jean Baptiste Joseph Du	チェロ <i>Violoncell</i>	○

楽器の種類と奏者の名前	資料に記された肩書	「オーケストラの年俸表」に現れた者
ティロワ、ジャン＝バティスト・プラシュ・デュ Tilloy, Jean-Baptiste Prache du	チェロ兼写譜家 <i>Violoncell und Notiste</i>	
ロッシ、アゴスティーノ・アントーニオ・デ Rossi, Agostino Antonio de	チェロ兼宮廷音楽家 <i>Violoncell und Cammer Musicus</i>	
Cb		
ゼレンカ、ヤン・ディースマス Zelenka, Jan Dismas	コントラバス <i>Contre Basse</i>	
Fl		
アンリオン、ジャン＝バティスト Henrion, Jean-Baptiste	フルート奏者 <i>Flauteniste</i>	○
ヴァイゲルト、ダーヴィット ⁷⁴ Weigelt, David	フルート奏者 <i>Flauteniste</i>	
デュセ、ジャン＝バティスト Ducé, Jean-Baptiste	フルート <i>Flute Allemande</i>	○
Fl&Fg		
カデ、ジャン Cadet, Jean	フルート・アルマンド兼バスン <i>Flute allemande und Basson</i>	
Ob		
アンリオン、シャルル Henrion, Charles	オーボエ奏者 <i>Hautboiste</i>	○
ブロッホヴィッツ、ヨーハン・マルティン Blochwitz, Johann Martin	オーボエ奏者 <i>Hautboiste</i>	
リヒター、ヨーハン・クリスティアン Richter, Johann Christian	[記載なし]	○
Fg		
ヘリング、ダニエル Herring, Daniel	バスン <i>Basson</i>	○
リビツキ、アントン Rybizki, Anton	バスン <i>Basson</i>	○
Hr		
ザム、アーダム・フランツ Samm, Adam Franz	ホルン奏者 <i>Corns de Chasse</i>	
フィッシャー、ヨーハン・アードルベルト Fischer, Johann Adalbert	ホルン奏者 <i>Corns de Chasse</i>	
Lut		
アリゴニー、フランチェスコ Arigoni, Francesco	テオルボ奏者 <i>Tiorbiste</i>	○
ベントレー、ゴットフリート Bentley, Gottfried	リュート奏者兼宮廷音楽家 <i>Arciliutist und Cammer Musicus</i>	○
Org		
コスモフスキ、ペトルス Cosmovsky, Petrus	教会作曲家兼オルガン奏者 <i>Kirchen Componist u. Organist</i>	○

⁷⁴ 「フルート奏者」の一人は、「クリスティアン・ヴァイゲルト Christian Weigelt」である。1712年頃の「その他の年俸表」以降の資料には、「ダーヴィット・ヴァイゲルト David Weigelt」がフルート奏者として記載されている。これらの人物は同一であると判断した。

楽器の種類と奏者の名前	資料に記された肩書	「オーケストラの年俸表」に現れた者
シュミット、ヨーハン・ヴォルフガング Schmidt, Johann Wolfgang	オルガン奏者兼写譜家 <i>Organ: und Notiste</i>	
ペツォルト、クリスティアン Petzold, Christian	宮廷作曲家兼オルガン奏者 <i>Cammer Componist und Organist</i>	○

表 1-3 から分かるように、この表に現れる 31 名のうち半数程の 17 名は、「オーケストラの年俸表」に見られた奏者であり、その中には「オート・コントロール」のレーナイスやプレトリーウス、「ターユ」のゴルデ、「ヴィオラ奏者」ペツチュマンが含まれる。そのため、1711 年のドレスデン宮廷楽団は、フランスの楽団に倣った 1709 年の「オーケストラ」に基づいていたと考えられよう。

この「宮廷楽団の年俸表」において、ピゼンデルはヴァイオリン奏者として記されており、彼は他の多くの奏者と異なり、「宮廷音楽家」の称号も与えられている。この肩書は、ピゼンデルの他にも、チェロ奏者アゴスティーノ・アントーニオ・デ・ロッシとリュート奏者ゴットフリート・ベントレーに与えられている。この 3 名は、1712 年頃の「その他の年俸表」においても「宮廷音楽家」として記載されている。

この 1712 年頃の年俸表には、楽師長ヴォリュミエの他に 34 名の名前が記されており、この 34 名のうち 31 名の肩書は、「ヴァイオリン奏者 Violist」など、彼らが奏者であったことを示している。他方、残りの 3 名は、「宮廷楽団世話係 Kapelldiener」の「ゴットロープ・ヴェルナー Gottlob Werner」、「バスシスト Bassiste」の「ピエール・ギュイアール Pierre Guiart」、同じく「バスシスト Bassiste」の「父ラ・フランス La France le Perre」、すなわちロベール・デュ・オロンデル Robert Du Haulondel である。彼らのうち、世話係ヴェルナーが奏者でないことは明らかであろう。

後に参照する年俸表には、バリトン歌手として「ペーター・ギュアルト Peter Guart」の名前が記載されている。名前の綴りが酷似していることから、「その他の年俸表」に見られた「バッシスト」の「ピエール・ギュイアール」は、歌手であったといえよう。

しかし、もう一人の「バッシスト」であったロベール・デュ・オロンデルは、後に取り上げる年俸表において、チェロ奏者やヴィオロン奏者の肩書を付されている。従って、彼は低音楽器の奏者であったと考えられる。

これらのことから、1712年頃の「その他の年俸表」に現れる奏者は、楽師長ヴォリュミエ、肩書から明白な31名、ロベール・デュ・オロンデルと判定できる。表1-4は、これらの奏者を、彼らが演奏したと推定される楽器の種類ごとに示している。さらに、この表の右の列には、「その他の年俸表」に記された各人の勤続年数を載せた。

表 1-4 1712年頃の「その他の年俸表」に記載された奏者

楽器の種類と奏者の名前	資料に記された肩書	勤続年数
VI		
ヴォリュミエ、ジャン＝バティスト Woulmyer, Jean-Baptiste	楽師長 <i>Concert Meister</i>	3年
ピゼンデル、ヨーハン・ゲオルク Pisendel, Johann Georg	首席ヴァイオリン奏者兼宮廷音楽家 <i>Premier Violist u. Kammer Musicus</i>	半年
フント、フランチェスコ Hunt, Francesco	ヴァイオリン奏者 <i>Violist</i>	2年
リビツキ、アーダム Rybizki, Adam	ヴァイオリン奏者 <i>Violist</i>	14年
ロットィ、ヨーハン・フリードリヒ Lotti, Johann Friedrich	ヴァイオリン奏者兼宮廷音楽家 <i>Violist und Cammer Musicus</i>	3年
ル・グロ、シモン Le Gros, Simon	ヴァイオリン奏者 <i>Violiste</i>	15年
Vla		
ゴルデ、マルティン Golde, Martin	ヴィオラ奏者兼ヴィオラ・ダ・ガンバ奏者 <i>Bracciste & Violdagambiste</i>	3年
プレトリーウス、ヨーハン・ハインリッヒ Praetorius, Johann Heinrich	ヴィオラ奏者 <i>Bracciste</i>	32年
ペツシュマン、ミヒャエル Petzschmann, Michael	ヴィオラ奏者 <i>Bracciste</i>	14年
ヘリング、ゴットフリート Herring, Gottfried	ヴィオラ奏者 <i>Bracciste</i>	31年

楽器の種類と奏者の名前	資料に記された肩書	勤続年数
ライン、カール・ヨーゼフ Rhein, Carl Joseph	ヴィオラ奏者 <i>Bracciste</i>	4年
レーナイス、ヨーハン・ゲオルク Lehneis, Johann Georg	ヴィオラ奏者 <i>Bracciste</i>	15年
Vlc		
オロンデル、ジャン・バティスト・ジョゼフ・デュ Haulondel, Jean Baptiste Joseph Du	チェロ奏者 <i>Violoncelliste</i>	3年
ティロワ、ジャン＝バティスト・ブラシュ・デュ Tilloy, Jean-Baptiste Prache du	チェロ [奏者] 兼写譜家 <i>Violoncell- und Notiste</i>	13年
ロッシ、アゴスティーノ・アントーニオ・デ Rossi, Agostino Antonio de	チェロ奏者兼宮廷音楽家 <i>Violoncellist und Cammer Musicus</i>	3年
Cb		
ゼレンカ、ヤン・ディースマス Zelenka, Jan Dismas	ヴィオロン奏者 <i>Violonist</i>	2年
Fl		
アンリオン、ジャン＝バティスト Henrion, Jean-Baptiste	フルート奏者 <i>Flauteniste</i>	15年
ヴァイゲルト、ダーヴィット Weigelt, David	フルート奏者 <i>Flauteniste</i>	1年と半年
カデ、ジャン Cadet, Jean	フルート・アルマンド奏者 <i>Flute Allemande Spieler</i>	1年
デュセ、ジャン＝バティスト Ducé, Jean-Baptiste	フルート・アルマンド <i>Flute Allemande</i>	3年
Ob		
アンリオン、シャルル Henrion, Charles	オーボエ奏者 <i>Hautboiste</i>	15年
ブロッホヴィッツ、ヨーハン・マルティン Blochwitz, Johann Martin	オーボエ奏者 <i>Hautboiste</i>	1年と半年
リヒター、ヨーハン・クリスティアン Richter, Johann Christian	主席オーボエ奏者 <i>Premier Hautboiste</i>	3年
Fg		
ヘーニッヒ、ダニエル Hennig, Daniel	バスン奏者 <i>Basson Spieler</i>	14年
リビツキ、アントン Rybizki, Anton	バスン奏者 <i>Basson Spieler</i>	14年
Hr		
ザム、アーダム・フランツ Samm, Adam Franz	ホルン奏者 <i>Corn de Chasse Blaser</i>	1年と3か月
フィッシャー、ヨーハン・アードルベルト Fischer, Johann Adalbert	ホルン奏者 <i>Corn de Chasse Blaser</i>	1年と3か月
Lut		
アリゴニー、フランチェスコ Arigoni, Francesco	テオルボ奏者 <i>Tiorbist</i>	15年
ベントレー、ゴットフリート Bentley, Gottfried	アルキリユート奏者兼宮廷音楽家 <i>Arci Liutiste, und Kammer Musicus</i>	12年
Og		
コスモフスキ、ペトルス Cosmovsky, Petrus	教会作曲家兼オルガン奏者 <i>Kirchen Componist und Organist</i>	12年

楽器の種類と奏者の名前	資料に記された肩書	勤続年数
シュミット、ヨハン・ヴォルフガング Schmidt, Johann Wolfgang	オルガン奏者兼写譜家 <i>Organist und Notiste</i>	3年
ペツォルト、クリスティアン Petzold, Christian	宮廷作曲家兼オルガン奏者 <i>Kammer Componist: und Organist</i>	3年
その他		
オロンデル、ロベール・デュ Haulondel, Robert Du	低音楽器奏者 <i>Bassiste</i>	[記載なし]

この表から分かるように、1712年頃の「その他の年俸表」では、ヴァイオリン奏者ピゼンデル、チェロ奏者ロッシ、リュート奏者ベントレーに加え、ヴァイオリン奏者ヨハン・フリードリヒ・ロッティも「宮廷音楽家」に数えられている。さらに、オーボエ奏者ヨハン・クリスティアン・リヒターは「首席オーボエ奏者」の肩書を持っている。その上、この5名のうちリュート奏者ベントレーを除く4名は、勤続年数が3年以下となっている。

この表 1-4 に現れる奏者は合計 34 名に上り、半数近くの 15 名はドレスデン宮廷に 10 年以上勤めている。これらの古参が在籍する中、ドレスデン宮廷に勤め始めて僅か 3 年以内に特別な称号を得たヴァイオリン奏者ピゼンデルとロッティ、チェロ奏者ロッシ、オーボエ奏者リヒターは、雇用された直後から奏者としての頭角を現したと考えられよう⁷⁵。この4名のうちヴァイオリン奏者ピゼンデルとオーボエ奏者リヒターは、1714年にパリに、その2年後の1716年にはイタリアに向かう機会を得ていた。

⁷⁵ 「宮廷音楽家」の職務の内容は、明らかにされていない。この肩書を持った奏者はヴァイオリン2名、チェロ1名、リュート1名であることから、彼らは、二つの声部と通奏低音声部のみから構成されるトリオ・ソナタなどの楽曲を演奏できただろう。よって、必要に応じて、彼らのみによって演奏した可能性がある。しかし本論文は、多数の奏者が合奏したことを研究対象にしているため、「宮廷音楽家」の実態に関する論究はとどめることにする。

第5節 1717年の「宮廷楽団の年俸表」

1717年の「宮廷楽団の年俸表」には、楽師長ヴォリュミエの他に合計42名の人名が見られ、42名のうち32名の肩書は楽器の種類を示している。表1-5は、この32名以外の10名とその肩書を示している。

表 1-5 奏者の肩書を持たない者（1717年の「宮廷楽団の年俸表」）

資料に記された肩書	名前
「楽長 Der Capellmeister」	ヨーハン・クリストフ・シュミット Johann Christoph Schmidt
	ヨーハン・ダーヴィット・ハイニヒェン Johann David Heinichen
「バス歌手 der Bassist」	「ディアール Diart」
「アルト歌手 Altist」	「ブルガール Bourgard」
「楽器庫管理人 Inspector der Instr: Kammer」	「ゲオルゲ・アウグスティン・キュメルマン George Augustin Kümmelmann」
「Copialien 写譜家」	「ヨーハン・ヤーコプ・リントナー Johann Jacob Lindner」
「オルガン職人 der Orgel Macher」	「グレーブナー Gräbner」
「楽器係 Instr: Diener」	「ゴットロープ・ヴェルナー Gottlob Werner」
[肩書の記載なし]	「フェリチェッティ Felicetti」
[肩書の記載なし]	パンタレオン・ヘーベンシュトライト Pantaleon Hebenstreit

この10名のうち、「フェリチェッティ」、すなわちジョヴァンニ・マリーア・フェリーチェ・ピチネッティ Giovanni Felice Picinetti は、音楽家自身によって記されたと考えられた短い履歴書において、「チェロ Violoncello」の奏者であることを明記している⁷⁶。さらにヘーベンシュトライトは、自身の名前を冠した楽器パンタレオンの奏者であった。残りの者は、その肩書に基づくと奏者ではなかったと考えられる。

以上のことから、1717年の「宮廷楽団の年俸表」から特定できる奏者は、楽師長ヴォリュミエ、肩書から判断された32名、ピチネッティ、ヘーベンシュトライトになる。表1-6は、彼らを楽器の種類ごとに分類して提示している。そして、すでに参照した1712年

⁷⁶ D-Dla, 10006 Oberhofmarschallamt, K II, Nr. 5 (Königl: Poln: und Churfülst. Sächß: Hof=Buch von 1717 biß 1720), fol. 92v.

頃の「その他の年俸表」に現れた者には「○」印を付けている。また、18世紀前半のドレスデン宮廷の歴史を論じたストックイットは、1717年頃のドレスデン宮廷楽団に所属したと考えられる者を一覧表に提示し、各人の出身地を示した⁷⁷。表 1-6 は、彼女の一覧表に基づき各奏者の出身地を示している。

⁷⁷ Janice B. Stockigt, “The Court of Saxony-Dresden,” in *Music at German Courts, 1715–1760: Changing Artistic Priorities*, edited by Samantha Owens et al. (Woodbridge: Boydell, 2011), pp. 38-39.

表 1-6 1717年の「宮廷楽団の年俸表」に記載された奏者

楽器の種類と奏者の名前	資料に記された肩書	「その他の年俸表」に現れた者	出身地
VI			
ヴォリュミエ、ジャン＝バティスト Woulmyer, Jean-Baptiste	楽師長 Maitre des Concert	○	スペイン
ピゼンデル、ヨーハン・ゲオルク Pisendel, Johann Georg	ヴァイオリン奏者兼宮廷音楽家 Violinist u. Cammer Musico	○	カドルツブルク Cadolzburg
フント、フランチェスコ Hunt, Francesco	ヴァイオリン奏者 Violist	○	フィレンツェ
リビツキ、アーダム Rybizki, Adam	ヴァイオリン奏者 Violist	○	ポーランド
ル・グロ、シモン Le Gros, Simon	ヴァイオリン奏者 Violist	○	パリ
ロッティ、ヨーハン・フリードリヒ Lotti, Johann Friedrich	ヴァイオリン奏者 Violist	○	ハノーファー
Vla			
ケストナー、ゲオルゲ・フリードリヒ Kästner, George Friedrich	ヴィオラ奏者 Braccist		プレッティン Prettin
ゴルデ、マルティン Golde, Martin	ヴィオラ奏者 Braccist	○	ドレスデン
プレトーリウス、ヨーハン・ハインリッヒ Praetorius, Johann Heinrich	ヴィオラ奏者 Braccist	○	[記載なし]
ペツシュマン、ミヒャエル Petzschmann, Michael	ヴィオラ奏者 Braccist	○	ライプツィヒ
ライヒェル、ヨーハン・クリストフ Reichel, Johann Christoph	ヴィオラ奏者 Braccist		ブルクハルトツヴァルデ Burkhardswalde
ライン、カール・ヨーゼフ Rhein, Carl Joseph	ヴィオラ奏者 Braccist	○	ヴィーン

楽器の種類と奏者の名前	資料に記された肩書	「その他の年俸表」に現れた者	出身地
レーナイス、ヨーハン・ゲオルク Lehneis, Johann Georg	ヴィオラ奏者 Braccist	○	レーゲンスタウフ Regenstauf
Vlc			
オロンデル、ジャン・バティスト・ジョゼフ・デュ Haulondel, Jean Baptiste Joseph Du	チェロ奏者 Violoncell.	○	ブリュッセル
ティロワ、ジャン＝バティスト・プラシュ・デュ Tilloy, Jean-Baptiste Prache du	チェロ奏者兼写譜家 Violoncell. u. Notist	○	パリ
ピチネッティ、ジョヴァンニ・マリーア・フェリーチェ Picinetti, Giovanni Maria Felice	[肩書の記載なし]		ヴェネツィア
ロッシ、アゴ스티ーノ・アントーニオ・デ Rossi, Agostino Antonio de	チェロ奏者兼宮廷音楽家 Violoncell. u. Cammer Musico	○	ローマ
Cb			
ゼレンカ、ヤン・ディースマス Zelenka, Jan Dismas	コントラバス Contre Basse	○	ボヘミア
Fl			
ヴァイゲルト、ダーヴィット Weigelt, David	フルート奏者 Flautenist	○	アイベンシュトック Eibenstock
ビュッフアルダン、ピエール＝ガブリエル Buffardin, Pierre-Gabriel	フルート・アルマンド Flute Allemande		プロヴァンス
Fl & Fg			
カデ、ジャン Cadet, Jean	フルート・アルマンド兼バスン Flute Allemand u. Basson	○	ピカルディ
Ob			
アンリオン、シャルル Henrion, Charles	オーボエ奏者 Hautboist	○	ルクセンブルク
ザイフェルト、マルティン Seyfert, Martin	オーボエ奏者 Hautboist		ノイブランデンブルク
ブロツホヴィッツ、ヨーハン・マルティン Blochwitz, Johann Martin	オーボエ奏者 Hautboist	○	ガイトハイン Geithain

楽器の種類と奏者の名前	資料に記された肩書	「その他の年俸表」に現れた者	出身地
リヒター、ヨーハン・クリスティアン Richter, Johann Christian	オーボエ奏者 Hautboist	○	ドレスデン
Fg			
クヴァッツ、カスパー・エルンスト Quatz, Caspar Ernst	バソン奏者 Bassonist		ベルリン
ベーメ、ヨーハン・ゴットフリート Böhme, Johann Gottfried	バソン奏者 Bassonist		リュッツシェーナ Lützschna
Hr			
ザム、アーダム・フランツ Samm, Adam Franz	ホルン奏者 Corno de Chasse	○	アルンシュタイン Arnstein
フィッシャー、ヨーハン・アーダルベルト Fischer, Johann Adalbert	ホルン奏者 Corno de Chasse	○	プレスニッツ Pressnitz
Lut			
アリゴーニ、フランチェスコ Arigoni, Francesco	テオロボ奏者 Tiorbist	○	ローマ
ベントレー、ゴットフリート Bentley, Gottfried	アルキ・リュート奏者兼宮廷音楽家 Arcilutist u. Cammer Musico	○	ドレスデン
Org			
シュミット、ヨーハン・ヴォルフガング Schmidt, Johann Wolfgang	オルガン奏者兼写譜家 Organist u. Notist	○	ホーンシュタイン Hohnstein
ペツォルト、クリスティアン Petzold, Christian	作曲家兼オルガン奏者 Componist u. Organist	○	ケーニッツヒシュタイン Königstein
Pan			
ヘーベンシュトライト、パンタレオン Hebenstreit, Pantaleon	[肩書の記載なし]		テューリンゲン

この表から明らかなように、1717年の「宮廷楽団の年俸表」には、ヴォリュミエと共に以前からドレスデン宮廷に在籍した奏者のみでなく、オペラを上演するために新たにイタリアから赴任してきた音楽家の名前も見られる。1717年の「宮廷楽団の年俸表」に現れる奏者のうち、楽師長ヴォリュミエを含む26名は、「その他の年俸表」に現れていた。彼らの中には、1709年の「オーケストラ」において「オート・コントル」、「ターユ」、「ヴィオラ」の奏者を務めたレーナイスやプレトーリウス、ゴルデ、ペッチュマン、さらに「宮廷音楽家」の称号を有したヴァイオリン奏者ピゼンデルやロッティ、チェロ奏者ロッシ、リュート奏者ベントレー、そして「首席オーボエ奏者」であったリヒターが含まれている。

他方、1717年の「宮廷楽団の年俸表」には、先に示したように、楽長ハイニヒェンやチェロ奏者ピチネッティの名前が記されていた。ハイニヒェンの名前の横には、「1717年1月1日から」と記されており、同様にピチネッティの名前の横には、「1717年5月1日から」の記述があるため、彼らは1717年に、新たにドレスデン宮廷に雇用されたことが分かる。

先に確認したように、ハイニヒェンはオペラ上演のためにドレスデン宮廷に雇われた。また、42頁から始まる表1-6に示したように、ピチネッティはヴェネツィア出身である。そして、ドレスデン宮廷の資料の一つ「選帝侯のオーケストラとその維持費」には、「イタリア・オペラ関係者への給料」の項目が見られ、そこには、「フェリチェッティ **Felicetti**」、すなわちピチネッティの名前が記録されている⁷⁸。これらのことから、チェロ奏者ピチネッティもオペラを上演するために雇われたことが分かる。

すでに説明したように、この年のドレスデン宮廷においては、ヴォリュミエと共に働き、彼の下でフランスの奏法を学んだ音楽家と、オペラを上演するためにイタリアから新たに赴任した音楽家が混在するようになった。この年の「宮廷楽団の年俸表」は、こうした状況を如実に反映しているといえよう。

⁷⁸ “Besoldung der Italienischen Operisten”, D-Dla, 10026 Geheimes Kabinett, Loc. 910/1 (Das Churfurst: Orchestre und deßen Unterhaltung), fol. 10r.

第1項 「チェロ奏者」と「ヴィオロン奏者」

このように、フランスの奏法を体得していた奏者と、イタリアから赴任してきた奏者の両方が見られる 1717 年の「宮廷楽団の年俸表」において、合計 4 名のチェロ奏者は興味深いといえるだろう。なぜなら、各楽器の奏者のうち唯一彼らは、フランスやその隣国のベルギー、イタリア出身の外国人のみによって構成されているからである。この 4 名は、パリ出身のプラシュ・デュ・ティロワ、ブリュッセル出身の「子ラ・フランス *La France le fils*」の異名を持つジャン・バプティスト・ヨーゼフ・オロンデル、ローマ出身のロッシとヴェネツィア出身のピチネッティである。

この 4 名の名前は、1718 年頃と 1719 年、1720 年 5 月、1720 年 9 月の 4 点の「音楽家の年俸表」に記載されている。そして、フランス出身のティロワとベルギー出身であり「子ラ・フランス」と呼ばれたオロンデルには「ヴィオロン奏者 *der Violon*」の肩書が、イタリア出身のロッシとピチネッティには「チェロ奏者 *der Violoncell*」の肩書が付されている。これらの年俸表において、チェロ奏者は、出身地によって異なる肩書を与えられているのである。

18 世紀前半のフランスとイタリアには、異なる種類の低音弦楽器が存在したと指摘されてきた。レーシュは、「バス・ドゥ・ヴィオロン *Bass de Violon*」と呼ばれる、胴体の長さが約 80 センチの低音弦楽器が、フランスにおいて 18 世紀に至るまで用いられた一方、上部イタリアの工房において製造された「チェロ *Violoncello*」は、1700 年頃から胴の長さがより短い 71 センチから 75 センチ程度になったと説明した⁷⁹。ケップは、クレモーナに工房を構えていたアントーニオ・ストラディヴァーリ *Antonio Stradivari* (1644?-1737) が、約 75 センチの長さの胴を持つチェロを 1710 年頃から製造したと推測している⁸⁰。

⁷⁹ Thomas Drescher and Heinz von Loesch, “Violoncello,” in *MGG2*, Sachteil vol. 9, cols. 1688-1689.

⁸⁰ Kai Köpp, “Vom Ensemble- zum Soloinstrument: Das Violoncello,” in *Bachs Orchester und Kammermusik: Das Handbuch*, edited by Rampe Siegbert (Laaber: Laaber, 2013), p. 257.

さらにケップは、フランスにおいて「バス・ドゥ・ヴィオロン」が演奏された際、その弓は親指を毛箱の下に添えるようにして握られたが、イタリア人によって広められた弓の持ち方は、親指を竿と毛箱の間に入れるものであったことを指摘している⁸¹。その上ドレジャーとレーシュは、「下一点ろーへーハート」の調弦法がフランスやイギリスにおいては18世紀初頭まで用いられていたが、これとは異なる「はーとーニーイ」の調弦法はすでに1600年頃にイタリアにおいて定着していたと推定している⁸²。

ドレスデン宮廷の音楽家たちは、1717年以降、異なるピッチや奏法が要求されるフランスとイタリアの音楽の両方に対応しなくてはならなかった。また、ヒラーが編纂したピゼンデルの伝記によると、フランスの奏法に則っていたヴォリュミエは、カストラートの希望通りに伴奏できなかった。チェロは低音楽器であるため、この楽器の奏者たちが、独奏者や独唱者をしばしば伴奏したことは容易に想像できるだろう。4点の「音楽家の年俸表」において、フランスやベルギー出身者とイタリア出奏者が異なる肩書を与えられていたことに基づくと、伴奏の問題を回避するために、フランスまたはイタリアの奏法を得意とするチェロ奏者は、これらの国の音楽を演奏する際に、適宜使い分けられていた可能性が考えられるだろう。

しかし、二人のイタリア人チェロ奏者のうちロッシは、すでに1711年の「宮廷楽団の年俸表」に名前が記載されていた。すでに説明したように、フランスの奏法をドレスデン宮廷に導入したヴォリュミエは、1709年に楽師長としてこの宮廷に雇われた。そして、オペラを上演するためにイタリアから多くの音楽家が赴任した年は、8年後の1717年であった。そのため、この1709年から1717年までの8年の間、ヴォリュミエの配下にあった奏者たちは、彼の指導の下、専らフランス音楽を演奏したと考えられる。従って、1711年の

⁸¹ Kai Köpp, *Handbuch historische Orchesterpraxis: Barock-Klassik-Romantik* (Kassel: Bärenreiter, 2009), pp. 64-70.

⁸² Thomas Drescher and Heinz von Loesch, “Violoncello,” in *MGG2*, Sachteil vol. 9, col. 1688; see also Winfried Pape and Wolfgang Boettcher, *Das Violoncello: Geschichte, Bau, Technik, Repertoire* (Mainz: Schott, 1996), pp. 16-17.

「宮廷楽団の年俵表」に名を連ねたロッシは、イタリア人でありながらフランス音楽の演奏に携わった可能性が高いといえよう。

ピエール・フランチェスコ・トージ Pier Francesco Tosi (ca. 1654-1732) は『昔時及び当節の歌い手に対する見解と、装飾の施された歌唱への所見 *Opinioni de' cantori antichi, E Moderni O Sieno osservazioni sopra il canto Figurato*』を著し、本書は1723年に出版された。この著作においてトージは、歌手がより高い声を獲得するために、ローマのピッチではなく、ヴェネツィアのピッチに従って歌手が教育されることを推奨している⁸³。この著作は、ヨーハン・フリードリヒ・アグリーコラ Johann Friedrich Agricola (1720-1774) によってドイツ語に翻訳され、1757年に『歌唱法指導 *Anleitung zur Singkunst*』の題の下に出版された。アグリーコラは、この翻訳書においてトージの文章に多くの補足を加えている。その中でアグリーコラは、トージがローマの音高ではなく、ヴェネツィアの音高に基づいて歌手を教育するように促したことについて注釈を付した。以下は、その一部の抜粋である。

ロンバルディア、そして特にヴェネツィアでは、チェンバロや他の楽器はとて高く調律されている。その音は、通常の合唱あるいはトランペットのピッチよりも、僅かに半音低いのみである。[……] ローマでは調律はとて低く、かつてのフランスの調律にほぼ等しく、合唱のピッチよりも長3度低い。⁸⁴

この補足から、ローマにおいて用いられていたピッチは、フランスのものと同様高さであったことが分かる。先のイタリア人チェロ奏者ロッシは、このローマの出身であっ

⁸³ Pier Francesco Tosi, *Opinioni de' cantori antichi, E Moderni O Sieno osservazioni sopra il canto Figurato* (Bologna, 1723), p. 45.

⁸⁴ Pier Francesco Tosi, *Anleitung zur Singkunst*, (originally published as: *Opinioni de' cantori antichi, E Moderni O Sieno osservazioni sopra il canto Figurato*, Bologna, 1723) translated by Johann Friedrich Agricola (Berlin: George Ludewig Winter, 1757), p. 45.

た。従って、ロッシがフランスのピッチに無理なく対応できたことは十分に考えられるだろう。ドレスデン宮廷の歴史を確認した第1節において、少なくともヴァイオリン奏者ピゼンデルとオーボエ奏者リヒターは、フランスとイタリアの両方の音楽を演奏できたと考えられた。本項からは、彼らに加えてチェロ奏者ロッシも、これらの音楽の両方を演奏できた可能性を指摘できよう。

第2項 1718年と1719年の出張と若手奏者たち

1717年の「宮廷楽団の年俸表」に現れた34名の奏者のうち、ヴィオラ奏者プレトーリウスを除く33名は、1717年頃の「宮廷音楽家の年俸表」に名前が見られる。プレトーリウスは、すでに1709年の「オーケストラの年俸表」から名前が記されており、本節において参照している1717年(8月1日付)の「宮廷楽団の年俸表」に至るまで、全ての年俸表に名前が現れていた。従って、彼は少なくとも1709年から1717年8月1日まで、ドレスデン宮廷に在籍したと考えられよう。しかし、先述のように1717年頃の「宮廷音楽家の年俸表」に、プレトーリウスの名前は現れていなかった。また、1718年8月23日にドレスデン宮廷に雇用されたと説明されていたリュート奏者ヴァイスの名前は、「宮廷音楽家の年俸表」に記されていなかった。

以上のことに基づくと、「宮廷音楽家の年俸表」が書かれた時期は、1717年8月から翌年の1718年8月までの約1年の間と推定できる。そのため、「宮廷音楽家の年俸表」と1717年の「宮廷楽団の年俸表」は、書かれた時期が非常に近かったと考えられる。表1-7は、「宮廷楽団の年俸表」に記された奏者の名前と、「宮廷音楽家の年俸表」に記載された彼らの年齢を示しており、奏者たちを年齢順に並べている。

表 1-7 1717年のドレスデン宮廷楽団の奏者 (年齢順)

奏者の名前 (楽器の種類)	年齢
リビツキ、アーダム Rybizki, Adam (VI)	64

奏者の名前 (楽器の種類)	年齢
ペツチュマン、ミヒヤエル Petzschmann, Michael (Vla)	62
アリゴニ、フランチェスコ Arigoni, Francesco (Lut)	60
カデ、ジャン Cadet, Jean (Fl & Fg)	48
ヘーベンシュトライト、パンタレオン Hebenstreit, Pantaleon (Pan)	48
ロッティ、ヨーハン・フリードリヒ Lotti, Johann Friedrich (Vl)	48
ゴルデ、マルティン Golde, Martin (Vla)	47
ベントレー、ゴットフリート Bentley, Gottfried (Lut)	46
ティロワ、ジャン＝バティスト・プラシュ・デュ Tilloy, Jean-Baptiste Prache du (Vlc)	45
シュミット、ヨーハン・ヴォルフガング Schmidt, Johann Wolfgang (Org)	40
ペツォルト、クリスティアン Petzold, Christian (Org)	40
ヴォリュミエ、ジャン＝バティスト Woulmyer, Jean-Baptiste (Vl)	40
フィッシャー、ヨーハン・アーダルベルト Fischer, Johann Adalbert (Hr)	40
ザム、アーダム・フランツ Samm, Adam Franz (Hr)	39
ゼレンカ、ヤン・ディースマス Zelenka, Jan Dismas (Cb)	[38]
フント、フランチェスコ Hunt, Francesco (Vl)	37
ザイフェルト、マルティン Seyfert, Martin (Ob)	36
クヴァッツ、カスパー・エルンスト Quatz, Caspar Ernst (Fg)	34
ピチネッティ、ジョヴァンニ・マリーア・フェリーチェ Picinetti, Giovanni Maria Felice (Vlc)	34
ブロツホヴィッツ、ヨーハン・マルティン Blochwitz, Johann Martin (Ob)	30
ピゼンデル、ヨーハン・ゲオルク Pisendel, Johann Georg (Vl)	30
ロッシ、アゴ스티ーノ・アントーニオ・デ Rossi, Agostino Antonio de (Vlc)	30
ベーメ、ヨーハン・ゴットフリート Böhme, Johann Gottfried (Fg)	29
オロンデル、ジャン・バティスト・ジョゼフ・デュ Haulondel, Jean Baptiste Joseph Du (Vlc)	29
ライヒェル、ヨーハン・クリストフ Reichel, Johann Christoph (Vla)	28
リヒター、ヨーハン・クリスティアン Richter, Johann Christian (Ob)	28
ライン、カール・ヨーゼフ Rhein, Carl Joseph (Vla)	28
ビュッフアルダン、ピエール＝ガブリエル Buffardin, Pierre-Gabriel (Fl)	27
ケストナー、ゲオルゲ・フリードリヒ Kästner, George Friedrich (Vla)	24

奏者の名前（楽器の種類）	年齢
アンリオン、シャルル Henrion, Charles (Ob)	記載なし
ル・グロ、シモン Le Gros, Simon (Vl)	記載なし
プレトーリウス、ヨーハン・ハインリッヒ Praetorius, Johann Heinrich (Vla)	記載なし
レーナイス、ヨーハン・ゲオルク Lehneis, Johann Georg (Vla)	記載なし
ヴァイゲルト、ダーヴィット Weigelt, David (Fl)	記載なし

表 1-7 において年齢が明らかな者は 29 名に上り、彼らは 64 歳から 24 歳に及んでいる。年齢の分布に基づくと、彼らは、60 歳以上 64 歳以下、34 歳以上 48 歳以下、24 歳以上 30 歳以下の三つの年齢層に分類できる。

34 歳以上 48 歳以下の奏者は最も多い 16 名に上り、年齢が判明している 29 名の半数ほどにあたる 5 割 5 分を占めている。楽師長ヴォリュミエと「宮廷音楽家」の称号を持っていたリュート奏者ベントレーやヴァイオリン奏者ロッティは、この年齢層に属している。最も若い 24 歳から 30 歳までの奏者は合計 10 名であり、年齢が判明している 29 名のうち 3 分の 1 を占めている。「宮廷音楽家」の称号を持ち、後に楽師長となるピゼンデルや、同じく「宮廷音楽家」であったチェロ奏者ロッシ、「主席オーボエ奏者」であったリヒターはこの年齢の範囲に入っている。

1717 年の「宮廷楽団の年俸表」が記された翌年の 1718 年に、ザクセン侯子であったフリードリヒ・アウグスト 2 世は、ヴィーンに滞在していた。彼に仕えるため、ドレスデン宮廷楽団の音楽家 11 名がこの地に派遣された。ドレスデン宮廷の資料の一つである「フランス喜劇団とオーケストラ」の 1718 年 8 月 22 日付の記録には、この 11 名の名前と肩書が記されている⁸⁵。表 1-8 は、彼らの名前とこの記録に記された彼らの肩書を示している。また、表 1-7 に基づき、各人の 1717 年頃の年齢を表している。

⁸⁵ D-Dla, 10026 Geheimes Kabinett, Loc. 383/4 (Die Bande Französischer Comoedianten und Orchestra), fol. 222r; see also Mary A. Oleskiewicz, *Quantz and the Flute at Dresden: His Instruments, his Repertory and their Significance for the Versuch and the Bach Circle*, (Ph. D. diss., Duke University, 1998), p. 50; Kai Köpp,

表 1-8 1718年にヴィーンに派遣された奏者たち

奏者の名前	資料に記された肩書 ⁸⁶	1717年頃の年齢
ヴォリュミエ、ジャン＝バティスト Woulmyer, Jean-Baptiste	楽師長 Der Concertmeister	40
ヘーベンシュトライト、パンタレオン Hebenstreit, Pantaleon	[肩書の記載なし]	48
ヴァイス、ジルビウス・レーオポルト Weiss, Silvius Leopold	リュート奏者 Der Lautenist	[記載なし]
ピゼンデル、ヨーハン・ゲオルク Pisendel, Johann Georg	第1ヴァイオリン Der Primo Violino	30
ロッシ、アゴスティーノ・アントーニオ・デ Rossi, Agostino Antonio de	チェロ Der Violoncello	30
リヒター、ヨーハン・クリスティアン Richter, Johann Christian	第1オーボエ Der Premier Hautbois	28
ビュッフアルダン、ピエール＝ガブリエル Buffardin, Pierre-Gabriel	フルート Der Flute Alemande	27
ライン、カール・ヨーゼフ Rhein, Carl Joseph	第2ヴァイオリン Der secondo Violino	28
ブロッホヴィッツ、ヨーハン・マルティン Blochwitz, Johann Martin	第2オーボエ Der andern Hautbois	30
レーナイス、ヨーハン・ゲオルク Lehneis, Johann Georg	ヴィオラ Der Violetta	[記載なし]
ベーメ、ヨーハン・ゴットフリート Böhme, Johann Gottfried	ファゴット Der Basson	29

ドレスデン宮廷楽団のコントラバス奏者ゼレンカは、ヴィーンにおいて、当地の宮廷の楽長であったヨーハン・ヨーゼフ・フックス Johann Joseph Fux (1660-1741) に師事していた⁸⁷。先の11名が派遣された1718年に、ゼレンカは少なくとも三つの作品を、この地において作曲している⁸⁸。よって、ゼレンカはヴィーンにおいて彼らと合流した可能性

Johann Georg Pisendel (1687-1755) und die Anfänge der neuzeitlichen Orchesterleitung, (Tutzing: H. Schneider, 2005), p. 119.

⁸⁶ D-Dla, 10026 Geheimes Kabinett, Loc. 383/4 (Die Bande Französischer Comoedianten und Orchestra), fol. 222r.

⁸⁷ Wolfgang Reich, "Jan Dismas Zelenka als Schüler von Johann Joseph Fux: Belege und Vermutungen," in *J. J. Fux-Symposium Graz '91: Bericht*, edited by Rudolf Flotzinger (Austria: Akademische Druck- und Verlagsanstalt, 1992), pp. 121-132; Herbert Seifert, "Zelenka in Wien," in *Zelenka-Studien. II*, edited by Günter Gattermann and Wolfgang Reich (Sankt Augustin: Academia, 1997), pp. 183-192.

⁸⁸ Janice B. Stockigt, *Jan Dismas Zelenka: A Bohemian Musician at the Court of Dresden* (Oxford: Oxford University Press, 2000), p. 47.

が考えられるだろう。ケップは、ヴィーンに向かった音楽家とこの地に滞在していたゼレンカについて、次のように考察している。

〔ヴィーンに向かった 11 名の音楽家とゼレンカによる〕合奏団は、弦楽 4 部と各種の楽器が完全に揃った木管群 [……]、リュートやコントラバス、パンタレオン奏者による通奏低音楽器群 [……]、さらに音楽監督としての楽師長 [ヴォリュミエ] から成っていた。⁸⁹

この指摘から明らかなように、ヴィーンに派遣された 11 名が演奏した楽器の種類には偏りがなく、コントラバス以外の弦楽器と各種の木管楽器が揃っている。一方、先の表 1-8 は、11 名の年齢が非常に偏っていたことを示している。この表において、大半にあたる 8 名は、27 歳から 30 歳となっているからである⁹⁰。ほぼ同じ年齢の 8 名は、「宮廷音楽家」の称号を与えられていたピゼンデルとチェロ奏者ロッシ、「主席オーボエ奏者」の肩書を有したリヒター、ヴァイオリン奏者ライン、オーボエ奏者ブロッホヴィッツ、ファゴット奏者ベーメ、リュート奏者ヴァイスである。

表 1-7 において年齢が判明している 29 名のうち、24 歳から 30 歳の若手奏者は 10 名であり、その割合は僅か 3 割程度にとどまっていた。しかし、1718 年にヴィーンに出張した 11 名の奏者のうち、27 歳から 30 歳の若手奏者は先述のように 8 名であり、彼らが 11 名全員のうちに占める割合は 7 割に達している。これらのことに基づくと、ヴィーンへの出張には、異常に多くの若手がドレスデン宮廷楽団から選出されたといえる。

⁸⁹ Kai Köpp, *Johann Georg Pisendel (1687-1755) und die Anfänge der neuzeitlichen Orchesterleitung* (Tutzing: H. Schneider, 2005), p. 120.

⁹⁰ ヴィーンに滞在していたコントラバス奏者ゼレンカは 1679 年生まれであったため、1717 年の年齢は 38 歳となる (表 1-7 参照)。従って、ゼレンカはこの 27 歳から 30 歳までの年齢層に含まれない。

翌年の 1719 年に、この楽団の音楽家たちは、モーリッツブルクに向かった。この地には、ザクセン選帝侯フリードリヒ・アウグスト 1 世が所有した別邸の一つが建てられていたのである。「1719 年 10 月にモーリッツブルクにおいて持たれた娯楽」と題された資料には、「ポーランド王兼ザクセン選帝侯宮廷楽団」、すなわちドレスデン宮廷楽団から選出され、この地に派遣された者を記した項目があり、合計 13 名の音楽家の名前と彼らの肩書が記されている⁹¹。この記録には、「楽長ハイニヒェンがさらにヴァイオリン奏者 2 名とファゴット奏者 1 名を必要とした」ため、「フント Hund」と「ロッティ Lotti」、「ベーメ Boehme」も出張したことが明記されている⁹²。この 3 名は、名前と彼らが演奏した楽器の種類から、1717 年の「宮廷楽団の年俸表」に現れたヴァイオリン奏者フント、ヴァイオリン奏者ロッティ、ファゴット奏者ベーメであったことが分かる。

表 1-9 は、「1719 年 10 月にモーリッツブルクにおいて持たれた娯楽」に記された 16 名の奏者の名前と、彼らの肩書を表している。また右の列には、表 1-7 に基づき 1717 年頃の彼らの年齢を示した。

表 1-9 1719 年にモーリッツブルクに派遣された音楽家たち

奏者の名前	資料に記された肩書	1717 年頃の年齢
シュミット、ヨーハン・クリストフ Schmidt, Johann Christoph	楽長 Der Capell=Meister	[記載なし]
ペツォルト、クリスティアン Petzold, Christian	宮廷オルガン奏者 Kammer Organist	40
ゼレンカ、ヤン・ディースマス Zelenka, Jan Dismas	コントラバス Contre Basse	38
ロッシ、アゴスティーノ・アントーニオ・デ Rossi, Agostino Antonio de	チェロ Violoncell	30
ピゼンデル、ヨーハン・ゲオルク Pisendel, Johann Georg	第 1 ヴァイオリン Pr: Viol:	30
ル・グロ、シモン Le Gros, Simon	ヴァイオリン Viol:	[記載なし]
ライン、カール・ヨーゼフ Rhein, Carl Joseph	ヴァイオリン Viol:	28

⁹¹ D-Dla, 10026 Oberhofmarschallamt G, Nr. 18 (Divertissements in Moritzburg gehalten worden Mense Octobr: 1719), fols. 52r.

⁹² D-Dla, 10026 Oberhofmarschallamt G, Nr. 18 (Divertissements in Moritzburg gehalten worden Mense Octobr: 1719), fols. 53r.

奏者の名前	資料に記された肩書	1717年頃の年齢
ビュッフアルダン、ピエール＝ガブリエル Buffardin, Pierre-Gabriel	フルート Flut: Allem:	27
リヒター、ヨーハン・クリスティアン Richter, Johann Christian	第1オーボエ Pr: Hautb:	28
ブロッホヴィッツ、ヨーハン・マルティン Blochwitz, Johann Martin	フルート Fl: Allem:	30
レーナイス、ヨーハン・ゲオルク Lehneis, Johann Georg	ヴィオラ Braccist	[記載なし]
ゴルデ、マルティン Golde, Martin	ヴィオラ Braccist	47
リビツキ、アーダム Rybizki, Adam	バレのためのヴァイオリン奏者 Violist zum Ballet	64
ヴァイス、ジルビウス・レーオポルト Weiss, Silvius Leopold	テオルゴ奏者 Tiorbiste	30
フント、フランチェスコ Hunt, Francesco	[ヴァイオリン奏者]	37
ロッティ、ヨーハン・フリードリヒ Lotti, Johann Friedrich	[ヴァイオリン奏者]	48
ベーメ、ヨーハン・ゴットフリート Böhme, Johann Gottfried	[ファゴット奏者]	29

この表と先の表 1-8 を比較すると、ウィーンに派遣された 11 名のうち、9 名がモーツブルクに向かっている。彼らは、ヴァイオリン奏者のピゼンデルとライン、ヴィオラ奏者レーナイス、チェロ奏者ロッシ、フルート奏者のビュッフアルダンとブロッホヴィッツ、オーボエ奏者リヒター、ファゴット奏者ベーメ、リュート奏者ヴァイスである。このことから明らかなように、ウィーンへ遣わされた先の若手奏者 8 名は、いずれもモーツブルクに派遣されている。

1719 年 9 月には、ドレスデンにおいて、侯子フリードリヒ・アウグスト 2 世の結婚祝賀行事が行われていた。その際、ドレスデン宮廷の奏者たちは、奏法が全く異なったフランスとイタリアの両方の音楽を演奏する必要に迫られていた。先の「1719 年 10 月にモーツブルクにおいて持たれた娯楽」の資料は、表 1-9 に示した 16 名の音楽家と共に、デュパルク DeBarc [Duparc] を筆頭とするフランス・バレの踊り手や、セネジーノ Francesco Bernardi Senesino (1686-1758) を含むイタリア人歌手も、この地に遣わされたことを示している。このことから、宮廷楽団の奏者たちは、フランス・バレの踊り手とイタリア人

歌手の両方を伴奏しなくてはならなかったことが分かる。従って彼らは、結婚祝賀行事の時と同様に、フランスとイタリアの音楽の演奏に携わったと考えられる。この二つの音楽に対応できたと考えられたヴァイオリン奏者ピゼンデルとオーボエ奏者リヒター、チェロ奏者ロッシがモーリツブルクに派遣された奏者の中に見られることは、このことを示唆しているといえよう。

さらに、ヴィーンに出張した奏者 11 名の大半にあたる 8 名は若手奏者であり、彼らはモーリツブルクへも派遣されていた。このことから、ヴォリュミエの配下にあった奏者の中において、彼らは主要な奏者として台頭していた可能性があるといえよう。

第6節 1717 年から 1729 年までの年俸表と名簿

ドレスデン宮廷は、1717 年に、オペラを上演するために多くのイタリア人を雇用した。しかし 3 年後の 1720 年に、彼らの大半は解雇された。このことにより、当宮廷におけるオペラ上演は衰退し、1720 年代には教会音楽が多く作曲された。同じ時期には、オペラ上演再開に向けた準備も進められていた。このように、1717 年から 1720 年代末にかけて、ドレスデン宮廷楽団の奏者を取り巻く状況は、著しく変化していた。

前節において示した表 1-6、表 1-8、表 1-9 を比較すると、ラインとブロッホヴィッツの肩書は大きく変化している。1717 年の「宮廷楽団の年俸表」においてラインはヴィオラ奏者であるが、1718 年のヴィーンや 1719 年のモーリツブルクへの出張の記録に、彼はヴァイオリン奏者として記載されている。ブロッホヴィッツは、1717 年の「宮廷楽団の年俸表」にオーボエ奏者として現れているが、フルート奏者としてモーリツブルクに派遣されている。このことから、彼らは専門とする楽器を変更したと考えられる。

ラントマンは、ザクセン選帝侯ヨーハン・ゲオルク 4 世 Johann Georg IV. (1668-1694、選帝侯在位 1691-1694) が亡くなるまでに、ドレスデン宮廷の奏者たちは一つの楽器を専

門とするようになったことを指摘した⁹³。本章において取り上げてきた1709年から1717年までの8年間の年俸表において、楽器を変えた奏者を確認すると、1709年の「オーケストラの年俸表」と1711年の「宮廷楽団の年俸表」において、ジャン＝バティスト・アンリオンはオーボエ奏者からフルート奏者に、ダニエル・ヘリングはチェロ奏者からファゴット奏者に、それぞれ転向している。1711年の「宮廷楽団の年俸表」と1712年の「その他の年俸表」、1717年の「宮廷楽団の年俸表」を比較すると、楽器の種類が変化する奏者はジャン・カデのみである⁹⁴。このように、ほぼ同じ時期に複数の奏者が演奏する楽器の種類を変えた例は、1711年以降見られない。

ラントマンの指摘と1711年以降の年俸表の傾向に基づくと、1717年から1719年までの僅か2年の間に、ラインとブロッホヴィッツの楽器の種類を示した肩書が変化したことは、異例といえるだろう。先述のように、1717年から1720年代のドレスデン宮廷において、奏者が直面した状況は様々に変化していた。このことを踏まえると、ラインとブロッホヴィッツ以外の奏者も、専門とする楽器を変更した可能性が考えられる。以上のことから本節では、1717年から1729年までの年俸表や名簿に記載された奏者を特定すると共に、それらの資料を相互に比較することにより、各奏者の肩書が変化しているかを確認する。

この期間に記された年俸表や名簿には、前節において言及した6点の他に、1721年頃と1725年頃の二つの「宮廷音楽家の年俸表」、1729年の「宮廷楽団の名簿」が含まれる。これら9点の資料のうち、1717年の「宮廷楽団の年俸表」以外は、内容を詳しく検証していない。以下では、残りの8点それぞれに記載された奏者の名前と、彼らが演奏した楽器の種類を提示する。

⁹³ Ortrun Landmann, “Die Dresdener Hofkapelle zur Zeit Johann Sebastian Bachs,” in *Concerto: Das Magazin für Alte Musik* 51 (March 1990): 8.

⁹⁴ カデは、1711年の「ドレスデン宮廷楽団の年俸表」において、フルートとファゴットの両方を演奏する奏者として記録された後、1712年の「その他の年俸表」において、ファゴットを専門とする奏者となっている。そして、1717年の「ドレスデン宮廷楽団の年俸表」において、再びフルートとファゴットの両方の奏者に戻っている。

第1項 1717年頃の「宮廷音楽家の年俸表」

1717年頃の「宮廷音楽家の年俸表」には、楽師長ヴォリュミエの他に39名の人名が記されており、この39名のうち32名の肩書は楽器の種類を表している。残りの7名の名前と肩書を表1-10に示す。彼らのうち、ヘーベンシュトライトはパンタレオンの奏者であり、オロンデルは1709年の「オーケストラの年俸表」からチェロ奏者として記載されていた。また他の者は、肩書から奏者ではなかったと考えられよう。

表 1-10 奏者の肩書を持たない者（1717年頃の「宮廷音楽家の年俸表」）

資料に記された肩書	名前
上級楽長 Ober Capellmeister	ヨーハン・クリストフ・シュミット Johann Christoph Schmidt
楽長 Capellmeister	ヨーハン・ダーヴィット・ハイニヒェン Johann David Heinichen
バリトン歌手 Sänger Bassist	「ディアール Diart」
アルト歌手 Sänger Altist	「ボルガル Beurgard」
楽器世話係 Instrument Dien[er]	「ゴットロープ・ヴェルナー Gottlob Werner」
宮廷音楽家 Cammer Musicus	パンタレオン・ヘーベンシュトライト Pantaleon Hebenstreit
[記載なし]	ジャン・バティスト・ジョゼフ・デュ・オロンデル Jean Baptiste Joseph Du Haulondel

以上のことから、1717年頃の「宮廷音楽家の年俸表」に現れる奏者は、楽師長ヴォリュミエ、肩書から判別された32名、ヘーベンシュトライト、オロンデルと指摘できる。下の表1-11は、これらの奏者の名前を、彼らが演奏したと考えられる楽器の種類に従って提示している。そして、1717年の「宮廷楽団の年俸表」に名前が記されていた奏者を、「○」印によって示している。

表 1-11 1717 年頃の「宮廷音楽家の年俸表」に記載された奏者

楽器の種類と奏者の名前	資料に記された肩書	1717年の「宮廷 楽団の年俸表」に 現れた者
VI		
ヴォリュミエ、ジャン＝バティスト Woulmyer, Jean-Baptiste	楽師長 Maitre des Concert	○
ピゼンデル、ヨーハン・ゲオルク Pisendel, Johann Georg	ヴァイオリン奏者 Violinist	○
フント、フランチェスコ Hunt, Francesco	ヴァイオリン奏者 Violinist	○
ライン、カール・ヨーゼフ Rhein, Carl Joseph	ヴァイオリン奏者 Violinist	○
リビツキ、アーダム Rybizki, Adam	ヴァイオリン奏者 Violinist	○
ル・グロ、シモン Le Gros, Simon	ヴァイオリン奏者 Violinist	○
ル・リシュ、フランソワ Le Riche, François	ヴァイオリン奏者 Violinist	
ロッティ、ヨーハン・フリードリヒ Lotti, Johann Friedrich	ヴァイオリン奏者 Violinist	○
Vla		
ゴルデ、マルティン Golde, Martin	ヴィオラ奏者 Bracciste	○
ペツシュマン、ミヒャエル Petzschmann, Michael	ヴィオラ奏者 Bracciste	○
ライヒェル、ヨーハン・クリストフ Reichel, Johann Christoph	ヴィオラ奏者 Bracciste	○
レーナイス、ヨーハン・ゲオルク Lehneis, Johann Georg	ヴィオラ奏者 Bracciste	○
Vlc		
オロンデル、ジャン・バティスト・ジョゼフ・デュ Haulondel, Jean Baptiste Joseph Du	[肩書なし]	○
オロンデル、ロベール・デュ Haulondel, Robert Du	チェロ奏者 Violoncellist	
ティロワ、ジャン＝バティスト・プラシュ・デュ Tilloy, Jean-Baptiste Prache du	チェロ奏者兼写譜家 Violoncellist u[nd]. Notist	○
ピチネッティ、ジョヴァンニ・マリーア・フェリーチェ Picinetti, Giovanni Maria Felice	チェロ奏者 Violoncellist	○
ロッシ、アゴスティーノ・アントーニオ・デ Rossi, Agostino Antonio de	チェロ奏者 Violoncellist	○
Cb		
ケストナー、ゲオルグ・フリードリヒ Kästner, George Friedrich	ヴィオロン奏者 Violonist	○
ゼレンカ、ヤン・ディースマス Zelenka, Jan Dismas	ヴィオロン奏者 Violonist	○

楽器の種類と奏者の名前	資料に記された肩書	1717年の「宮廷楽団の年俸表」に現れた者
Fl		
ビュッフアルダン、ピエール＝ガブリエル Buffardin, Pierre-Gabriel	フルート・アルマン Flute Allemand	○
Ob		
アンリオン、シャルル Henrion, Charles	オーボエ奏者 Hautboist	○
ヴァイゲルト、ダーヴィット Weigelt, David	オーボエ奏者 Hautboist	○
ザイフェルト、マルティン Seyfert, Martin	オーボエ奏者 Hautboist	○
ブロッホヴィッツ、ヨーハン・マルティン Blochwitz, Johann Martin	オーボエ奏者 Hautboiste	○
リヒター、ヨーハン・クリスティアン Richter, Johann Christian	オーボエ奏者 Hautboist	○
Fg		
カデ、ジャン Cadet, Jean	バソン奏者 Bassonist	○
クヴァッツ、カスパー・エルンスト Quatz, Caspar Ernst	バソン奏者 Bassonist	
ベーメ、ヨーハン・ゴットフリート Böhme, Johann Gottfried	バソン奏者 Bassonist	○
Hr		
ザム、アーダム・フランツ Samm, Adam Franz	ホルン奏者 Wald Hornist	○
フィッシャー、ヨーハン・アーダルベルト Fischer, Johann Adalbert	ホルン奏者 Wald Hornist	○
Lut		
アリゴニ、フランチェスコ Arigoni, Francesco	宮廷テオルボ奏者 Cammer Teorbist	○
ベントレー、ゴットフリート Bentley, Gottfried	宮廷テオルボ奏者 Cammer Teorbist	○
Org		
シュミット、ヨーハン・ヴォルフガング Schmidt, Johann Wolfgang	オルガン奏者兼写譜家 Organist und Notist	○
ペツォルト、クリスティアン Petzold, Christian	宮廷作曲家兼 オルガン奏者 Cammer Componist u[nd]. Organist	○
Pan		
ヘーベンシュトライト、パンタレオン Hebenstreit, Pantaleon	宮廷音楽家 Cammer Musicus	○

この表に示した奏者は合計 35 名に上り、その大半にあたる 32 名は、1717 年の「宮廷楽団の年俸表」に現れていた。この年俸表と比較した場合、32 名のうち 4 名は、演奏する

楽器の種類が変化している。すなわち、ヴィオラ奏者であったラインはヴァイオリン奏者に、同じくヴィオラ奏者であったケストナーはコントラバス奏者に、フルート奏者ヴァイゲルトはオーボエ奏者に、フルートとファゴットの両方の奏者であったカデはファゴットを専門とする奏者になっている。彼らのうち、ラインがヴァイオリン奏者となっていることは、ウィーンやモーリッツブルクへの出張に関する資料と一致している。

さらに、オーボエ奏者であったブロッホヴィッツは、1717年頃の「宮廷音楽家の年俸表」に「フルート・アルマンド Flute Allemande」の奏者として記載されていたが、「オーボエ奏者 Hautboiste」に書き直されている。彼は、ウィーンへの出張に関する資料にオーボエ奏者として記録されたが、モーリッツブルクに関する資料にフルート奏者として記載されていた。これらのことから、ブロッホヴィッツは、必要に応じてオーボエとフルートの奏者を務めていたと考えられよう。

第2項 1718年頃の「音楽家の年俸表」

1718年頃の「音楽家の年俸表」には、ヴォリュミエの他に合計41名の名前が記されている。この41名のうち33名の肩書は楽器の種類を示している。表1-12は、残りの8名の名前と肩書を表している。彼らのうち「宮廷作曲家」のフランチェスコ・マリーア・ヴェラチーニ Francesco Maria Veracini (1690-1768) は著名なヴァイオリン奏者であり、「宮廷音楽家」ヘーベンシュトライトはパンタレオン奏者であった。他の6名は、肩書から奏者ではなかったと指摘できる。

表 1-12 奏者の肩書を持たない者（1718年頃の「音楽家の年俸表」）

資料に記された肩書	名前
「楽長 Der Capellmeister」	ヨーハン・クリストフ・シュミット Johann Christoph Schmidt
「楽長 Der Capellmeister」	ヨーハン・ダーヴィット・ハイニヒェン Johann David Heinichen
宮廷作曲家 der Cammer Compositeur	「フランチェスコ・マリーア・ヴェラチーニ Francesco Maria Veracini」

資料に記された肩書	名前
宮廷音楽家 der Cammer Music	パンタレオン・ヘーベンシュトライト Pantaleon Hebenstreit
楽器庫管理人兼楽器修理 Inspection der Instrument Cammer und reparation derer Instrumente	「ゲオルゲ・アウグスト・キュメルマン George August Kümmelmann」
オルガン職人 der Orgelmacher	「ヨーハン・ハインリッヒ・グレープナー Joh. Heinrich Gräbner」
写譜家 die Musicalische Copialien	「ヨーハン・ヤーコプ・リントナー Joh. Jacob Lindner」
楽器係 der Instrument Diener	「ヨーハン・ゴットロープ・ヴェルナー Joh. Gottlob Werner」

これらのことから、1718年頃の「音楽家の年俸表」に記された奏者は、楽師長ヴォリュミエ、肩書から明らかな33名、ヴェラチーニ、ヘーベンシュトライトであったといえる。表 1-13 は、これらの奏者の名前を、彼らが演奏した楽器の種類に従って示している。そして、1717年頃の「宮廷音楽家の年俸表」に見られた者には、「○」印を付けている。

表 1-13 1718年頃の「音楽家の年俸表」に記載された奏者

楽器の種類と奏者の名前	資料に記された肩書	1717年頃の「宮廷音楽家の年俸表」に現れた者
VI		
ヴェラチーニ、フランチェスコ・マリーア Veracini, Francesco Maria	宮廷作曲家 der Cammer Compositeur	
ヴォリュミエ、ジャン＝バティスト Woulmyer, Jean-Baptiste	楽師長 der Concertmeister	○
ピゼンデル、ヨーハン・ゲオルク Pisendel, Johann Georg	ヴァイオリン奏者 der Violinist	○
フント、フランチェスコ Hunt, Francesco	ヴァイオリン奏者 der Violinist	○
リビツキ、アーダム Rybizki, Adam	ヴァイオリン奏者 der Violinist	○
ル・グロ、シモン Le Gros, Simon	ヴァイオリン奏者 der Violinist	○
ロッティ、ヨーハン・フリードリヒ Lotti, Johann Friedrich	ヴァイオリン奏者 der Violinist	○
Vla		
ヴァイゲルト、ダーヴィット Weigelt, David	ヴィオラ奏者 der Braccist	○

楽器の種類と奏者の名前	資料に記された肩書	1717年頃の「宮廷音楽家の年俸表」に現れた者
ゴルデ、マルティン Golde, Martin	ヴィオラ奏者 der Braccist	○
ペツシュマン、ミヒャエル Petzschmann, Michael	ヴィオラ奏者 der Braccist	○
ライヒェル、ヨーハン・クリストフ Reichel, Johann Christoph	ヴィオラ奏者 der Braccist	○
ライン、カール・ヨーゼフ Rhein, Carl Joseph	ヴィオラ奏者 der Braccist	○
レーナイス、ヨーハン・ゲオルク Lehneis, Johann Georg	ヴィオラ奏者 der B[r]accist	○
Vlc		
オロンデル、ジャン・バティスト・ジョゼフ・デュ Haulondel, Jean Baptiste Joseph Du	ヴィオロン奏者 der Violon	○
オロンデル、ロベール・デュ Haulondel, Robert Du	ヴィオロン奏者 der Violon	○
ティロワ、ジャン＝バティスト・ブラシュ・デュ Tilloy, Jean-Baptiste Prache du	ヴィオロン奏者 der Violon	○
ピチネッティ、ジョヴァンニ・マリーア・フェリーチェ Picinetti, Giovanni Maria Felice	チェロ奏者 der Violoncell	○
ロッシ、アゴスティーノ・アントーニオ・デ Rossi, Agostino Antonio de	チェロ奏者 der Violoncel	○
Cb		
ガッギ、アンジェロ Gaggi, Angelo	ヴィオロン奏者 der Violon	
Vdg		
ベントレー、ゴットフリート Bentley, Gottfried	ヴィオラ・ダ・ガンバ奏者 der Violdigambist	○
Fl		
ビュッフアルダン、ピエール＝ガブリエル Buffardin, Pierre-Gabriel	フルート・アルマンダ奏者 der Flute=Alemande	○
Ob		
アンリオン、シャルル Henrion, Charles	オーボエ奏者 der Hautboist	○
ザイフェルト、マルティン Seyfert, Martin	オーボエ奏者 der Hautboist	○
ブロツホヴィッツ、ヨーハン・マルティン Blochwitz, Johann Martin	オーボエ奏者 der Hautboist	○
リヒター、ヨーハン・クリスティアン Richter, Johann Christian	オーボエ奏者 der Hautboist	○
Fg		
クヴァッツ、カスパール・エルンスト Quatz, Caspar Ernst	バスオン奏者 der Basson	○

楽器の種類と奏者の名前	資料に記された肩書	1717年頃の「宮廷音楽家の年俸表」に現れた者
ケストナー、ゲオルゲ・フリードリヒ Kästner, George Friedrich	バソン奏者 der Basson	○
ベーメ、ヨーハン・ゴットフリート Böhme, Johann Gottfried	バソン奏者 der Basson	○
Hr		
ザム、アーダム・フランツ Samm, Adam Franz	ホルン奏者 der Waldhornist	○
フィッシャー、ヨーハン・アーダルベルト Fischer, Johann Adalbert	ホルン奏者 der Waldhornist	○
Lut		
アリゴーニ、フランチェスコ Arigoni, Francesco	テオルボ奏者 der Theorbist	○
Org		
シュミット、ヨーハン・ヴォルフガング Schmidt, Johann Wolfgang	オルガン奏者 der Organist	○
ペツォルト、クリスティアン Petzold, Christian	オルガン奏者 der Organist	○
Pan		
ヘーベンシュトライト、パンタレオン Hebenstreit, Pantaleon	宮廷音楽家 der Cammer Music	○
その他		
カデ、ジャン Cadet, Jean	低音楽器奏者 der Bassist	○
ゼレンカ、ヤン・ディースマス Zelenka, Jan Dismas	低音楽器奏者 der Bassist	○

この表に現れる奏者は合計 36 名であり、そのうちヴァイオリン奏者ヴェラチャーニとコントラバス奏者ガッギ以外の 34 名は、前項において取り上げた 1717 年頃の「宮廷音楽家の年俸表」に現れていた。このうち 5 名は、肩書が変化している。すなわち、ラインはヴァイオリン奏者ではなく、1717 年の「宮廷楽団の年俸表」のように、再びヴィオラ奏者として記されている。「ヴィオロン奏者」であったゼレンカとケストナーはそれぞれ「低音楽器奏者」とファゴット奏者に、オーボエ奏者ヴァイゲルトはヴィオラ奏者に、カデはファゴット奏者から「低音楽器奏者」に、リュート奏者ベントレーはヴィオラ・ダ・ガンバ奏者に変化している。

第3項 1719年の「音楽家の年俸表」

1719年の「音楽家の年俸表」には、楽師長ヴォリュミエと共に42名の名前が書かれている。この42名のうち34名の肩書は、楽器の種類を示している。表1-14は、残りの8名の名前と肩書を示しており、この8名は先の表1-13に記載した音楽家と同一である。表1-13において、ヴェラチーニとヘーベンシュトライトは奏者であったと考えられた。

表 1-14 奏者の肩書を持たない者（1719年の「音楽家の年俸表」）

資料に記された肩書	名前
楽長 der CapellMeister	ヨーハン・クリストフ・シュミット Johann Christoph Schmidt
楽長 der CapellMeister	ヨーハン・ダーヴィット・ハイニヒェン Johann David Heinichen
宮廷作曲家 der Cammer Compositeur	フランチェスコ・マリーア・ヴェラチーニ Francesco Maria Veracini
宮廷音楽家 der Cammer Music	パンタレオン・ヘーベンシュトライト Pantaleon Hebenstreit
楽器庫管理人兼楽器修理人 Inspection der Instrument Cammer und reparatur derer Instrumente	「ゲオルゲ・アウグスティン・キュメルマン George Augustin Kümmelmann」
オルガン職人 der Orgelmacher	「ヨーハン・ハインリッヒ・グレーブナー Joh. Heinrich Gräbner」
写譜家 Musicalische Copialie	「ヨーハン・ヤーコプ・リントナー Johann Jacob Lindner」
楽器係 der Instrument Diener	ヨーハン・ゴットロープ・ヴェルナー Johann Gottlob Werner

以上のことに基づくと、この1719年の「音楽家の年俸表」に見られる奏者は、楽師長ヴォリュミエ、肩書から明白な34名、ヴェラチーニ、ヘーベンシュトライトであったと指摘できるだろう。表1-15は、これらの奏者の名前を彼らが演奏した楽器の種類に基づいて提示している。

この表に記した者は合計37名に上り、そのうちヴィオラ・ダ・ガンバ奏者の「ヘッセ」とリュート奏者ヴァイスを除く35名は、1718年頃の「音楽家の年俸表」に現れていた。彼らの中に、肩書が変化した者は見られない。

表 1-15 1719年の「音楽家の年俸表」に記載された奏者

楽器の種類と奏者の名前	資料に記された肩書	1718年の「音楽家の年俸表」に現れた者
VI		
ヴェラチーニ、フランチェスコ・マリーア Veracini, Francesco Maria	宮廷作曲家 der Cammer Compositeur	○
ヴォリュミエ、ジャン＝バティスト Woulmyer, Jean-Baptiste	楽師長 der Concertmeister	○
ピゼンデル、ヨーハン・ゲオルク Pisendel, Johann Georg	ヴァイオリン奏者 der Violinist	○
フント、フランチェスコ Hunt, Francesco	ヴァイオリン奏者 der Violinist	○
リビツキ、アーダム Rybizki, Adam	ヴァイオリン奏者 der Violinist	○
ル・グロ、シモン Le Gros, Simon	ヴァイオリン奏者 der Violinist	○
ロッティ、ヨーハン・フリードリヒ Lotti, Johann Friedrich	ヴァイオリン奏者 der Violinist	○
Vla		
ヴァイゲルト、ダーヴィット Weigelt, David	ヴィオラ奏者 der Braccist	○
ゴルデ、マルティン Golde, Martin	ヴィオラ奏者 der Braccist	○
ペツシュマン、ミヒャエル Petzschmann, Michael	ヴィオラ奏者 der Braccist	○
ライヒェル、ヨーハン・クリストフ Reichel, Johann Christoph	ヴィオラ奏者 der Braccist	○
ライン、カール・ヨーゼフ Rhein, Carl Joseph	ヴィオラ奏者 der Braccist	○
レーナイス、ヨーハン・ゲオルク Lehneis, Johann Georg	ヴィオラ奏者 der Braccist	○
Vlc		
オロンデル、ジャン・バティスト・ジョゼフ・デュ Haulondel, Jean Baptiste Joseph Du	ヴィオロン奏者 der Violon	○
オロンデル、ロベール・デュ Haulondel, Robert Du	ヴィオロン奏者 der Violon	○
ティロワ、ジャン＝バティスト・プラシュ・デュ Tilloy, Jean-Baptiste Prache du	ヴィオロン奏者 der Violon	○
ピチネッティ、ジョヴァンニ・マリーア・フェリー チェ Picinetti, Giovanni Maria Felice	チェロ奏者 der Violoncell	○
ロッシ、アゴスティーノ・アントーニオ・デ Rossi, Agostino Antonio de	チェロ奏者 der Violoncell	○
Vdg		
「ヘッセ Heße」 ⁹⁵	ヴィオラ・ダ・ガンバ奏者 der Violdigambiste	○

⁹⁵ この奏者を特定することはできなかった。

楽器の種類と奏者の名前	資料に記された肩書	1718年の「音楽家の年俸表」に現れた者
ベントレー、ゴットフリート Bentley, Gottfried	ヴィオラ・ダ・ガンバ奏者 der Violdigambist	○
Fl		
ビュッフアルダン、ピエール＝ガブリエル Buffardin, Pierre-Gabriel	フルート・アルマンダ奏者 der Flute Alemande	○
Ob		
アンリオン、シャルル Henrion, Charles	オーボエ奏者 der Hautboist	○
ザイフェルト、マルティン Seyfert, Martin	オーボエ奏者 der Hautboist	○
ブロッホヴィッツ、ヨーハン・マルティン Blochwitz, Johann Martin	オーボエ奏者 der Hautboist	○
リヒター、ヨーハン・クリスティアン Richter, Johann Christian	オーボエ奏者 der Hautboist	○
Fg		
クヴァッツ、カスパー・エルンスト Quatz, Caspar Ernst	バスオン奏者 der Basson	○
ケストナー、ゲオルゲ・フリードリヒ Kästner, George Friedrich	バスオン奏者 der Basson	○
ベーメ、ヨーハン・ゴットフリート Böhme, Johann Gottfried	バスオン奏者 der Basson	○
Hr		
ザム、アーダム・フランツ Samm, Adam Franz	ホルン奏者 der Waldhornist	○
フィッシャー、ヨーハン・アーダルベルト Fischer, Johann Adalbert	ホルン奏者 der Waldhornist	○
Lut		
アリゴーニ、フランチェスコ Arigoni, Francesco	テオルボ奏者 der Theorbist	○
ヴァイス、シルビウス・レーオポルト Weiss, Silvius Leopold	リュート奏者 der Lautenist	
Org		
シュミット、ヨーハン・ヴォルフガング Schmidt, Johann Wolfgang	オルガン奏者 der Organist	○
ペツォルト、クリスティアン Petzold, Christian	オルガン奏者 der Organist	○
Pan		
ヘーベンシュトライト、パンタレオン Hebenstreit, Pantaleon	宮廷音楽家 der Cammer Music	○
その他		
カデ、ジャン Cadet, Jean	低音楽器奏者 der Bassist	○
ゼレンカ、ヤン・ディースマス Zelenka, Jan Dismas	低音楽器奏者 der Bassist	○

第4項 1720年5月の「音楽家の年俸表」

1720年5月の「音楽家の年俸表」には、楽師長ヴォリュミエの他に40名の人名が記されている。この40名のうち32名は、肩書が楽器の種類を示している。残りの8名は、先の表1-14に示した者と完全に一致している。彼らのうち奏者であったと考えられた者は、ヴェラチーニとヘーベンシュトライトに限られた。

従って、1720年5月の「王の音楽家の年俸表」に記された奏者は、楽師長ヴォリュミエ、肩書から明らかな32名、ヴェラチーニ、ヘーベンシュトライトであったといえる。表1-16は、これらの奏者の名前を、彼らが演奏した楽器の種類に沿って示している。この表に示した奏者の合計は35名であり、そのうちホルン奏者シンドラーを除く34名は、先の1719年の「音楽家の年俸表」に現れていた。彼らが演奏した楽器の種類に変更は見られない。

表 1-16 1720年5月の「音楽家の年俸表」に記載された奏者

楽器の種類と奏者の名前	資料に記された肩書	1719年の「音楽家の年俸表」に現れた者
VI		
ヴェラチーニ、フランチェスコ・マリーア Veracini, Francesco Maria	宮廷作曲家 der Cammer Compositeur	○
ヴォリュミエ、ジャン＝バティスト Woulmyer, Jean-Baptiste	楽師長 der Concertm[eister]	○
フント、フランチェスコ Hunt, Francesco	ヴァイオリン奏者 der Violinist	○
ピゼンデル、ヨーハン・ゲオルク Pisendel, Johann Georg	ヴァイオリン奏者 der Violinist	○
リビツキ、アーダム Rybizki, Adam	ヴァイオリン奏者 der Violinist	○
ル・グロ、シモン Le Gros, Simon	ヴァイオリン奏者 der Violinist	○
ロッティ、ヨーハン・フリードリヒ Lotti, Johann Friedrich	ヴァイオリン奏者 der Violinist	○

楽器の種類と奏者の名前	資料に記された肩書	1719年の「音楽家の年俸表」に現れた者
Vla		
ヴァイゲルト、ダーヴィット Weigelt, David	ヴィオラ奏者 der Braccist	○
ゴルデ、マルティン Golde, Martin	ヴィオラ奏者 der Braccist	○
ペツシュマン、ミヒャエル Petzschmann, Michael	ヴィオラ奏者 der Braccist	○
ライヒェル、ヨーハン・クリストフ Reichel, Johann Christoph	ヴィオラ奏者 der Braccist	○
ライン、カール・ヨーゼフ Rhein, Carl Joseph	ヴィオラ奏者 der Braccist	○
レーナイス、ヨーハン・ゲオルク Lehneis, Johann Georg	ヴィオラ奏者 der Braccist	○
Vlc		
オロンデル、ジャン・バティスト・ジョゼフ・デュ Haulondel, Jean Baptiste Joseph Du	ヴィオロン奏者 der Violon	○
ティロワ、ジャン＝バティスト・プラシュ・デュ Tilloy, Jean-Baptiste Prache du	ヴィオロン奏者 der Violon	○
ピチネッティ、ジョヴァンニ・マリーア・フェリーチェ Picinetti, Giovanni Maria Felice	チェロ奏者 der Violoncell	○
ロッシ、アゴスティーノ・アントーニオ・デ Rossi, Agostino Antonio de	チェロ奏者 der Violoncell	○
Vdg		
ベントレー、ゴットフリート Bentley, Gottfried	ヴィオラ・ダ・ガンバ奏者 der Violdigambist	○
Fl		
ビュッフアルダン、ピエール＝ガブリエル Buffardin, Pierre-Gabriel	フルート・アルマンド奏者 der Flute Alemande	○
Ob		
アンリオン、シャルル Henrion, Charles	オーボエ奏者 der Hautboist	○
ザイフェルト、マルティン Seyfert, Martin	オーボエ奏者 der Hautboist	○
ブロッホヴィッツ、ヨーハン・マルティン Blochwitz, Johann Martin	オーボエ奏者 der Hautboist	○
リヒター、ヨーハン・クリスティアン Richter, Johann Christian	オーボエ奏者 der Hautboist	○
Fg		
クヴァッツ、カスパール・エルンスト Quatz, Caspar Ernst	バスオン奏者 der Basson	○
ケストナー、ゲオルゲ・フリードリヒ Kästner, George Friedrich	バスオン奏者 der Basson	○

楽器の種類と奏者の名前	資料に記された肩書	1719年の「音楽家の年俸表」に現れた者
ベーメ、ヨーハン・ゴットフリート Böhme, Johann Gottfried	バスン奏者 der Basson	○
Hr		
ザム、アーダム・フランツ Samm, Adam Franz	ホルン奏者 der Waldhornist	○
シンドラー、ヨーハン・アーダム Schindler, Johann Adam	ホルン奏者 der Waldhornist	
Lut		
アリゴニ、フランチェスコ Arigoni, Francesco	テオルボ奏者 Theorbist	○
ヴァイス、ジルビウス・レーオポルト Weiss, Silvius Leopold	リュート奏者 der Lautenist	○
Org		
シュミット、ヨーハン・ヴォルフガング Schmidt, Johann Wolfgang	オルガン奏者 der Organist	○
ペツォルト、クリスティアン Petzold, Christian	オルガン奏者 der Organist	○
Pan		
ヘーベンシュトライト、パンタレオン Hebenstreit, Pantaleon	宮廷音楽家 der Cammer Mus:	○
その他		
カデ、ジャン Cadet, Jean	低音楽器奏者 der Bassist	○
ゼレンカ、ヤン・ディースマス Zelenka, Jan Dismas	低音楽器奏者 der Bassist	○

第5項 1720年9月の「音楽家の年俸表」

1720年9月の「音楽家の年俸表」には、楽師長ヴォリュミエと40名の人名が記されている。この40名のうち31名は、奏者であることを示す肩書が付されている。この31名のうちの一人は、「ヴァイオリン奏者 子レーナイス der Violin Lehneiß le fils」と記されている。この表記の横には、「1720年4月1日から vom 1. April 1720 an」と書かれているため、「子レーナイス」は、この日から奏者としてドレスデン宮廷から年俸を受け取り始めたと考えられる。よって、「子レーナイス」は、これまでに参照してきた年俸表に記載されていたヴィオラ奏者ヨーハン・ゲオルク・レーナイスと異なることは明らかであろう。

次項において参照する 1721 年頃の「宮廷音楽家の年俸表」には、これまでの年俸表に見られなかった「カール・マティアス・レーナイス Carl Matthias Lehneis」が、「ヴィオロン奏者見習い Violonist Scholar [sic]」として新たに現れている。従って、先の「ヴァイオリン奏者 子レーナイス」は、肩書が異なるものの、このカール・マティアス・レーナイスを指していると考えられるだろう。

1720 年 9 月の「音楽家の年俸表」に記載された残りの 9 名の名前と肩書を、表 1-17 に示す。彼らのうち、ヴェラチーニはヴァイオリン奏者であり、ヘーベンシュトライトはパンタレオンの奏者であった。肩書に基づくと、他の者は奏者ではなかったといえるだろう。

表 1-17 奏者の肩書を持たない者（1720 年 9 月の「音楽家の年俸表」）

資料に記された肩書	名前
楽長 der CapellM.	ヨーハン・クリストフ・シュミット Johann Christoph Schmidt
	ヨーハン・ダーヴィット・ハイニヒェン Johann David Heinichen
作曲家 der Compos. De Musique	「アンドレ André」
宮廷作曲家 der Cammer Compos.	フランチェスコ・マリーア・ヴェラチーニ Francesco Maria Veracini
宮廷音楽家 der Cammer Mus.	パンタレオン・ヘーベンシュトライト Pantaleon Hebenstreit
楽器庫管理兼修理人 Inspection der Instrument Cammer und Reparatur derer Instrumente	「ゲオルゲ・アウグスティン・キュメルマン George Augustin Kümmelmann」
オルガン職人 der Orgelmacher	「ヨーハン・ハインリッヒ・グレーブナー Joh. Heinrich Gräbner」
写譜家 Musicalische Copialie	「ヨーハン・ヤーコプ・リントナー Johann Jacob Lindner」
楽器世話係 Instrument Diener	ヨーハン・ゴットロープ・ヴェルナー Johann Gottlob Werner

以上のことから、1720 年 9 月の「音楽家の年俸表」に見られる奏者は、楽師長ヴォリュミエ、肩書から明らかな 31 名、ヴェラチーニ、ヘーベンシュトライトと考えられる。表 1-18 は、これらの奏者の名前を、彼らが演奏した楽器の種類ごとに示している。また、先の 1720 年 5 月の「音楽家の年俸表」に現れた奏者を、「○」印によって表している。

この表に見られる奏者は 34 名であり、そのうちヴァイオリン奏者レーナイスを除く 33 名は、前項において取り上げた 1720 年 5 月の「音楽家の年俸表」に名前が記されている。

この 33 名の中に、演奏する楽器を変更した者は見られない。

表 1-18 1720 年 9 月の「音楽家の年俸表」に記載された奏者

楽器の種類と奏者の名前	資料に記された肩書	1720 年 5 月の「音楽家の年俸表」に現れた者
VI		
ヴェラチャーニ、フランチェスコ・マリーア Veracini, Francesco Maria	宮廷作曲家 der Cammer Compos[iteur]	○
ヴォリュミエ、ジャン＝バティスト Woulmyer, Jean-Baptiste	楽師長 der Concertm[eister]	○
ピゼンデル、ヨーハン・ゲオルク Pisendel, Johann Georg	ヴァイオリン奏者 der Violinist	○
フント、フランチェスコ Hunt, Francesco	ヴァイオリン奏者 der Violinist	○
リビツキ、アーダム Rybizki, Adam	ヴァイオリン奏者 der Violinist	○
ル・グロ、シモン Le Gros, Simon	ヴァイオリン奏者 der Violinist	○
レーナイス、カール・マティアス Lehneis, Carl Matthias	ヴァイオリン奏者 der Violin	
ロッティ、ヨーハン・フリードリヒ Lotti, Johann Friedrich	ヴァイオリン奏者 der Violinist	○
Vla		
ヴァイゲルト、ダーヴィット Weigelt, David	ヴィオラ奏者 der Braccist	○
ゴルデ、マルティン Golde, Martin	ヴィオラ奏者 der Braccist	○
ペツシュマン、ミヒャエル Petzschmann, Michael	ヴィオラ奏者 der Braccist	○
ライヒェル、ヨーハン・クリストフ Reichel, Johann Christoph	ヴィオラ奏者 der Braccist	○
ライン、カール・ヨーゼフ Rhein, Carl Joseph	ヴィオラ奏者 der Braccist	○
Vlc		
オロンデル、ジャン・バティスト・ジョゼフ・デュ Haulondel, Jean Baptiste Joseph Du	ヴィオロン奏者 der Violon	○

楽器の種類と奏者の名前	資料に記された肩書	1720年5月の「音楽家の年俸表」に現れた者
ティロワ、ジャン＝バティスト・ブラシュ・デュ Tilloy, Jean-Baptiste Prache du	ヴィオロン奏者 der Violon	○
ピチネッティ、ジョヴァンニ・マリーア・フェリー チェ Picinetti, Giovanni Maria Felice	チェロ奏者 der Violoncell	○
ロッシ、アゴスティーノ・アントーニオ・デ Rossi, Agostino Antonio de	チェロ奏者 der Violoncell	○
Vdg		
ベントレー、ゴットフリート Bentley, Gottfried	ヴィオラ・ダ・ガンバ奏者 der Violdigambist	○
Fl		
ビュッフアルダン、ピエール＝ガブリエル Buffardin, Pierre-Gabriel	フルート・アルマンド奏者 der Flute Alemande	○
Ob		
アンリオン、シャルル Henrion, Charles	オーボエ奏者 der Hautboist	○
ザイフェルト、マルティン Seyfert, Martin	オーボエ奏者 der Hautboist	○
ブロッホヴィッツ、ヨーハン・マルティン Blochwitz, Johann Martin	オーボエ奏者 der Hautboist	○
リヒター、ヨーハン・クリスティアン Richter, Johann Christian	オーボエ奏者 der Hautboist	○
Fg		
クヴァッツ、カスパー・エルンスト Quatz, Caspar Ernst	バスオン奏者 der Basson	○
ケストナー、ゲオルゲ・フリードリヒ Kästner, George Friedrich	バスオン奏者 der Basson	○
ベーメ、ヨーハン・ゴットフリート Böhme, Johann Gottfried	バスオン奏者 der Basson	○
Hr		
ザム、アーダム・フランツ Samm, Adam Franz	ホルン奏者 der Waldhornist	○
フィッシャー、ヨーハン・アーダルベルト Fischer, Johann Adalbert	ホルン奏者 der Waldhornist	○
Lut		
ヴァイス、ジルビウス・レーオポルト Weiss, Silvius Leopold	リュート奏者 der Lautenist	○
Org		
シュミット、ヨーハン・ヴォルフガング Schmidt, Johann Wolfgang	オルガン奏者 der Organist	○
ペツォルト、クリスティアン Petzold, Christian	オルガン奏者 der Organist	○
Pan		
ヘーベンシュトライト、パンタレオン Hebenstreit, Pantaleon	宮廷音楽家 der Cammer Mus.	○

楽器の種類と奏者の名前	資料に記された肩書	1720年5月の「音楽家の年俸表」に現れた者
その他		
カデ、ジャン Cadet, Jean	低音楽器奏者 der Bassist	○
ゼレンカ、ヤン・ディースマス Zelenka, Jan Dismas	低音楽器奏者 der Bassist	○

第6項 1721年頃の「宮廷音楽家の年俸表」

1721年頃の「宮廷音楽家の年俸表」には、楽師長ヴォリュミエの他に42名の人名が記されている。この42名のうち34名は、肩書から奏者であることが分かる。表1-19は、他の8名の名前と肩書を表している。

表 1-19 奏者の肩書を持たない者（1721年頃の「宮廷音楽家の年俸表」）

資料に記された肩書	名前
総宿駅長兼宮廷楽団監督 General Postmeister und Directeur der Capelle	「ヨーハン・ジークムント・フォン・モルダクスト 男爵 Johann Siegmund Baron von Mordaxt」
上級楽長 Ober Capellm[eil]ster	ヨーハン・クリストフ・シュミット Johann Christoph Schmidt
楽長 Capellmeister	ヨーハン・ダーヴィット・ハイニヒェン Johann David Heinichen
バリトン歌手 Sänger Bassist	「ペーター・ギュアルト Peter Guart」
アルト歌手 Sänger Altist	「フランソワ・ゴットフリート・ボルガル Francois Gottfried Beauregard」
アルト歌手 Sänger Altist	ジローラモ・ペルヅネッリ Gerolamo Personelli
宮廷音楽家 Cammer Musicuus	パンタレオン・ヘーベンシュトライト Pantaleon Hebenstreit
楽器世話係 Instrument Diener	ヨーハン・ゴットローブ・ヴェルナー Johann Gottlob Werner

この表に見られる者のうち、「宮廷音楽家」ヘーベンシュトライトは、パンタレオン奏者であった。またジローラモ・ペルヅネッリの肩書は「アルト歌手」となっているが、次項

において参照する 1725 年頃の「宮廷音楽家の年俸表」において、彼は「コントラバス奏者」の肩書を持っている⁹⁶。残りの 6 名は、肩書から奏者ではなかったことが分かる。

従って、1721 年頃の「宮廷音楽家の年俸表」から抽出される奏者は、楽師長ヴォリュミエ、肩書から明白な 34 名、ヘーベンシュトライト、ペルヅネッリになる。下の表 1-20 は、これらの奏者の名前を楽器の種類ごとに示し、先の 1720 年 9 月の「音楽家の年俸表」に名前が記されていた者を「○」印によって表している。

表 1-20 1721 年頃の「宮廷音楽家の年俸表」に記載された奏者

楽器の種類と奏者の名前	資料に記された肩書	1720 年 9 月の「音楽家の年俸表」に現れた者
VI		
ヴォリュミエ、ジャン＝バティスト Woulmyer, Jean-Baptiste	楽師長 Maitre des Concerts	○
ピゼンデル、ヨーハン・ゲオルク Pisendel, Johann Georg	ヴァイオリン奏者 Violinist	○
フント、フランチェスコ Hunt, Francesco	ヴァイオリン奏者 Violinist	○
ライン、カール・ヨーゼフ Rhein, Carl Joseph	ヴァイオリン奏者 Violinist	○
リビツキ、アードム Rybizki, Adam	ヴァイオリン奏者 Violinist	○
ル・グロ、シモン Le Gros, Simon	ヴァイオリン奏者 Violinist	○
ル・リシュ、フランソワ Le Riche, François	ヴァイオリン奏者 Violinist	
ロットィ、ヨーハン・フリードリヒ Lotti, Johann Friedrich	ヴァイオリン奏者 Violinist	○
Vla		
ゴルデ、マルティン Golde, Martin	ヴィオラ奏者 Bracciste	○
ペツシュマン、ミヒヤエル Petzschmann, Michael	ヴィオラ奏者 Bracciste	○

⁹⁶ 本項において取り上げた 1721 年頃の「宮廷音楽家の年俸表」において、ペルヅネッリの名前は、「アルト歌手 Sanger Altist」の「フランソワ・ゴットフリート・ボルガル Francois Gottfried Beauregard」の直下に書かれている。このことからペルヅネッリは、誤って「ボルガル」と同じ「アルト歌手 Sanger Altist」の肩書を書かれたと推定される。

楽器の種類と奏者の名前	資料に記された肩書	1720年9月の「音楽家の年俸表」に現れた者
ライヒェル、ヨーハン・クリストフ Reichel, Johann Christoph	ヴィオラ奏者 Bracciste	○
Vlc		
オロンデル、ジャン・バティスト・ジョゼフ・デュ Haulondel, Jean Baptiste Joseph Du	チェロ奏者 Violoncellist	○
オロンデル、ロベール・デュ Haulondel, Robert Du	チェロ奏者 Violoncellist	
ティロワ、ジャン＝バティスト・ブラシュ・デュ Tilloy, Jean-Baptiste Prache du	チェロ奏者兼写譜家 Violoncellist und Notist	○
ピチネッティ、ジョヴァンニ・マリーア・フェリーチェ Picinetti, Giovanni Maria Felice	チェロ奏者 Violoncellist	○
ロッシ、アゴスティーノ・アントーニオ・デ Rossi, Agostino Antonio de	チェロ奏者 Violoncellist	○
Cb		
ケストナー、ゲオルゲ・フリードリヒ Kästner, George Friedrich	ヴィオロン奏者 Violonist	○
ゼレンカ、ヤン・ディースマス Zelenka, Jan Dismas	ヴィオロン奏者 Violonist	○
ペルゾネッリ、ジローラモ Personelli, Girolamo	アルト歌手 Sänger Altist	
レーナイス、カール・マティアス Lehneis, Carl Matthias	ヴィオロン奏者見習い Violonist Scholar [sic]	○
ロンメル、ペーター Rommel, Peter	ヴィオロン奏者 Violonist	
Fl		
ビュッフアルダン、ピエール＝ガブリエル Buffardin, Pierre-Gabriel	フルート・アルマン Flute Allemande	○
Ob		
アンリオン、シャルル Henrion, Charles	オーボエ奏者 Hautboist	○
ヴァイゲルト、ダーヴィット Weigelt, David	オーボエ奏者 Hautboist	○
ザイフェルト、マルティン Seyfert, Martin	オーボエ奏者 Hautboist	○
ブロッホヴィッツ、ヨーハン・マルティン Blochwitz, Johann Martin	オーボエ奏者 Hautboist	○
リヒター、ヨーハン・クリスティアン Richter, Johann Christian	オーボエ奏者 Hautboist	○
Fg		
カデ、ジャン Cadet, Jean	バスン奏者 Bassonist	○
クヴァッツ、カスパー・エルンスト Quatz, Caspar Ernst	バスン奏者 Bassonist	○
ベーメ、ヨーハン・ゴットフリート Böhme, Johann Gottfried	バスン奏者 Bassonist	○

楽器の種類と奏者の名前	資料に記された肩書	1720年9月の「音楽家の年俸表」に現れた者
Hr		
シンドラー、アンドレアス Schindler, Andreas	ホルン奏者 Waldhornist	
シンドラー、ヨーハン・アーダム Schindler, Johann Adam	ホルン奏者 Waldhornist	
Lut		
ヴァイス、ジルビウス・レーオポルト Weiss, Silvius Leopold	リュート奏者 Lautenist	○
ベントレー、ゴットフリート Bentley, Gottfried	宮廷テオルボ奏者 Cammer Teorbist	○
Org		
シュミット、ヨーハン・ヴォルフガング Schmidt, Johann Wolfgang	オルガン奏者兼写譜家 Organist und Notist	○
ペツォルト、クリスティアン Petzold, Christian	宮廷作曲家兼オルガン奏者 Cammer Componist und Organist	○
Pan		
ヘーベンシュトライト、パンタレオン Hebenstreit, Pantaleon	宮廷音楽家 Cammer Musicus	○

この表から明らかなように、合計 37 名の奏者のうち 31 名は、すでに 1720 年 9 月の「王の音楽家の年俸表」に名前が記載されていた。彼らのうち 7 名は、1720 年 9 月の「音楽家の年俸表」と比較した場合、専門とする楽器の種類に変化が見られる。

この 7 名のうち、ヴィオラ奏者であったラインとヴァイゲルトは、それぞれヴァイオリン奏者とオーボエ奏者に、ファゴット奏者であったケストナーはコントラバス奏者に、「低音楽器奏者」カデとゼレンカは各々ファゴット奏者とヴィオロン奏者に、ヴィオラ・ダ・ガンバ奏者ベントレーはリュート奏者に戻っているといえる。なぜなら彼らの肩書は、すでに 4 年程前の 1717 年頃の「宮廷音楽家の年俸表」に見られたものと一致しているからだ。そして、残りの一人はレーナイスであり、彼はヴァイオリン奏者から「ヴィオロン奏者」の見習いになっている。

第7項 1725年頃の「宮廷音楽家の年俸表」

1725年頃の「宮廷音楽家の年俸表」には、楽師長ヴォリュミエの他に41名の人名が記されている。この41名のうち36名の肩書は、彼らが奏者であったことを明示している。残りの5名のうち4名は、「楽長 Capell Meister」のハイニヒェン、「バリトン歌手 Sänger Bassist」の「ペーター・ギュアルト Peter Giuart」、「アルト歌手 Sänger Altist」の「フランソワ・ゴットフリート・ボルガル Francois Gottfried Beauregard」、「楽器世話係 Instrument Diener」の「ゴットロープ・ヴェルナー Gottlob Werner」である。これまでに、彼らは奏者ではなかったと判断された。そして、「宮廷音楽家 Cammer Musicus」のヘーベンシュトライトは、パンタレオン奏者であった。

以上のことから、1725年頃の「宮廷音楽家の年俸表」に記された奏者は、楽師長ヴォリュミエ、肩書から明らかな36名、ヘーベンシュトライトであるといえよう。表 1-21 は、この38名の奏者の名前を、彼らが演奏した楽器の種類ごとに示している。そして、1721年頃の「宮廷音楽家の年俸表」に現れた者を、「○」印によって表している。

この表に現れる奏者のうち、ヴィオラ奏者モルゲンシュテルン以外は、1721年頃の「宮廷音楽家の年俸表」に名前が記されていた。そして、1721年頃と1725年頃の「宮廷音楽家の年俸表」を比較した場合、奏者たちは演奏する楽器の種類を変更していない。

表 1-21 1725年頃の「宮廷音楽家の年俸表」に記載された奏者

楽器の種類と奏者の名前	資料に記された肩書	1721年頃の「宮廷音楽家の年俸表」に現れた者
VI		
ヴォリュミエ、ジャン＝バティスト Woulmyer, Jean-Baptiste	楽師長 Maitre des Concert	○
ピゼンデル、ヨーハン・ゲオルク Pisendel, Johann Georg	ヴァイオリン奏者 Violinist	○

楽器の種類と奏者の名前	資料に記された肩書	1721年頃の「宮廷音楽家の年俸表」に現れた者
フント、フランチェスコ Hunt, Francesco	ヴァイオリン奏者 Violinist	○
ライン、カール・ヨーゼフ Rhein, Carl Joseph	ヴァイオリン奏者 Violinist	○
リビツキ、アーダム Rybizki, Adam	ヴァイオリン奏者 Violinist	○
ル・グロ、シモン Le Gros, Simon	ヴァイオリン奏者 Violinist	○
ル・リシュ、フランソワ Le Riche, François	ヴァイオリン奏者 Violinist	○
ロッティ、ヨーハン・フリードリヒ Lotti, Johann Friedrich	ヴァイオリン奏者 Violinist	○
Vla		
ゴルデ、マルティン Golde, Martin	ヴィオラ奏者 Bracciste	○
ペツシュマン、ミヒャエル Petzschmann, Michael	ヴィオラ奏者 Bracciste	○
モルゲンシュテルン、ヨーハン・ゴットリーブ Morgenstern, Johann Gottlieb	ヴィオラ奏者 Bracciste	
ライヒェル、ヨーハン・クリストフ Reichel, Johann Christoph	ヴィオラ奏者 Bracciste	○
Vlc		
オロンデル、ジャン・バティスト・ジョゼフ・デュ Haulondel, Jean Baptiste Joseph Du	チェロ奏者 Violoncellist	○
オロンデル、ロベール・デュ Haulondel, Robert Du	チェロ奏者 Violoncellist	○
ティロワ、ジャン＝バティスト・プラシュ・デュ Tilloy, Jean-Baptiste Prache du	チェロ奏者兼写譜家 Violoncellist und Notist	○
ピチネッティ、ジョヴァンニ・マリーア・フェリーチェ Picinetti, Giovanni Maria Felice	チェロ奏者 Violoncellist	○
ロッシ、アゴスティーノ・アントーニオ・デ Rossi, Agostino Antonio de	チェロ奏者 Violoncellist	○
Cb		
ケストナー、ゲオルゲ・フリードリヒ Kästner, George Friedrich	ヴィオロン奏者 Violonist	○
ゼレンカ、ヤン・ディースマス Zelenka, Jan Dismas	ヴィオロン奏者 Violonist	○
ペルヅネッリ、ジローラモ Personelli, Girolamo	コントラバス奏者兼写譜家 Contrabass u. Notist	○
レーナイス、カール・マティアス Lehneis, Carl Matthias	ヴィオロン奏者見習い Violonist Scholar [sic]	○

楽器の種類と奏者の名前	資料に記された肩書	1721年頃の「宮廷音楽家の年俸表」に現れた者
ロンメル、ペーター Rommel, Peter	ヴィオロン奏者 Violonist	○
Fl		
ビュッフアルダン、ピエール＝ガブリエル Buffardin, Pierre-Gabriel	フルート・アルマンデ Flute Allemande	○
Ob		
アンリオン、シャルル Henrion, Charles	オーボエ奏者 Hautboist	○
ヴァイゲルト、ダーヴィット Weigelt, David	オーボエ奏者 Hautboist	○
ザイフェルト、マルティン Seyfert, Martin	オーボエ奏者 Hautboist	○
ブロッホヴィッツ、ヨーハン・マルティン Blochwitz, Johann Martin	オーボエ奏者 Hautboist	○
リヒター、ヨーハン・クリスティアン Richter, Johann Christian	オーボエ奏者 Hautboist	○
Fg		
カデ、ジャン Cadet, Jean	バソン奏者 Bassonist	○
クヴァッツ、カスパー・エルンスト Quatz, Caspar Ernst	バソン奏者 Bassonist	○
ベーメ、ヨーハン・ゴットフリート Böhme, Johann Gottfried	バソン奏者 Bassonist	○
Hr		
シンドラー、アンドレアス Schindler, Andreas	ホルン奏者 Waldhornist	○
シンドラー、ヨーハン・アーダム Schindler, Johann Adam	ホルン奏者 Waldhornist	○
Lut		
ヴァイス、シルビウス・レーオポルト Weiss, Silvius Leopold	リュート奏者 Lautenist	○
ベントレー、ゴットフリート Bentley, Gottfried	宮廷テオルボ奏者 Cammer Teorbist	○
Org		
シュミット、ヨーハン・ヴォルフガング Schmidt, Johann Wolfgang	オルガン奏者兼写譜家 Organist und Notist	○
ペツォルト、クリスティアン Petzold, Christian	宮廷作曲家兼オルガン奏者 Cammer Componist und Organist	○
Pan		
ヘーベンシュトライト、パンタレオン Hebenstreit, Pantaleon	宮廷音楽家 Cammer Musicus	○

第8項 1729年の「宮廷楽団の名簿」

1729年の「宮廷楽団の名簿」には、奏者に関する項目が見られ、人名が列挙されている。

表 1-19 は、奏者以外の項目の名称と、そこに記載された人名を示している⁹⁷。この表に示した「イタリア音楽の作曲家」リストーリは、次の第2章において示すように、「宮廷オルガン奏者 Cammer=Organist」の称号を得る。従って、彼はオルガンを演奏したと考えられる。また「宮廷音楽家」には、パンタレオン奏者ヘーベンシュトライトの名前が挙げられている。

表 1-22 奏者の肩書を持たない者（1729年の「宮廷楽団の名簿」）

資料に記された肩書	名前
イタリア音楽の作曲家 Compositeur de la Musique Italienne	「ジョヴァンニ・アルベルト・リストーリ Giovanni Alberto Ristori」
宮廷音楽家 Cammer=Musicus	パンタレオン・ヘーベンシュトライト Pantaleon Hebenstreit
フランス歌曲 [作曲家] Musiciens vocals François	「ルイ・アンドレ Louis André」
写譜家 Notist	「ヨーハン・ヤーコプ・リントナー Johann Jacob Lindner」
楽器世話係 Instrument=Inspector	「ゲオルゲ・アウグスト・キュメルマン George August Kümmelmann」
宮廷オルガン職人 Hof=Orgelmacher	「ヨーハン・ハインリッヒ・グレーブナー Joh. Heinrich Gräbner」
宮廷楽団世話係 Capell=Diener	「ゴットロープ・ベルナー Gottlob Werner」

以上のことから、1729年の「宮廷楽団の名簿」に現れる奏者は、奏者の項目の下に記載された者、リストーリ、ヘーベンシュトライトであったと指摘できる。表 1-23 は、これらの奏者の人名を、彼らが演奏した楽器の種類ごとに分類して示している。

⁹⁷ 「ソプラノ歌手 Soprano」など、歌手に関する項目に記載された人名は多数に上るため省略する。

この表に提示した奏者の合計は 38 名に上り、先の 1725 年頃の「宮廷音楽家の年俸表」に名前が記載されていた奏者は、フルート奏者クヴァンツとオルガン奏者リストーリ以外の 36 名となっている。この 36 名の中で肩書が大きく異なる者は、レーナイスのみである。彼は「ヴィオロン奏者見習い」であったが、「ヴァイオリン奏者」の項目に名前が記載されているのである。

表 1-23 1729 年の「宮廷楽団の名簿」に記載された奏者

楽器の種類と奏者の名前 ⁹⁸	1725 年頃の「宮廷音楽家の年俸表」に現れた者
VI (「ヴァイオリン奏者 Violinist」)	
[ヴォリュミエ、ジャン＝バティスト Woulmyer, Jean-Baptiste] ⁹⁹	○
ピゼンデル、ヨーハン・ゲオルク Pisendel, Johann Georg	○
フント、フランチェスコ Hunt, Francesco	○
ライン、カール・ヨーゼフ Rhein, Carl Joseph	○
リビツキ、アーダム Rybizki, Adam	○
ル・グロ、シモン Le Gros, Simon	○
レーナイス、カール・マティアス Lehneis, Carl Matthias	○
ロッティ、ヨーハン・フリードリヒ Lotti, Johann Friedrich	○
Vla (「ヴィオラ奏者 Brachist」)	
ゴルデ、マルティン Golde, Martin	○
ペツシュマン、ミヒャエル Petzschmann, Michael	○
モルゲンシュテルン、ヨーハン・ゴットリーブ Morgenstern, Johann Gottlieb	○
ライヒェル、ヨーハン・クリストフ Reichel, Johann Christoph	○

⁹⁸ 括弧内は、名簿に記載された項目名を表している。

⁹⁹ ヴォリュミエは、「楽師長 Der Concert=Meister」の見出しの下に名前が記載されている。しかし、彼は前年の 1728 年に死亡している。

楽器の種類と奏者の名前 ⁹⁸	1725年頃の「宮廷音楽家の年俸表」に現れた者
Vlc (「チェロ奏者 Violoncello」)	
オロンデル、ジャン・バティスト・ジョゼフ・デュ Haulondel, Jean Baptiste Joseph Du	○
オロンデル、ロベール・デュ Haulondel, Robert Du	○
ティロワ、ジャン＝バティスト・プラシュ・デュ Tilloy, Jean-Baptiste Prache du	○
ピチネッティ、ジョヴァンニ・マリーア・フェリーチェ Picinetti, Giovanni Maria Felice	○
ロッシ、アゴスティーノ・アントーニオ・デ Rossi, Agostino Antonio de	○
Cb (「コントラバス奏者 Contra-Basso」)	
ケストナー、ゲオルゲ・フリードリヒ Kästner, George Friedrich	○
ゼレンカ、ヤン・ディースマス Zelenka, Jan Dismas	○
Fl (「フルート・アルマンド奏者 Flutes traverses」)	
クヴァンツ、ヨーハン・ヨアヒム Quantz, Johann Joachim	
ビュッフアルダン、ピエール＝ガブリエル Buffardin, Pierre-Gabriel	○
ブロッホヴィッツ、ヨーハン・マルティン Blochwitz, Johann Martin	○
Ob (「オーボエ奏者 Hautbois」)	
アンリオン、シャルル Henrion, Charles	○
ヴァイゲルト、ダーヴィット Weigelt, David ¹⁰⁰	○
ザイフェルト、マルティン Seyfert, Martin	○
リヒター、ヨーハン・クリスティアン Richter, Johann Christian	○
ル・リシュ、フランソワ Le Riche, François ¹⁰¹	○
Fg (「バスーン奏者 Basson」)	
カデ、ジャン Cadet, Jean	○
クヴァッツ、カスパー・エルンスト Quatz, Caspar Ernst	○
ベーメ、ヨーハン・ゴットフリート Böhme, Johann Gottfried	○

¹⁰⁰ この名簿には、「クリスティアン・ヴァイゲルト Christian Weigelt」と記載されている。

¹⁰¹ ル・リシュの名前は、「宮廷オーボエ奏者 Hautbois de la Chambre」の項目に記載されている。

楽器の種類と奏者の名前 ⁹⁸	1725年頃の「宮廷音楽家の年俸表」に現れた者
Hr (「ホルン奏者 Waldhornist 」)	
シンドラー、アンドレアス Schindler, Andreas	○
シンドラー、ヨーハン・アーダム Schindler, Johann Adam	○
Lut (「リュート奏者 Theorbist 」)	
ヴァイス、ジルビウス・レーオポルト Weiss, Silvius Leopold ¹⁰²	○
ベントレー、ゴットフリート Bentley, Gottfried	○
Cem (「チェンバロ Clavecín 」)	
シュミット、ヨーハン・ヴォルフガング Schmidt, Johann Wolfgang	○
ペツォルト、クリスティアン Petzold, Christian ¹⁰³	○
リストーリ、ジョヴァンニ・アルベルト Ristori, Giovanni Alberto ¹⁰⁴	
Pan	
ヘーベンシュトライト、パンタレオン Hebenstreit, Pantaleon	○

第9項 楽器の種類を変更した奏者たち

1717年から1729年までの年俸表や名簿に現れた奏者の中には、肩書から推定される楽器の種類が、資料によって異なる者が見られた。彼らは、ライン、ブロッホヴィッツ、カデ、ベントレー、ゼレンカ、ケストナー、ヴァイゲルトの7名に上っている。表 1-24 は、これらの資料に記載された、彼らの楽器の種類を示している。

¹⁰² ヴァイスの名前は、「宮廷リュート奏者 **Cammer=Lautenist**」の項目に記載されている。

¹⁰³ ペツォルトの名前は、「作曲家兼オルガン奏者 **Componist und Organist**」の項目に記載されている。

¹⁰⁴ リストーリの名前は、先述のように、「イタリア音楽の作曲家」の項目に記載されている。

表 1-24 1717 年から 1729 年までの年俸表と名簿において楽器の種類が変化した奏者

奏者の名前	1717 年の「宮廷楽団の年俸表」	1717 年頃の「宮廷音楽家の年俸表」	1718 年頃の「音楽家の年俸表」	1719 年の「音楽家の年俸表」	1720 年 5 月「音楽家の年俸表」	1720 年 9 月「音楽家の年俸表」	1721 年頃「宮廷音楽家の年俸表」	1725 年頃「宮廷音楽家の年俸表」	1729 年の「宮廷楽団の名簿」
ヴァイゲルト、ダーヴィット Weigelt, David	Fl	Ob	Vla	Vla	Vla	Vla	Ob	Ob	Ob
カデ、ジャン Cadet, Jean	Fl & Fg	Fg	Bas	Bas	Bas	Bas	Fg	Fg	Fg
ケストナー、ゲオルゲ・フリードリヒ Kästner, George Friedrich	Vla	Cb	Fg	Fg	Fg	Fg	Cb	Cb	Cb
ゼレンカ、ヤン・ディースマス Zelenka, Jan Dismas	Cb	Cb	Bas	Bas	Bas	Bas	Cb	Cb	Cb
ブロッホヴィッツ、ヨーハン・マルティン Blochwitz, Johann Martin	Ob	Ob (Fl)	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob	Fl
ベントレー、ゴットフリート Bentley, Gottfried	Lut	Lut	Vdg	Vdg	Vdg	Vdg	Lut	Lut	Lut
ライン、カール・ヨーゼフ Rhein, Carl Joseph	Vla	Vl	Vla	Vla	Vla	Vla	Vl	Vl	Vl

この表において、2 列目の 1717 年頃の「宮廷音楽家の年俸表」から 1725 年頃の「宮廷音楽家の年俸表」までの資料は、奏者の楽器の種類に基づき、二つの類型に分けられよう。

その一つは 3 点の「宮廷音楽家の年俸表」であり、もう一つは 4 点の「音楽家の年俸表」である。

3 点の「宮廷音楽家の年俸表」において、ラインはヴァイオリン奏者、ヴァイゲルトはオーボエ奏者、ブロッホヴィッツはオーボエまたはフルートの奏者、カデはファゴット奏者、ベントレーはリュート奏者、ゼレンカとケストナーはコントラバス奏者になっている。

しかし、4 点の「音楽家の年俸表」において、ラインはヴァイオリンではなくヴィオラの奏者に、ヴァイゲルトはオーボエではなくヴィオラの奏者に、ブロッホヴィッツは一貫し

てオーボエ奏者に、カデはファゴット奏者ではなく低音楽器奏者に、ベントレーはリュートではなくヴィオラ・ダ・ガンバの奏者に、ゼレンカはコントラバスではなく低音楽器の奏者に、ケストナーはコントラバスではなくファゴットの奏者になっているのである。そして、この二つの類型のうち「宮廷音楽家の年俸表」のものが、1729年の「宮廷楽団の名簿」に反映されたことを、表 1-24 は示している。

さらに、この表の両端に位置する 1717 年の「宮廷楽団の年俸表」と 1729 年の「宮廷楽団の名簿」を比較すると、ベントレーとゼレンカは、一貫してリュート奏者とコントラバス奏者になっているが、残りの 5 名は楽器の種類が異なる。すなわち、ラインはヴィオラからヴァイオリンの奏者に、ヴァイゲルトはフルートからオーボエの奏者に、ブロッホヴィッツはオーボエからフルートの奏者に、カデはフルートとファゴットの両方の奏者からファゴットの専門家に、ケストナーはヴィオラからコントラバスの奏者にそれぞれ変化している。このことに基づくと、1717 年から 1729 年までの約 10 年の間に、ドレスデン宮廷楽団に所属した 5 名もの奏者が、専門とする楽器を変更したと考えられよう。

彼らのうちの一人であるケストナーは、1717 年の「宮廷楽団の年俸表」に記載された奏者のうち、年齢が判明している者の中で最も若かった（50 頁の表 1-7 参照）。ストックキートは、ケストナー自身が 1733 年に記した嘆願書に基づき、「ケストナーがペルヅネッリの後任となった」ことを指摘している¹⁰⁵。

先に確認したように、ペルヅネッリは、1725 年頃の「宮廷音楽家の年俸表」にコントラバス奏者として記載されていた。この年俸表には、各人の出身地が記されており、ペルヅネッリはヴェネツィア出身になっている。彼は遅くとも 1718 年に、オペラを上演するためにドレスデン宮廷に雇われたと考えられる。なぜなら、「オペラ関係者、音楽家、歌手及びその他のオペラ従事者」と題されたこの宮廷の資料には、1718 年 8 月 23 日付の「イタ

¹⁰⁵ Janice B. Stockigt, “Bach’s *Missa BWV 232*¹ in the Context of Catholic Mass Settings in Dresden,” in *Exploring Bach’s B-minor Mass*, edited by Robin A. Leaver et al. (Cambridge: Cambridge University Press, 2013), p. 49.

リア・オペラ関係者とその年間契約の明細」が記録されており、そこにペルゾネッリの名前が記載されているからである¹⁰⁶。

ペルゾネッリは、1728年に亡くなった。若手のケストナーは、1720年5月と9月に記された2点の「音楽家の年俸表」に、ファゴット奏者として記載されていたが、1721年頃と1725年頃の「宮廷音楽家の年俸表」において、「ヴィオロン奏者」に変わっていた。よってケストナーは、1720年から1721年の間に、低音弦楽器の奏者に転向したと推定されよう。

ペルゾネッリの名前が記されていた先の「明細」において、彼の年俸は950ターラーに達している。一方、1721年頃の「宮廷音楽家の年俸表」におけるケストナーの年俸は、その4分の1以下の僅か200ターラーである。このことに基づくと、若手奏者ケストナーが低音弦楽器の奏者に転向し、オペラ上演のために雇われたコントラバス奏者ペルゾネッリの「後任となった」ことは、出費を抑えつつオペラを上演するための準備の一環であった可能性を指摘できるだろう。

第7節 第1章の総括

本章は、ヴォリュミエが楽師長を務めた時代のドレスデン宮廷楽団を研究対象として、彼によって基礎が据えられた、乱れのない合奏に不可欠であった奏者を指摘することを目的とした。そして、ヴォリュミエが楽師長に就任した1709年から、彼が亡くなった翌年の1729年までに記録された合計12点の年俸表や名簿から、奏者を特定してきた。

フランスの宮廷に勤めた経験を持つヴォリュミエがドレスデン宮廷に赴任したことにより、この宮廷にはフランスの奏法が導入された。年俸表に基づくと、1711年のドレスデン宮廷楽団は、フランスの楽団を模した1709年の「オーケストラ」に基づいて組織されて

¹⁰⁶ “Specificatio Deren Italienischen Operisten und Ihres Jährl. Tractaments”, D-Dla, 10026 Geheimes Kabinett, Loc. 907/3 (Die Operisten, Musicos, Sänger und andere zur Opera gehörige Personen betr: ao 1717, 18, 19, [17]20), fol. 120; see also Janice B. Stockigt, *op. cit.*, p. 49.

いたと指摘できた。1711年の「宮廷楽団の年俸表」に現れた奏者のうち、ヴァイオリン奏者ピゼンデル、チェロ奏者ロッシ、リュート奏者ベントレーの3名には、「宮廷音楽家」の肩書が付されていた。翌年の1712年頃の「その他の年俸表」においては、この3名に加え、ヴァイオリン奏者ロッチェも「宮廷音楽家」となっており、リヒターは「首席オーボエ奏者」になっていた。これらの奏者のうち、ヴァイオリン奏者ピゼンデルとオーボエ奏者リヒターは、1714年にはフランスへ、1716年にはイタリアへ行く機会が与えられていた。

しかし、1717年にこの楽団の奏者を取り巻く状況は一変した。ドレスデン宮廷では、楽師長ヴォリュミエの下でフランスの奏法を学んだ奏者と、新たにイタリアからオペラを上演するために雇われた奏者が混在するようになった。このことは、1717年の「宮廷楽団の年俸表」に反映されていた。1717年頃の「宮廷音楽家の年俸表」と比較した結果、この「宮廷楽団の年俸表」に記された奏者のうち10名は、24歳から30歳までの若手奏者であり、「宮廷音楽家」であったヴァイオリン奏者ピゼンデルやチェロ奏者ロッシ、「首席オーボエ奏者」であったリヒターは、この年齢層に属していた。

1718年には、ドレスデン宮廷楽団から11名の奏者がヴィーンに派遣されていた。その大半を占めた8名は、互いに年齢が近い若手奏者であった。彼らは、先のヴァイオリン奏者ピゼンデルとチェロ奏者ロッシ、オーボエ奏者リヒターに加え、フルート奏者ビュッフアルダン、ファゴット奏者ベーメ、リュート奏者ヴァイス、さらにヴィオラ奏者とオーボエ奏者をそれぞれ務めてきたラインとブロッホヴィッツであった。また、ヴィーンへの出張が行われた翌年の1719年には、合計16名の宮廷楽団の音楽家がモーリッツブルクに出張していた。先にヴィーンに派遣されていた若手8名とヴィオラ奏者レーナイスは、このモーリッツブルクへ向かった奏者に選ばれていた。

1717年にオペラ上演のために雇用されたイタリア人の大半は、3年後の1720年に解雇された。1720年代には多数の教会音楽が作曲されるようになり、オペラ上演再開に向けた

準備も進められた。このように変化に富んだ 1717 年から 1720 年代末までに記録された年俸表は、7 名もの奏者が専門とする楽器を変更したことを示していた。

こうしたヴォリュミエの時代に、奏者たちは少なくとも 4 回出張していた。下の表 1-25 は、この 4 回の出張それぞれに選出された奏者を「○」印によって示している。この表に基づくと、ヴァイオリン奏者であったピゼンデルとオーボエ奏者リヒターは全ての出張に選出されているため、彼らが演奏に欠かせなかったことは明白といえる。他の奏者は出張回数が 2 回または 1 回であり、その回数にほとんど差はないが、1718 年と 1719 年の出張に着目すると、ピゼンデルやリヒターと共にヴァイス、ビュッフアルダン、ブロッホヴィッツ、ベーメ、ライン、レーナイス、ロッシは連続して出張に選出されている。さらに表 1-25 は、1718 年と 1719 年の出張それぞれにおいて、奏者たちが、種々の弦楽器と木管楽器による、10 名近くから成る合奏団を組織できたことを示している。

表 1-25 出張に選ばれた奏者たち

奏者の名前	出張回数	1714 年 パリ	1716 年 イタリヤ	1718 年 ザイン	1719 年 モーリッ ブルク
ヴァイス、ジルビウス・レーオポルト Weiss, Silvius Leopold	2			○	○
ヴォリュミエ、ジャン＝バティスト Woulmyer, Jean-Baptiste	2	○		○	
ゴルデ、マルティン Golde, Martin	1				○
ゼレンカ、ヤン・ディースマス Zelenka, Jan Dismas	1				○
ピゼンデル、ヨーハン・ゲオルク Pisendel, Johann Georg	4	○	○	○	○
ビュッフアルダン、ピエール＝ガブリエル Buffardin, Pierre-Gabriel	2			○	○
ブロッホヴィッツ、ヨーハン・マルティン Blochwitz, Johann Martin	2			○	○
フント、フランチェスコ Hunt, Francesco	1				○
ペツォルト、クリスティアン Petzold, Christian	2	○			○
ヘーベンシュトライト、パンタレオン Hebenstreit, Pantaleon	1			○	
ベーメ、ヨーハン・ゴットフリート Böhme, Johann Gottfried	2			○	○

ライン、カール・ヨーゼフ Rhein, Carl Joseph	2			○	○
リヒター、ヨーハン・クリスティアン Richter, Johann Christian	4	○	○	○	○
リビツキ、アーダム Rybizki, Adam	1				○
ル・グロ、シモン Le Gros, Simon	1				○
レーナイス、ヨーハン・ゲオルク Lehneis, Johann Georg	2			○	○
ロッシ、アゴスティーノ・アントーニオ・デ Rossi, Agostino Antonio de	2			○	○
ロットィ、ヨーハン・フリードリヒ Lotti, Johann Friedrich	1				○

1718年のヴィーン出張の記録に記された奏者の肩書を改めて確認すると、ピゼンデルは「第1 ヴァイオリン」、リヒターは「第1 オーボエ」、ラインは「第2 ヴァイオリン」、ブロッホヴィッツは「第2 オーボエ」となっている。(53頁の表 1-8 参照)。このことに基づくと、合計 11名の奏者が一つの合奏団としてヴィーンに派遣され、彼ら全員によって何らかの楽曲が演奏された可能性は高いといえる。さらにモーリッツブルクへの出張においては、ハイニヒェンが作曲した《モーリッツブルクのセレナータ *Serenata di Moritzburg*》が演奏された。この作品の自筆総譜と演奏に用いられたパート譜は現存しており、これらの楽譜には、種々の楽器が同一の声部を演奏する箇所が随所に見られる¹⁰⁷。これらの楽譜にリュートの声部は記されていないが、当時のドレスデン宮廷において書かれた楽譜は、リュート奏者が他の奏者と共に通奏低音声部を奏でていたことを示している。従って、モーリッツブルクに派遣された奏者も全員で合奏を行ったことは、十分に考えられる。以上のように、ヴィーンとモーリッツブルクの出張においては、奏者が全員で一糸乱れぬ合奏を披露した可能性が高いことを指摘できる。

このことに基づくと、これらの出張の両方に携わったピゼンデルと 8名、すなわちライン、レーナイス、ロッシ、ビュッフアルダン、リヒター、ブロッホヴィッツ、ベーメ、ヴァ

¹⁰⁷ Johann David Heinichen, *Serenata di Moritzburg* (D-Dl, Mus.2398-L-3), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212006383>; Johann David Heinichen, *Serenata di Moritzburg* (D-Dl, Mus.2398-L-3a), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212006384>.

イスは、乱れない合奏に不可欠な奏者であったと考えられる。

ドレスデン宮廷楽団の奏者たちは、1717年以降、それまでに体得したフランスの奏法に加え、新たにイタリアの奏法を学ばなければならず、その不慣れな奏法において乱れない合奏を行うことは大変難しかったと考えられた。この合奏に必要と考えられたピゼンデルと8名のうち、ピゼンデル、リヒター、ロッシは、フランスとイタリアの両方の奏法に対応できたと推定できた。残りの6名も、フランスとイタリアの音楽を演奏する必要があったモーリツブルクへの出張に選ばれていたことから、これらの国の奏法を習得していたと推測できる。これらのことに基づくと、彼らはフランスの奏法だけでなく、イタリアの奏法においても一糸乱れぬ合奏の要となる奏者であった可能性を指摘できる。

先の表 1-26 に基づくと、ピゼンデルと8名のうち、ヴィオラ奏者レーナイスは1720年5月の「音楽家の年俸表」を最後に、資料に名前が記載されていない。しかし、彼以外の奏者は、楽師長ヴォリュミエが亡くなった翌年にあたる1729年の「宮廷楽団の名簿」に現れているため、ドレスデン宮廷楽団に在籍し続けたことが分かる。この7名は、ヴィーンへの出張を説明した際に指摘したように、ピゼンデルとほぼ同じ年齢であった。以上のことから、1720年代においては、ピゼンデル及び彼と同世代の7名が中心となって乱れない合奏を実現していたと考えられる。

最後に、本章において取り上げた12点の年俸表や名簿から特定された奏者の名前と楽器の種類を表 1-26 に示す。

表 1-26 1709 年から 1729 年までの年俸表や名簿に記載された奏者の名前と楽器の種類

奏者の名前	1709 年の「オーケストラの年俸表」	1711 年の「宮廷楽団の年俸表」	1712 年頃の「その他の年俸表」	1717 年の「宮廷楽団の年俸表」	1717 年頃の「宮廷音楽家の年俸表」	1718 年頃の「音楽家の年俸表」	1719 年の「音楽家の年俸表」	1720 年 5 月「音楽家の年俸表」	1720 年 9 月「音楽家の年俸表」	1721 年頃「宮廷音楽家の年俸表」	1725 年頃「宮廷音楽家の年俸表」	1729 年の「宮廷楽団の名簿」
アリゴーニ、フランチェスコ Arigoni, Francesco	Lut	Lut	Lut	Lut	Lut	Lut	Lut					
アンリオン、シャルル Henrion, Charles	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob
アンリオン、ジャン＝バティスト Henrion, Jean-Baptiste	Ob	Fl	Fl									
ヴァイゲルト、ダーヴィット Weigelt, David		Fl	Fl	Fl	Ob	Vla	Vla	Vla	Vla	Ob	Ob	Ob
ヴァイス、シルビウス・レーオポルト Weiss, Silvius Leopold							Lut	Lut	Lut	Lut	Lut	Lut
D. ウイス D. Huisse	Fl											
ヴェラチーニ、フランチェスコ・マリーア Veracini, Francesco Maria						Vl	Vl	Vl	Vl			
ヴォリュミエ、ジャン＝バティスト Woulmyer, Jean-Baptiste	Vl	Vl	Vl	Vl	Vl	Vl	Vl	Vl	Vl	Vl	Vl	Vl
オロンデル、ジャン・バティスト・ジョゼフ・デュ Haulondel, Jean Baptiste Joseph Du	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc
オロンデル、ロベール・デュ Haulondel, Robert Du			Bas		Vlc	Vlc	Vlc			Vlc	Vlc	Vlc

奏者の名前	1709年の「オーケストラの年俸表」	1711年の「宮廷楽団の年俸表」	1712年頃の「その他の年俸表」	1717年の「宮廷楽団の年俸表」	1717年頃の「宮廷音楽家の年俸表」	1718年頃の「音楽家の年俸表」	1719年の「音楽家の年俸表」	1720年5月「音楽家の年俸表」	1720年9月「音楽家の年俸表」	1721年頃「宮廷音楽家の年俸表」	1725年頃「宮廷音楽家の年俸表」	1729年の「宮廷楽団の名簿」
ガッジ、アンジェロ Gaggi, Angelo						Cb						
カデ、ジャン Cadet, Jean		Fl & Fg	Fl	Fl & Fg	Fg	Bas	Bas	Bas	Bas	Fg	Fg	Fg
クヴァッツ、カスパール・エルンスト Quatz, Caspar Ernst				Fg	Fg	Fg	Fg	Fg	Fg	Fg	Fg	Fg
クヴァンツ、ヨーハン・ヨアヒム Quantz, Johann Joachim												Fl
ケストナー、ゲオルゲ・フリードリヒ Kästner, George Friedrich				Vla	Cb	Fg	Fg	Fg	Fg	Cb	Cb	Cb
コスモフスキ、ペトルス Cosmovsky, Petrus	Org	Org	Org									
ゴルデ、マルティン Golde, Martin	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla
ザイフェルト、マルティン Seyfert, Martin				Ob	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob
ザム、アーダム・フランツ Samm, Adam Franz		Hr	Hr	Hr	Hr	Hr	Hr	Hr	Hr			
シュミット、ヨーハン・ヴォルフガング Schmidt, Johann Wolfgang		Org	Org	Org	Org	Org	Org	Org	Org	Org	Org	Org
シンドララー、アンドレアス Schindler, Andreas										Hr	Hr	Hr

奏者の名前	1709年の「オーケストラの年俸表」	1711年の「宮廷楽団の年俸表」	1712年頃の「その他の年俸表」	1717年の「宮廷楽団の年俸表」	1717年頃の「宮廷音楽家の年俸表」	1718年頃の「音楽家の年俸表」	1719年の「音楽家の年俸表」	1720年5月「音楽家の年俸表」	1720年9月「音楽家の年俸表」	1721年頃「宮廷音楽家の年俸表」	1725年頃「宮廷音楽家の年俸表」	1729年の「宮廷楽団の名簿」
シンドラー、ヨーハン・アーダム Schindler, Johann Adam								Hr	Hr	Hr	Hr	Hr
ゼレンカ、ヤン・ディースマス Zelenka, Jan Dismas		Cb	Cb	Cb	Cb	Bas	Bas	Bas	Bas	Cb	Cb	Cb
ティロワ、ジャン＝バティスト・ブラシュ・デュ Tilloy, Jean-Baptiste Prache du		Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc
デュセ、ジャン＝バティスト Ducé, Jean-Baptiste		Fl	Fl									
ピゼンデル、ヨーハン・ゲオルク Pisendel, Johann Georg		Vl	Vl	Vl	Vl	Vl	Vl	Vl	Vl	Vl	Vl	Vl
ピチネッティ、ジョヴァンニ・ マリーア・フェリーチェ Picinetti, Giovanni Maria Felice				Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc
ビュッフアルダン、ピエール＝ガブリエル Buffardin, Pierre-Gabriel				Fl	Fl	Fl	Fl	Fl	Fl	Fl	Fl	Fl
フィオレリ、カルロ Fiorelli, Carlo	Vl											
フィッシャー、ヨーハン・アダルベルト Fischer, Johann Adalbert		Hr	Hr	Hr	Hr	Hr	Hr					
プレトーリウス、ヨーハン・ハインリッヒ Praetorius, Johann Heinrich	Vla	Vla	Vla	Vla								
ブロッホヴィッツ、ヨーハン・マルティン Blochwitz, Johann Martin		Ob	Ob	Ob	Ob (Fl)	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob	Fl

奏者の名前	1709年の「オーケストラの年俸表」	1711年の「宮廷楽団の年俸表」	1712年頃の「その他の年俸表」	1717年の「宮廷楽団の年俸表」	1717年頃の「宮廷音楽家の年俸表」	1718年頃の「音楽家の年俸表」	1719年の「音楽家の年俸表」	1720年5月「音楽家の年俸表」	1720年9月「音楽家の年俸表」	1721年頃「宮廷音楽家の年俸表」	1725年頃「宮廷音楽家の年俸表」	1729年の「宮廷楽団の名簿」
フント、フランチェスコ Hunt, Francesco		VI	VI	VI	VI	VI	VI	VI	VI	VI	VI	VI
ペツォルト、クリスティアン Petzold, Christian	Org	Org	Org	Org	Org	Org	Org	Org	Org	Org	Org	Org
ヘッセ Heße							Org					
ペツシュマン、ミヒヤエル Petzschmann, Michael	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla
ヘーニツヒ、ダニエル Hennig, Daniel		Fg	Fg									
ヘーベンシュトライト、パンタレオン Hebenstreit, Pantaleon				Pan	Pan	Pan	Pan	Pan	Pan	Pan	Pan	Pan
ベーメ、ヨーハン・ゴットフリート Böhme, Johann Gottfried				Fg	Fg	Fg	Fg	Fg	Fg	Fg	Fg	Fg
ヘリング、ゴットフリート Herring, Gottfried	Cb	Vla	Vla									
ヘリング、ダニエル Herring, Daniel	Vlc											
ペルゾネッリ、ジローラモ Personelli, Girolamo										Cb	Cb	
ベントレー、ゴットフリート Bentley, Gottfried	Lut	Lut	Lut	Lut	Lut	Vdg	Vdg	Vdg	Vdg	Lut	Lut	Lut
モルゲンシュテルン、ヨーハン・ゴットリーブ Morgenstern, Johann Gottlieb											Vla	Vla

奏者の名前	1709年の「オーケストラの年俸表」	1711年の「宮廷楽団の年俸表」	1712年頃の「その他の年俸表」	1717年の「宮廷楽団の年俸表」	1717年頃の「宮廷音楽家の年俸表」	1718年頃の「音楽家の年俸表」	1719年の「音楽家の年俸表」	1720年5月「音楽家の年俸表」	1720年9月「音楽家の年俸表」	1721年頃「宮廷音楽家の年俸表」	1725年頃「宮廷音楽家の年俸表」	1729年の「宮廷楽団の名簿」
ル・リシュ、フランソワ Le Riche, François					VI					VI	VI	Ob
レヒ、クリスティアン Rech, Christian	Ob											
レーナイス、カール・マティアス Lehneis, Carl Matthias									VI	Cb	Cb	VI
レーナイス、ヨーハン・ゲオルク Lehneis, Johann Georg	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla				
ロッシ、アゴスティーノ・アントーニオ・デ Rossi, Agostino Antonio de		Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc
ローター、クリスティアン Rother, Christian	Vla											
ロッティ、ヨーハン・フリードリヒ Lotti, Johann Friedrich	VI	VI	VI	VI	VI	VI	VI	VI	VI	VI	VI	VI
ロンメル、ペーター Rommel, Peter										Cb	Cb	

第2章 楽師長ピゼンデルとドレスデン宮廷楽団の奏者たち

本章は、ピゼンデルが楽師長を務めていた 1731 年から 1755 年までのドレスデン宮廷楽団を研究対象として、この楽団の一糸乱れぬ合奏に不可欠であった奏者を特定する。

すでに序において確認したように、18 世紀前半において乱れない合奏を行うことは珍しかったが、先代の楽師長ヴォリュミエはドレスデン宮廷楽団にこの合奏を導入した。ビルンバウムは、1738 年にこの楽団の乱れない合奏を特筆しており、この時の楽師長はピゼンデルであった。これらのことから、この合奏はヴォリュミエの時代からピゼンデルの時代に引き継がれ、この二人の時代においてドレスデン宮廷楽団の特徴を成していたと考えられた。

第 1 章では、ピゼンデルをヴォリュミエの時代における一糸乱れぬ合奏に不可欠な奏者の一人に挙げた。楽師長に就任したピゼンデルは、この楽団の奏者たちを統括し、彼らに奏法を指導した。これからのことに基づくと、ピゼンデルが中心となって、ヴォリュミエの時代から乱れない合奏を継承したと考えられる。

さらに第 1 章では、この合奏に欠かせなかった奏者として、ピゼンデルの他に 8 名を挙げた。この 8 名のうち、ヴィオラ奏者レーナイス以外の 7 名は、ヴォリュミエが亡くなった翌年の 1729 年の「宮廷楽団の名簿」に名前が記されていた。よってこの 7 名は、ピゼンデルの時代においてもこの楽団に所属して、乱れない合奏を実現する一翼を担った可能性がある。一方、楽団に所属した奏者の中には死亡する者や退団する者がいたため、彼らに代わる奏者が新たに雇用されたと考えられる。従って、ピゼンデルの時代に新たに雇用された奏者の中から、一糸乱れぬ合奏に欠かせない者が現れた可能性もある。

これらに基づくと、ヴォリュミエの時代において乱れない合奏に不可欠であった 7 名が、ピゼンデルの時代においてもこの合奏に欠かせなかったか、またピゼンデルの

時代に新たに雇用された奏者のうち、この合奏に必要となった者がいたかを検証する必要がある。

ピゼンデルの時代に関する先行研究の状況は、ヴォリュミエの時代に関するものに似ており、フルステナウをはじめとした研究者たちによって、ピゼンデルが楽師長を務めた時代のドレスデン宮廷楽団の歴史が記された¹⁰⁸。彼らが記した歴史に基づくことにより、奏者たちがこの楽団に雇用された背景を理解することは可能である。しかし、彼らの歴史は独奏者として活躍したと考えられる名手のみに焦点を当てているため、この楽団に所属した奏者全員を把握することは不可能であり、一糸乱れぬ合奏に貢献した奏者も特定されていない。

これらの研究課題のうち、楽団に在籍した奏者を確認することは、序において説明したように、『宮廷年鑑』に載せられた楽団の名簿（「宮廷楽団の名簿」）から奏者を特定することによって解決できる。ピゼンデルの時代にはほぼ毎年出版された『宮廷年鑑』は、24巻に上る。さらに序においては、秋に狩猟用別邸フベルトゥスブルクへ出張した奏者たちが、この別邸においてオペラ、室内楽、教会音楽を上演したことを説明した。このうちオペラ上演は、当時のザクセン選帝侯フリードリヒ・アウグスト2世の誕生日を祝うものであった。そして、秋旅行に関する資料に基づいてこの別邸に頻繁に派遣された奏者を特定することによって、この楽団に在籍した奏者のうち、乱れのない合奏に不可欠であった奏者を明らかにできる可能性を指摘できた。

以上のことから、本章では、はじめにピゼンデルの時代におけるドレスデン宮廷楽団の歴史を確認することにより、奏者たちが置かれていた状況を把握する。次に、この楽団に所属した奏者を特定することを通して、ヴォリュミエの時代に不可欠であった7名の奏者がピゼンデルの時代のこの楽団に在籍したかを確認すると共に、新たにこの楽団に所属す

¹⁰⁸ Moritz Fürstenau, *Zur Geschichte der Musik und des Theaters am Hofe zu Dresden* (Dresden: 1861-1862 in 2 vols; reprint ed. Leipzig: Peters, 1971 in 1 vol.), vol. 2, pp. 155-374.

るようになった奏者を明らかにする。さらに、フベルトゥスブルクに出張した奏者を特定することにより、先の7名がピゼンデルの時代においても一糸乱れぬ合奏に不可欠であったか、彼らの他にもこの合奏に必要とされた奏者がいたかを検証する。その上で、ピゼンデルの時代において乱れない合奏に不可欠であった奏者を指摘する。

第1節 ピゼンデルが楽師長を務めた時代のドレスデン宮廷楽団

楽師長ヴォリュミエは1728年に亡くなった。その3年後にあたる1731年の12月11日に、ピゼンデルは新しい楽師長としてドレスデン宮廷の全ての音楽家に紹介された¹⁰⁹。

また、楽長であったシュミットとハイニヒェンも、1728年と1729年に相次いで亡くなった。ハッセは5年ほど後の1734年に、正式に次の楽長としてドレスデン宮廷に雇用された。この宮廷の記録である「1733年から1739年のイタリア人歌手、楽団、踊り手及びその他のオペラに従事する人々」の1734年6月11日付の記録は、「楽長ハッセ Capellmeister Haße」と、歌手であった彼の妻ファウスティーナ・ボルドーニ Faustina Bordoni (1697-1781) に、年俸6000ターラーが支払われることを示している¹¹⁰。

ハッセは、ナポリにおいて成功を取めたオペラ作曲家であった。当地の作曲家にとって最高の榮譽は、この王国を統治していたオーストリア皇帝カール6世 Karl VI. (1685-1740) の聖名祝日、すなわち11月4日の聖チャールズ日を祝うオペラを作曲することであった。ハッセは、1729年にこの日のために《ティグラナーネ Tigrane》を作曲している¹¹¹。

2年後の1731年に、ハッセは初めてドレスデンを訪問し、第1章において確認したように、オペラ《クレオーフィデ》を初演した。その後ハッセはドレスデンを離れ、先述の

¹⁰⁹ Kai Köpp, *Johann Georg Pisendel (1687-1755) und die Anfänge der neuzeitlichen Orchesterleitung* (Tutzing: Schneider, 2005), p. 146.

¹¹⁰ D-Dla, 10026 Geheimes Kabinett, Loc. 907/4 (Die Italiänischen Sänger und Sängerinnen, das Orchestre, die Tänzer und Tänzerinnen, auch andere zur Opera gehörige Personen betr. Ao 1733. 1739), fol. 18; Raffaele Mellace, *Johann Adolf Hasse*, translated by Juliane Riepe (Beeskow: Ortus Musikverlag, 2016), p. 56.

¹¹¹ Daniel Heartz, "Hasse at the Crossroads: Artaserse (Venice, 1730), Dresden, and Vienna," *The Opera Quarterly* 16/1 (Winter, 2000): 25.

ように3年後の1734年に、正式にドレスデン宮廷に雇われた。ハッセは1763年までドレスデン宮廷の楽長を務めた。すでに1731年に楽師長に就任していたピゼンデルは、彼自身が亡くなる1755年まで、ハッセと共にドレスデン宮廷楽団を統括した。

1730年代前半には、新しい楽師長や楽長が就任しただけでなく、彼らを配下に置いていたザクセン選帝侯も交代した。フリードリヒ・アウグスト1世は、1733年2月1日に、ワルシャワにおいて亡くなる。この年、彼の息子フリードリヒ・アウグスト2世はザクセン選帝侯に即位し、翌年の1734年にはアウグスト3世としてポーランド王の位をも獲得した。彼は亡くなる1763年まで、この二つの地位を保持した。

選帝侯の交代により、ドレスデン宮廷の組織は再編された¹¹²。その結果、フランス・バレルの踊り手たちは引き続き雇用されたが、ポーランド楽団やフランス喜劇団は解散させられ、カトリック教会音楽の演奏に関わった少年聖歌隊は減員された¹¹³。

しかしドレスデン宮廷楽団は、フリードリヒ・アウグスト2世の治世においても存続し、この楽団の奏者たちは、教会音楽や室内楽を演奏しただけでなく、オペラ上演も行った¹¹⁴。ミュッケやストッキートは、特にオペラ上演を通して、ドレスデンの名声が非常に高まったことを指摘している¹¹⁵。本章では、選帝侯の誕生日を祝うオペラが上演されたフベル

¹¹² Gerhard Poppe, "Kontinuität oder Neubeginn: Zur Anfangssituation der Ära Hasse in Dresden," in *Johann Adolf Hasse in seiner Zeit: Bericht über das Symposium vom 23. bis 26. März 1999 in Hamburg*, edited by Reinhard Wiesend (Stuttgart: Carus-Verlag, 2006), pp. 307-308.

¹¹³ Mary A. Oleskiewicz, "The Flute at Dresden: Ramifications for Eighteenth-century Woodwind Performance in Germany," in *From Renaissance to Baroque: Change in Instruments and Instrumental Music in the Seventeenth Century*, edited by Jonathan P. Wainwright and Peter Holman (Aldershot: Ashgate, 2005), p. 149; Janice B. Stockigt, "The Court of Saxony-Dresden," in *Music at German Courts, 1715-1760: Changing Artistic Priorities*, edited by Samantha Owens et al. (Woodbridge: Boydell, 2011), p. 31; see also Alina Zórawska-Witkowska, "The Saxon court of the Kingdom of Poland," in *ibid.*, pp. 51-77.

¹¹⁴ 荒川恒子、「ザクセン選帝侯フリードリヒ・アウグスト2世宮廷における音楽事情」、『山梨大学教育人間科学部紀要』第12巻19号、2010年、137～139頁。Janice B. Stockigt, "The Court of Saxony-Dresden," in *Music at German Courts, 1715-1760: Changing Artistic Priorities*, edited by Samantha Owens et al. (Woodbridge: Boydell, 2011), p. 19.

¹¹⁵ Panja Mücke, *Johann Adolf Hasses Dresdner Opern im Kontext der Hofkultur* (Laaber: Laaber, 2003), p. 34; Janice B. Stockigt, "The Court of Saxony-Dresden," in

トウスブルクへの出張に着目するため、以下ではオペラ上演を中心にドレスデン宮廷の歴史を概観する。

ミュッケは、フリードリヒ・アウグスト 2 世の治世に、この君主の下で上演された楽長ハッセによるオペラの一覧表を提示した¹¹⁶。表 2-1 は、彼女の表に記された、オペラの初演日（または再演日）、作品名、演奏場所と演奏機会を引用している。

表 2-1 フリードリヒ・アウグスト 2 世のために上演された楽長ハッセのオペラ
(1734 年から 1763 年)

上演日	作品名	上演場所	上演機会
1734 年 7 月 8 日	カイウス・ファブリキウス Cajo Fabricio	ドレスデン 宮廷歌劇場	カーニバル
1737 年 カーニバル	セノクリタ Senocrita	ドレスデン 宮廷歌劇場	カーニバル
1737 年 7 月 26 日	アタランテ Atalanta	ドレスデン 宮廷歌劇場	ロシア女帝アンナの洗 礼名の日
1737 年 8 月 3 日	アステリア Asteria	ドレスデン 宮廷歌劇場	フリードリヒ・アウグ スト 2 世の洗礼名の日
1737 年 10 月 5 日/11 日	アタランテ (再演)	フベルトゥスブルク	フリードリヒ・アウグ スト 2 世の誕生日
1737 年 10 月 7 日/13 日	アステリア (再演)	フベルトゥスブルク	フリードリヒ・アウグ スト 2 世の誕生日
1738 年 カーニバル	皇帝ティトゥスの仁慈 La clemenza di Tito エイレネ Irene	ドレスデン 宮廷歌劇場	カーニバル
1738 年 5 月 11 日	アルフォンソ Alfonso	ドレスデン 宮廷歌劇場	結婚式
1740 年 カーニバル	皇帝ティトゥスの仁慈 (再演) デメトリオス Demetrio	ドレスデン 宮廷歌劇場	カーニバル
1740 年 9 月 7 日	アルタクセルクセス Artaserse	ドレスデン 宮廷歌劇場	侯子フリードリヒ・ク リスティアンの遊学か らの帰国
1741 年 10 月 7 日	ヌマ・ポンピリウス Numa Pompilio	フベルトゥスブルク	フリードリヒ・アウグ スト 2 世の誕生日
1742 年 カーニバル	ルーチョ・パピリオ Lucio Papirio	ドレスデン 宮廷歌劇場	カーニバル
1742 年 10 月 7 日	見捨てられたディド Didone abbandonata	フベルトゥスブルク	フリードリヒ・アウグ スト 2 世の誕生日

Music at German Courts, 1715–1760: Changing Artistic Priorities, edited by Samantha Owens et al. (Woodbridge: Boydell, 2011), p. 30.

¹¹⁶ Panja Mücke, *Johann Adolf Hasses Dresdner Opern im Kontext der Hofkultur* (Laaber: Laaber, 2003), p. 42.

上演日	作品名	上演場所	上演機会
1743年 カーニバル	ヌマ・ポンピリウス (再演) 見捨てられたディド (再演)	ドレスデン 宮廷歌劇場	カーニバル
1743年 10月7日	愛の隠れ家 L'asilo d'Amore	フベルトゥスブルク	フリードリヒ・アウグ スト2世の誕生日
1744年 カーニバル	アンティゴノス Antigono	ドレスデン 宮廷歌劇場	カーニバル
1745年 10月7日	アルミニウス Arminio	ドレスデン 宮廷歌劇場	フリードリヒ・アウグ スト2世の誕生日
1747年 カーニバル	セミラミスの確認 Semiramide riconosciuta	ドレスデン 宮廷歌劇場	カーニバル兼結婚式
1747年 6月14日	寛容なるスパルタ女 La spartana generosa	ドレスデン 宮廷歌劇場	結婚式
1747年 10月7日	レウキッポス Leucippo	フベルトゥスブルク	フリードリヒ・アウグ スト2世の誕生日
1748年 カーニバル	寛容なるスパルタ女 (再演) デモフォオンテ Demofonte レウキッポス (再演)	ドレスデン 宮廷歌劇場 小劇場	カーニバル
1749年 10月7日	ユピテルルの誕生 Il natal di Giove	フベルトゥスブルク	フリードリヒ・アウグ スト2世の誕生日
1750年 カーニバル	アッティリウス・レグルス Attilio Regolo	ドレスデン 宮廷歌劇場	カーニバル
1751年 カーニバル	レウキッポス キュロスの確認 Ciro Riconosciuto	ドレスデン 宮廷歌劇場	カーニバル
1751年 10月7日	ヒュペルムネストラ Ipermestra	フベルトゥスブルク	フリードリヒ・アウグ スト2世の誕生日
1752年 カーニバル	ヒュペルムネストラ (再演) シリアのハドリアヌス帝 Adriano in Siria	ドレスデン 宮廷歌劇場	カーニバル
1753年 カーニバル	アルミニウス スレイマン Solimano	ドレスデン 宮廷歌劇場	カーニバル
1753年 10月7日	シナの英雄 L'eroe cinese	フベルトゥスブルク	フリードリヒ・アウグ スト2世の誕生日
1754年 カーニバル	スレイマン (再演) アルテミシア Artemisia	ドレスデン 宮廷歌劇場	カーニバル
1755年 カーニバル	アルテミシア アエティウス (再演) Ezio	ドレスデン 宮廷歌劇場	カーニバル
1755年 10月7日	羊飼いの王 Il rè pastore	フベルトゥスブルク	フリードリヒ・アウグ スト2世の誕生日
1756年 カーニバル	羊飼いの王 (再演) アエティウス (再演) オリンピーアデ L'Olimpiade	ドレスデン 宮廷歌劇場	カーニバル
1763年 8月3日	ペルシアの王シロエ Siroe re di Persia	ドレスデン 宮廷歌劇場	フリードリヒ・アウグ スト2世の洗礼名の日

この表に示したオペラは、1734年から1763年までの約30年間に上演されており、その数は再演されたものも含め延べ45作品に上る。上演場所は1748年の《レウキッポス》

を除き、ドレスデン宮廷歌劇場またはフベルトゥスブルクであり、主な上演機会はカーニバルや君主の誕生日、結婚式になっている。

フリードリヒ・アウグスト 2 世の下において、カーニバルは 1 月から 3 月にかけて開催された¹¹⁷。ミュッケは、1730 年代末までのドレスデンにおけるカーニバルが、17 世紀から好まれてきた「オペラや演劇、輪突き、そりすべり、射撃、狩り」から構成されたことを指摘している¹¹⁸。当時のカーニバルには、王侯貴族たちが自ら参加する「そりすべり」や「射撃」、「狩り」が含まれたのである。

さらにミュッケは、ドレスデンのカーニバルについて以下のように説明している。

1740 年代の [ドレスデンの] カーニバルでは、舞台上演が増えたことにより、貴族が自ら参加した祭りの要素は減った。伝統的な「バロック」の祭りの要素であった射撃、狩り、輪突き、そりすべり、食事は、[……] 完全に抑えられたのである。¹¹⁹

この指摘から、1740 年以降のカーニバルはそれ以前と内容が大きく異なり、オペラなどの舞台の上演回数が増えたことが分かる。先の表 2-1 は、この年以降、ハッセのオペラが毎年上演されるようになったことを示している。

翌年の 1741 年には、フベルトゥスブルクに木造の歌劇場が新設された。君主の誕生日を祝うオペラは、それまで別邸の食堂に隣接する広間に組まれた仮設の舞台において上演されたが、1741 年以降はこの歌劇場が用いられた¹²⁰。ドレスデン宮廷のカーニバルにおいて、オペラ上演が主要な演目となった時期に、フベルトゥスブルクにおけるオペラ上演

¹¹⁷ Panja Mücke, *Johann Adolf Hasses Dresdner Opern im Kontext der Hofkultur* (Laaber: Laaber, 2003), p. 53.

¹¹⁸ *Ibid.*, p. 53.

¹¹⁹ *Ibid.*, pp. 55-56.

¹²⁰ Ortrun Landmann, “Musikpflege in der Herbstresidenz Hubertusburg,” in *Schloß Hubertusburg: Werte einer sächsischen Residenz*, edited by Vereins für sächsische Landesgeschichte (Dresden: Vereins für sächsische Landesgeschichte), p. 61.

の環境も整えられたのである。この別邸におけるオペラ上演を表 2-1 によって確認すると、歌劇場が建てられた 1741 年からは、毎年オペラが上演されるようになったことが分かる¹²¹。

しかし表 2-1 において、1746 年はオペラ上演の記録がない。このことには、前年の 1745 年 12 月に、プロイセン王フリードリヒ 2 世がドレスデンに入城したことが関連しているであろう。第 2 次シュレーゲル戦争にザクセンは敗れ、戦勝者のプロイセン王が、和平を結ぶためにこの地を訪れた。ドレスデン宮廷におけるオペラ上演の本拠であった宮廷歌劇場は、この 1745 年 12 月から 1747 年 1 月まで閉鎖された¹²²。

1740 年代後半からは、ドレスデン宮廷に新しい動向が見られる。表 2-1 から明らかのように、ドレスデン宮廷において楽長ハッセのオペラを上演することは、1747 年から再開された。《寛容なるスパルタ女》は、この年の 6 月に行われたバイエルン選帝侯マクシミリアン 3 世 Maximilian III. (1727-1777、選帝侯在位 1745-1777) とザクセン侯女マリア・アンナ Maria Anna (1728-1797) の結婚と、ザクセン侯子フリードリヒ・クリスティアン Friedrich Christian (1722-1763) とバイエルン侯女マリア・アントニア・ヴァルブルギス Maria Antonia Walpurgis (1724-1780) の結婚の祝賀行事において初演された。この祝祭は、1719 年のフリードリヒ・アウグスト 2 世とマリア・ヨゼファの結婚式以来の大規模なものであり、多くの人々がドレスデンを訪れた。侯子妃となったマリア・アントニアは諸芸術に造詣が深く、ドレスデン宮廷における芸術活動の一翼を担うようになった¹²³。

1740 年代後半から、この宮廷はピエトロ・ミンゴッティ Pietro Mingotti (ca. 1702-1759) が率いたイタリア演劇団をはじめとする一座を招くようになった¹²⁴。ヴィーン宮

¹²¹ 表 2-1 には記載していないが、1736 年のフベルトゥスブルクにおいては、リストーリのオペラ《アリアンナ Arianna》が上演された。

¹²² Sven Hansell and David J. Nichols, “Hasse, Johann Adolf,” in *NG2*, vol. 11, p. 101.

¹²³ ヨハン・ヨアヒム・クヴァンツ、『フルート奏法 [改訂版]』 荒川恒子訳、東京：全音楽譜出版社、2017 年、468～469 頁。

¹²⁴ 荒川恒子、「ザクセン選帝侯フリードリヒ・アウグスト 2 世宮廷における音楽事情」、『山梨大学教育人間科学部紀要』第 12 巻 19 号、2010 年、139 頁。

廷に仕えた著名な建築家兼演出家であったジュゼッペ・ガッリ=ビビエーナ Giuseppe Galli=Bibiena (1696-1757) も、ドレスデン宮廷に召され、1748年のカーニバルにおいて上演されたハッセのオペラ《デモフォンテ Demofonte》の演出を手掛けた¹²⁵。ビビエーナは、1751年の《キュロスの確認》、1752年の《シリアのハドリアヌス帝》、1753年の《スレイマン》の演出にも携わった¹²⁶。これらのオペラのうち1753年の《スレイマン》は、「特にその優れた演出は賞賛される」と評価が高く、多くの人々がドレスデンを訪れた¹²⁷。

《スレイマン》の初演では、演出家ビビエーナに加え、ドレスデン宮廷楽団の奏者も高く評価された。ヨハン・クリスティアン・トレーマー Johann Christian Trömer (1697-1756)は、「1753年のヨゼファ祭によせて An Josephafest 1753」と題した詩を作った¹²⁸。そして「美しいオペラ die schöne Opera」、すなわち《スレイマン》の上演において、「オーボエを持ったその男は、息遣いによって雲まで昇れることを示そうとした」と記し、オーボエ奏者の一人を称賛した¹²⁹。フェルステナウは、このオーボエ奏者が宮廷楽団に所属したイタリア出身の名手アントニオ・ベソッツィであったと推測し、ヘインズは《スレイマン》の上演において、オーボエのカデンツァを伴うアリアが演奏されたことを指摘している¹³⁰。

¹²⁵ Martin Hammitzsch, *Der moderne Theaterbau: Der höfische Theaterbau: Der Anfang der modernen Theaterbaukunst, ihre Entwicklung und Betätigung zur Zeit der Renaissance des Barock und des Rokoko* (Berlin: Wasmuth, 1906), p. 162.

¹²⁶ *Ibid.*, p. 167.

¹²⁷ *Neu-eröffnete historische Correspondenz von alten und neuen Curiosis Saxonis* (1753), pp. 66-67. (D-D1, Eph.hist.0362.a)

¹²⁸ Johann Christian Trömer, *Jean Chretien Toucement des Deutsch François Schrifften: mit viel schön Kuffer Stick Kanß Complett mit den zweiten Theil vermehrt* (Nürnberg: 1772), p. 231.

¹²⁹ *Ibid.*, p. 232.

¹³⁰ Moritz Fürstenau, *Zur Geschichte der Musik und des Theaters am Hofe zu Dresden* (Dresden 1861-1862; reprint ed. Leipzig: Peters, 1971), vol. 2, p. 275; Bruce Haynes, *The Eloquent Oboe: A History of the Hautboy from 1640-1760* (Oxford: Oxford University Press, 2007), p. 428.

《スレイマン》の初演から2年を経た1755年には、カーニバルにおいてハッセのオペラ《アエティウス Ezio》が初演され、《スレイマン》と同様に大変な評判となった¹³¹。このオペラの演出のために、ドレスデン宮廷は、フランスの「音楽王立アカデミー Academie Royal de Musique」において主席舞台美術家を務めたジャン＝ニコラ・セルヴァンドーニ Jean-Nicolas Servandoni (1695-1766) を招聘している¹³²。《アエティウス》における彼の演出は、「自然のものや人工のものを華麗な場面転換や装飾によって、また特別な方法によって提示しようとした」と評価された¹³³。またプロイセン王フリードリヒ2世は、姉のフリーデリーケ・ゾフィー・ヴィルヘルミーネ Friederike Sophie Wilhelmine von Preußen (1709-1758) に宛てた手紙において、以下のように、この《アエティウス》について記している¹³⁴。

ドレスデンでは、今年、オペラ《アエティウス》がとてつもない費用で上演されました。役者たちは620人から成っていました。[……] このオペラはドイツ中で大評判となっています。それについての驚くべきことが伝えられているのです。

この手紙からは、《アエティウス》の評判が、ドレスデンの外にまで伝わっていたことが分かる。

このように1747年に再開されたドレスデン宮廷のオペラ上演は、1753年の《スレイマン》と1755年の《アエティウス》によって大きな成功を収めた。この成功を踏まえると、

¹³¹ Anja-Rosa Thöming, “Metastasio Ezio in den Opernfassungen von Johann Adolf Hasse,” *Händel-Jahrbuch* 45 (1999): 165-172.

¹³² Alois M. Nagler, “J. N. Servandoni und F. Bouchers Wirken an der Pariser Oper,” in *Bühnenformen-Bühnenräume-Bühnendekorationen: Beiträge zur Entwicklung des Spielorts*, edited by Rolf Badenhausen and Harald Zielske (Berlin: Schmidt, 1974), pp. 64-65 and 68.

¹³³ *Neu-eröffnete historische Correspondenz von alten und neuen Curiosis Saxonis* (1755), pp. 54-55. (D-DI, Eph.hist.0362)

¹³⁴ Friederike Sophie Wilhelmine and Friedrich II, *Friedrich der Große und Wilhelmine von Baireuth: Briefe der Königszeit 1740-1758*, edited by Gustav Berthold Volz (Leipzig: Koehler, 1926), vol. 2, pp. 287-288; Anja-Rosa Thöming, *op. cit.*: 167.

ドレスデン宮廷の名声は、特にこの二つのオペラが上演された 1750 年代前半に絶頂を迎えたといえるだろう。

この 1747 年から 1750 年代半ばまでの時期におけるフベルトゥスブルクのオペラ上演を確認すると、ドレスデンにおいてオペラが再び上演されるようになった 1747 年から、この別邸におけるオペラ上演も再開されている（表 2-1 参照）。その上演は、評判となった《アエティウス》が初演された 1755 年まで、2 年に 1 回の割合で行われた。

フルステナウによると、翌年の 1756 年もフベルトゥスブルクへの出張は計画されていた¹³⁵。しかし、プロイセン軍がザクセン選帝侯の領地に侵攻したことにより、七年戦争が勃発したためこの出張は中止となり、ザクセン選帝侯フリードリヒ・アウグスト 2 世は、ドレスデンを離れ、ポーランドに退避した。表 2-1 において、七年戦争が行われていた 1757 年から 1762 年までは、オペラ上演の記録は見られない。ザクセンはこの戦争においても敗れ、1763 年にはフベルトゥスブルクにおいて和平が結ばれる。この 1763 年に、フリードリヒ・アウグスト 2 世はポーランドからドレスデンに帰還できたが、彼は同じ年の 10 月 5 日に亡くなった。

以上のように、1733 年にザクセン選帝侯が交代したことにより、この君主の下に置かれていた音楽に関連する組織は大きく再編された。1745 年にはプロイセン王がドレスデンを訪れたことにより、当地の宮廷歌劇場は一時閉鎖され、その後は侯子妃マリア・アンナ・ヴァルブルギスが台頭したり、演劇団や演出家が新たに外国から呼び寄せられたりしていた。このように大きな変化が生じたことに基づくと、ピゼンデルが楽師長を務めた 1731 年から 1755 年までは、1733 年と 1745 年によって三つの時期に区切ることができる。

ピゼンデルは、1740 年代半ば以降、宮廷楽団に所属した奏者やこの楽団の現状に不満を述べるようになったことが確認されている。彼は 1744 年にザクセン選帝侯と娯楽局の長

¹³⁵ Moritz Fürstenau, *Zur Geschichte der Musik und des Theaters am Hofe zu Dresden* (Dresden: 1861-1862 in 2 vols; reprint ed. Leipzig: Peters, 1971 in 1 vol.), vol. 2, p. 359.

der Directeur des Plaisirs に宛てた手紙に、オーボエ奏者ベソツィの横柄な態度を好まないことを記しており、1749年にゲオルク・フィーリップ・テーレマン Georg Philipp Telemann (1681-1767) に記した2通の手紙それぞれにおいて、「カッタネオ氏は怠惰であるため、ここの宮廷ではますます嫌われている」、「ネルダのひどい素行は、[……] 心底頭にくる」と記しているのである¹³⁶。このことから、少なくともベソツィとカッタネオは、ピゼンデルの指示に従わなかった可能性を指摘できる。さらにピゼンデルからテーレマンに宛てられた1752年の手紙は、高齢のため6名から8名の奏者が病気になったことにより、ピゼンデル自身は初対面の多くの奏者と演奏しなくてはならなかったことを伝えている¹³⁷。これらのことに基づくと、先に設定した三つの時期のうち、最後の1745年から1755年までの時期において、ピゼンデルの意図に従って一糸乱れぬ合奏を実現することは、困難になったと考えられる。

第2節 「宮廷楽団の名簿」に記載された奏者たち

先述のように、ピゼンデルが楽師長を務めた1731年から1755年までの時期に出版された『宮廷年鑑』は、24巻に上る。これらの『宮廷年鑑』に記載された「宮廷楽団の名簿」の中には複数の項目があり、そこには人物の姓と名の両方が明記されている。これらの項目からは、ドレスデン宮廷楽団が、監督、楽長、楽師長、詩人、歌手、奏者、さらに写譜家などその他の仕事に関わる者から構成されていたことが分かる。下の表2-2は、この時期の「宮廷楽団の名簿」に見られる奏者以外の項目の名称と、そこに記載された人名を示している¹³⁸。

¹³⁶ Kai Köpp, *Johann Georg Pisendel (1687-1755) und die Anfänge der neuzeitlichen Orchesterleitung* (Tutzing: Schneider, 2005), pp. 260, 316 and 313.

¹³⁷ Georg Philipp Telemann, *Briefwechsel: Sämtliche erreichbare Briefe von und an Telemann*, edited by Hans Grosse (Leipzig: Dt. Verl. für Musik, 1972), p. 361.

¹³⁸ 歌手の項目に記された人名は多数に上るため省略している。

表 2-2 「宮廷楽団の名簿」において奏者以外の項目に記載された者

(1731年から1755年まで)

名前	記載されている期間
「監督 Director」	
ブライテンバウフ、ハインリッヒ・アウグスト・フォン Breitenbauch, Heinrich August von	1735-1747
ディースカウ、カール・ハインリッヒ・フォン Dießkau, Carl Heinrich von	1748-1755
「楽長 Capell=Meister」	
ハッセ、ヨーハン・アードルフ Hasse, Johann Adolf	1732-1755 ¹³⁹
リストーリ、ジョヴァンニ・アルベルト Ristori, Giovanni Alberto	1750-1755 ¹⁴⁰
「楽師長 Concert-Meister」	
ピゼンデル、ヨーハン・ゲオルク Pisendel, Johann Georg	1731-1755
「宮廷音楽家 Cammer=Musicus」	
ヘーベンシュトライト、パンタレオン Hebenstreit, Pantaleon	1731-1751
「フランス歌曲作曲家 Musiciens vocals François」	
アンドレ、ルイ André, Louis	1731 と 1733
「写譜家 Notisten」	
グルンディッヒ、ヨーハン・ゴットフリート Grundig, Johann Gottfried	1735-1755
クレンムラー、ヨーハン・ゲオルク Kremmler, Johann Georg	1735-1755
リントナー、ヨーハン・ヤーコブ Lindner, Johann Jacob	1731 と 1733
「楽器管理人 Instrument=Inspector」	
キュメルマン、ゲオルゲ・アウグスティン Kümmerlmann, George Augstin	1731 と 1733-1744
ケストナー、ゲオルゲ・フリードリヒ Kästner, George Friedrich	1747-1755
「宮廷オルガン職人 Hof=Orgelmacher」	
グレープナー、ヨーハン・ゴットフリート Graebner, Johann Gottfried	1740-1755
グレープナー、ヨーハン・ハインリッヒ Gräbner, Johann Heinrich	1731, 1733-1755
「宮廷楽団世話係 Capell=Diener」	
ヴェルナー、ゴットリーブ Werner, Gottlieb	1731, 1733-1748
ヴェルナー、ヨーハン・ゲオルゲ Werner, Johann George	1749-1750
ヴェルナー、ヨーハン・ゴットフリート Werner, Johann Gottfried	1749-1754
ヴェルナー、ヨーハン・ゴットローブ Werner, Johann Gottlob	1731, 1733-1748

¹³⁹ 1751年以降は「上級楽長 Ober=Capell Meist[er].」として記載されている。

¹⁴⁰ リストーリは「副楽長 Vice=Capell=Meist[er].」として記載されている。

名前	記載されている期間
「詩人 Poet」	
パッラヴィチーノ、ステファーノ Pallavicino, Stefano	1735-1742
パスキーニ Pasquieni	1746-1752
ミリアヴァッカ、ジョヴァンニ・アンブロジオ Migliavaccha, Giovanni Ambrogio	1753-1755
「教会作曲家 Kirchen=Composit」	
シーラー、アーダム Schierer, Adam	1754-1755
ゼレンカ、ヤン・ディースマス Zelenka, Jan Dismas	1733-1746
バッハ、ヨーハン・ゼバスティアン Bach, Johann Sebastian	1738-1750
ブッツ、トビアス Butz, Tobias	1734-1755
ブロイニツヒ、ヨーハン・ミヒャエル Breunich, Johann Michael	1747-1755
ポルポラ、ニコラ Porpora, Nicola	1751-1755
リストーリ、ジョヴァンニ・アルベルト Ristori, Giovanni Albert	1747-1749

この表に示した人物のうち、楽器を演奏したと考えられる者は、楽長のハッセとリストーリ、楽師長ピゼンデル、宮廷音楽家ヘーベンシュトライト、楽器管理人ケストナー、教会作曲家のゼレンカとバッハの7名であろう。ケップは、楽長ハッセによって作曲された作品が上演された際、ハッセ自身はチェンバロを演奏した可能性を指摘している¹⁴¹。リストーリは、1735年から1746年までの「宮廷楽団の名簿」に「宮廷オルガン奏者」として記載されているため、教会作曲家や副楽長に昇格した後も、オルガンを演奏することがあったと考えられる。楽師長ピゼンデルは、先代の楽師長ヴォリュミエの下でヴァイオリン奏者を務めていたため、楽師長に昇進した後も、この楽器を演奏した可能性がある。「宮廷音楽家」ヘーベンシュトライトは、自身の名を冠した楽器パンタレオンの奏者であった。ケストナーは、1731年から1755年までの「宮廷楽団の名簿」において、一貫して「コント

¹⁴¹ Kai Köpp, *Johann Georg Pisendel (1687-1755) und die Anfänge der neuzeitlichen Orchesterleitung* (Tutzing: Schneider, 2005), pp. 346-354.

ラバス奏者」の項目に名前が記録されている¹⁴²。ゼレンカは、ヴォリュミエが楽師長を務めた時代からコントラバス奏者を務めたため、「教会作曲家」の肩書を与えられた後も、この楽器を演奏した場合があったと考えられる。また教会作曲家バッハは鍵盤楽器の名手であったが、ライプツィヒにおいてカントルを務めていたため、ドレスデンを活動の拠点としていなかった。

これらのことに基づくと、ここまでに名前を挙げた楽長ハッセから教会作曲家バッハに至る7名のうち、バッハ以外の6名は、ドレスデン宮廷楽団の合奏に加わった可能性を指摘できる。従って、1731年から1755年までの「宮廷楽団の名簿」に記録された人物のうち、この楽団の合奏に携わった者には、奏者の項目に現れる者に加え、楽長ハッセをはじめとするこの6名を含めることができる。下の表 2-3 は、合計 81 名に上る彼らの名前と、彼らの名前が記された項目が表す楽器の種類を示している。

この表から明らかなように、1731年から1755年までの約25年間の「宮廷楽団の名簿」には、新たに名前が記載されるようになった者と名前が抹消された者が見られ、彼らはいずれも多数に上っている。よって、本節では先に設定した時期の区分に従って、この名簿における奏者の入れ替わりを確認し、ドレスデン宮廷楽団がどのように変化したかを考察する。

¹⁴² ケストナーの名前は、1747年から1755年のこの名簿において、「コントラバス」と「楽器管理人」の項目の両方に記載されている。

表 2-3 1731年から1755年までの「宮廷楽団の名簿」に記載された奏者の名前と楽器の種類

	1731	1732	1733	1735	1736	1737	1738	1739	1740	1741	1742
1731年から1742年まで											
アウグスト、ペーター August, Peter											
アーダム、ヨーハン Adam, Johann						Vla	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla
アーベル、カール・フリードリヒ Abel, Carl Friedrich											
アンリオン、シャルル Henrion, Charles	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob				
ヴァイゲルト、ダーヴィット Weigelt, David	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob
ヴァイス、ジルビウス・レーオポルト Weiss, Silvius Leopold	Lut	Lut	Lut	Lut	Lut	Lut	Lut	Lut	Lut	Lut	Lut
ヴォプスト、クリスティアン Wopst, Christian											
ウーリッヒ、アウグスティン Uhlig, Augustin			VI	VI	VI	VI	VI	VI	VI	VI	VI
オロンデル、ジャン・バティスト・ジョゼフ・デュ Haulondel, Jean Baptiste Joseph Du	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc
オロンデル、ロベール・デュ Haulondel, Robert Du	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc			
カイザー、ヨーハン・ザミュエル Kayser, Johann Samuel			Cb	Cb	Cb	Cb	Cb	Cb	Cb	Cb	Cb
カッタネオ、フランチェスコ・マリーア Cattaneo, Francesco Maria				VI	VI	VI	VI	VI	VI	VI	VI
カデ、ジャン Cadet, Jean	Fg	Fg	Fg	Fg	Fg	Fg	Fg				
カラッシ、ロレンツォ Carassi, Lorenzo										VI	VI
カリファーン、アルカンジェロ Califano, Arcangelo			Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc	Vlc

	1731	1732	1733	1735	1736	1737	1738	1739	1740	1741	1742
1731年から1742年まで											
クヴァッツ、カスパール・エルンスト Quatz, Caspar Ernst	Fg	Fg	Fg	Fg	Fg	Fg	Fg	Fg	Fg	Fg	Fg
クヴァッツ、フリードリヒ・エルンスト Quatz, Friedrich Ernst									Vla	Vla	Vla
クヴァンツ、ヨーハン・ヨアヒム Quantz, Johann Joachim	Fl	Fl	Fl	Fl	Fl	Fl	Fl	Fl	Fl	Fl	Fl
クネヒテル、ヨーハン・ゲオルク Knechtel, Johann Georg				Hr	Hr	Hr	Hr	Hr	Hr	Hr	Hr
クリーガー、ヨーハン・ゴットリーブ Krieger, Johann Gottlieb			Vla	Vla	Vla						
ケストナー、ゲオルグ・フリードリヒ Kästner, George Friedrich	Cb	Cb	Cb	Cb	Cb	Cb	Cb	Cb	Cb	Cb	Cb
ゲッツェル、フランツ・ヨーゼフ Götzel, Franz Joseph											
ゲーリッケ、ゴットフリート・フリードリヒ Göricke, Gottfried Friedrich											
ゴルデ、マルティン Golde, Martin	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla			
ザイフェルト、マルティン Seyfert, Martin	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob
シュミット、ヨーハン・ヴォルフガング Schmidt, Johann Wolfgang	Cem	Cem	Cem	Cem	Cem	Cem	Cem	Cem	Cem	Cem	Cem
シンドラ、アンドレアス Schindler, Andreas	Hr	Hr	Hr	Hr	Hr	Hr					
シンドラ、ヨーハン・アーダム Schindler, Johann Adam	Hr	Hr	Hr								
ゼレンカ、ヤン・ディースマス Zelenka, Jan Dismas	Cb	Cb	Cb ₁₄₃	Cb	Cb	Cb	Cb	Cb	Cb	Cb	Cb
タッシュエンベルク、クリスティアン・ヴィルヘルム Taschenberg, Christian Wilhelm			Vl	Vl	Vl	Vl	Vl	Vl	Vl	Vl	Vl

143 この年から作曲家の肩書を持つ。

	1743	1744	1745	1746	1747	1748	1749	1750	1751	1752	1753	1754	1755
1743年から1755年まで													
ペツシュマン、ミヒャエル Petzschmann, Michael													
ヘーベンシュトライト、パンタレオン Hebenstreit, Pantaleon	Pan	Pan	Pan	Pan	Pan	Pan	Pan	Pan	Pan				
ベーメ、ヨーハン・ゴットフリート Böhme, Johann Gottfried	Fg	Fg	Fg	Fg	Fg	Fg	Fg	Fg	Fg	Fg			
ベントレー、ゴットフリート Bentley, Gottfried													
ホルン、ヨーハン・カスパー Horn, Johann Caspar											Cb	Cb	Cb
マツシュテット、クリスティアン・フリードリヒ Mattstädt, Christian Friedrich				Fg	Fg	Fg	Fg	Fg	Fg	Fg	Fg	Fg	Fg
メーザー、アントン Möser, Anton													
モラシュ、カール Morasch, Carl	Fg	Fg	Fg	Fg	Fg	Fg	Fg	Fg	Fg	Fg	Fg	Fg	Fg
モルゲンシュテルン、ヨーハン・ゴットリーブ Morgenstern, Johann Gottlieb	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla
ライヒェル、ヨーハン・クリストフ Reichel, Johann Christoph	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla	Vla
ライン、カール・ヨーゼフ Rhein, Carl Joseph	Vl	Vl	Vl	Vl	Vl	Vl	Vl	Vl	Vl	Vl	Vl		
ラッハマン、ゴットリーブ・ベンヤミン Lachmann, Gottlieb Benjamin		Ob	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob
リストーリ、ジョヴァンニ・アルベルト Ristori, Giovanni Alberto	Org	Org	Org	Org	Org ¹⁴⁴	Org	Org	Org ¹⁴⁵	Org	Org	Org	Org	
リッター、カール・クリスティアン Ritter, Carl Christian									Fg	Fg	Fg	Fg	Fg

¹⁴⁴ この年から作曲家の肩書を持つ。

¹⁴⁵ この年から副楽長の肩書を持つ。

第1項 1731年と1732年

ピゼンデルが楽師長に就任した1731年に、「宮廷楽団の名簿」に名前が記載されていた奏者は、表2-3のこの年の列に示している。彼らのうちクヴァンツ以外は、第1章において参照した1725年頃の「宮廷音楽家の年俸表」に現れている。このことから、新たに楽師長となったピゼンデルの配下に置かれた奏者の大半は、先代の楽師長ヴォリュミエの時代からピゼンデルと共に演奏していた者であったことが分かる。

1731年の「宮廷楽団の名簿」に見られた奏者は、ヴァイオリン奏者リビツキを除き、翌年の1732年に現れており、この年に新たに名前が記載された奏者は、楽長ハッセのみとなっている。よって、これらの名簿に現れる奏者は、大きく変化していないといえよう。

第1章では、ピゼンデル、ヴィオラ奏者レーナイス、ピゼンデルと年齢がほぼ同じであった7名が、乱れのない合奏に不可欠であったと考えられた。彼らは、ヴァイオリン奏者ライン、チェロ奏者ロッシ、フルート奏者のビュッフアルダンとブロッホヴィッツ、オーボエ奏者リヒター、ファゴット奏者ベーメ、リュート奏者ヴァイスであった。表2-3から明らかのように、このピゼンデルの同僚7名は、1731年及び1732年の「宮廷楽団の名簿」に現れている。

第2項 1733年から1744年

1733年から1744年までの約10年間の「宮廷楽団の名簿」からは、ほぼ毎年、複数の奏者の名前が抹消されている。彼らの名前を、114頁から始まる表2-3を基に表2-4に示した。この表に記した年は、それぞれの人名が記載された最後の年を表している。

表2-4 「宮廷楽団の名簿」から名前が抹消された奏者（1733年から1744年）

	奏者の名前（楽器の種類）
1733年	シンドラー、ヨーハン・アーダム (Hr)
	Schindler, Johann Adam
	ティロワ、ジャン＝バティスト・ブラシュ・デュ (Vlc)
	Tilloy, Jean-Baptiste Prache du

	奏者の名前 (楽器の種類)
	ペツォルト、クリスティアン (Org) Petzold, Christian
	ル・リシュ、フランソワ (Ob) Le Riche, François
1735 年	フント (父)、フランチェスコ (Vl) Hunt Francesco
1736 年	クリーガー、ヨーハン・ゴットリーブ (Vla) Krieger, Johann Gottlieb
	ツァルト、ゲオルク (Vl) Zarth, Georg
1737 年	シンドラー、アンドレアス (Hr) Schindler, Andreas
1738 年	アンリオン、シャルル (Ob) Henrion, Charles
	カデ、ジャン (Fg) Cadet, Jean
1739 年	オロンデル、ロベール・デュ (Vlc) Haulondel, Robert Du
	ゴルデ、マルティン (Vla) Golde, Martin
1740 年	ビオット、フランチェスコ (Vl) Biotto, Francesco
1742 年	ヴァイゲルト、ダーヴィット (Ob) Weigelt, David
	クヴァンツ、ヨーハン・ヨアヒム (Fl) Quantz, Johann Joachim
	ブロッホヴィッツ、ヨーハン・マルティン (Fl) Blochwitz, Johann Martin
	メーザー、アントン (Fg) Möser, Anton
1744 年	オロンデル、ジャン・バティスト・ジョゼフ・デュ (Vlc) Haulondel, Jean Baptiste Joseph Du
	シュミット、ヨーハン・ヴォルフガング (Org) Schmidt, Johann Wolfgang

この表に示した 19 名のうち、1736 年のヴァイオリン奏者ツァルトとヴィオラ奏者ク
リーガー、1740 年のヴァイオリン奏者ビオット、1742 年のフルート奏者クヴァンツとファ
ゴット奏者メーザーを除く 14 名は、先代の楽師長ヴォリュミエと共にドレスデン宮廷に
在籍していた (93 頁からの表 1-26 参照)。彼らの中には、フランスやその隣国のベルギー
出身の者が見られる。1733 年のティロワとル・リシュのうち、前者はパリ出身のチェロ奏
者であり、後者の出身地はフランドル地方であったと考えられているのである¹⁴⁶。さらに
1738 年のファゴット奏者カデと 1739 年のチェロ奏者ロベール・デュ・オロンデルもフラ

¹⁴⁶ David Lasock, “La Riche [Le Riche], François,” in *NG2*, vol. 14, pp. 273-274.

ンス出身であり、1744年のチェロ奏者ジョゼフ・ドゥ・オロンデルは、ブリュッセル出身であった¹⁴⁷。

表 2-4 が示すように、ピゼンデルの同僚 7 名に含まれたフルート奏者ブロッホヴィッツは、1743 年以降の「宮廷楽団の名簿」に名前が記されていない。ドレスデン宮廷の「イタリア人歌手、オーケストラ、踊り手、その他オペラに関わる者」と題された資料には、1744 年 1 月 24 日付の「契約書」が収められており、その冒頭には「他界した音楽家 *der abgelebte Musici*」ブロッホヴィッツの年俸 300 ターラーを 200 ターラーと 100 ターラーに分割し、それぞれリュート奏者ヴァイスとヴィオラ奏者アーダムの年俸に加えることが明記されている¹⁴⁸。このことから、ブロッホヴィッツは遅くとも 1744 年 1 月 24 日までに亡くなったことが分かる。同様にピゼンデルの 7 名の同僚に含まれたオーボエ奏者リヒターは、1746 年までの「宮廷楽団の名簿」に名前が記載されているが、実際には 1744 年に亡くなった¹⁴⁹。

次に、114 頁から始まる表 2-3 に基づき、1733 年から 1744 年までの「宮廷楽団の名簿」において、新たに名前が記されるようになった奏者を下の表 2-5 に示す。

¹⁴⁷ ロベール・デュ・オロンデルは、1740 年の『宮廷年鑑』において「退職者 Pensionairer」の項目に現れている。

¹⁴⁸ D-DI, 10026 Geheimes Kabinett, Loc. 907/5 (Die italiänischen Sänger und Sängerinnen, das Orchestre, die Tänzer und Tänzerinnen, auch andre zu der Ope[r] gehörige Personen, betr. ao 1740), fol. 77r.

¹⁴⁹ Kai Köpp, *Johann Georg Pisendel (1687-1755) und die Anfänge der neuzeitlichen Orchesterleitung* (Tutzing: Schneider, 2005), p. 315.

表 2-5 「宮廷楽団の名簿」に新たに記載された奏者（1733年から1744年）

	奏者の名前（楽器の種類）	
1733年	ウーリッヒ、アウグスティン（VI） Uhlig, Augustin	
	カイザー、ヨーハン・ザミュエル（Cb） Kayser, Johann Samuel	
	カリファーン、アルカンジェロ（Vlc） Califano, Arcangelo	
	クリーガー、ヨーハン・ゴットリーブ（Vla） Krieger, Johann Gottlieb	
	タッシュエンベルク、クリスティアン・ヴィルヘルム（VI） Taschenberg, Christian Wilhelm	
	ティーデレ、ヨーゼフ（VI） Tiederle, Joseph	
	フィックラー、ヨーハン・ゲオルク（VI） Fickler, Johann Georg	
	ビオット、フランチェスコ（VI） Biotto, Francesco	
	フーコー、ヨーハン・ヴィルヘルム（Ob） Hucho, Johann Wilhelm	
	リンケ、ヨーハン・ペーター・カシミール（Fg） Lincke, Johann Peter Casimir	
	1735年	ツァルト、ゲオルク（VI） Zarth, Georg
		クネヒテル、ヨーハン・ゲオルク（Hr） Knechtel, Johann Georg
		モラシュ、カール（Fg） Morasch, Carl
1737年	アーダム、ヨーハン（Vla） Adam, Johann	
	ツイッヒ、フランツ・ゼラフ（VI） Zich, Franz Seraph	
	ハンケ、ヨーハン・フランツ（VI） Hantke, Johann Franz	
1738年	ハンペル、アントン・ヨーゼフ（Hr） Hampel, Anton Joseph	
1739年	メーザー、アントン（Fg） Möser, Anton	
1740年	クヴァッツ、フリードリヒ・エルンスト（Vla） Quatz, Friedrich Ernst	
1741年	カラッシ、ロレンツォ（VI） Carassi, Lorenzo	
	ベソッツィ、アントニオ（Ob） Besozzi, Antonio	
1743年	ゲッツェル、フランツ・ヨーゼフ（Fl） Götzel, Franz Joseph	
	デヴェルデク、ヴェンツェル・ゴットフリート（Fl） Dewerdek, Wenzel Gottfried	
1744年	ツィンケ、ヨーハン・フランツ（Ob） Zincke, Johann Franz	
	フランチーニ、フランソワ（VI） Francini, François	
	ラッハマン、ゴットリーブ・ベンヤミン（Ob） Lachmann, Gottlieb Benjamin	

この表に見られる 26 名のうち 10 名は、1733 年に新たに名前が記載されている。他の年に名前が初めて記録された者は 3 名以下であるため、この人数は非常に多いといえるだろう。この 10 名は、いずれも 1731 年 11 月に雇用が決定された。

ドレスデン宮廷の記録「フランス喜劇団とオーケストラ」に基づく、この宮廷は 1731 年 11 月 28 日に、11 名の奏者を新たに雇うことを決議した¹⁵⁰。表 2-6 は、この資料に記された彼らの名前と楽器の種類を示している。この表と先の表 2-5 の比較から明らかなように、雇用が決まった 11 名の奏者のうち、ヴァイオリン奏者「レッセル」を除く 10 名は、ドレスデン宮廷楽団の一員となった。

表 2-6 1731 年 11 月に雇用が決定された 11 名の奏者

資料に記された肩書	名前
「ヴァイオリン Violon」	「レッセル Lössel」 ¹⁵¹
	ウーリッヒ、アウグスティン Uhlig, Augustin
	タッシュエンベルク、クリスティアン・ヴィルヘルム Taschenberg, Christian Wilhelm
	ティーデレ、ヨーゼフ Tiederle, Joseph
	ビオット、フランチェスコ Biotto, Francesco
	フィックラー、ヨーハン・ゲオルク Fickler, Johann Georg
	クリーガー、ヨーハン・ゴットリープ Krieger, Johann Gottlieb
「ヴィオラ Violetto」	カイザー、ヨーハン・ザミュエル Kayser, Johann Samuel
「コントラバス Contrabasso」	カリファーノ、アルカンジェロ Califano, Arcangelo
「チェロ Violoncello」	フーコー、ヨーハン・ヴィルヘルム Hucho, Johann Wilhelm
「オーボエ Haubois」	リンケ、ヨーハン・ペーター・カシミール Lincke, Johann Peter Casimir

¹⁵⁰ 10026 Geheimes Kabinett, Loc. 383/5 (Französische Comoedianten und Orchestra), fols. 223r-224r.

¹⁵¹ この人物を特定することはできなかった。

表 2-5 に示した者のうち、少なくともオーボエ奏者ベソツツィとヴァイオリン奏者カラッシはイタリア出身の奏者であり、前者は 1739 年に、後者は 1740 年に、それぞれドレスデン宮廷と雇用契約を結んだ¹⁵²。両者は 1741 年の「宮廷楽団の名簿」に初めて現れている。

各年のこの名簿を俯瞰すると、新任者は、すでにこの楽団に在籍していた者の後に名前が記載されている。しかし 1741 年において、ベソツツィの名前は、オーボエ奏者の項目に記された 5 名のうち、リヒターに次いで二人目に書かれている¹⁵³。またカラッシも、合計 11 名の名前が記載されたヴァイオリン奏者の項目の中で五人目に現れている。このようにベソツツィやカラッシの名前が最初から上位に記載されたことは、彼らが特別な待遇によって招かれたことを示唆している可能性があるだろう。

以上のように、1733 年から 1744 年までの「宮廷楽団の名簿」は、先代の楽師長ヴォリュミエの時代からドレスデン宮廷に在籍した奏者のうち 14 名が除籍されたことを示しており、イタリア出身のオーボエ奏者ベソツツィやヴァイオリン奏者カラッシが新たにこの楽団に加入していた。1733 年にザクセン選帝侯に即位したフリードリヒ・アウグスト 2 世は、侯子であった頃ヴェネツィアに滞在し、オペラに傾倒した。そして彼の治世に、オペラはカーニバルにおける主要な演目になっていった。ヴォリュミエの下でフランスの奏法を学んだ奏者の退団とイタリア人奏者の入団に基づくと、フリードリヒ・アウグスト 2 世がザクセン選帝侯に即位して以降、彼の配下にあったドレスデン宮廷楽団は、オペラなどのイタリア音楽を好んだこの君主の趣味に従って変化したといえよう。

¹⁵² Paola Pozzi, “Il concerto strumentale italiano alla Corte di Dresda durante la prima metà del settecento,” in *Intorno a Locatelli: Studi in occasione del tricentenario della nascita di Pietro Antonio Locatelli—1695-1764*, edited by Albert Dunning (Lucca: Libreria Musicale Italiana, 1995), vol. 2, pp. 980 and 981; see also Alina Żórawska-Witkowska, “Federico Cristiano in Italia: Esperienze musicali di un principe reale polacco,” *Musica e storia* 4 (1996): 277-323.

¹⁵³ *Königlich-Polnischer und Churfürstlich-Sächsischer Hoff- und Staats-Calender* (Leipzig, 1741; D-Dl, Hist.Sax.I.0179), p. 15.

第3項 1745年から1755年

1745年から1755年までの20年間の「宮廷楽団の名簿」においても、ヴォリュミエの時代からドレスデン宮廷に所属した奏者の名前は抹消されている。下の表 2-7 は、114 頁から始まる表 2-3 に基づいて、この名簿から消された奏者を示している。この表に示した年は、各人の名前が記載された最後の年となっている。

表 2-7 「宮廷楽団の名簿」から名前が抹消された奏者（1745年から1755年）

	奏者の名前（楽器の種類）
1745年	クヴァッツ、フリードリヒ・エルンスト (Vla) Quatz, Friedrich Ernst
	ザイフェルト、マルティン (Ob) Seyfert, Martin
1746年	リヒター、ヨーハン・クリスティアン (Ob) Richter, Johann Christian
1747年	ル・グロ、シモン (VI) Le Gros, Simon
1748年	ビュッフアルダン、ピエール＝ガブリエル (Fl) Buffardin, Pierre-Gabriel
1750年	カイザー、ヨーハン・ザミュエル (Cb) Kayser, Johann Samuel
	クヴァッツ、カスパール・エルンスト (Fg) Quatz, Caspar Ernst
1751年	ヴァイス、ジルピウス・レーオポルト (Lut) Weiss, Silvius Leopold
	ヘーベンシュトライト、パンタレオン (Pan) Hebenstreit, Pantaleon
1752年	パウアー、ヨーゼフ・マリア (VI) Bauer, Joseph Maria
	ベーメ、ヨーハン・ゴットフリート (Fg) Böhme, Johann Gottfried
1753年	ライン、カール・ヨーゼフ (VI) Rhein, Carl Joseph
1755年	フリツェ、ザミュエル (Vdg) Fritzsche, Samuel
	ライヒェル、ヨーハン・クリストフ (Vla) Reichel, Johann Christoph
	ラッハマン、ゴットリープ・ベンヤミン (Ob) Lachmann, Gottlieb Benjamin
	リストーリ、ジョヴァンニ・アルベルト (Org) Ristori, Giovanni Alberto
	ロッシ、アゴスティノー・アントーニオ・デ (Vlc) Rossi, Agostino Antonio de

表 2-7に見られる 17 名のうち半数以上の 11 名は、ヴォリュミエの時代からドレスデン宮廷に所属した。彼らは、1745 年のヴィオラ奏者クヴァッツ、1750 年のコントラバス奏者カイザー、1752 年のヴァイオリン奏者バウアー、1755 年のヴィオラ・ダ・ガンバ奏者フリッチェ、オーボエ奏者ラッハマン、オルガン奏者リストーリ以外の者である。さらに、この 11 名の中には、ピゼンデルの同僚 7 名のうち、先述のブロッホヴィッツとリヒターを除く、残りの 5 名が含まれている。ヴァイオリン奏者ライン、チェロ奏者ロッシ、フルート奏者ビュッフアルダン、ファゴット奏者ベーメ、リュート奏者ヴァイスである。

彼らのうちフルート奏者ビュッフアルダンは、1748 年を最後に名簿から名前が見られなくなる。ドレスデン宮廷の「イタリア人歌手、オーケストラ、踊り手及びその他のオペラに関わる者」と題された資料には、彼の名前が記された退職願が綴じられており、この書類は 1748 年 3 月 9 日付となっている¹⁵⁴。1749 年から 1756 年までの『宮廷年鑑』において、彼の名前は「退職者 Pensionnaires」の見出しの下に記載されている。これらのことから、ビュッフアルダンは 1748 年にドレスデン宮廷楽団を退団したことが分かる。またリュート奏者ヴァイスは、1750 年に亡くなった。

ファゴット奏者ベーメの名前が最後に現れる「宮廷楽団の名簿」は 1752 年のものであり、先に挙げた「イタリア人歌手、オーケストラ、踊り手、その他のオペラに関わる者」の 1752 年 1 月 29 日の記録には、「亡くなった音楽家ベーメ der verstorbene Musici Böhme」の年俸 380 ターラーが 200 ターラーと 100 ターラー、80 ターラーに分割され、200 ターラーは「新たに雇われたオーボエ奏者ヤーコブ・フリッチェ der neuangenommene Hautboist Jacob Frizsche」の年俸として、100 ターラーと 80 ターラーはそれぞれ「音楽家フランツ・ニコラウス・フント der Musico Franz Nicolaus Hunt」と「音楽家カール・クリスティアン・リッター der Musico Karl Christian Ritter」に「加給金として als

¹⁵⁴ D-DI, 10026 Geheimes Kabinett Loc. 907/5 (Die italiänischen Sanger und Sangerinnen, das Orchestre, die Tanzer und Tanzerinnen, auch andre zu der Ope[r] gehorige Personen, betr. ao 1740), fol. 178r.

Zulagen」支払われることが記されている¹⁵⁵。これらのことに基づくと、ベーメは 1751 年から 1752 年初頭の間に亡くなったと推定できるだろう。

同じ「イタリア人歌手、オーケストラ、踊り手、その他のオペラに関わる者」の 1754 年 6 月 6 日の記録には、「亡くなった音楽家 die verstorbene Musicis」の一人としてヴァイオリン奏者ラインの名前が挙げられている¹⁵⁶。先の表 2-7 から分かるように、彼の名前は、前年の 1753 年を最後に名簿から見られなくなる。よってラインは、1753 年から 1754 年の間に亡くなったと考えられよう。

チェロ奏者ロッシは、1756 年の名簿に名前が記されていない。先述の「イタリア人歌手、オーケストラ、踊り手、その他のオペラに関わる者」の第 296 葉の表には、音楽家「クリストフ・シュテファン・ショイヒャルト Christoph Stephan Scheuchardt」が 1755 年 3 月に亡くなったことが記されており、同じ第 296 葉の表には、チェロ奏者ロッシが「同年 6 月に im Monath Juny. a. c.」亡くなったことも記録されている。

一方、1745 年から 1755 年までの「宮廷楽団の名簿」には、合計 15 名の名前が新たに記載されている。下の表 2-8 は、114 頁から始まる表 2-3 に基づいて彼らの名前を示している。

表 2-8 「宮廷楽団の名簿」に新たに記載された奏者（1745 年から 1755 年）

	名前（楽器の種類）
1745 年	アーベル、カール・フリードリヒ（Vdg） Abel, Carl Friedrich
	ヨーゼフ・ツィーカ（Vlc） Joseph Zyka
1746 年	アウグスト、ペーター（Org） August, Peter
	ヴォプスト、クリスティアン（Ob） Wopst, Christian
	ピチネッティ、フェリーチェ（Vl） Picinetti, Felice
	フーバー、ヨーハン・ニコラウス（Vla） Huber, Johann Nicolaus

¹⁵⁵ D-DI, 10026 Geheimes Kabinett Loc. 907/5, fol. 224r.

¹⁵⁶ D-DI, 10026 Geheimes Kabinett Loc. 907/5, fol. 268r.

	名前 (楽器の種類)
	フント (息子)、フランチェスコ (VI) Hunt Francesco
	マットシュテット、クリスティアン・フリードリヒ (Fg) Mattstädt, Christian Friedrich
1748 年	ハウデク、カール (Hr) Haudeck, Carl
1750 年	ネルダ、ヨーハン・ゲオルク (VI) Neruda, Johann Georg
1751 年	バウアー、ヨーゼフ・マリア (VI) Bauer, Joseph Maria
	リッター、カール・クリスティアン (Fg) Ritter, Carl Christian
1753 年	ゲーリック、ゴットフリート・フリードリヒ (VI) Göricke, Gottfried Friedrich
	フリツェ、ザミュエル (Vdg) Fritzsche, Samuel
	ホルン、ヨーハン・カスパール (Cb) Horn, Johann Caspar

この表において、1746 年以外の年に見られる新任者は 3 名以下であるのに対し、この年の入団は、著しく多い 6 名に及んでいる。彼らの名前は、先に参照した「イタリア人歌手、オーケストラ、踊り手及びその他のオペラに関わる者」の 1745 年 4 月 21 日の記録に現れている。そこには、ヴァイオリン奏者フントとピチネッティ、ヴィオラ奏者フーバー、オーボエ奏者ヴォプスト、鍵盤楽器奏者アウグストを新たに雇用したことが明記されており、ファゴット奏者マットシュテットに「加給金 als Zulage」として 50 ターラーを与えることも記されている¹⁵⁷。

ドレスデン宮廷は、1740 年代半ば以降、著名な舞台演出家ビビエーナやセルバンドーニを雇い、彼らとドレスデン宮廷楽団によって 1753 年に初演された《スレイマン》や 1755 年に初演された《アエティウス》は、いずれも大変な好評を博した。しかし本項において確認したように、ヴォリュミエの時代からこの楽団に在籍した奏者のうち 11 名は、1745 年から 1755 年までの約 20 年間の「宮廷楽団の名簿」において名前が抹消されていた。このことから、成功を収めた《スレイマン》や《アエティウス》の初演に携わった奏者の中に、ピゼンデルが楽師長になる以前から彼と共に長年演奏してきた者は、ほとんど見られ

¹⁵⁷ D-Dl, 10026 Geheimes Kabinett Loc. 907/5, fols. 95r-98r.

なかったといえる。その上、ピゼンデルとほぼ同じ年齢であった同僚 7 名全員は、1744 年から 1755 年までの間に死亡またはドレスデン宮廷楽団を退団しており、ピゼンデルも 1755 年に亡くなった。

他方 1745 年から 1755 年までの「宮廷楽団の名簿」は、新たに合計 15 名の奏者がこの楽団に加入したことを示していた。しかし、前項において取り上げた 1733 年から 1744 年までのこの名簿において、新たに名前が記載された奏者は 26 名に達したことを踏まえると、この人数は明らかに少ない。これらのことに基づくと、1740 年代半ばからドレスデン宮廷には新しい動きが見られたが、宮廷楽団は以前のように多くの奏者を獲得しなくなったことが分かる。

第4項 1731 年と 1755 年の比較

ここまでに提示した表 2-4、表 2-5、表 2-7、表 2-8 に基づくと、1733 年から 1755 年までの約 20 年に渡る「宮廷楽団の名簿」においては、37 名の名前が抹消され、41 名が新たに記載されるようになったことが分かる。よって、ピゼンデルが楽師長を務めていた間に、彼の配下にあったドレスデン宮廷楽団の奏者は大きく入れ替わったといえよう。

このことを確認するために、本節では最後に 1731 年と 1755 年の「宮廷楽団の名簿」に記載された奏者を比較する。表 2-9 は表 2-3 に基づいており、1755 年に現れる奏者のうち楽師長ピゼンデル以外を楽器の種類ごとに示し、1731 年に見られた者を「○」印によって表している。この表から明らかなように、1731 年に名前が記載されていた 32 名のうち、1755 年に現れる者は 5 分の 1 程度の僅か 7 名まで減少している。

表 2-9 1755 年の「宮廷楽団の名簿」に記載された奏者

楽器の種類と奏者の名前	1731 年の「宮廷楽団の名簿」に現れた者
VI	
ウーリッヒ、アウグスティン Uhlig, Augustin	
カッタネオ、フランチェスコ・マリーア Cattaneo, Francesco Maria	
カラッシ、ロレンツォ Carassi, Lorenzo	
ゲーリック、ゴットフリート・フリードリヒ Göricke, Gottfried Friedrich	
タッシュエンベルク、クリスティアン・ヴィルヘルム Taschenberg, Christian Wilhelm	
ツイッヒ、フランツ・ゼラフ Zich, Franz Seraph	
ティーデレ、ヨーゼフ Tiederle, Joseph	
ネルダ、ヨーハン・ゲオルク Neruda, Johann Georg	
バウアー、ヨーゼフ・マリア Bauer, Joseph Maria	
ハンケ、ヨーハン・フランツ Hantke, Johann Franz	
ピチネッティ、フェリーチェ Picinetti, Felice	
フィックラー、ヨーハン・ゲオルク Fickler, Johann Georg	
フランチーニ、フランソワ Francini, François	
フント（息子）、フランチェスコ Hunt Francesco	
レーナイス、カール・マティアス Lehneis, Carl Matthias	○
Vla	
アーダム、ヨーハン Adam, Johann	
モルゲンシュテルン、ヨーハン・ゴットリーブ Morgenstern, Johann Gottlieb	○
フーバー、ヨーハン・ニコラウス Huber, Johann Nicolaus	
ライヒェル、ヨーハン・クリストフ Reichel, Johann Christoph	○
Vlc	
カリファーノ、アルカンジェロ Califano, Arcangelo	
ツィーカ、ヨーゼフ Zyka, Joseph	

楽器の種類と奏者の名前	1731年の「宮 廷楽団の名簿」 に現れた者
ピチネッティ、ジョヴァンニ・マリーア・フェリーチェ Picinetti, Giovanni Maria Felice	○
ロッシ、アゴ스티ーノ・アントーニオ・デ Rossi, Agostino Antonio de	○
Cb	
ケストナー、ゲオルゲ・フリードリヒ Kästner, George Friedrich	○
ホルン、ヨーハン・カスパー Horn, Johann Caspar	
Vdg	
アーベル、カール・フリードリヒ Abel, Carl Friedrich	
フリッツェ、ザミュエル Fritzsche, Samuel	
Fl	
ゲッツェル、フランツ・ヨーゼフ Götzel, Franz Joseph	
デヴェルデク、ヴェンツェル・ゴットフリート Dewerdek, Wenzel Gottfried	
Ob	
ヴォプスト、クリスティアン Wopst, Christian	
ツインケ、ヨーハン・フランツ Zincke, Johann Franz	
フーコー、ヨーハン・ヴィルヘルム Hucho, Johann Wilhelm	
ベソッツィ、アントニオ Besozzi, Antonio	
ラッハマン、ゴットリープ・ベンヤミン Lachmann, Gottlieb Benjamin	
Fg	
マツシュテット、クリスティアン・フリードリヒ Mattstädt, Christian Friedrich	
モラシュ、カール Morasch, Carl	
リッター、カール・クリスティアン Ritter, Carl Christian	
リンケ、ヨーハン・ペーター・カシミール Lincke, Johann Peter Casimir	
Hr	
クネヒテル、ヨーハン・ゲオルク Knechtel, Johann Georg	
ハウデク、カール Haudeck, Carl	
ハンペル、アントン・ヨーゼフ Hampel, Anton Joseph	

	1731年の「宮廷楽団の名簿」に現れた者
楽器の種類と奏者の名前	
Org/Cem	
アウグスト、ペーター August, Peter	
ハッセ、ヨーハン・アードルフ Hasse, Johann Adolf	

第3節 フベルトゥスブルクに向かったドレスデン宮廷楽団の奏者の特定

前節では、ピゼンデルの時代のドレスデン宮廷楽団において、奏者が徐々に入れ替わり、1755年までに彼らの大半は新たに雇用された者になっていたことを明らかにした。この変化を踏まえ、本節では、先代のヴォリュミエの時代からこの楽団に在籍した古参の奏者と、ピゼンデルが楽師長に就任した後に雇用された新任の奏者の中から、誰がフベルトゥスブルクへの出張に選ばれたかを特定する。フベルトゥスブルクへの秋旅行に関する資料に基づくと、この旅行が行われた年は、1736年、1737年、1739年、1741年、1742年、1743年、1747年、1749年、1751年、1753年、1755年となっている。秋旅行は、1736年から1743年までほぼ毎年開催され、1747年から1755年にかけては第1節において指摘したように、2年に1度の割合で行われた。一方1743年から1747年までの4年間、この旅行は行われていない。このことから、秋旅行が行われた時期は、1736年から1743年までと、1747年から1755年までの二つに大別できるだろう。従って本節では、この区分に基づいて別邸に派遣された奏者を明らかにする。

以下では、フベルトゥスブルクへの秋旅行に携わった音楽家を記録した名簿の情報を確認する。その上で、それぞれの名簿から別邸に向かった奏者を特定する。ピゼンデルは1731年に楽師長に就任し、この年の「宮廷楽団の名簿」に記載された奏者の大半は、ヴォリュミエの時代からドレスデン宮廷に属していた。このことから、1731年の「宮廷楽団の名簿」に名前が記載されているかを基準にすることによって、別邸に向かった奏者の中から古参

の者と新任の者を特定する。その上で、1736年から1743年までの時期と1747年から1755年までの時期それぞれにおいて各人の出張回数を算出し、頻繁にこの別邸に派遣された奏者を特定する。

第1項 対象とする資料の確認

各年の秋旅行に関する資料の中には、ピゼンデルの名前が記された「オーケストラ」などの題を付された項目が見られる。本項では、これらの項目の内容を確認する。また項目の中には題が長いものも含まれるため、以下では、その名称を規定している。

1736年の「オーケストラの項目」

「1736年のドレスデンからフベルトゥスブルクへの王の旅行」には、「会計伝票」の見出しがあり、そこには1736年9月にドレスデンからフベルトゥスブルクに派遣された人々の人名が記録されている¹⁵⁸。この見出しの下には、「オーケストラに関して **Zum Orchestre**」と題された項目が見られる。そこに列挙された人名の大半は姓のみであり、名字や肩書は記載されていない。本章ではこの項目を、「1736年の「オーケストラの項目」と呼ぶ。

1737年の「オーケストラの項目」

「1737年の王陛下と王妃並びに王子クサーヴァーと王女アマーリア及びマリア・アンナのフベルトゥスブルクへの秋旅行」の資料においても、先の1736年と同様に「会計伝票」の見出しが見られ、ドレスデンからフベルトゥスブルクに派遣された人物の名前が列挙されている¹⁵⁹。この見出しの下には、「オーケストラ **Orgester**」の項目があり、そこ

¹⁵⁸ “Fourier Zeddel”, D-Dla, 10006 Oberhofmarschallamt I, Nr. 49a (Königl: Reise von Dreßden nach Hubertusburg 1736. Vol: I), fols. 249r-250r.

¹⁵⁹ “Fourier Zeddel”, D-Dla, 10006 Oberhofmarschallamt I, Nr. 53a (Herbstreise beider Königlicher Majestäten und des Kurprinzen sowie des Prinzen Xaver und der Prinzessinnen Amalia und Maria Anna nach Hubertusburg 1737), fols. 101r-104v.

に見られる人物は姓のみが記されている。また「楽師長 **Concertmeister**」として記載されたピゼンデル以外の人物に、肩書は記されていない。本章では、この項目を 1737 年の「オーケストラの項目」と呼ぶ。

1739 年の「楽団の項目」

「1739 年のポーランド王陛下兼ザクセン選帝侯フリードリッヒ・アウグスト 3 世 [原文のまま] 及び女王陛下のドレスデンからフベルトゥスブルクへの旅行」と題された資料の中には、「ドレスデンからムツェンへの王の宮廷楽団の会計伝票」の見出しが見られる¹⁶⁰。その下には、「オーボエ **Hautb:**」などの項目ごとに、人物の姓が記されている。本章では、この項目を 1739 年の「楽団の項目」と呼ぶ。

1741 年の「明細」

「1741 年のドレスデンからフベルトゥスブルクへの王の秋旅行」の資料の中には、「フベルトゥスブルクに派遣された人々の明細」と題された項目が見られる¹⁶¹。そこには、人物の姓のみが列挙されており、彼らの名や肩書は記載されていない。本章では、この項目を 1741 年の「明細」と呼ぶ。

1742 年の「オーケストラの項目」

「1742 年のドレスデンからフベルトゥスブルクへの王の旅行」の中には、「1742 年 10 月ドレスデンからムツェンへの王のオペラ関係者とオーケストラの会計伝票」の見出し

¹⁶⁰ “Fourier Zeddel der Königl: Capelle von Dresden nach Mutzschen”, D-Dla, 10006 Oberhofmarschallamt I, Nr. 66b (Hr: Königl: Majt: von Pohlen und Churfürstl: Durch: Zu Sachßen Herrns Friderici Augusti III. und Dero Frau gemahlin Kö[ni]gl: Majt:Herbst=Reise, von Dreßden nach Hubertusburg 1739. Vol: II), fol. 139r-v.

¹⁶¹ “Specification dererjenigen Personen, welche nach St: Hubertusburg beordert worden”, D-Dla, 10006 Oberhofmarschallamt I, Nr. 83a (Königl. Herbst=Reise von Dreßden nach Hubertsburg Anno 1741), fols. 227r-228r.

が見られる¹⁶²。その下には「オーケストラ Orchester」の項目があり、人物の姓が記録されているが、その大半には肩書が書かれていない。本章では、この項目を1742年の「オーケストラの項目」と呼ぶ。

1743年の「オーケストラの項目」

「1743年のフベルトゥスブルクへの秋旅行と狩りの宿泊」と題された資料の中には、「ムッチェンにおける王のオペラ関係者、オーケストラの宿泊」の項目が見られる¹⁶³。そこには、人物の姓のみが列挙されており、一部の人物を除き肩書は書かれていない。本章では、この項目を1743年の「オーケストラの項目」と呼ぶ。

1747年の「オーケストラの項目」

「1747年8月、9月、10月、11月のフベルトゥスブルクへの秋旅行と宮廷の宿泊」の資料の中には、「1747年10月ドレスデンからフベルトゥスブルクとムッチェンへの王のオペラ関係者とオーケストラ、踊り手の会計伝票」の見出しが見られ、この見出しの下には「オーケストラ Orchestre」の項目がある¹⁶⁴。そこには人物の姓が列挙されており、その多くに肩書は付されていない。本章では、この項目を1747年の「オーケストラの項目」と呼ぶ。

¹⁶² “Fourier Zeddel der Königl. Operisten und Orchester von Dreßden nach Muzschen im Octobr: 1742”, D-Dla, 10006 Oberhofmarschallamt I, Nr. 91a (Königl. Herbst: Reise von Dreßden nach Hubertusburg. 1742), fols. 183r-184v.

¹⁶³ “Ein Quartirung der Königl Operisten u Orgester in der Stadt Mutzschen [...]”, D-Dla, 10006 Oberhofmarschallamt I, Nr. 97 (Herbst Jagdt=Reise und Jagdt=Lager zur Hubertusburg 1743. von 30. Aug. bis 28. Nov: [Vol.] 1), fol. 134r-v.

¹⁶⁴ “Fourier Zeddel der Königl Operisten Orchestre und Tänzern von Dresden nach Hubertsburg”, D-Dla, 10006 Oberhofmarschallamt I, Nr. 118 (Königl: Reise von Dreßden nach Hubertsburg und Hof Lager daselbst, Mens. Aug. Sept. Oct. et Nov. 1747. Vol. 1), fols. 218r-219r.

1749年の「オーケストラの項目」

「1749年8月、9月、10月、11月のフベルトゥスブルクへの秋旅行と宮廷の宿泊」の題を持つ資料の中には「会計伝票」の見出しが見られ、その中には「オーケストラ Orghester」の項目がある¹⁶⁵。この項目においては楽器名が肩書となっており、その横に人物の姓が記載されている。本章では、この項目を1749年の「オーケストラの項目」と呼ぶ。

1751年の「オーケストラの項目」

「1751年8月、9月、10月、11月のフベルトゥスブルクへの秋旅行と宮廷の宿泊」の資料の中には、フベルトゥスブルクに派遣された「オーケストラ」の項目が見られ、人物の姓のみが列挙されている¹⁶⁶。本章では、この項目を1751年の「オーケストラの項目」と呼ぶ。

1753年の「オーケストラの項目」

「1753年のフベルトゥスブルクへの王の秋旅行」の中には、「1753年10月3日フベルトゥスブルクへの出立」の見出しが見られ、その下には「オーケストラ Orchestre」の項目がある¹⁶⁷。そこには人物の姓が記録されている。本章では、この項目を1753年の「オーケストラの項目」と呼ぶ。

¹⁶⁵ “Fourier Zeddel”, D-Dla, 10006 Oberhofmarschallamt I, Nr. 124 (Königl: Reise von Dreßden nach Hubertsburg und Hof=Lager daselbst Mens. August: Sept: Oct: et Novembr 1749), fol. 228r-v.

¹⁶⁶ “Orghester”, D-Dla, 10006 Oberhofmarschallamt I, Nr. 131 (Königl: Reise von Dreßden nach Hubertsburg und Hof=Lager daselbst Mens. Aug. Sept. Octobr. Nov. 1751), fol. 232r-v.

¹⁶⁷ “Fortkommen nach Hubertsburg den 3. Octobre. 1753”, D-Dla, 10006 Oberhofmarschallamt I, Nr. 142 (Königl: Herbst=Reise nach Hubertsburg. 1753. [Vol.] 1), fols. 242r-243r.

1755 年の「オーケストラの項目」

「1755 年のフベルトゥスブルクへの王の秋旅行」の資料の中には、「フベルトゥスブルクへの会計目録」の見出しがあり、そこには「オーケストラ Orchestre」の項目が見られる¹⁶⁸。そして「ヴァイオリン奏者 Violinisten」などの肩書ごとに、人物の姓が記されている。本章では、この項目を 1755 年の「オーケストラの項目」と呼ぶ。

第2項 1736 年の「オーケストラの項目」

1736 年の「オーケストラの項目」には、楽師長ピゼンデルの他に合計 30 名の人名が記されている。彼らの名前を 114 頁から始まる表 2-3 と比較した場合、19 名はドレスデン宮廷楽団に所属した奏者と姓が一致している。

残りの 11 名のうち、「ヴェントゥリーニ Venturini」と「ピンディ Pindi」、「ピッコリーノ Piccolino」、「コージモ Cosimo」の 4 名は、「オーケストラ」の項目において「歌手 Sanger」の肩書が付されており、「カッタネオ Cattaneo」は「装飾家 Decorateur」、「グレープナー Grabner [sic]」は「オルガン職人 der Orgelmacher」、「ヴェルナー Werner」は「楽器世話係 der Instrument Diener」、「クローニ Croni」と「カステル Castel」は「画家 Mahler」となっている。さらに「パッラヴィチーニ Pallavicini」と「アンドレ Andre」は、それぞれ詩人ステファノー・パッラヴィチーニとフランス歌曲作曲家ルイ・アンドレであったと考えられる（111 頁の表 2-2 参照）。

以上のことから、1736 年の「オーケストラの項目」に記された奏者は、表 2-3 に示した人物と姓が一致した先の 19 名になる。表 2-10 は、彼らの名前を彼らが演奏した楽器の種類ごとに示している。また 1731 年の「宮廷楽団の名簿」に見られる者を、「○」印によって示している。

¹⁶⁸ “Fourier Listen nach Hubertsburg”, D-Dla, 10006 Oberhofmarschallamt I, Nr. 150 (Konigl: Herbst=Reise nach Hubertsburg 1755. Vol. 1), fols. 225r-226r.

表 2-10 1736 年の「オーケストラの項目」に記載された奏者

楽器の種類と奏者の名前	1731 年の「宮廷楽団の名簿」に現れた者
Vl	
ウーリッヒ、アウグスティン Uhlig, Augustin	
ティーデレ、ヨーゼフ Tiederle, Joseph	
ツイッヒ、フランツ・ゼラフ Zich, Franz Seraph	
フィックラー、ヨーハン・ゲオルク Fickler, Johann Georg	
レーナイス、カール・マティアス Lehneis, Carl Matthias	○
Vla	
アーダム、ヨーハン Adam, Johann	○
モルゲンシュテルン、ヨーハン・ゴットリーブ Morgenstern, Johann Gottlieb	
Vlc	
オロンデル、ジャン・バティスト・ジョゼフ・デュ Haulondel, Jean Baptiste Joseph Du	○
ロッシ、アゴスティーノ・アントーニオ・デ Rossi, Agostino Antonio de	○
Cb	
ケストナー、ゲオルゲ・フリードリヒ Kästner, George Friedrich	○
Fl	
クヴァンツ、ヨーハン・ヨアヒム Quantz, Johann Joachim	○
ビュッフアルダン、ピエール＝ガブリエル Buffardin, Pierre-Gabriel	○
Ob	
フーコー、ヨーハン・ヴィルヘルム Hucho, Johann Wilhelm	
リヒター、ヨーハン・クリスティアン Richter, Johann Christian	○
Fg	
ベーメ、ヨーハン・ゴットフリート Böhme, Johann Gottfried	○
モラシュ、カール Morasch, Carl	
Hr	
クネヒテル、ヨーハン・ゲオルク Knechtel, Johann Georg	
シンドラー、アンドレアス Schindler, Andreas	○
Org	
リストーリ、ジョヴァンニ・アルベルト Ristori, Giovanni Alberto	

この表において「○」印によって示したように、合計 19 名のうち約半数にあたる 10 名は、ピゼンデルが楽師長に就任した年であった 1731 年の「宮廷楽団の名簿」に、名前が記されていた。また前節において指摘したように、先代の楽師長ヴォリュミエの時代において乱れのない合奏に必要と考えられた奏者のうち、ピゼンデルと年齢が近い 7 名は、1731 年のこの名簿に現れていた。表 2-10 には、彼らのうちチェロ奏者ロッシ、フルート奏者ビュッフアルダン、オーボエ奏者リヒター、ファゴット奏者ベーメが見られる。

一方、表 2-10 において「○」印が付されていない者は、ピゼンデルが楽師長となった翌年以降、すなわち 1732 年より後に、「宮廷楽団の名簿」に名前が記載されるようになった奏者たちである。彼らは合計 9 名に上り、その中には、1731 年 11 月に雇用されたヴァイオリン奏者ウーリッヒ、ティーデレ、フィックラー、オーボエ奏者フーコーが見られる。また、ファゴット奏者モラシュとホルン奏者クネヒテルは 1735 年に、ヴィオラ奏者アーダムは 1737 年に、初めて「宮廷楽団の名簿」に現れる（128 頁の表 2-5 参照）。このように、1736 年に別邸に行った奏者の中には、この年の「宮廷楽団の名簿」に名前が見られない者が含まれている。

表 2-10 に示した奏者は、フベルトゥスブルクに向かう際に馬車を利用した。「1736 年のドレスデンからフベルトゥスブルクへの王の旅行」には、「オペラへの出立」と題された項目があり、音楽家の名前が乗り合わせた馬車ごとに記載されている¹⁶⁹。この項目に基づく、音楽家は四人で 1 台の馬車を利用しており、チェロ奏者ロッシ、フルート奏者のビュッフアルダン及びクヴァンツは、楽師長ピゼンデルの馬車に同乗している。彼らのうちロッシとビュッフアルダンは、約 20 年の間ピゼンデルと共にドレスデン宮廷に所属していた。またクヴァンツは、自伝において 1718 年を回想した際に、「ピゼンデル氏と知り合うという幸福を得て、その面識は徐々に双方から親しい友情に変わった」と記してい

¹⁶⁹ “Fortkommen zur Opera”, D-Dla, 10006 Oberhofmarschallamt I, Nr. 49a (Königl: Reise von Dresden nach Hubertusburg 1736. Vol: I), fols. 249v-250r.

る¹⁷⁰。このことからクヴァンツは、ピゼンデルが信頼した奏者の一人であったといえるだろう。

以上のように、1736年の「オーケストラの項目」において、1731年の名簿に現れていた奏者は半数近くを占めていた。この名簿に記載された奏者の大半は、ヴォリュミエの時代からドレスデン宮廷に在籍していたことに基づくと、1736年にフベルトゥスブルクに派遣されたドレスデン宮廷楽団において、奏者の半数程は古参であったといえよう。彼らの中には、ヴォリュミエが楽師長を務めたころから合奏に必要とされたと考えられたピゼンデルの同僚7名のうち、4名が含まれた。

また残りの奏者の中には、この出張が行われた前年の1735年から1737年にかけて、初めて「宮廷楽団の名簿」に名前が記載された者が見られた。そのため、別邸に向かった宮廷楽団の中には、この楽団に所属して非常に日が浅い奏者も含まれたと考えられる。そして楽師長ピゼンデルは、長年共に演奏してきた奏者や、信頼していたと考えられる奏者と共に馬車に乗っていた。

第3項 1737年の「オーケストラの項目」

1737年の「オーケストラの項目」には、楽師長ピゼンデルに加え23名の姓が記されている。114頁から始まる表2-3に基づくと、彼らはドレスデン宮廷楽団に所属した奏者と姓が一致する。下の表2-11は、この23名の奏者を楽器の種類ごとに示している。そして、1731年の「宮廷楽団の名簿」に名前が記載されていた者を「○」によって表している。さらに、1736年にこの別邸に派遣されなかった者には「初めて派遣された者」の列に「○」印を付けている。

¹⁷⁰ Johann Joachim Quantz, "Hrn. Johann Joachim Quanzens Lebenslauf, von ihm selbst entworfen," in Friedrich Wilhelm Marpurg, *Historisch-kritische Beyträge zur Aufnahme der Musik* (Berlin, 1755; reprint ed. Hildesheim: Georg Olms, 1970), vol. 1, pp. 210-211.

表 2-11 1737 年の「オーケストラの項目」に記載された奏者

楽器の種類と奏者の名前	1731 年の「宮廷楽団の名簿」に現れた者	初めて別邸に派遣された者
VI		
ル・グロ、シモン Le Gros, Simon	○	○
ウーリッヒ、アウグスティン Uhlig, Augustin		
タッシュェンベルク、クリスティアン・ヴィルヘルム Taschenberg, Christian Wilhelm		○
ティーデレ、ヨーゼフ Tiederle, Joseph		
ハンケ、ヨーハン・フランツ Hantke, Johann Franz		○
フィックラー、ヨーハン・ゲオルク Fickler, Johann Georg		
レーナイス、カール・マティアス Lehneis, Carl Matthias	○	
Vla		
アーダム、ヨーハン Adam, Johann		
モルゲンシュテルン、ヨーハン・ゴットリーブ Morgenstern, Johann Gottlieb	○	
Vlc		
ピチネッティ、ジョヴァンニ・マリーア・フェリーチェ Picinetti, Giovanni Maria Felice	○	○
ロッシ、アゴスティーノ・アントーニオ・デ Rossi, Agostino Antonio de	○	
Cb		
ケストナー、ゲオルゲ・フリードリヒ Kästner, George Friedrich	○	
Fl		
クヴァンツ、ヨーハン・ヨアヒム Quantz, Johann Joachim	○	
ブロッホヴィッツ、ヨーハン・マルティン Blochwitz, Johann Martin	○	○
Ob		
ザイフェルト、マルティン Seyfert, Martin	○	○
フーコー、ヨーハン・ヴィルヘルム Hucho, Johann Wilhelm		
リヒター、ヨーハン・クリスティアン Richter, Johann Christian	○	
Fg		
クヴァッツ、フリードリヒ・エルンスト Quatz, Friedrich Ernst	○	○
ベーメ、ヨーハン・ゴットフリート Böhme, Johann Gottfried	○	
Hr		
クネヒテル、ヨーハン・ゲオルク Knechtel, Johann Georg		

楽器の種類と奏者の名前	1731 年 の「宮廷楽団の名簿」に現れた者	初めて別邸に派遣された者
ハンペル、アントン・ヨーゼフ Hampel, Anton Joseph		○
Lut		
ヴァイス、ジルビウス・レーオポルト Weiss, Silvius Leopold	○	○
Org		
リストーリ、ジョヴァンニ・アルベルト Ristori, Giovanni Alberto		

この表に示した 23 名のうち約半数の 13 名は、1731 年の名簿に名前が記載されている。彼らの中には、1736 年と同様に、ピゼンデルの同僚 7 名のうち複数が含まれている。彼らはチェロ奏者ロッシ、フルート奏者ブロッホヴィッツ、オーボエ奏者リヒター、ファゴット奏者ベーメ、リュート奏者ヴァイスである。

表 2-11 の「1731 年の『宮廷楽団の名簿』に現れた者」の列において、「○」印が付されていない奏者は 10 名であり、彼らのうちヴァイオリンのハンケとタッシェンベルク、ホルンのハンペルは、初めて別邸に派遣されている。この 3 名の中でヴァイオリン奏者ハンケは、この出張が行われた 1737 年の「宮廷楽団の名簿」に新たに名前が記され、ホルン奏者ハンペルは、翌年の 1738 年にこの名簿に現れるようになる（128 頁の表 2-5 参照）。このことから、ハンケやハンペルは、宮廷楽団に所属した直後に、別邸に派遣された可能性を指摘できよう。

第4項 1739 年の「楽団の項目」

1739 年の「楽団の項目」においては、見出しごとに、ピゼンデルと合計 19 名の人物の姓が記載されている。この 19 名のうちの 5 名は、「ソプラノ」をはじめとする歌手の見出しの下に名前が挙がっており、彼らの姓は 114 頁から始まる表 2-3 に示したドレスデン宮廷楽団の奏者と異なる。一方、「楽団の項目」に現れる残りの 14 名のうち 13 名は、楽器の種類を示した項目に記載されており、彼らの姓は表 2-3 に示したドレスデン宮廷楽団の

奏者と一致している。さらに「ゼレンカ Zelenka」は「作曲家 Composit」となっているが、彼は 1732 年までの「宮廷楽団の名簿」にコントラバス奏者として記録されていた。

これらのことから、1739 年の「楽団の項目」に現れるドレスデン宮廷楽団の奏者は先の 13 名であり、ゼレンカも合奏に携わった可能性がある。表 2-12 は、彼らの名前を楽器の種類ごとに示している。そして、1731 年の「宮廷楽団の名簿」に名前を記載された者と、初めてフベルトゥスブルクに派遣された者を、それぞれ「○」印によって表している。

表 2-12 1739 年の「楽団の項目」に記載された奏者

楽器の種類と奏者の名前 ¹⁷¹	1731 年の「宮廷楽団の名簿」に現れた者	初めて別邸に派遣された者
VI (「ヴァイオリン Violini」)		
ティーデレ、ヨーゼフ Tiederle, Joseph		
フィックラー、ヨーハン・ゲオルク Fickler, Johann Georg		
レーナイス、カール・マティアス Lehneis, Carl Matthias	○	
Vla (「ヴィオラ Violette」)		
アーダム、ヨーハン Adam, Johann		
モルゲンシュテルン、ヨーハン・ゴットリーブ Morgenstern, Johann Gottlieb	○	
Vlc (「チェロ Violoncello」)		
ロッシ、アゴスティーノ・アントーニオ・デ Rossi, Agostino Antonio de		
Cb (「コントラバス Contra Bass」)		
ケストナー、ゲオルゲ・フリードリヒ Kästner, George Friedrich	○	
ゼレンカ、ヤン・ディースマス ¹⁷² Zelenka, Jan Dismas	○	
Fl (「フルート Fluti」)		
クヴァンツ、ヨーハン・ヨアヒム Quantz, Johann Joachim	○	
ビュッフアルダン、ピエール＝ガブリエル Buffardin, Pierre-Gabriel	○	
Ob (「オーボエ Hautb:」)		
フーコー、ヨーハン・ヴィルヘルム Hucho, Johann Wilhelm		

¹⁷¹ 括弧内は、1739 年の「楽団の項目」に記された見出しを表している。

¹⁷² すでに説明したように、ゼレンカは 1739 年の「楽団の項目」において、「作曲家」の見出しの下に現れていた。

楽器の種類と奏者の名前 ¹⁷¹	1731年の「宮廷楽団の名簿」に現れた者	初めて別邸に派遣された者
リヒター、ヨーハン・クリスティアン Richter, Johann Christian	○	
Fg (「ファゴット Basson」)		
モラシュ、カール Morasch, Carl		○
Org (「小型オルガン奏者 Psidive Zuspierer」)		
ウーリッヒ、アウグスティン Uhlig, Augustin		

この表に示した奏者は合計 14 名に上り、そのうち半数程度の 8 名は 1731 年の名簿に名前が記載されていた。彼らの中には、ピゼンデルの同僚 7 名に含まれた、チェロ奏者ロッシ、フルート奏者ビュッフアルダン、オーボエ奏者リヒターが見られる。

表 2-12 に現れる残りの 6 名は、1732 年以降に「宮廷楽団の名簿」に名前が記されるようになった。彼らのうち初めてフベルトゥスブルクに派遣された奏者はファゴットのモラシュのみであり、彼は 1735 年からこの名簿に宮廷楽団の一員として記されるようになった。

「1739 年のポーランド王陛下兼ザクセン選帝侯フリードリッヒ・アウグスト 3 世及び女王陛下のドレスデンからフベルトゥスブルクへの旅行」には、「宿泊」と題された項目が見られ、フベルトゥスブルクに派遣された奏者の名前が、宿泊場所ごとに記されている¹⁷³。この項目は、フルート奏者クヴァンツとヴァイオリン奏者フィックラーが、楽師長ピゼンデルと同じ場所に泊まったことを示している。クヴァンツは、1736 年の出張においてピゼンデルと同じ馬車に乗った者の一人であった。

¹⁷³ “Einquartirung”, D-Dla, 10006 Oberhofmarschallamt I, Nr. 66b (Hr: Königl: Majt: von Pohlen und Churfürstl: Durch: Zu Sachßen Herrns Friderici Augusti III. und Dero Frau gemahlin Kö[ni]gl: Majt: Herbst=Reise, von Dreßden nach Hubertusburg 1739. Vol: II), fol. 144r.

第5項 1741年の「明細」

1741年の「明細」には、ピゼンデルと合計66名の人物の姓が列挙されている。114頁から始まる表2-3と比較した場合、この66名のうち29名の姓は、ドレスデン宮廷楽団の奏者と一致する。

その他の37名のうち35名は、1741年から1744年までの『宮廷年鑑』において、ドレスデン宮廷楽団の「詩人」、歌手、「オルガン職人」、「宮廷楽団世話係」、ドレスデン宮廷に属するフランス・バレの「踊り手」、「イタリア喜劇の役者」、「劇場に雇われたその他の者」の項目に記載された人物と姓が一致している¹⁷⁴。残りの2名のうち「キルヒナー Kirchner」には「かつら師 der Peruquier」の肩書が付けられている。そして「ハウスヴァルト氏 Mr. Hauswald」は、1742年の秋旅行に関する資料において、「ドイツ人詩人 Le Poet Allemand」の肩書が付されている¹⁷⁵。

以上のことから、1741年の「明細」から抽出されるドレスデン宮廷楽団の奏者は29名になる。表2-13は彼らの名前を楽器の種類ごとに提示し、彼らのうち1731年の「宮廷楽団の名簿」に名前が記載された者と、初めて別邸に向かった者を、それぞれ「○」印によって表している。

表 2-13 1741年の「明細」に記載された奏者

楽器の種類と奏者の名前	1731年の「宮廷楽団の名簿」に現れた者	初めて別邸に派遣された者
VI		
ウーリッヒ、アウグスティン Uhlig, Augustin		

¹⁷⁴ *Königlich-Polnischer und Churfürstlich-Sächsischer Hoff- und Staats-Calender* (Leipzig, 1741; D-Dl, Hist.Sax.I.0179), pp. 14-15; *Königlich-Polnischer und Churfürstlich-Sächsischer Hoff- und Staats-Calender* (Leipzig, 1742), pp. 15-16; *Königlich-Polnischer und Churfürstlich-Sächsischer Hoff- und Staats-Calender* (Leipzig, 1743), pp. 15-16; *Königlich-Polnischer und Churfürstlich-Sächsischer Hoff- und Staats-Calender* (Leipzig, 1744), pp. 16-17.

¹⁷⁵ D-Dla, 10006 Oberhofmarschallamt I, Nr. 91a (Königl. Herbst: Reise von Dreßden nach Hubertusburg. 1742), fol. 206r.

楽器の種類と奏者の名前	1731年の「宮廷楽団の名簿」に現れた者	初めて別邸に派遣された者
カッタネオ、フランチェスコ・マリーア Cattaneo, Francesco Maria		○
カラッシ、ロレンツォ Carassi, Lorenzo		○
タッシュエンベルク、クリスティアン・ヴィルヘルム Taschenberg, Christian Wilhelm		
ツイッヒ、フランツ・ゼラフ Zich, Franz Seraph		
ティーデレ、ヨーゼフ Tiederle, Joseph		
ハンケ、ヨーハン・フランツ Hantke, Johann Franz		
フィックラー、ヨーハン・ゲオルク Fickler, Johann Georg		
レーナイス、カール・マティアス Lehneis, Carl Matthias	○	
Vla		
アーダム、ヨーハン Adam, Johann		
クヴァッツ、フリードリヒ・エルンスト Quatz, Friedrich Ernst		○
モルゲンシュテルン、ヨーハン・ゴットリーブ Morgenstern, Johann Gottlieb	○	
ライヒェル、ヨーハン・クリストフ Reichel, Johann Christoph	○	○
Vlc		
カリファーノ、アルカンジェロ Califano, Arcangelo		
ピチネッティ、ジョヴァンニ・マリーア・フェリーチェ Picinetti, Giovanni Maria Felice	○	○
ロッシ、アゴスティーノ・アントーニオ・デ Rossi, Agostino Antonio de	○	
Cb		
ケストナー、ゲオルゲ・フリードリヒ Kästner, George Friedrich	○	
Fl		
クヴァンツ、ヨーハン・ヨアヒム Quantz, Johann Joachim	○	
ビュッフアルダン、ピエール＝ガブリエル Buffardin, Pierre-Gabriel	○	
Ob		
フーコー、ヨーハン・ヴィルヘルム Hucho, Johann Wilhelm		
ベソッツィ、アントニオ Besozzi, Antonio		○
リヒター、ヨーハン・クリスティアン Richter, Johann Christian	○	
Fg		
クヴァッツ、カスパール・エルンスト Quatz, Caspar Ernst	○	
ベーメ、ヨーハン・ゴットフリート Böhme, Johann Gottfried	○	

楽器の種類と奏者の名前	1731年の「宮廷楽団の名簿」に現れた者	初めて別邸に派遣された者
モラシュ、カール Morasch, Carl		
リンケ、ヨーハン・ペーター・カシミール Lincke, Johann Peter Casimir		○
Hr		
クネヒテル、ヨーハン・ゲオルク Knechtel, Johann Georg		
Lut		
ヴァイス、ジルビウス・レーオポルト Weiss, Silvius Leopold	○	
Org		
リストーリ、ジョヴァンニ・アルベルト Ristori, Giovanni Alberto		

この表に示した 29 名のうち 1731 年の名簿に現れた者は、半数を若干下回る 12 名である。彼らのうち、チェロ奏者ロッシ、フルート奏者ビュッフアルダン、オーボエ奏者リヒター、ファゴット奏者ベーメ、リュート奏者ヴァイスの 5 名は、ピゼンデルの同僚 7 名に含まれていた。

表 2-13 に示した残りの 17 名のうち、フベルトゥスブルクに初めて派遣された者は 5 名であり、彼らの中にはイタリア人奏者が見られる。それは、ヴァイオリン奏者カッタネオとカラッシ、オーボエ奏者ベソッツィである。ヴァイオリン奏者カッタネオは、1735 年の「宮廷楽団の名簿」から名前が記されており、「宮廷ヴァイオリン奏者 Cammer=Violinist」の称号を持っている。ヴァイオリン奏者カラッシとオーボエ奏者ベソッツィは、すでに説明したように、1739 年と 1740 年に相次いでドレスデン宮廷に雇用された。このように、カラッシとベソッツィは新任の奏者であったが、1741 年にはフベルトゥスブルクにおいてオペラを上演する者に選出されている。

「1741 年のドレスデンからフベルトゥスブルクへの王の秋旅行」の中には、さらに「王の慈悲深い命令によりオペラ上演のためフベルトゥスブルクに派遣された人々の明細」が見られる¹⁷⁶。そこに記された人名は、別邸に向かった際に利用した馬車ごとに区切られて

¹⁷⁶ “Specification dererjenigen Personen, welche auf aller gnädigsten Befehl Ihre Königl. Mait. zu representirung derer Opern nach Hubertsburg beordert worden”, D-

いる。この「明細」に基づく、ヴァイオリン奏者フィックラー、フルート奏者クヴァンツ、コントラバス奏者ケストナーは、ピゼンデルの馬車に同乗したと考えられる。フィックラーとクヴァンツは、先の 1739 年の出張において、ピゼンデルと同じ宿泊場所を利用していた。

第6項 1742 年の「オーケストラの項目」

1742 年の「オーケストラの項目」には、ピゼンデルと 35 名の姓が記載されている。この 35 名のうち 31 名は、その姓が 114 頁から始まる表 2-3 に示したドレスデン宮廷楽団の奏者と一致する。残りの 4 名には肩書が書かれおり、それは「写譜家 notiste」、「チェンバロ調律師 Clavier Stimmer」、「宮廷楽団世話係 Capelldiener」となっている。肩書から、この 4 名が宮廷楽団の奏者ではなかったことは明らかであろう。以上のことから、1742 年の「オーケストラの項目」に記されたこの楽団の奏者は 31 名になる。表 2-14 は、彼らの名前を楽器の種類ごとに示している。

表 2-14 1742 年の「オーケストラの項目」に記載された奏者

楽器の種類と奏者の名前	1731 年の「宮廷楽団の名簿」に現れた者	初めて別邸に派遣された者
VI		
ウーリッヒ、アウグスティン Uhlig, Augustin		
カッタネオ、フランチェスコ・マリーア Cattaneo, Francesco Maria		
カラッシ、ロレンツォ Carassi, Lorenzo		
タッシュェンベルク、クリスティアン・ヴィルヘルム Taschenberg, Christian Wilhelm		
ティーデレ、ヨーゼフ Tiederle, Joseph		
ツイッヒ、フランツ・ゼラフ Zich, Franz Seraph		

Dla, 10006 Oberhofmarschallamt I, Nr. 83a (Königl. Herbst=Reise von Dreßden nach Hubertsburg Anno 1741), fols. 219r-220v.

楽器の種類と奏者の名前	1731年の「宮廷楽団の名簿」に現れた者	初めて別邸に派遣された者
ハンケ、ヨーハン・フランツ Hantke, Johann Franz		
フィックラー、ヨーハン・ゲオルク Fickler, Johann Georg		
フランチャーニ、フランソワ Francini, François		
レーナイス、カール・マティアス Lehneis, Carl Matthias	○	
Vla		
アーダム、ヨーハン Adam, Johann		
モルゲンシュテルン、ヨーハン・ゴットリーブ Morgenstern, Johann Gottlieb	○	
ライヒェル、ヨーハン・クリストフ Reichel, Johann Christoph	○	
Vlc		
カリファーノ、アルカンジェロ Califano, Arcangelo		
ピチネッティ、ジョヴァンニ・マリーア・フェリーチェ Picinetti, Giovanni Maria Felice	○	
ロッシ、アゴスティーノ・アントーニオ・デ Rossi, Agostino Antonio de	○	
Cb		
ケストナー、ゲオルゲ・フリードリヒ Kästner, George Friedrich	○	
Fl		
ゲッツェル、フランツ・ヨーゼフ Götzel, Franz Joseph		○
ビュッフアルダン、ピエール＝ガブリエル Buffardin, Pierre-Gabriel	○	
Ob		
フーコー、ヨーハン・ヴィルヘルム Hucho, Johann Wilhelm		
ベソッツィ、アントニオ Besozzi, Antonio		
ラッハマン、ゴットリーブ・ベンヤミン Lachmann, Gottlieb Benjamin		○
リヒター、ヨーハン・クリスティアン Richter, Johann Christian	○	
Fg		
クヴァッツ、カスパー・エルンスト Quatz, Caspar Ernst	○	
ベーメ、ヨーハン・ゴットフリート Böhme, Johann Gottfried	○	
モラシュ、カール Morasch, Carl		
リンケ、ヨーハン・ペーター・カシミール Lincke, Johann Peter Casimir		
Hr		
クネヒテル、ヨーハン・ゲオルク Knechtel, Johann Georg		

楽器の種類と奏者の名前	1731年の「宮廷楽団の名簿」に現れた者	初めて別邸に派遣された者
ハンペル、アントン・ヨーゼフ Hampel, Anton Joseph		
Lut		
ヴァイス、ジルビウス・レーオポルト Weiss, Silvius Leopold	○	
Org		
リストーリ、ジョヴァンニ・アルベルト Ristori, Giovanni Alberto		

この表に示した31名のうち、1731年の名簿に見られる者は3分の1程度の11名となっている。そして前年の1741年の出張と同様に、ピゼンデルの同僚7名のうち、チェロ奏者ロッシ、フルート奏者ビュッフアルダン、オーボエ奏者リヒター、ファゴット奏者ベーム、リュート奏者ヴァイスの5名が、別邸へのお出張に選出されている。

また、1742年の「オーケストラの項目」に見られる奏者のうち、新たに派遣された奏者はフルート奏者ゲッツェルとオーボエ奏者ラッハマンのみとなっている。フルート奏者ゲッツェルは、1741年末にドレスデン宮廷楽団を退団してベルリン宮廷に向かったフルート奏者クヴァンツの後任であり、1743年の「宮廷楽団の名簿」に初めて名前が記される。オーボエ奏者ラッハマンは、1744年のこの名簿に初めて現れる。そのため、この二人はドレスデン宮廷楽団に加入した直後に、フベルトゥスブルクに遣わされたと考えられよう。

この「オーケストラの項目」が見られた「1742年のドレスデンからフベルトゥスブルクへの王の旅行」と題された資料の中には、「オペラ [に携わる者] のフベルトゥスブルクとムッチェンへの出立」の項目があり、音楽家の名前が乗り込む馬車ごとに区分されて記されている¹⁷⁷。この項目に従うと、ヴァイオリン奏者フィックラー、ヴィオラ奏者ライヒェル、コントラバス奏者ケストナーは、楽師長ピゼンデルの馬車に乗っている。彼らのうち

¹⁷⁷ “Fortkommen vor die Opera nach Hubertusburg und Mutzschen”, D-Dla, 10006 Oberhofmarschallamt I, Nr. 91a (Königl. Herbst: Reise von Dreßden nach Hubertusburg. 1742), fols. 185r-186v.

フィックラーとケストナーは、前年の 1741 年においてもピゼンデルの馬車に同乗していた。

第7項 1743 年の「オーケストラの項目」

1743 年の「オーケストラの項目」には、ピゼンデルと 34 名の姓が列挙されている。この 34 名のうち 29 名は、114 頁から始まる表 2-3 に示したドレスデン宮廷楽団の奏者と姓が一致する。そして、他の 5 名には肩書が書かれている。「ギールマン Giermann」は「トランペット奏者 Trompetter」、「グルンディッヒ Grundig」と「クレムラー Cremller」は「写譜家 Notisten」、「ヴェルナー Werner」は「宮廷楽団世話係 Capel Diener」となっているのである。彼らのうち「ギールマン」が奏者であったことは明らかであるが、先の表 2-3 から明らかのように、1731 年から 1755 年までの「宮廷楽団の名簿」に、トランペット奏者は記載されていない。従って、「ギールマン」はこの楽団に在籍していなかったといえるだろう。

以上のことから、1743 年の「オーケストラの項目」に記されたドレスデン宮廷楽団の奏者は、表 2-3 に示した人名と姓が一致した 29 名になる。表 2-15 は、彼らの名前を楽器の種類ごとに示している。

表 2-15 1743 年の「オーケストラの項目」に記載された奏者

楽器の種類と奏者の名前	1731 年の「宮廷楽団の名簿」に現れた者	初めて別邸に派遣された者
VI		
カッタネオ、フランチェスコ・マリーア Cattaneo, Francesco Maria		
カラッシ、ロレンツォ Carassi, Lorenzo		
タッシュエンベルク、クリスティアン・ヴィルヘルム Taschenberg, Christian Wilhelm		
ティーデレ、ヨーゼフ Tiederle, Joseph		
ツィッヒ、フランツ・ゼラフ Zich, Franz Seraph		

楽器の種類と奏者の名前	1731年の「宮廷楽団の名簿」に現れた者	初めて別邸に派遣された者
ハンケ、ヨーハン・フランツ Hantke, Johann Franz		
フィックラー、ヨーハン・ゲオルク Fickler, Johann Georg		
フランチャーニ、フランソワ Francini, François		○
レーナイス、カール・マティアス Lehneis, Carl Matthias	○	
Vla		
アーダム、ヨーハン Adam, Johann		
クヴァッツ、フリードリヒ・エルンスト Quatz, Friedrich Ernst		
モルゲンシュテルン、ヨーハン・ゴットリープ Morgenstern, Johann Gottlieb	○	
Vlc		
カリファノー、アルカンジェロ Califano, Arcangelo		
ピチネッティ、ジョヴァンニ・マリーア・フェリーチェ Picinetti, Giovanni Maria Felice	○	
ロッシ、アゴスティーノ・アントーニオ・デ Rossi, Agostino Antonio de	○	
Cb		
ケストナー、ゲオルゲ・フリードリヒ Kästner, George Friedrich	○	
Fl		
ゲッツェル、フランツ・ヨーゼフ Götzel, Franz Joseph		
ビュッフアルダン、ピエール＝ガブリエル Buffardin, Pierre-Gabriel	○	
Ob		
ツインケ、ヨーハン・フランツ Zinke, Johann Franz		○
フーコー、ヨーハン・ヴィルヘルム Hucho, Johann Wilhelm		
ベソッツィ、アントニオ Besozzi, Antonio		
リヒター、ヨーハン・クリスティアン Richter, Johann Christian	○	
Fg		
クヴァッツ、カスパール・エルンスト Quatz, Caspar Ernst	○	
ベーメ、ヨーハン・ゴットフリート Böhme, Johann Gottfried	○	
リンケ、ヨーハン・ペーター・カシミール Lincke, Johann Peter Casimir		
Hr		
クネヒテル、ヨーハン・ゲオルク Knechtel, Johann Georg		
ハンペル、アントン・ヨーゼフ Hampel, Anton Joseph		

楽器の種類と奏者の名前	1731年の「宮廷楽団の名簿」に現れた者	初めて別邸に派遣された者
Lut		
ヴァイス、ジルビウス・レーオポルト Weiss, Silvius Leopold	○	
Org		
リストーリ、ジョヴァンニ・アルベルト Ristori, Giovanni Alberto		

表 2-15 に示した 29 名のうち、約 3 分の 1 にあたる 10 名は 1731 年の名簿に現れている。彼らの中には、ピゼンデルの同僚 7 名に含まれたチェロ奏者ロッシ、フルート奏者ビュッフアルダン、オーボエ奏者リヒター、ファゴット奏者ベーメ、リュート奏者ヴァイスが見られる。この 5 名がピゼンデルに同伴していることは、1741 年や 1742 年と同様である。

一方、表 2-15 に示した 29 名のうち、初めてフベルトゥスブルクに向かった奏者は、ヴァイオリンのフランチーニとオーボエのツィンケンである。二人は共に 1744 年の「宮廷楽団の名簿」に初めて名前が見られるため、別邸に出張した時には、楽団に加わってから日が浅かったと考えられよう。

本節において参照した「オーケストラの項目」が記されていた「1743 年のフベルトゥスブルクへの秋旅行と狩り」の資料の中には、「王のオーケストラと歌手の出立」と題された項目がある¹⁷⁸。そこには、音楽家の名前が別邸に向かう馬車ごとに記録されており、ヴァイオリン奏者フィックラー、ヴィオラ奏者アーダム、コントラバス奏者ケストナーは、楽師長ピゼンデルと共に記載されている。このことから、前年の 1742 年と同様に、ピゼンデルの馬車には、ヴァイオリン、ヴィオラ、コントラバスの奏者が同乗したことが分かる。

¹⁷⁸ “Fortkommen des Königl Orchester und Sängers”, D-Dla, 10006 Oberhofmarschallamt I, Nr. 97 (Herbst Jagdt=Reise und Jagdt=Lager zur Hubertusburg 1743. von 30. Aug. bis 28. Nov: [Vol.] 1), fols. 140r-141v.

第8項 1736年から1743年までのフベルトゥスブルクへの出張

ここまで、1736年から1743年までの間に、狩猟用別邸フベルトゥスブルクに派遣されたドレスデン宮廷楽団の奏者を概観した。この時期に楽師長ピゼンデルは毎回フベルトゥスブルクに向かっており、先代の楽師長ヴォリュミエの時代からドレスデン宮廷に在籍し、1731年に「宮廷楽団の名簿」に名前が記載されていた奏者は、ピゼンデルに同伴していた。他方、派遣された奏者の中には、ピゼンデルが楽師長に就任した翌年の1732年以降に、「宮廷楽団の名簿」に名前が現れるようになった者も含まれた。彼らの中には、この楽団に加入した直後に別邸に向かったと考えられる者も確認された。

表 2-16 は、1736年から1743年までの各年について、フベルトゥスブルクに派遣された奏者の合計人数を第1行目に示している。第2行目には、別邸に向かった奏者のうち1731年の「宮廷楽団の名簿」に名前が記載されていた者の数と、彼らが奏者の合計人数のうちに占めた割合を示している。この表において、1731年の名簿に記載された者の割合は、1736年から1739年まで5割を維持しているが、その後減少し、1743年には2割程度低い3割4分になっている。

表 2-16 フベルトゥスブルクに派遣された奏者の人数と割合（1736年から1743年）

年	1736年	1737年	1739年	1741年	1742年	1743年
別邸に派遣された奏者の合計人数	19	23	14	29	31	29
1731年の「宮廷楽団の名簿」に現れた者の人数と割合	10 (52.6%)	13 (56.5%)	8 (57.1%)	12 (41.3%)	11 (35.4%)	10 (34.4%)

また表 2-17 は、1736年から1743年までの「宮廷楽団の名簿」に記載された奏者の名前を楽器の種類ごとに示している。彼らのうち、1731年のこの名簿に名が記されていた者には「○」印を付している。さらに、各人の出張回数を示し、出張した年を「○」印によって表している。

この表において、リュート以外の楽器、すなわちヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス、フルート、オーボエ、ファゴット、ホルン、オルガンには、複数の奏者が見られる。この9種類の楽器それぞれにおいて、最も出張回数が多い奏者を確認すると、ヴァイオリンはレーナイス、ヴィオラはモルゲンシュテルン、チェロはロッシ、コントラバスはケストナー、フルートはビュッフアルダン、オーボエはリヒター、ファゴットはベーメ、ホルンはクネヒテル、チェンバロはリストーリとなっている。この9名のうち、ホルン奏者クネヒテルとチェンバロ奏者リストーリ以外の7名は、ピゼンデルが楽師長に就任した年にあたる1731年の「宮廷楽団の名簿」に名前が記録されていた。これらのことから、別邸に向かったドレスデン宮廷楽団において、ほぼ全ての種類の楽器には、ヴォリュミエが楽師長であった頃から、長年ピゼンデルと共に演奏してきた奏者が配置されていたことが分かる。

また、これまでに指摘したように、フベルトゥスブルクに遣わされた奏者の中には、ヴォリュミエの時代の合奏に欠かせなかったと考えられた、ピゼンデルとほぼ同じ年齢の奏者が含まれていた。特に1741年、1742年、1743年の出張には、このピゼンデルの同僚7名のうち、チェロ奏者ロッシ、フルート奏者ビュッフアルダン、オーボエ奏者リヒター、ファゴット奏者ベーメ、リュート奏者ヴァイスの5名が常に参加していた。表2-17に基づく、この5名は1736年から1743年までの合計6回に上る別邸への出張のうち、少なくとも4回以上に携わっているため、頻繁に別邸に向かったといえよう。特にロッシ、ビュッフアルダン、リヒター、ベーメの4名は、先に確認したように、ドレスデン宮廷楽団に在籍した複数のチェロ奏者、フルート奏者、オーボエ奏者、ファゴット奏者の中で出張回数が最も多い。

ピゼンデルの同僚7名のうち名前を挙げた5名以外は、ヴァイオリン奏者ラインとフルート奏者ブロッホヴィッツであった。表2-17から明らかなように、ラインは全くフベルトゥスブルクへの出張に関与していない。ブロッホヴィッツがこの別邸に向かった年は、

1737年のみである。この二人は、第1章において指摘したように専門とする楽器を変更していた。このようにピゼンデルの同僚7名の間では、一つの楽器に専念してきた者と、楽器を持ち替えた者の出張回数に明確な違いが認められる。そして、フベルトゥスブルクに度々派遣された奏者は、一つの楽器を演奏してきた者のみとなっている。

表 2-17 において、「1731年の『宮廷楽団の名簿』に記載された者」の列に「○」印が見られない奏者は、ピゼンデルが楽師長に就任した翌年の1732年以降に、「宮廷楽団の名簿」に名前が記録されている。彼らのうちヴァイオリン奏者ティーデレとフィックラー、ヴィオラ奏者アーダム、オーボエ奏者フーコーは、合計6回の出張全てに携わっている。特にフィックラーとアーダムは、ピゼンデルの馬車に同乗していた。

この二人のうちヴァイオリン奏者フィックラーは、1731年11月にドレスデン宮廷に雇用されることが決定された11名の奏者の一人であった。この時期は、ピゼンデルが楽師長としてドレスデン宮廷の音楽家に紹介された1731年12月の僅か一か月前である。このことから、ヴァイオリン奏者フィックラーは、ピゼンデルが楽師長に就任した時期に、ドレスデン宮廷楽団に所属するようになったことが分かる。またアーダムは、1737年の「宮廷楽団の名簿」に初めて名前が記載されていた。ドレスデン宮廷の資料「1733年から1739年のイタリア人歌手、楽団、踊り手及びその他のオペラに従事する人々」の1737年1月2日付の記録には、彼がこの宮廷に雇われたことが記されている¹⁷⁹。従ってアーダムは、1737年に宮廷楽団に加入したと考えられよう。このように、ピゼンデルが楽師長を務めた時代に楽団の一員となり、ピゼンデルの馬車に同乗するようになったことに基づくと、少なくともヴァイオリン奏者フィックラーとヴィオラ奏者アーダムは、ピゼンデルにとって子飼いの弟子であった可能性を指摘できるだろう。

次項からは、1747年以降の出張に携わった奏者を特定する。

¹⁷⁹ D-Dla, 10026 Greheimes Kabinett, Loc. 907/4 (Die Italiänischen Sanger und Sangerinnen, das Orchestre, die Tanzer und Tanzerinnen, auch andere zur Opera gehorige Personen betr. Ao 1733. 1739), fol. 59r-v.

表 2-17 フベルトウスブルクに派遣された奏者（1736年から1743年）

楽器の種類と奏者の名前	1731年の「宮 廷楽団の名簿」 に現れた者	出張回数	1736年	1737年	1739年	1741年	1742年	1743年
VI								
ティーデレ、ヨーゼフ Tiederle, Joseph		6	○	○	○	○	○	○
フィックラー、ヨーハン・ゲオルク Fickler, Johann Georg		6	○	○	○	○	○	○
レーナイス、カール・マティアス Lehneis, Carl Matthias	○	6	○	○	○	○	○	○
ウーリッヒ、アウグスティン Uhlig, Augustin		5	○	○	○	○	○	
タッシュエンベルク、クリスティアン・ヴィルヘルム Taschenberg, Christian Wilhelm		4		○		○	○	○
ツイッヒ、フランツ・ゼラフ Zich, Franz Seraph		4	○			○	○	○
ハンケ、ヨーハン・フランツ Hantke, Johann Franz		4		○		○	○	○
カッタネオ、フランチェスコ・マリア Cattaneo, Francesco Maria		3				○	○	○
カラッシ、ロレンツォ Carassi, Lorenzo		3				○	○	○
フランチャーニ、フランソワ Francini, François		1						○
ル・グロ、シモン Le Gros, Simon	○	1		○				
ツァルト、ゲオルク Zarth, Georg		0						
ビオット、フランチェスコ Biotto, Francesco		0						
ライン、カール・ヨーゼフ Rhein, Carl Joseph	○	0						
Vla								
アーダム、ヨーハン Adam, Johann		6	○	○	○	○	○	○
モルゲンシュテルン、ヨーハン・ゴットリーブ Morgenstern, Johann Gottlieb		6	○	○	○	○	○	○
クヴァッツ、フリードリヒ・エルンスト Quatz, Friedrich Ernst		2				○		○
ライヒェル、ヨーハン・クリストフ Reichel, Johann Christoph	○	2				○	○	
クリーガー、ヨーハン・ゴットリーブ Krieger, Johann Gottlieb		0						
ゴルデ、マルティン Golde, Martin		0						

楽器の種類と奏者の名前	1731年の「宮 廷楽団の名簿」 に現れた者	出張回数	1736年	1737年	1739年	1741年	1742年	1743年
Vlc								
ロッシ、アゴ스티ーノ・アントーニオ・デ Rossi, Agostino Antonio de	○	6	○	○	○	○	○	○
カリファーノ、アルカンジェロ Califano, Arcangelo		4		○		○	○	○
ピチネッティ、ジョヴァンニ・マリーア・フェリー チェ Picinetti, Giovanni Maria Felice		3				○	○	○
オロンデル、ジャン・バティスト・ジョゼフ・デュ Haulondel, Jean Baptiste Joseph Du		1	○					
オロンデル、ロベール・デュ Haulondel, Robert Du		0						
Cb								
ケストナー、ゲオルグ・フリードリヒ Kästner, George Friedrich	○	6	○	○	○	○	○	○
カイザー、ヨーハン・ザミュエル Kayser, Johann Samuel		0						
Fl								
ビュッフアルダン、ピエール＝ガブリエル Buffardin, Pierre-Gabriel	○	5	○		○	○	○	○
クヴァンツ、ヨーハン・ヨアヒム Quantz, Johann Joachim		4	○	○	○	○		
ゲッツェル、フランツ・ヨーゼフ Götzel, Franz Joseph		2					○	○
ブロッホヴィッツ、ヨーハン・マルティン Blochwitz, Johann Martin	○	1		○				
デヴェルデク、ヴェンツェル・ゴットフリート Dewerdek, Wenzel Gottfried		0						
Ob								
フーコー、ヨーハン・ヴィルヘルム Hucho, Johann Wilhelm		6	○	○	○	○	○	○
リヒター、ヨーハン・クリスティアン Richter, Johann Christian	○	6	○	○	○	○	○	○
ベソッツィ、アントニオ Besozzi, Antonio		3				○	○	○
ザイフェルト、マルティン Seyfert, Martin	○	1		○				
ツィンケ、ヨーハン・フランツ Zincke, Johann Franz		1						○
ラッハマン、ゴットリーブ・ベンヤミン Lachmann, Gottlieb Benjamin		1					○	
アンリオン、シャルル Henrion, Charles	○	0						
ヴァイゲルト、ダーヴィット Weigelt, David	○	0						
Fg								
ベーメ、ヨーハン・ゴットフリート Böhme, Johann Gottfried	○	5	○	○		○	○	○

楽器の種類と奏者の名前	1731年の「宮廷楽団の名簿」に現れた者	出張回数	1736年	1737年	1739年	1741年	1742年	1743年
クヴァッツ、カスパー・エルンスト Quatz, Caspar Ernst	○	4		○		○	○	○
モラシュ、カール Morasch, Carl		4	○		○	○	○	
リンケ、ヨーハン・ペーター・カシミール Lincke, Johann Peter Casimir		3				○	○	○
カデ、ジャン Cadet, Jean	○	0						
メーザー、アントン Möser, Anton		0						
Hr								
クネヒテル、ヨーハン・ゲオルク Knechtel, Johann Georg		5	○	○		○	○	○
ハンペル、アントン・ヨーゼフ Hampel, Anton Joseph		3		○			○	○
シンドラー、ヨーハン・アーダム Schindler, Johann Adam	○	1	○					
Lut								
ヴァイス、ジルビウス・レーオポルト Weiss, Silvius Leopold	○	4		○		○	○	○
Org								
リストーリ、ジョヴァンニ・アルベルト Ristori, Giovanni Alberto		5	○	○		○	○	○
シュミット、ヨーハン・ヴォルフガング Schmidt, Johann Wolfgang	○	0						

第9項 1747年の「オーケストラの項目」

1747年の「オーケストラの項目」には、ピゼンデルと37名の姓が記録されている。この37名のうち32名の姓は、114頁から始まる表2-3に提示したドレスデン宮廷楽団の奏者と合致する。残りの5名は、「オーケストラの項目」において肩書が記されている。それは「調律師 Stimmer」、「写譜家 Notisten」、「宮廷楽団世話係 Capelldiener」であるため、彼らが奏者でなかったことは明らかといえよう。これらのことから、1743年の「オーケストラの項目」に記載されたドレスデン宮廷楽団の奏者は、表2-3に示した人名と姓が一致した32名になる。表2-18は、彼らの名前を楽器の種類ごとに示している。

表 2-18 1747 年の「オーケストラの項目」に記載された奏者

楽器の種類と奏者の名前	1731 年の「宮廷楽団の名簿」に現れた者	初めて別邸に派遣された者
VI		
ウーリッヒ、アウグスティン Uhlig, Augustin		
カッタネオ、フランチェスコ・マリーア Cattaneo, Francesco Maria		
カラッシ、ロレンツォ Carassi, Lorenzo		
タッシュェンベルク、クリスティアン・ヴィルヘルム Taschenberg, Christian Wilhelm		
ツイッヒ、フランツ・ゼラフ Zich, Franz Seraph		
ティーデレ、ヨーゼフ Tiederle, Joseph		
ピチネッティ、フェリーチェ Picinetti, Felice		○
フィックラー、ヨーハン・ゲオルク Fickler, Johann Georg		
フランチャーニ、フランソワ Francini, François		
フント（息子）、フランチェスコ Hunt Francesco		○
レーナイス、カール・マティアス Lehneis, Carl Matthias	○	
Vla		
アーダム、ヨーハン Adam, Johann		
フーバー、ヨーハン・ニコラウス Huber, Johann Nicolaus		○
Vlc		
カリファーノ、アルカンジェロ Califano, Arcangelo		
ツィーカ、ヨーゼフ Zyka, Joseph		○
ロッシ、アゴスティーノ・アントーニオ・デ Rossi, Agostino Antonio de	○	
Cb		
カイザー、ヨーハン・ザミュエル Kayser, Johann Samuel		○
ケストナー、ゲオルゲ・フリードリヒ Kästner, George Friedrich	○	
Fl		
ゲッツェル、フランツ・ヨーゼフ Götzel, Franz Joseph		
デヴェルデク、ヴェンツェル・ゴットフリート Dewerdek, Wenzel Gottfried		
Ob		
ヴォプスト、クリスティアン Wopst, Christian		○
ツィンケ、ヨーハン・フランツ Zincke, Johann Franz		

楽器の種類と奏者の名前	1731年の「宮廷楽団の名簿」に現れた者	初めて別邸に派遣された者
ベソッツィ、アントニオ Besozzi, Antonio		
ラッハマン、ゴットリープ・ベンヤミン Lachmann, Gottlieb Benjamin		
Fg		
ベーメ、ヨーハン・ゴットフリート Böhme, Johann Gottfried	○	
マツシュテット、クリスティアン・フリードリヒ Mattstädt, Christian Friedrich		○
モラシュ、カール Morasch, Carl		
リンケ、ヨーハン・ペーター・カシミール Lincke, Johann Peter Casimir		
Hr		
ハウデク、カール Haudeck, Carl		○
ハンペル、アントン・ヨーゼフ Hampel, Anton Joseph		
Lut		
ヴァイス、ジルビウス・レーオポルト Weiss, Silvius Leopold	○	
Org		
リストーリ、ジョヴァンニ・アルベルト Ristori, Giovanni Alberto		

この表に示した 32 名のうち、1731 年の名簿に見られる者は 2 割以下の 5 名のみである。すでに指摘したように、1736 年から 1743 年までのフベルトウスブルクへの出張において、この名簿に記載された奏者は 3 割 4 分から 5 割を占めていたため、1747 年におけるこの割合は、非常に低いといえる。彼らの中には、ピゼンデルの 7 名の同僚のうち、チェロ奏者ロッシ、ファゴット奏者ベーメ、リュート奏者ヴァイスが見られる。

1747 年の「オーケストラの項目」に記された 32 名の中で、初めて別邸に向かった者は 8 名に上っている。彼らのうち、ヴァイオリン奏者フントとピチネッティ、ヴィオラ奏者フーバー、オーボエ奏者ヴォプストは、前節において説明したように、1745 年 4 月 21 日のドレスデン宮廷の記録に、新たに雇用されたことが明記されていた。チェロ奏者ツィーカは 1745 年の「宮廷楽団の名簿」に初めて現れ、ファゴット奏者マツシュテットとホルン奏者ハウデクの名前が最初に見られるこの名簿は、それぞれ 1746 年と 1748 年のも

のである（133 頁の表 2-8 参照）。これらのことから、1747 年に初めてフベルトゥスブルクに遣わされた奏者の多くは、宮廷楽団における勤続年数が短かったと考えられよう。

本節において参照した「オーケストラの項目」が記されていた「1747 年のフベルトゥスブルクへの秋旅行と宮廷の宿泊」の資料の中には、「1747 年におけるオペラ関係者のドレスデンからフベルトゥスブルクとムツェンへの出立」と題された項目も見られる¹⁸⁰。そこには、別邸に向かう際に利用した馬車ごとに音楽家の名前が記されており、楽師長ピゼンデル、ヴァイオリン奏者フィックラー、ヴィオラ奏者アーダム、コントラバス奏者ケストナーは、一組として記載されている。この人選は 1743 年のものと同一になっている。

第10項 1749 年の「オーケストラの項目」

1749 年の「オーケストラの項目」にはピゼンデルと 26 名の姓が見られ、これらの人名は見出しごとに分けて記載されている。この 26 名のうち 21 名は楽器の種類を示した見出しの下に現れており、彼らの姓は 114 頁から始まる表 2-3 に示したドレスデン宮廷楽団の奏者と合致する。残りの 5 名は、「プロンプター Souffleur」、「建築家 Architecte」、「画家 Mahler」の項目に見られる。従って、1749 年の「オーケストラの項目」から抽出されるドレスデン宮廷楽団の奏者は、先の 21 名になる。表 2-19 は、彼らの名前を楽器の種類ごとに示している。

表 2-19 1749 年の「オーケストラの項目」に記載された奏者

楽器の種類と奏者の名前	1731 年の「宮廷楽団の名簿」に現れた者	初めて別邸に派遣された者
VI		
ウーリッヒ、アウグスティン Uhlig, Augustin		

¹⁸⁰ “Fortkommen der Operisten von Dresden nach Hubertsburg und Mutzschen 1747”, D-Dla, 10006 Oberhofmarschallamt I, Nr. 118 (Königl: Reise von Dreßden nach Hubertsburg und Hof Lager daselbst, Mens. Aug. Sept. Oct. et Nov. 1747. Vol. 1), fols. 220r-222v.

楽器の種類と奏者の名前	1731年の「宮廷楽団の名簿」に現れた者	初めて別邸に派遣された者
カッタネオ、フランチェスコ・マリーア Cattaneo, Francesco Maria		
カラッシ、ロレンツォ Carassi, Lorenzo		
タッシュェンベルク、クリスティアン・ヴィルヘルム Taschenberg, Christian Wilhelm		
ティーデレ、ヨーゼフ Tiederle, Joseph		
ハンケ、ヨーハン・フランツ Hantke, Johann Franz		
レーナイス、カール・マティアス Lehneis, Carl Matthias	○	
Vla		
アーダム、ヨーハン Adam, Johann		
ライヒェル、ヨーハン・クリストフ Reichel, Johann Christoph	○	
Vlc		
カリファーノ、アルカンジェロ Califano, Arcangelo	○	
ロッシ、アゴスティーノ・アントーニオ・デ Rossi, Agostino Antonio de		
Cb		
ケストナー、ゲオルゲ・フリードリヒ Kästner, George Friedrich	○	
Fl		
ゲッツェル、フランツ・ヨーゼフ Götzel, Franz Joseph		
デヴェルデク、ヴェンツェル・ゴットフリート Dewerdek, Wenzel Gottfried		
Ob		
ベソッツィ、アントニオ Besozzi, Antonio		
ラッハマン、ゴットリーブ・ベンヤミン Lachmann, Gottlieb Benjamin		
Fg		
マツシュテット、クリスティアン・フリードリヒ Mattstädt, Christian Friedrich		
ベーメ、ヨーハン・ゴットフリート Böhme, Johann Gottfried	○	
リンケ、ヨーハン・ペーター・カシミール Lincke, Johann Peter Casimir		
Hr		
ハウデク、カール Haudeck, Carl		
フーバー、ヨーハン・ニコラウス Huber, Johann Nicolaus		

表 2-19 から明らかなように、1749 年の「オーケストラの項目」に記された奏者全員は、すでにこの別邸に出張した経験を持つ者たちとなっている。この 21 名のうち、1731 年の名簿に現れた者は 5 名である。しかし彼らの中には、1741 年以来、毎回フベルトゥスブルクへの出張に携わってきたリュート奏者ヴァイスは含まれていない¹⁸¹。

「1749 年のフベルトゥスブルクへの秋旅行と宮廷の宿泊」の資料には、「フベルトゥスブルクへのオペラ関係者の出立」の項目が見られ、別邸に向かった馬車ごとに、音楽家の名前が記されている¹⁸²。この項目において、ヴィオラ奏者アーダムとライヒェル、コントラバス奏者ケストナーは、ピゼンデルと共に名前が書かれているため、彼らはピゼンデルの馬車に乗ったことが分かる。1742 年から 1747 年までは、一貫してヴァイオリン、ヴィオラ、コントラバスの奏者がピゼンデルに随伴していたが、この年は若干異なり、ヴァイオリン奏者が見られない。

第11項 1751 年の「オーケストラの項目」

1751 年の「オーケストラの項目」には、楽師長ピゼンデルと 31 名の姓が列挙されている。この 31 名のうち 29 名は、114 頁から始まる表 2-3 に現れるドレスデン宮廷楽団の奏者と姓が一致している。また残りの 2 名のうち、「グレープナー Grabner [sic]」は、その姓から「宮廷オルガン職人」の肩書を持ったヨーハン・ハインリッヒ・グレープナー、またはヨーハン・ゴットフリート・グレープナーのいずれかであったと判断される（111 頁の表 2-2 参照）。もう一人の「コルネリウス Cornelius」は、人物を特定できなかった。以上のことから、1751 年の「オーケストラの項目」から抽出されるドレスデン宮廷楽団の奏者は、先の 29 名になる。下の表 2-20 には、彼らの名前を楽器の種類ごとに示した。

¹⁸¹ 前節において確認したように、ヴァイスはこの出張が行われた翌年の 1750 年に亡くなった。

¹⁸² “Fortkommen der Operisten nach Hubertsburg”, D-Dla, 10006 Oberhofmarschallamt I, Nr. 124 (Königl: Reise von Dreßden nach Hubertsburg und Hof=Lager daselbst Mens. August: Sept: Oct: et Novembr 1749), fol. 229r-v.

表 2-20 1751 年の「オーケストラの項目」に記載された奏者

楽器の種類と奏者の名前	1731 年の 「宮廷楽団 の名簿」に 現れた者	初めて別邸に 派遣された者
VI		
ウーリッヒ、アウグスティン Uhlig, Augustin		
カッタネオ、フランチェスコ・マリーア Cattaneo, Francesco Maria		
カラッシ、ロレンツォ Carassi, Lorenzo		
ツイッヒ、フランツ・ゼラフ Zich, Franz Seraph		
ティーデレ、ヨーゼフ Tiederle, Joseph		
ネルダ、ヨーハン・ゲオルク Neruda, Johann Georg		○
ハンケ、ヨーハン・フランツ Hantke, Johann Franz		
フィックラー、ヨーハン・ゲオルク Fickler, Johann Georg		
フランチーニ、フランソワ Francini, François		
フント (息子)、フランチェスコ Hunt Francesco		
Vla		
アーダム、ヨーハン Adam, Johann		
フーバー、ヨーハン・ニコラウス Huber, Johann Nicolaus		
ライヒェル、ヨーハン・クリストフ Reichel, Johann Christoph	○	
Vlc		
カリファーノ、アルカンジェロ Califano, Arcangelo		
ツィーカ、ヨーゼフ Zyka, Joseph		
ロッシ、アゴスティーノ・アントーニオ・デ Rossi, Agostino Antonio de	○	
Cb		
ケストナー、ゲオルグ・フリードリヒ Kästner, George Friedrich	○	
ホルン、ヨーハン・カスパー Horn, Johann Caspar		○
Fl		
ゲッツェル、フランツ・ヨーゼフ Götzel, Franz Joseph		
デヴェルデク、ヴェンツェル・ゴットフリート Dewerdek, Wenzel Gottfried		

楽器の種類と奏者の名前	1731年の「宮廷楽団の名簿」に現れた者	初めて別邸に派遣された者
Ob		
ヴォプスト、クリスティアン Wopst, Christian		
ツィンケ、ヨーハン・フランツ Zinke, Johann Franz		
ベソッツィ、アントニオ Besozzi, Antonio		
ラッハマン、ゴットリープ・ベンヤミン Lachmann, Gottlieb Benjamin		
Fg		
マツシュテット、クリスティアン・フリードリヒ Mattstädt, Christian Friedrich		
リッター、カール・クリスティアン Ritter, Carl Christian		○
リンケ、ヨーハン・ペーター・カシミール Lincke, Johann Peter Casimir		
Hr		
ハウデク、カール Haudeck, Carl		
ハンペル、アントン・ヨーゼフ Hampel, Anton Joseph		

表 2-20 の 29 名のうち、1731 年の名簿に名前が記載された者は 4 名である。彼らの中には、1741 年からフベルトゥスブルクへ向かう一員に選ばれ続けていたファゴット奏者ベーメは含まれていない¹⁸³。

また、新たにこの別邸に遣わされた者は、ヴァイオリン奏者ネルダ、ファゴット奏者リッター、コントラバス奏者ホルンの 3 名である。彼らの名前が初めて見られた「宮廷楽団の名簿」は、ネルダとリッターがそれぞれ 1750 年と 1751 年の巻、ホルンが 1753 年の巻となっている。従って特にホルンは、楽団に加入した直後に別邸へ向かった可能性があるだろう。

本項において取り上げた「オーケストラの項目」が記された「1751 年のフベルトゥスブルクへの秋旅行と宮廷の宿泊」の資料には、さらに「フベルトゥスブルクへの王のオーケ

¹⁸³ 先に指摘したように、ベーメは 1752 年 1 月 29 日の記録において、死亡したことが明記されていた。

ストラの出立」の項目が見られる¹⁸⁴。そして音楽家の名前が、利用した馬車ごとに記載されている。この項目に基づく、1751年にピゼンデルの馬車に乗った者は、1743年や1747年と同様に、ヴァイオリン奏者フィックラー、ヴィオラ奏者アーダム、コントラバス奏者ケストナーとなっている。

第12項 1753年の「オーケストラの項目」

1753年の「オーケストラの項目」には、フベルトゥスブルクに向かう時に使った馬車ごとに、楽師長ピゼンデルと27名の姓が記載されている。この27名のうち25名の姓は、114頁から始まる表2-3に提示したドレスデン宮廷楽団の奏者と一致する。残りの2名は、「ヴルカーニ Vulcani」と「グレープナー Graebner」である。同じ1753年の『宮廷年鑑』には、「ベルナルド・ブルカーニ Bernardo Bulcani」が「オペラのプロンプター Souffleurs der Opera」の一人として記載されている。姓の類似から、先の「ヴルカーニ」はこのプロンプターであったと考えられる。また先述のように、「グレープナー」は「宮廷オルガン職人」であった二人のグレープナーのうちのいずれかを指していると指摘できる。

以上のことから、1753年の「オーケストラ」の項目に記されたドレスデン宮廷楽団の奏者は25名になる。下の表2-21は、彼らの名前を楽器の種類ごとに示している。

表 2-21 1753年の「オーケストラの項目」に記載された奏者

楽器の種類と奏者の名前	1731年の「宮廷楽団の名簿」に現れた者	初めて別邸に派遣された者
VI		
ウーリッヒ、アウグスティン Uhlig, Augustin		
カッタネオ、フランチェスコ・マリーア Cattaneo, Francesco Maria		

¹⁸⁴ “Fortkommen der königl Orchestre nach Hubertsburg”, D-Dla, 10006 Oberhofmarschallamt I, Nr. 131 (Königl: Reise von Dreßden nach Hubertsburg und Hof=Lager daselbst Mens. Aug. Sept. Octobr. Nov. 1751), fols. 237r-238r.

	カラッシ、ロレンツォ Carassi, Lorenzo		
	ゲーリッケ、ゴットフリート・フリードリヒ Göricke, Gottfried Friedrich		○
	タッシュエンベルク、クリスティアン・ヴィルヘルム Taschenberg, Christian Wilhelm		
	ネルダ、ヨーハン・ゲオルク Neruda, Johann Georg		
	ピチネッティ、フェリーチェ Picinetti, Felice		
	フィックラー、ヨーハン・ゲオルク Fickler, Johann Georg		
	フランチャーニ、フランソワ Francini, François		
	フント (息子)、フランチェスコ Hunt Francesco		
Vla			
	アーダム、ヨーハン Adam, Johann		
	フーバー、ヨーハン・ニコラウス Huber, Johann Nicolaus		
	ライヒェル、ヨーハン・クリストフ Reichel, Johann Christoph	○	
Vlc			
	カリファーノ、アルカンジェロ Califano, Arcangelo		
	ツィーカ、ヨーゼフ Zyka, Joseph		
Cb			
	ケストナー、ゲオルゲ・フリードリヒ Kästner, George Friedrich	○	
Fl			
	ゲッツェル、フランツ・ヨーゼフ Götzel, Franz Joseph		
	デヴェルデク、ヴェンツェル・ゴットフリート Dewerdek, Wenzel Gottfried		
Ob			
	ヴォプスト、クリスティアン Wopst, Christian		
	ツィンケ、ヨーハン・フランツ Zinke, Johann Franz		
	ベソッツィ、アントニオ Besozzi, Antonio		
Fg			
	マットシュテット、クリスティアン・フリードリヒ Mattstädt, Christian Friedrich		
	リッター、カール・クリスティアン Ritter, Carl Christian		
Hr			
	ハウデク、カール Haudeck, Carl		
	ハンペル、アントン・ヨーゼフ Hampel, Anton Joseph		

この表に示した 25 名のうち、1731 年の名簿に名前が記載された者は 3 名である。彼らの中に、1736 年以來必ずフベルトゥスブルクへ向かっていたチェロ奏者ロッシは見られない¹⁸⁵。

初めてフベルトゥスブルクに遣わされた奏者は、ヴァイオリン奏者ゲーリッケに限られる。彼は、1753 年から「宮廷楽団の名簿」に名前が記されるため、新任の時に別邸に向かったと考えられるだろう。

本項において参照している「オーケストラの項目」は、別邸に向かった馬車ごとに、音楽家の名前を示していた。この項目によると、ヴァイオリン奏者フィックラー、ヴィオラ奏者アーダム、コントラバス奏者ケストナーは楽師長ピゼンデルと共に馬車に乗っている。この組み合わせは、1743 年や 1747 年、1751 年に見られたものと同じである。

第13項 1755 年の「オーケストラの項目」

1755 年の「オーケストラの項目」には、ピゼンデルの名前が見られない。そして合計 37 名の姓が記載されており、彼らのうち 26 名は 114 頁の表 2-3 に示したドレスデン宮廷楽団の奏者と一致している。残りの 11 名は、表 2-22 に示した。

表 2-22 「宮廷楽団の名簿」(1731~1755) に記載されていない者

(1755 年の「オーケストラの項目」)

資料に記された肩書	資料に記された名前
ヴァイオリン奏者 Violinisten	アイゼルト Eiselt
	ハラー Haller
	子フンディ Hundi jun:
ヴィオラ奏者 Brachisten	ランゲ Lange
	レール Röhr
コントラバス Contra Bass	バルク Balk
オーボエ奏者 Hautboisten	子ベソツツィ Besozzi jun:
バスン Basson	フランツ Franz
	フリッチェ Fritsche

¹⁸⁵ 前節において確認したように、ドレスデン宮廷の記録に基づくと、ロッシは 1755 年 6 月に亡くなっていた。

資料に記された肩書	資料に記された名前
調律師 <i>der Stimmer</i>	グレーブナー <i>Graebner</i>
宮廷楽団世話係 <i>Capelldiener</i>	ヴェルナー <i>Werner</i>

この表に載せた人物のうち、グレーブナーとヴェルナーが奏者でないことは、肩書から明らかである。また、1756年の「宮廷楽団の名簿」において、「ヨーハン・ハインリッヒ・アイゼルト *Johann Heinrich Eiselt*」、「フリードリヒ・ゴットロープ・ハラール *Friedrich Gottlob Haller*」、「子ヨーハン・バプティスタ・フント *Johann Baptista Hunt, jun*」は「ヴァイオリン奏者 *Violinisten*」として、「ヨーハン・ゴットフリート・レール *Johann Gottfried Röhr*」はヴィオラ奏者として、「ヤーコプ・フリッツェ *Jacob Fritzsche*」と「フランツ・アドルフ・クリストリープ *Franz Adolph Christlieb*」はファゴット奏者として記載されている。さらに、子ベソッツィはアントニオ・ベソッツィの息子であったカルロ・ベソッツィ *Carlo Besozzi* (1738-1791) を指していると考えられよう。1765年に出版された『ザクセン選帝侯国宮廷年鑑 *Churfürstlich-Sächsischer Hof- und Staatscalender*』に、彼や「ゲオルゲ・クリストフ・バルヒ *George Christoph Balch*」、「ヨーハン・ダーヴィット・ラング *Johann David Lange*」は、宮廷楽団の一員として記録されている¹⁸⁶。

以上のことから、1755年の「オーケストラの項目」に記されたドレスデン宮廷楽団の奏者は、表 2-3 に示した人物と姓が一致した 26 名、さらに表 2-22 の 11 名のうちグレーブナーとヴェルナー以外の 9 名になる。表 2-23 は、これらの奏者の人名を楽器の種類ごとに示している。

表 2-23 1755 年の「オーケストラ」の項目に記載された奏者

楽器の種類と奏者の名前	1731 年の「宮廷楽団の名簿」に現れた者	初めて別邸に派遣された者
VI		
アイゼルト、ヨーハン <i>Eiselt, Johann</i>		○

¹⁸⁶ *Churfürstlich-Sächsischer Hof- und Staatscalender* (Leipzig: Weidmann, 1765; D-DI, Hist.Sax.I.0616), pp. 63-64.

楽器の種類と奏者の名前	1731年の「宮廷楽団の名簿」に現れた者	初めて別邸に派遣された者
ウーリッヒ、アウグスティン Uhlig, Augustin		
カッタネオ、フランチェスコ・マリーア Cattaneo, Francesco Maria		
カラッシ、ロレンツォ Carassi, Lorenzo		
ゲーリッケ、ゴットフリート・フリードリヒ Göricke, Gottfried Friedrich		
ネルダ、ヨーハン・ゲオルク Neruda, Johann Georg		
ハラール、フリードリヒ・ゴットロープ Haller, Friedrich Gottlob		○
ピチネッティ、フェリーチェ Picinetti, Felice		
フィックラー、ヨーハン・ゲオルク Fickler, Johann Georg		
フランチャーニ、フランソワ Francini, François		
フント（息子）、フランチェスコ Hunt Francesco		
フント、ジャン・バティスタ Hunt, Johann Baptista		○
レーナイス、カール・マティアス Lehneis, Carl Matthias	○	
Vla		
アーダム、ヨーハン Adam, Johann		
フーバー、ヨーハン・ニコラウス Huber, Johann Nicolaus		
ランゲ、ヨーハン・ダーヴィット Lange, Johann David		○
レール、ヨーハン・ゴットフリート Röhr, Johann Gottfried		○
Vlc		
カリファノー、アルカンジェロ Califano, Arcangelo		
ツィーカ、ヨーゼフ Zyka, Joseph		
ピチネッティ、アントニオ・フェリーチェ Picinetti, Antonio Felice		
Cb		
バルヒ、ゲオルゲ・クリストフ Balch, George Christoph		○
ホルン、ヨーハン・カスパール Horn, Johann Caspar		
Fl		
ゲッツェル、フランツ・ヨーゼフ Götzel, Franz Joseph		
デヴェルデク、ヴェンツェル・ゴットフリート Dewerdek, Wenzel Gottfried		

楽器の種類と奏者の名前	1731年の「宮廷楽団の名簿」に現れた者	初めて別邸に派遣された者
Ob		
ヴォプスト、クリスティアン Wopst, Christian		
ツィンケ、ヨーハン・フランツ Zincke, Johann Franz		
ベソッツィ、アントニオ Besozzi, Antonio		
ベソッツィ、カルロ Besozzi, Carlo		○
Fg		
クリストリープ、フランツ・アドルフ Christlieb, Franz Adolph		○
フリッチェ、ヤーコブ Fritzsche, Jacob		○
マツシュテット、クリスティアン・フリードリヒ Mattstädt, Christian Friedrich		
リッター、カール・クリスティアン Ritter, Carl Christian		
Hr		
ハウデク、カール Haudeck, Carl		
ハンペル、アントン・ヨーゼフ Hampel, Anton Joseph		
Org		
アウグスト、ペーター August, Peter		○

この表に現れる 35 名のうち 1731 年の名簿に見られた者は、ヴァイオリン奏者レーナイスのみである。一方、初めてフベルトゥスブルクに遣わされた者は合計 10 名に上る。彼らのうち、オルガン奏者アウグストは 1746 年の「宮廷楽団の名簿」から名前が記されているが、残りの 9 名は、先に確認したように、1756 年や 1765 年の資料に初めて名前が掲載されていた。従って、彼らは楽団に所属するようになった直後に、別邸への出張に携わった可能性を指摘できよう。

第14項 1747年から1755年までのフベルトゥスブルクへの出張

第 9 項からは、1747 年から 1755 年までの合計 5 回のフベルトゥスブルクへの出張を概観した。楽師長ピゼンデルは、1747 年から毎回この出張に携わっていたが、彼は最後の 1755 年に別邸に向かった「オーケストラ」の構成員に含まれていなかった。

この 5 回の出張において、1731 年の「宮廷楽団の名簿」に名前が記載された奏者の数は、徐々に減少していた。表 2-24 は、これらの出張に携わった奏者全員の数と、彼らのうち 1731 年の名簿に名前が記載された奏者の数、彼らが奏者全員のうちに占めた割合を示している。この表からは、名簿に記載された奏者の数と割合が、特に 1751 年から減少していることが分かる。

表 2-24 フベルトゥスブルクに派遣された奏者の人数と割合（1747 年から 1755 年）

年	1747 年	1749 年	1751 年	1753 年	1755 年
別邸に派遣された奏者の合計人数	32	21	29	25	35
1731 年の「宮廷楽団の名簿」に現れた者の人数と割合	5 (15.6%)	5 (23.8%)	4 (13.7%)	3 (12.0%)	1 (2.8%)

第 1 節において説明したように、ピゼンデルは 1752 年にテーレマンに宛てた手紙において、奏者が高齢のため病気となり、彼自身は初対面の多くの奏者と演奏しなくてはならなかったことを記していた。1731 年の「宮廷楽団の名簿」に現れた奏者は、大半が先代の楽師長ヴォリュミエの時代からドレスデン宮廷に在籍しており、1751 年以降のフベルトゥスブルクへの出張において彼らの数と割合は減っていた。一方、別邸へ遣わされた奏者の中には、宮廷楽団に勤め始めて日が浅いと考えられる奏者が含まれていた。従って、1751 年以降のフベルトゥスブルクへの出張は、ピゼンデルと共に長年演奏してきた奏者がピゼンデルの下において演奏できなくなり、かつ新任の奏者がピゼンデルと演奏した様子を如実に表しているといえよう。

下の表 2-25 は、1747 年から 1755 年までの「宮廷楽団の名簿」に現れる奏者の名前を楽器ごとに示している。そして、1731 年のこの名簿に名前が記されていた奏者には、「○」を付けている。また、各人のフベルトゥスブルクへの出張回数を示し、出張した年を「○」によって表した。

表 2-25 フベルトゥスブルクに派遣された奏者（1747年から1755年）

楽器の種類と奏者の名前	1731年の「宮 廷楽団の名簿」 に現れた者	出張回数	1747年	1749年	1751年	1753年	1755年
VI							
ウーリッヒ、アウグスティン Uhlig, Augustin		5	○	○	○	○	○
カッタネオ、フランチェスコ・マリーア Cattaneo, Francesco Maria		5	○	○	○	○	○
カラッシ、ロレンツォ Carassi, Lorenzo		5	○	○	○	○	○
ピゼンデル、ヨーハン・ゲオルク Pisendel, Johann Georg		4	○	○	○	○	
フィックラー、ヨーハン・ゲオルク Fickler, Johann Georg		4	○		○	○	○
フランチーニ、フランソワ Francini, François		4	○		○	○	○
フント（息子）、フランチェスコ Hunt Francesco		4	○		○	○	○
タッシュェンベルク、クリスティアン・ ヴィルヘルム Taschenberg, Christian Wilhelm		3	○	○		○	
ティーデレ、ヨーゼフ Tiederle, Joseph		3	○	○	○		
ネルダ、ヨーハン・ゲオルク Neruda, Johann Georg		3			○	○	○
フェリーチェ・ピチネッティ Felice Picinetti		3	○			○	○
レーナイス、カール・マティアス Lehneis, Carl Matthias	○	3	○	○			○
ゲーリック、ゴットフリート・フリードリヒ Göricke, Gottfried Friedrich		2				○	○
ツイッヒ、フランツ・ゼラフ Zich, Franz Seraph		2	○		○		
ハンケ、ヨーハン・フランツ Hantke, Johann Franz		2		○	○		
アイゼルト、ヨーハン Eiselt, Johann		1					○
ハラー、フリードリヒ・ゴットロープ Haller, Friedrich Gottlob		1					○
フント、ジャン・パティスタ Hunt, Johann Baptista		1					○
ライン、カール・ヨーゼフ Rhein, Carl Joseph	○	0					
パウアー、ヨーゼフ・マリア Bauer, Joseph Maria		0					
ル・グロ、シモン Le Gros, Simon	○	0					

楽器の種類と奏者の名前	1731年の「宮 廷楽団の名簿」 に現れた者	出張回数	1747年	1749年	1751年	1753年	1755年
Vla							
アーダム、ヨーハン Adam, Johann		5	○	○	○	○	○
フーバー、ヨーハン・ニコラウス Huber, Johann Nicolaus		4	○	○ 187	○	○	○
ライヒェル、ヨーハン・クリストフ Reichel, Johann Christoph	○	3		○	○	○	
ランゲ、ヨーハン・ダーヴィット Lange, Johann David		1					○
レール、ヨーハン・ゴットフリート Röhr, Johann Gottfried		1					○
フーバー、ヨーハン・ニコラウス Huber, Johann Nicolaus		0					
モルゲンシュテルン、ヨーハン・ゴットリーブ Morgenstern, Johann Gottlieb	○	0					
Vlc							
カリファノ、アルカンジェロ Califano, Arcangelo		5	○	○	○	○	○
ツィーカ、ヨーゼフ Zyka, Joseph		4	○		○	○	○
ロッシ、アゴスティーノ・アントーニオ・デ Rossi, Agostino Antonio de	○	3	○	○	○		
ピチネッティ、フェリーチェ Picinetti, Felice		1					○
ピチネッティ、ジョヴァンニ・ マリーア・フェリーチェ Picinetti, Giovanni Maria Felice		0					
Cb							
ケストナー、ゲオルゲ・フリードリヒ Kästner, George Friedrich	○	4	○	○	○	○	
ホルン、ヨーハン・カスパー Horn, Johann Caspar		2			○		○
カイザー、ヨーハン・ザミュエル Kayser, Johann Samuel		1	○				
バルヒ、ゲオルゲ・クリストフ Balch, George Christoph		1					○
Fl							
ゲッツェル、フランツ・ヨーゼフ Götzel, Franz Joseph		5	○	○	○	○	○
デヴェルデク、ヴェンツェル・ゴットフリート Dewerdek, Wenzel Gottfried		5	○	○	○	○	○
ビュッフアルダン、ピエール＝ガブリエル Buffardin, Pierre-Gabriel	○	0					
Ob							
ベソッツィ、アントニオ Besozzi, Antonio		5	○	○	○	○	○

187 肩書はホルン奏者となっている。

楽器の種類と奏者の名前	1731年の「宮 廷楽団の名簿」 に現れた者	出張回数	1747年	1749年	1751年	1753年	1755年
ヴォプスト、クリスティアン Wopst, Christian		4	○		○	○	○
ツインケ、ヨーハン・フランツ Zincke, Johann Franz		4	○		○	○	○
ラッハマン、ゴットリーブ・ベンヤミン Lachmann, Gottlieb Benjamin		3	○	○	○		
ベソツツイ、カルロ Besozzi, Carlo		1					○
フーコー、ヨーハン・ヴィルヘルム Hucho, Johann Wilhelm		0					
Fg							
マツシュテット、クリスティアン・ フリードリヒ Mattstädt, Christian Friedrich		5	○	○	○	○	○
リッター、カール・クリスティアン Ritter, Carl Christian		3			○	○	○
リンケ、ヨーハン・ペーター・カシミール Lincke, Johann Peter Casimir		3	○	○	○		
ベーメ、ヨーハン・ゴットフリート Böhme, Johann Gottfried	○	2	○	○			
クリストリーブ、フランツ・アドルフ Christlieb, Franz Adolph		1					○
フリツェ、ヤーコブ Fritzsche, Jacob		1					○
モラシュ、カール Morasch, Carl		1	○				
クヴァッツ、カスパール・エルンスト Quatz, Caspar Ernst	○	0					
Hr							
ハウデク、カール Haudeck, Carl		5	○	○	○	○	○
ハンペル、アントン・ヨーゼフ Hampel, Anton Joseph		4	○		○	○	○
クネヒテル、ヨーハン・ゲオルク Knechtel, Johann Georg		0					
Lut							
ヴァイス、ジルビウス・レーオポルト Weiss, Silvius Leopold	○	1	○				
Org							
アウグスト、ペーター August, Peter		1					○
リストーリ、ジョヴァンニ・アルベルト Ristori, Giovanni Alberto		1	○				

この表において、合計 5 回の出張全てに携わった者は 10 名に上る。彼らは、いずれもピゼンデルが楽師長に就任した翌年の 1732 年以降に、「宮廷楽団の名簿」に名前が加えられている。彼らの中には、ピゼンデルが苦言を呈したヴァイオリン奏者カッタネオとオーボエ奏者ベソツィの名前が見られる。フベルトゥスブルクへの出張は、ピゼンデルがこれらのイタリア人と頻繁に演奏しなくてはならなかった様子を示唆しているといえよう。

次に、1747 年から 1755 年にかけて頻繁に出張した奏者のうち、ピゼンデルの馬車に同乗した奏者を表 2-26 に示す。この表から明らかなように、ピゼンデルに随行した者は、ヴァイオリン奏者フィークラー、ヴィオラ奏者アーダムまたはライヒェル、コントラバス奏者ケストナーに限られている。

この 4 名は、すでに 1742 年や 1743 年の出張においても、ピゼンデルの馬車に同乗していた。彼らのうちライヒェルとケストナーは、先代の楽師長ヴォリュミエの時代からドレスデン宮廷に在籍していた。一方、ヴァイオリン奏者フィックラーとヴィオラ奏者アーダムは、すでに指摘したように、ピゼンデルが楽師長に就任した直前やその後に、ドレスデン宮廷楽団に加入していた。この 4 名が頻繁にピゼンデルの馬車に乗り込んだことに基づく、ピゼンデルが長年共に演奏してきた奏者を失い、新任の者やイタリア人と演奏しなくてはならなかった状況の下で、この 4 名がピゼンデルから信頼を得ていたことは間違いないであろう。

表 2-26 ピゼンデルの馬車に同乗した奏者たち (1747 年から 1755 年)

	名前 (楽器の種類)
1747 年	アーダム、ヨーハン (Vla) Adam, Johann
	ケストナー、ゲオルゲ・フリードリヒ (Cb) Kästner, George Friedrich
	フィックラー、ヨーハン・ゲオルク VI) Fickler, Johann Georg
1749 年	アーダム (Vla)
	ケストナー (Kb)
	ライヒェル、ヨーハン・クリストフ (Vla) Reichel, Johann Christoph

1751 年	アーダム (Vla)
	ケストナー (Kb)
	フィックラー (VI)
1753 年	アーダム (Vla)
	ケストナー (Kb)
	フィックラー (VI)

第4節 第2章の総括

本章では、楽師長ピゼンデルの配下にあったドレスデン宮廷楽団の奏者のうち、一糸乱れぬ合奏に必要とされた奏者を明らかにすることを試みている。そのために、はじめに『宮廷年鑑』に記載された「宮廷楽団の名簿」に基づき、ピゼンデルが楽師長を務めた 1731 年から 1755 年までにこの楽団に所属した奏者を確認した。さらに、狩猟用別邸フベルトゥスブルクへの秋旅行に関する資料を基に、彼らの中からこの別邸に出張した者を特定した。

1731 年の「宮廷楽団の名簿」に記載された奏者は、クヴァンツを除き全員が、先代の楽師長ヴォリュミエの時代からドレスデン宮廷に所属していた。彼らの中には、乱れのない合奏に欠かせなかったと考えられた、ピゼンデルとほぼ同じ年齢の 7 名の同僚も含まれた。1755 年までのこの名簿において、ヴォリュミエの時代から在籍した奏者の大半は、名前が抹消されていた。先のピゼンデルの同僚たちは、1744 年から 1755 年までの間に死亡、またはこの楽団を去っていた。一方「宮廷楽団の名簿」には、多数の奏者が新たに名前を記載されるようになっていた。従って、ドレスデン宮廷楽団の奏者の大半は、1755 年までに入れ替わっていたと考えられた。

こうした変化が起こる中、フベルトゥスブルクへの出張は行われていた。楽師長ピゼンデルは、1736 年から 1755 年までの合計 11 回の出張のうち、1755 年を除く 10 回に携わっていた。先述のピゼンデルの同僚 7 名のうち、チェロ奏者ロッシ、フルート奏者ビュッファルダン、オーボエ奏者リヒター、ファゴット奏者ベーメ、リユート奏者ヴァイスの 5 名は、1736 年から 1743 年にかけて頻繁にこの別邸に向かい、特に 1741 年、1742 年、1743 年に彼らは全員揃って遣わされていた。またピゼンデルは、フベルトゥスブルクに向かう際、3 名の奏者と共に 1 台の馬車を利用しており、1742 年以降、彼の馬車に同乗する者は、

ヴァイオリン奏者フィックラー、ヴィオラ奏者ライヒェルまたはアーダム、コントラバス奏者ケストナーに限定されていた。

ここまでに名前を挙げた奏者のうち、1736年から1743年にかけてフベルトゥスブルクへ頻繁に出張したピゼンデルの同僚5名は、1718年と1719年に、ピゼンデルと共にヴィーンやモーリツブルクへ出張する奏者に選出されていた。このことから、彼らは少なくとも20年に渡り、ピゼンデルと共に演奏してきたことが分かる。従って、彼らはピゼンデルの音楽に対する考えを深く理解していたと考えられよう。さらにこの5名は、ヴォリュミエの時代から、一糸乱れぬ合奏の中核をピゼンデルと共に担ったと考えられた。これらのことに基づくと、楽師長となったピゼンデルの下において、彼らが乱れのない合奏を実現することに貢献したことは明らかといえる。

さらに、先述のようにピゼンデルの馬車には、ヴァイオリン奏者フィックラー、ヴィオラ奏者ライヒェルないしアーダム、コントラバス奏者ケストナーが繰り返し同乗していた。このように常にピゼンデルに同伴したことから、彼らはこの楽師長の考えを深く理解でき、それを演奏によって体現できた可能性が高い。

以上のことから、ピゼンデルが乱れのない合奏に必要とした奏者は、表 2-27 に示した9名であったと考えられる。この表に示した奏者たちが専門とした楽器は、ライヒェルとアーダムを除き全く重複しておらず、弦楽4部、オブリガート声部を演奏することが多かったホルンを除く全ての木管楽器、通奏低音声部を担ったリュートに及んでいる。これらのことに基づくと、9名はピゼンデルの指示に忠実に従うことができる柔軟な演奏能力を持ち、指導者として同じ楽器の奏者たちを統率していたと考えられよう¹⁸⁸。

¹⁸⁸ピゼンデルの7名の同僚のうちラインとブロッホヴィッツは、ここに挙げた9名の中に含まれていない。彼らが一糸乱れぬ合奏に貢献したことは第1章において指摘したが、この二人はフベルトゥスブルクにほとんど出張していなかった。彼らは、ドレスデンに残っていたため、宮廷楽団本体が不在となった当地の宮廷において、奏者たちを統括していた可能性を指摘できよう。ラインはヴィオラからヴァイオリンへ、ブロッホヴィッツはオーボエからフルートに楽器を変更していた。よって、ラインは弦楽器奏者を、ブロッホヴィッツは木管楽器奏者を指導したのではなかろうか。彼らがフベルトゥスブルクへの出張に選出されなかった要因を解明することは、今後の課題とする。

表 2-27 ピゼンデルの下における合奏に必要であったと考えられる奏者たち

名前（楽器の種類）
フィックラー、ヨーハン・ゲオルク（Vl） Fickler, Johann Georg
アーダム、ヨーハン（Vla） Adam, Johann
ライヒェル、ヨーハン・クリストフ（Vla） Reichel, Johann Christoph
ロッシ、アゴスティーノ・アントーニオ・デ（Vlc） Rossi, Agostino Antonio de
ケストナー、ゲオルゲ・フリードリヒ（Cb） Kästner, George Friedrich
ビュッファルダン、ピエール＝ガブリエル（Fl） Buffardin, Pierre-Gabriel
リヒター、ヨーハン・クリスティアン（Ob） Richter, Johann Christian
ベーメ、ヨーハン・ゴットフリート（Fg） Böhme, Johann Gottfried
ヴァイス、シルビウス・レーオポルト（Lut） Weiss, Silvius Leopold

この9名全員の名前は、「1741年のドレスデンからフベルトゥスブルクへの王の秋旅行」に記された「王の慈悲深い命令によりオペラ上演のためフベルトゥスブルクに派遣された人々の明細」に記されている¹⁸⁹。このことから、彼らはこの年の別邸において、ハッセのオペラ《ヌマ・ポンピリウス》の初演に携わったことが分かる。さらに、この9名の名前は、「1742年のドレスデンからフベルトゥスブルクへの王の旅行」に収められた、ピゼンデルの自筆による「王の楽団からフベルトゥスブルクにおけるオペラ、ディドのために必要な人々の記録」においても見られる。よって《捨てられたディド》の初演に、彼らが携わったことは明らかといえる。

ドレスデン州立兼大学図書館に現存する《ヌマ・ポンピリウス》のパート譜 D-D1, Mus.2477-F-28a は、1741年のフベルトゥスブルクにおける初演と1743年のドレスデン

¹⁸⁹ “Specification dererjenigen Personen, welche auf aller gnädigsten Befehl Ihre Königl. Mait. zu reäsentirung derer Opern nach Hubertsburg beordert worden”, D-D1a, 10006 Oberhofmarschallamt I, Nr. 83a (Königl. Herbst=Reise von Dreßden nach Hubertsburg Anno 1741), fols. 219r-220v.

における再演の両方に用いられた¹⁹⁰。同じくこの図書館に保管されている《捨てられたディド》のパート譜 D-DI, Mus.2477-F-35a は、1742 年のフベルトゥスブルクの初演と 1743 年のドレスデンの再演に使用された¹⁹¹。これらのパート譜に記されたアリアの多くにおいて、独奏のためのオブリガート声部は、奏者に対して一切与えられていない。そして、各パート譜には同一の声部が記譜されているため、奏者たちは互いに同じ声部を演奏したことが分かる¹⁹²。このことは、先の 9 名全員が実際に運弓やアーティキュレーションを揃えて乱れなく合奏したことを強く示唆している。

ピゼンデルの下における一糸乱れぬ合奏に不可欠と考えられた 9 名のうち、ヴァイオリン奏者フィックラー、ヴィオラ奏者のライヒェルとアーダム、チェロ奏者ロッシ、コントラバス奏者ケストナーの 5 名は、これまでほとんど着目されてこなかった。しかし、1784 年に出版されたヒラーの著作『新時代の著名な音楽識者と作曲家の伝記 *Lebensbeschreibungen berühmter Musikgelehrten und Tonkünstler, neuerer Zeit*』においては、以下に引用したように、楽師長ピゼンデルの下において奏者たちが運弓を揃えて合奏したことが特筆されている。

ピゼンデルは、写譜家がパート譜を完成させると、その全てに注意深く目を通し、細かい演奏に関する手順を入念に書き込んだ。ゆえに当時の[ドレスデン宮廷楽団の]楽団員が集まって仕事をするのを見ると、ヴァイオリン奏者は、あたかも隠された機械によって、弓を運ぶ彼らの腕が全て同じ動きにされているようにしか見えなかった。¹⁹³

¹⁹⁰ Johann Adolf Hasse, *Numa pompilio* (D-DI, Mus.2477-F-28a), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=270000672>.

¹⁹¹ Johann Adolf Hasse, *Didone abbandonata* (D-DI, Mus.2477-F-35a), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=270000687>.

¹⁹² この 2 冊のパート譜に記載されたアリアは、日本音楽学会学会誌『音楽学』へ投稿中の論文（2017 年 9 月現在、掲載可否審議中）において、詳細に分析している。

¹⁹³ Johann Adam Hiller, *Lebensbeschreibungen berühmter Musikgelehrten und Tonkünstler neuerer Zeit* (Leipzig 1784; reprint ed. Leipzig: Peters, 1975), pp. 192-193.

ヒラーが説明したように、運弓を揃えて演奏するためには、ピゼンデルによる指示が不可欠である。しかし本章では、先に名前を挙げた弦楽器奏者たちが、この指示に基づきつつ、同一の楽器の奏者を統括した可能性を指摘した。さらに彼らは、ピゼンデルが亡くなる1755年まで、「宮廷楽団の名簿」に名前が記載されている（114頁の表2-3参照）。この楽師長は、1740年代半ば以降、楽団の状態や一部の奏者に不満を述べていたが、彼らはピゼンデルの晩年に至るまで統一された運弓の一翼を担い続け、彼を支えたと考えられる。このことにおいて、彼らは特筆に値するだろう。

さらに、合奏に不可欠な9名のうちビュッフアルダン、リヒター、ヴァイスは、1755年に出版されたクヴァンツの自伝において著名な奏者に数えられているため、彼らは独奏者として名声を成していたと考えられる¹⁹⁴。しかし本章の結論に基づくと、彼らは華々しい独奏を披露する能力だけでなく、他の奏者と協調しつつ合奏する能力も持ち合わせていたと指摘できる。

114頁から始まる表2-3に基づくと、これら9名の名前は、1737年から1746年までの約10年間の「宮廷楽団の名簿」に揃って記載されている。彼らのうち最も遅くこの名簿に名前が記されるようになった者は、ヴィオラ奏者アーダムである。ドレスデン宮廷の資料に見られた1737年1月2日付の記録は、彼がドレスデン宮廷に雇用されたことを示していた。また、オーボエ奏者リヒターは、この9名のうち最初に「宮廷楽団の名簿」から名前が抹消されており、1744年に亡くなっていた。これらのことから、彼ら全員がドレスデン宮廷楽団に在籍した期間は、1737年から1744年までに及ぶといえよう。これらの奏者は、フベルトゥスブルクにおいて、選帝侯の誕生日を祝うオペラを上演するという重要な

¹⁹⁴ Johann Joachim Quantz, “Hrn. Johann Joachim Quanzens Lebenslauf, von ihm selbst entworfen,” in Friedrich Wilhelm Marpurg, *Historisch-kritische Beyträge zur Aufnahme der Musik* (Berlin, 1755; reprint ed. Hildesheim: Georg Olms, 1970), vol. 1, p. 206.

任務に携わっていた。そのため、彼らが本拠地のドレスデンにおいてもピゼンデルが主導した合奏を支えたことは明らかといえよう。

第3章 年俸表や名簿から算出される奏者の数とその配分

本章はヴォリュミエとピゼンデルが楽師長を務めた 1709 年から 1755 年までのドレスデン宮廷楽団を研究対象として、この楽団の楽器編成の特徴を指摘することを目的とする。

序において確認したように、先行研究は年俸表や名簿から人数を算出することによって、この楽団の楽器編成の特徴を明らかにしようとしてきた。しかし、スピッツァーとザスローは、18 世紀のオーケストラの年俸表や名簿の多くには演奏に携わらなかった者も記載されたことに基づき、これらの資料から算出された奏者の数が、実際の演奏における奏者の数、すなわち楽器編成と大きく異なる場合があったことを指摘していた。そのため、ドレスデン宮廷楽団の年俸表や名簿から導かれる人数が、どの程度実際の演奏における奏者の数に類似していたかを検証する必要が生じていた。

本章はこの課題に取り組むために、はじめにヴォリュミエとピゼンデルが楽師長を務めた時代の年俸表や名簿から各楽器の人数を算出して一覧表に提示する。次に、フベルトゥスブルクにおけるオペラ上演のために選出された者のみを示した 3 点の名簿に基づいて、上演のために計画された各楽器の人数を把握する。その後、このオペラ上演における人数を基準として、楽団の年俸表や名簿から求められた人数が、実際の演奏における奏者の数と、どの程度類似するかを検証する。この検証結果を踏まえた上で、これらの資料から導かれるドレスデン宮廷楽団の楽器編成の特徴を指摘する。

第1節 年俸表や名簿に記載された奏者の数の算出

第 1 章と第 2 章では、ドレスデン宮廷において記録された合計 36 点の年俸表や名簿から、奏者や合奏に携わった可能性があった者をできる限り特定した。これらの資料の情報は、第 1 章第 2 節及び第 2 章第 2 節に示し、特に第 1 章第 2 節においては、資料の呼称を規定した。

この 36 点は、ヴォリュミエが楽師長に就任した 1709 年から彼が亡くなった翌年の 1729 年までの 12 点と、ピゼンデルが楽師長に就任した 1731 年から彼が亡くなる 1755 年までの 24 点に分けられる。これらの資料から抽出した者の名前と彼らが演奏したと考えられた楽器の種類は、93 頁から始まる表 1-26 と、114 頁から始まる表 2-3 に示した。192 頁から始まる表 3-1 は、この二つの表に基づき、年俸表や名簿から算出される奏者や合奏に加わった可能性があった者の数を示している。

表 3-1 の最も左の列には、年俸表と名簿の名称を示している。その右には順に、弦楽器、木管楽器、その他の奏者の数を示し、その隣に彼らの合計人数を示した。この表の右側には、奏者全員のうちに占める彼らの割合を示している。

この表における弦楽器、木管楽器、その他の奏者の区分は、表において太い縦線によって区切ったとおりである。すなわち、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス、ヴィオラ・ダ・ガンバの奏者は、弦楽器の奏者に分類している。また木管楽器奏者は、フルート、オーボエ、ファゴット、ホルンの奏者から成る。その他の奏者は、テオルボ、鍵盤楽器（オルガンとチェンバロ）、パンタレオンの奏者の他に、「低音楽器奏者 Bassist」の肩書を持った者、さらに二つの楽器の奏者を兼任している者を含めている。

表 3-1 1709 年から 1755 年までの年俸表や名簿から算出される奏者の数

	弦楽器					木管楽器				その他				合計人数	各楽器の奏者の割合 (%)		
	VI	Vla	Vlc	Cb	Vdg	Fl	Ob	Fg	Hr	Lut	Key	Pan	その他の楽器		弦楽器	木管楽器	その他
1709 年の「オーケストラの年俸表」	5	5	2	1		2	4	2		2	3			26	50.0	30.8	19.2
1711 年の「宮廷楽団の年俸表」	5	6	3	1		3	3	2	2	2	3		Fl&Fg x1	31	48.4	35.5	16.1
1712 年頃の「その他の年俸表」	6	6	3	1		4	3	2	2	2	3		Bas x1	33	48.5	33.3	18.2
1717 年の「宮廷楽団の年俸表」	6	7	4	1		2	4	2	2	2	2	1	Fl&Fg x1	34	52.9	32.4	14.7
1717 年頃の「宮廷音楽家の年俸表」	8	4	5	2		1	5	3	2	2	2	1		35	54.3	31.4	14.3
1718 年頃の「音楽家の年俸表」	7	6	5	1	1	1	4	3	2	1	2	1	Bas x2	36	55.6	27.8	16.7
1719 年の「音楽家の年俸表」	7	6	5		2	1	4	3	2	2	2	1	Bas x2	37	54.1	32.4	13.5
1720 年 5 月の「音楽家の年俸表」	7	6	4		1	1	4	3	2	2	2	1	Bas x2	35	51.4	34.3	14.3
1720 年 9 月の「音楽家の年俸表」	8	5	4		1	1	4	3	2	1	2	1	Bas x2	34	52.9	35.3	11.8
1721 年頃の「宮廷音楽家の年俸表」	8	3	5	5 ¹⁹⁵		1	5	3	2	2	2	1		37	56.8	29.7	13.5
1725 年頃の「宮廷音楽家の年俸表」	8	4	5	5 ¹⁹⁶		1	5	3	2	2	2	1		38	57.9	28.9	13.2
1729 年の「宮廷楽団の名簿」	8	4	5	2		3	5	3	2	2	3	1		38	50.0	34.2	15.8
1731 年の「宮廷楽団の名簿」	7	3	5	2		3	5	3	2	1	2	1		34	50.0	38.2	11.8
1732 年の「宮廷楽団の名簿」	6	3	5	2		3	5	3	2	1	3	1		34	47.1	38.2	14.7
1733 年の「宮廷楽団の名簿」	10	4	6	3		3	6	4	2	1	3	1		43	53.5	34.9	11.6
1735 年の「宮廷楽団の名簿」	12	4	5	3		3	5	5	2	1	3	1		44	54.5	34.1	11.4
1736 年の「宮廷楽団の名簿」	11	4	5	3		3	5	5	2	1	3	1		43	53.5	34.9	11.6
1737 年の「宮廷楽団の名簿」	12	4	5	3		3	5	5	2	1	3	1		44	54.5	34.1	11.4
1738 年の「宮廷楽団の名簿」	12	4	5	3		3	5	5	2	1	3	1		44	54.5	34.1	11.4
1739 年の「宮廷楽団の名簿」	12	4	5	3		3	4	5	2	1	3	1		43	55.8	32.6	11.6
1740 年の「宮廷楽団の名簿」	12	4	4	3		3	4	5	2	1	3	1		42	54.8	33.3	11.9

195 「コントラバス奏者」1名と「ヴィオロン奏者」3名、「ヴィオロン奏者」の見習い1名。

196 「コントラバス奏者」1名と「ヴィオロン奏者」3名、「ヴィオロン奏者」の見習い1名。

	弦楽器					木管楽器				その他				合計人数	各楽器の奏者の割合 (%)		
	VI	Vla	Vlc	Cb	Vdg	Fl	Ob	Fg	Hr	Lut	Key	Pan	その他の楽器		弦楽器	木管楽器	その他
1741年の「宮廷楽団の名簿」	12	4	4	3		3	5	5	2	1	3	1		43	53.5	34.9	11.6
1742年の「宮廷楽団の名簿」	12	4	4	3		3	5	5	2	1	3	1		43	53.5	34.9	11.6
1743年の「宮廷楽団の名簿」	12	4	4	3		3	4	4	2	1	3	1		41	56.1	31.7	12.2
1744年の「宮廷楽団の名簿」	13	4	4	3		3	6	4	2	1	3	1		44	54.5	34.1	11.4
1745年の「宮廷楽団の名簿」	13	4	4	3	1	3	6	4	2	1	2	1		44	56.8	34.1	9.1
1746年の「宮廷楽団の名簿」	15	4	4	3	1	3	6	5	2	1	3	1		48	56.3	33.3	10.4
1747年の「宮廷楽団の名簿」	15	4	4	2	1	3	5	5	2	1	3	1		46	56.5	32.6	10.9
1748年の「宮廷楽団の名簿」	14	4	4	2	1	3	5	5	3	1	3	1		46	54.3	34.8	10.9
1749年の「宮廷楽団の名簿」	14	4	4	2	1	2	5	5	3	1	3	1		45	55.6	33.3	11.1
1750年の「宮廷楽団の名簿」	15	4	4	2	1	2	5	5	3	1	3	1		46	56.5	32.6	10.9
1751年の「宮廷楽団の名簿」	16	4	4	1	1	2	5	5	3	1	3	1		46	56.5	32.6	10.9
1752年の「宮廷楽団の名簿」	16	4	4	1	1	2	5	5	3	0	3	0		44	59.1	34.1	6.8
1753年の「宮廷楽団の名簿」	16	4	4	2	2	2	5	4	3	0	3	0		45	62.2	31.1	6.7
1754年の「宮廷楽団の名簿」	15	4	4	2	2	2	5	4	3	0	3	0		44	61.4	31.8	6.8
1755年の「宮廷楽団の名簿」	15	4	4	2	2	2	5	4	3	0	2	0		43	62.8	32.6	4.7

第2節 楽師長ヴォリュミエの時代の年俸表や名簿に記された奏者の数

先に示した表 3-1 において、ヴォリュミエが楽師長としてドレスデン宮廷に赴任した 1709 年から、彼が亡くなった翌年の 1729 年までの間に書かれた年俸表と名簿は合計 12 点に及んだ(1709 年の「オーケストラの年俸表」から 1729 年の「宮廷楽団の名簿」まで)。これらの資料に記された奏者の合計人数は、26 名から 38 名の間を推移している。そして、奏者全員のうち、弦楽器奏者は 4 割 8 分から 5 割 7 分を占めており、木管楽器奏者は 2 割 7 分から 3 割 5 分を、その他の奏者は 1 割 1 分から 1 割 9 分を占めている¹⁹⁷。弦楽器奏者の人数が最も多く、次に木管楽器が続き、その他の奏者は最も少ないのである。

彼らのうち、その他の奏者における人数配分は、ほとんど変化していない。1709 年の「オーケストラの年俸表」から 1712 年頃の「その他の年俸表」に至るまで、彼らはリュート奏者 2 名と鍵盤楽器奏者 3 名から構成されており、その後は 1729 年の「宮廷楽団の名簿」に至るまで、リュート奏者 2 名、鍵盤楽器奏者 2 名、パンタレオン奏者 1 名を維持している。従って以下では、12 点の年俸表や名簿それぞれについて、弦楽器奏者と木管楽器奏者における人数の配分を詳しく論じる。

第1項 1709 年の「オーケストラの年俸表」

1709 年の「オーケストラの年俸表」には、合計 26 名の奏者が記載されている。そのうち弦楽器奏者は 13 名、木管楽器奏者は 8 名、その他の奏者は 5 名となっている。

弦楽器奏者は、ヴァイオリン 5 名、ヴィオラ 5 名、チェロ 2 名、コントラバス 1 名である。彼らの中では、ヴァイオリンとヴィオラの奏者が同数であり最も人数が多く、次にチェロ奏者が続き、コントラバス奏者は最も少ない。

¹⁹⁷ 本章において種々の割合を述べる際には、小数点以下を切り捨てる。

第1章において確認したように、この「オーケストラの年俸表」には、3種類のヴィオラ、すなわち「オート・コントル」、「ターユ」、「ヴィオラ」の奏者が見られた。このように3種類のヴィオラの奏者が在籍することは、スピッツァーやザスローが提示したフランスのオペラ座の楽団や「王の24のヴァイオリン」、「王の小さなヴァイオリン」の人数表に表れていた。この三つの楽団の人数表のうち、唯一「王の小さなヴァイオリン」においては、ドレスデンの「オーケストラの年俸表」と同様に、ヴァイオリンとヴィオラの奏者の数が等しい。表3-2は、スピッツァーとザスローによって示された「王の小さなヴァイオリン」の表に見られる奏者の数を示している¹⁹⁸。

表 3-2 「王の小さなヴァイオリン」に所属した奏者の数（1694年から1702年）¹⁹⁹

	ヴァイオリン Dessus	オート・コントル Haute contre	ターユ Taille	カント Quinte	低音 Basse	木管楽器	合計人数
1692年	7	2	3	2	4	2 高音のクルムホルン dessus de cromor 2 バッソン bassons	22
1698年	7	2	3	2	5	2 高音のオーボエ dessus d'hautobis 2 バッソン	23
1702年	7	2	3	2	5	2 オーボエ 2 バッソン	23

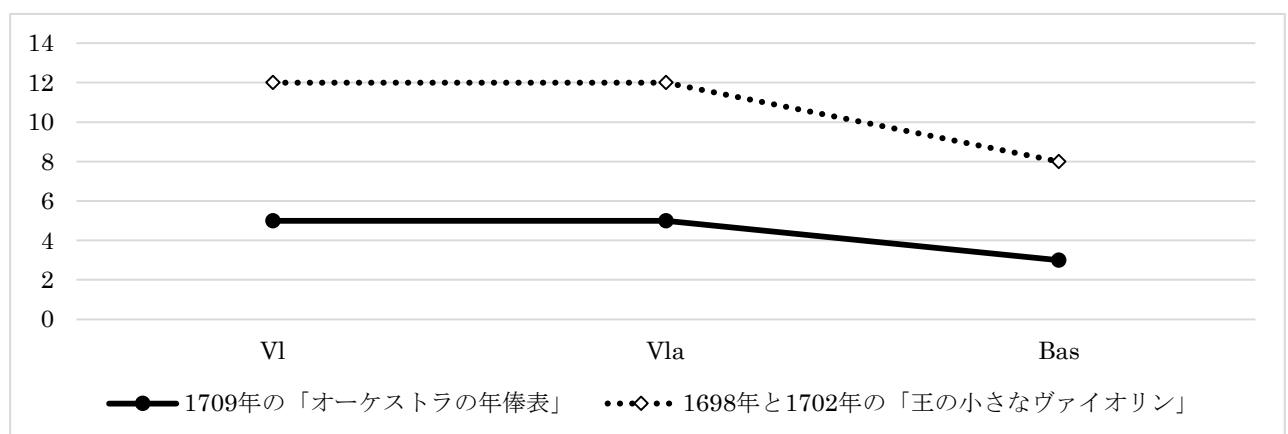
この表において、ヴァイオリン奏者は7名であり、ヴィオラ奏者、すなわちオート・コントル、ターユ、カントの合計人数も同様に7名である。さらに1698年と1702年におい

¹⁹⁸ John Spitzer and Neal Zaslaw, *The Birth of the Orchestra: History of an Institution, 1650-1815* (Oxford: Oxford University Press, 2004), p. 79.

¹⁹⁹ スピッツァーとザスローは、1664年から1712年までのこの合奏団に所属した奏者の数を示している。1690年までは奏者の合計人数が記されているのみであり、1692年からは奏者の合計人数に加え、各楽器の奏者の数も示されている。表3-2は、各楽器の奏者の数を把握できる1692年から、ドレスデンの「オーケストラの年俸表」が書かれる前の1702年までを引用している。

て、「低音」弦楽器の奏者は 5 名であり、ヴァイオリン奏者やヴィオラ奏者よりも 2 名少ない。ドレスデンの「オーケストラの年俸表」においても、チェロとコントラバスの奏者は合計 3 名であり、各 5 名のヴァイオリン奏者やヴィオラ奏者よりも 2 名少ない。下の図 3-1 は、こうした 1709 年の「オーケストラの年俸表」と、1698 年や 1702 年の「王の小さなヴァイオリン」の弦楽器奏者の数を比較している。この図において、2 本の折れ線がほぼ並行していることから明らかなように、1709 年の「オーケストラの年俸表」に記された弦楽器奏者の人数配分は、「王の小さなヴァイオリン」の人数表に非常に似ている。

図 3-1 弦楽器の人数の比較（1709 年の「オーケストラの年俸表」及び 1698 年と 1702 年の「王の小さなヴァイオリン」）



一方、「オーケストラの年俸表」において、合計 26 名のうちに占める 8 名の木管楽器奏者の割合は 3 割に上る（192 頁から始まる表 3-1 参照）。しかし、表 3-3 に示したように、「王の小さなヴァイオリン」の人数表において、この楽器の奏者は 2 割以下にとどまっている。また、「オーケストラの年俸表」には、フルート奏者 2 名、オーボエ奏者 4 名、ファゴット奏者 2 名が見られ、オーボエ奏者が最も多く、フルート奏者とファゴット奏者は同数となっている。このことは、「王の小さなヴァイオリン」の表 3-2 に現れていないため、木管楽器奏者の人数配分には、著しい相違が認められるといえよう。

表 3-3 「王の小さなヴァイオリン」における木管楽器奏者の割合

	1692 年	1698 年	1702 年
奏者の合計数	22	23	23
木管楽器奏者の数	4	4	4
木管楽器奏者の割合 (%)	18.2	17.4	17.4

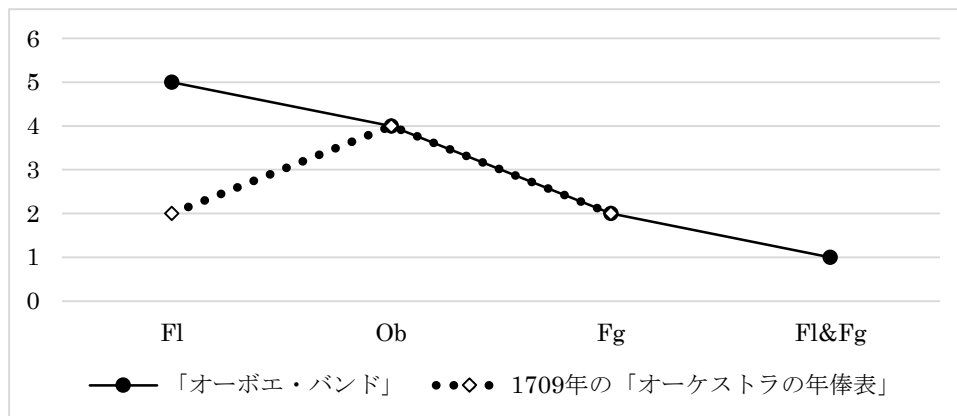
ザクセン選帝侯フリードリヒ・アウグスト 1 世は、1694 年に、当時オスマン・トルコから攻撃を受けていたヴィーンに出兵した。彼はこの地において、木管楽器奏者のみによって構成された楽団「オーボエ・バンド」を雇い、この楽団をドレスデンに連れ帰った。ドレスデン宮廷において記された資料には、「1696 年にヴィーンから [ドレスデンに] 来た音楽家」と題されたものがある。オレスキーヴィッツは、この資料に記載された「オーボエ・バンド」の奏者の名前と彼らが演奏した楽器の種類を表によって提示した²⁰⁰。この人名表によると、ヴィーンから来た奏者は、フルート 5 名、オーボエ 4 名、ファゴット 2 名、ファゴットとフルートの両方を演奏する 1 名から成っていた。図 3-2 は、「オーボエ・バンド」を構成した彼らと、「オーケストラの年俸表」における木管楽器奏者の数を比較している。この表から分かるように、「オーボエ・バンド」と「オーケストラの年俸表」のオーボエ奏者とファゴット奏者の数は、一致している²⁰¹。

²⁰⁰ Mary A. Oleskiewicz, *Quantz and the Flute at Dresden: His Instruments, his Repertory and their Significance for the Versuch and the Bach Circle* (Durham, NC, Duke Univ., iss., 1998), pp. 20-24.

²⁰¹ 「オーボエ・バンド」においては、5 名のフルート奏者に対して、4 名のオーボエ奏者と 2 名のファゴット奏者が充てられている。「オーケストラの年俸表」を俯瞰すると、先のフルート奏者と同数の 5 名のヴァイオリン奏者に対して、オーボエ奏者は 4 名、ファゴット奏者は 2 名であるという類似が見られる。

図 3-2 木管楽器の人数の比較

(「オーボエ・バンド」と 1709 年の「オーケストラの年俸表」)



以上のように、1709 年の「オーケストラの年俸表」から算出された弦楽器奏者の数はフランスの「王の小さなヴァイオリン」の人数表に酷似しており、オーボエ奏者とファゴット奏者の数は、1696 年にドレスデンに召された「オーボエ・バンド」の人名表と等しかったことを指摘できる。従って、ドレスデン宮廷において 1709 年に組織された「オーケストラ」は、「王の小さなヴァイオリン」や「オーボエ・バンド」の構成を取り入れていた可能性があるといえる。

フランスの宮廷に勤めていた楽師長ヴォリュミエによって、この国の楽団に関する情報が、ドレスデン宮廷に持ち込まれたことは十分に考えられる。一方、侯子であったフリードリヒ・アウグスト 1 世は、1687 年から 1689 年にかけて諸国を遊学していた。「ザクセン選帝侯フリードリヒ・アウグスト 1 世の外国への旅行」と題された資料集には、パリからドレスデンに送られた 2 通の手紙が見られる²⁰²。その一つは 1687 年 9 月 12 日の日付が記されており、もう一つには 1687 年 9 月 15 日と書かれている。この 2 通の手紙の間には、さらに「月次出費目録 Verzeichniß ordinari-Monath. Ausgaben」が綴じられており、

²⁰² “Hertzog Friedrich August I zu Sachsen Hochfürst: Durch: Reise in fremde Lande. Ao 1686-95”, D-Dla, Geheimer Rat, Gemeimes Archiv, Loc. 10291/17, folios without number.

この目録は「オペラと劇、ヴェルサイユへの旅行のため für Reisen nach Versailles, Opera, und Comedien」に 160 ターラーが支払われたことを示している²⁰³。「王の小さなヴァイオリン」の奏者たちは、1680 年以降ヴェルサイユに宿泊していたため、フリードリヒ・アウグスト 1 世は、この楽団の演奏を直接鑑賞できたと考えられる²⁰⁴。よって、ドレスデンにおいて組織された「オーケストラ」における弦楽器奏者の人数配分は、フリードリヒ・アウグスト 1 世の意見に基づいた可能性を指摘できる。

第2項 1711 年から 1717 年までの年俸表

1711 年の「宮廷楽団の年俸表」と 1712 年の「その他の年俸表」、1717 年の「宮廷楽団の年俸表」の 3 点に記された奏者は 31 名を超えている（192 頁から始まる表 3-1 参照）。この人数は、26 名であった 1709 年の「オーケストラの年俸表」よりも 5 名以上多い。この 3 点から算出される弦楽器、木管楽器、その他の奏者の割合は、先の表 3-1 に示した。その数値を、1709 年の「オーケストラの年俸表」と比較した場合の差を、表 3-4 に示した。この表から明らかなように、各割合の差はいずれも 4 分以内に収まっている。そのため、「オーケストラの年俸表」における弦楽器、木管楽器、その他の奏者の割合は、1717 年の「宮廷楽団の年俸表」まで維持されているといえる。

²⁰³ Karl Czok, *August der Starke und seine Zeit: Kurfürst von Sachsen, König in Polen* (München: Piper, 2012), p. 34; “Verzeichniß der ordinari-Monathl. Ausgaben”, D-Dla, Geheimer Rat, Gemeines Archiv, Loc. 10291/17, folio without number.

²⁰⁴ John Spitzer and Neal Zaslaw, *The Birth of the Orchestra: History of an Institution, 1650-1815* (Oxford: Oxford University Press, 2004), p. 143; Bernard Bardet, “Violons, Petits,” in *Dictionnaire de la musique en France aux XVIIe et XVIIIe siècles*, edited by Marcelle Benoit (Paris: Fayard, 1992), p. 724.

表 3-4 各楽器の割合における数値の差

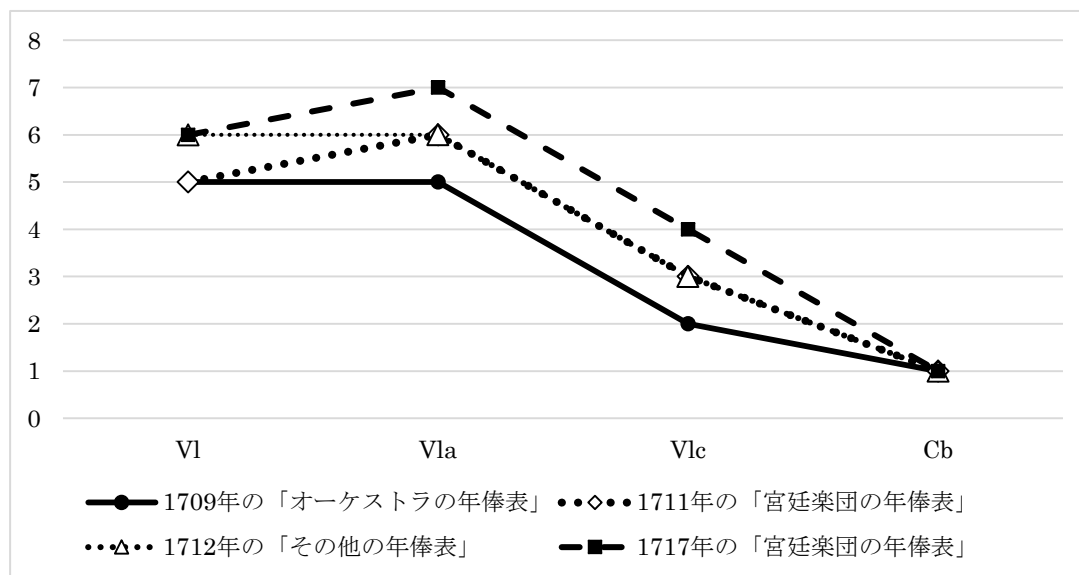
(1709年の「オーケストラの年俸表」を基準とした場合)

(%)	弦楽器	木管楽器	その他
1711年の「宮廷楽団の年俸表」	-1.6	+4.7	-3.1
1712年の「その他の年俸表」	-1.5	+2.5	-1.0
1717年の「宮廷楽団の年俸表」	+2.9	+1.6	-4.5

図 3-3 は、1709年の「オーケストラの年俸表」から1717年の「宮廷楽団の年俸表」までの4点の資料から抽出された、弦楽器奏者の数を表している。この図において、各折れ線はほぼ並行しているため、「オーケストラの年俸表」に見られた人数配分は、1717年の「宮廷楽団の年俸表」まで反映されているといえよう。

図 3-3 弦楽器の人数の比較

(1709年の「オーケストラの年俸表」から1717年の「宮廷楽団の年俸表」まで)



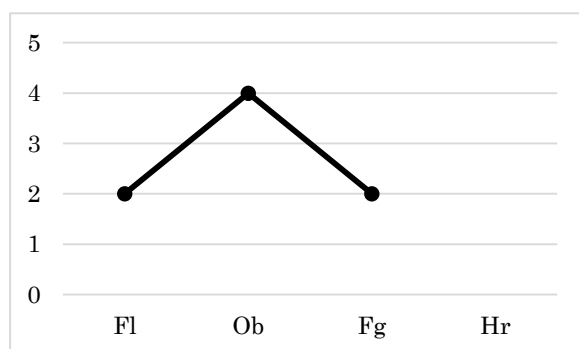
192 頁から始まる表 3-1 に示したように、1709 年の「オーケストラの年俸表」にホルン奏者は見られないが、1711 年以降の資料には、この楽器の奏者が記載されている。図 3-4 は、「オーケストラの年俸表」から 1717 年の「宮廷楽団の年俸表」までの資料から求めら

れた各木管楽器の人数を示している。この図に示した折れ線は、二つの種類に分類できよう。一つは1711年の「宮廷楽団の年俸表」や1712年頃の「その他の年俸表」に現れているものであり、フルート奏者とオーボエ奏者が、ホルン奏者やファゴット奏者よりも多い。もう一つは、オーボエ奏者が最も多い4名であり、他は2名のものである。これは1709年の「オーケストラの年俸表」と1717年の「宮廷楽団の年俸表」に見られる。

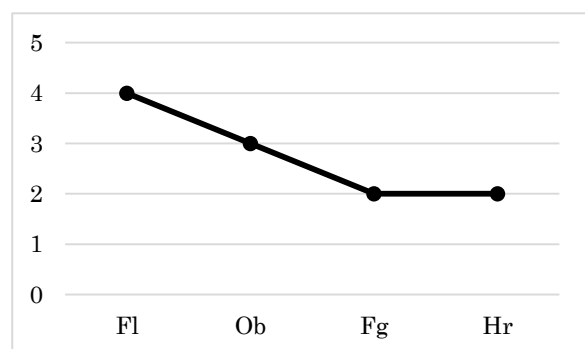
図 3-4 木管楽器の人数の比較

(1709年の「オーケストラの年俸表」から1717年の「宮廷楽団の年俸表」まで)

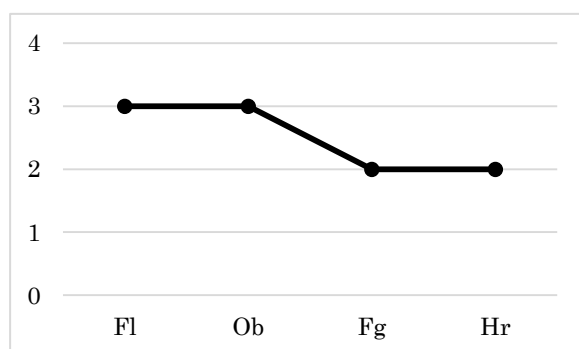
1709年の「オーケストラの年俸表」



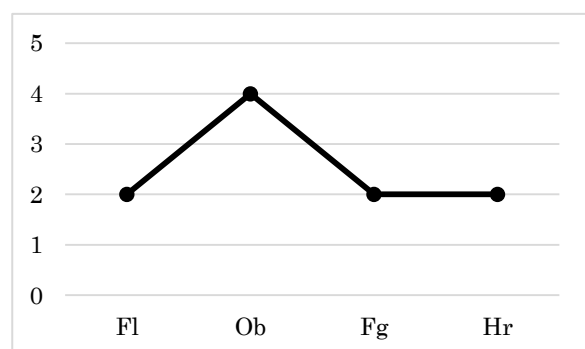
1712年頃の「その他の年俸表」



1711年の「宮廷楽団の年俸表」



1717年の「宮廷楽団の年俸表」



1709年の「オーケストラの年俸表」に比べ、1711年の「宮廷楽団の年俸表」や1712年頃の「その他の年俸表」、1717年の「宮廷楽団の年俸表」に記された奏者の数は5名以上多かった。しかし、「オーケストラの年俸表」に見られた弦楽器奏者と木管楽器奏者の人数

配分の傾向は、共に 1717 年の「宮廷楽団の年俸表」に現れていた。このことに基づくと、1717 年のドレスデン宮廷楽団は、8 年前に組織された「オーケストラ」よりも規模が大きかったが、奏者の人数配分を継承していたと考えられる。

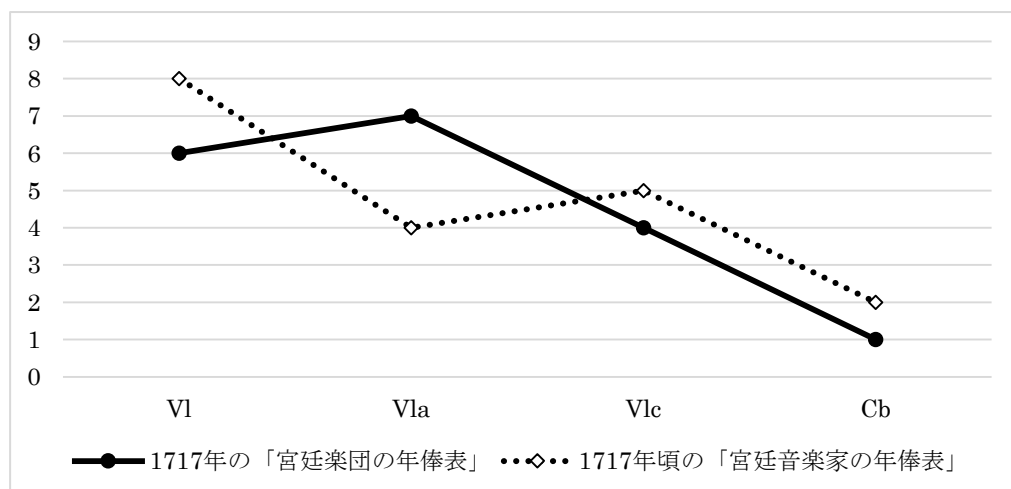
第3項 1717 年頃の「宮廷音楽家の年俸表」

1717 年頃の「宮廷音楽家の年俸表」に現れる奏者は合計 35 名であり、1717 年の「宮廷楽団の年俸表」よりも、僅かに 1 名多いのみである。さらに弦楽器、木管楽器、その他の奏者の割合は、数値の差が僅か 1 分以下になっている。

図 3-5 は、これらの資料に記載された弦楽器奏者の数を示している。この図から明らかのように、チェロ奏者よりもコントラバス奏者が 3 名少ないことは共通している。しかし、1717 年の「宮廷楽団の年俸表」において、ヴァイオリンとヴィオラの人数は 1 名異なるのみであるが、1717 年頃の「宮廷音楽家の年俸表」において、その差は 4 名に広がっており、配分が著しく異なる。

図 3-5 弦楽器の人数の比較

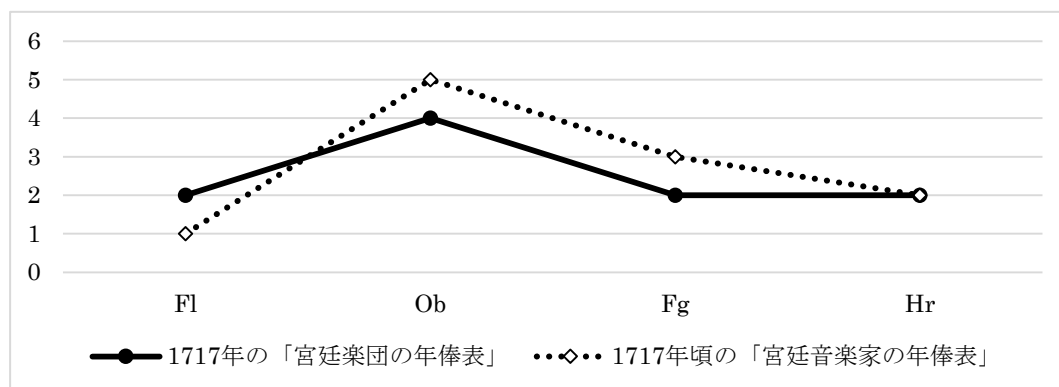
(1717 年の「宮廷楽団の年俸表」と 1717 年頃の「宮廷音楽家の年俸表」)



下の図 3-6 は、この二つの資料に記載された木管楽器の人数を示している。この図から分かるように、オーボエ奏者が最も多いことは共通している。しかし 1717 年の「宮廷楽団の年俸表」においては、フルート、ファゴット、ホルンの奏者が同じ 2 名であるのに対し、1717 年頃の「宮廷音楽家の年俸表」において、彼らのうちフルート奏者は 1 名減少して僅か 1 名になり、ファゴット奏者は 1 名増加して 3 名となっているため、彼らの間には 2 名の差が生じている。

図 3-6 木管楽器の人数の比較

(1717 年の「宮廷楽団の年俸表」と 1717 年頃の「宮廷音楽家の年俸表」)



以上のように、1717 年の「宮廷楽団の年俸表」と比較した場合、1717 年頃の「宮廷音楽家の年俸表」に見られる奏者の合計人数や、弦楽器、木管楽器、その他の奏者の割合は、ほぼ同じであった。しかし、ヴァイオリン、ヴィオラ、ファゴット、フルートの人数配分には違いが見られた。その原因を探るため、本節では次に、これらの年俸表に記された奏者を確認する。表 3-5 は、彼らの名前と、各奏者の肩書から推定された楽器の種類を示している (43 頁の表 1-6 及び 60 頁の表 1-11 と比較)。さらに特定の奏者を容易に参照できるようにするため、各人には番号を付した。

表 3-5 奏者と彼らに割り当てられた楽器の種類

(1717年頃の「宮廷音楽家の年俸表」と1717年の「宮廷楽団の年俸表」)

	名前	1717年の「宮廷楽団の年俸表」	1717年頃の「宮廷音楽家の年俸表」
1	ジャン＝バティスト・ヴォリュミエ Jean-Baptiste Woulmyer	[VI]	[VI]
2	アーダム・リビツキ Adam Rybizki	VI	VI
3	フランチェスコ・フント Francesco Hunt	VI	VI
4	フランソワ・ル・リシュ François Le Riche		VI
5	ヨーハン・フリードリヒ・ロッティ Johann Friedrich Lotti	VI	VI
6	ヨーハン・ゲオルク・ピゼンデル Johann Georg Pisendel	VI	VI
7	シモン・ル・グロ Simon Le Gros	VI	VI
8	Carl Joseph Rhein カール・ヨーゼフ・ライン	Vla	VI
9	クリスティアン [マルティン]・ゴルデ Christian [Martin] Golde	Vla	Vla
10	ゲオルグ・フリードリヒ・ケストナー George Friedrich Kästner	Vla	Cb
11	ヨーハン・クリストフ・ライヒェル Johann Christoph Reichel	Vla	Vla
12	ヨーハン・ゲオルク・レーナイス Johann Georg Lehneis	Vla	Vla
13	ヨーハン・ハインリッヒ・プレトーリウス Johann Heinrich Praetorius	Vla	
14	ミヒャエル・ペツシュマン Michael Petzschmann	Vla	Vla
15	アゴスティーノ・アントーニオ・デ・ロッシ Agostino Antonio de Rossi	Vlc	Vlc
16	ジョヴァンニ・マリーア・フェリーチェ・ピチネッティ Giovanni Maria Felice Picinetti	Vlc	Vlc
17	ジャン・バティスト・ジョゼフ・デュ・オロンデル Jean Baptiste Joseph Du Haulondel	Vlc	Vlc
18	ジャン＝バティスト・プラシュ・デュ・ティロワ Jean-Baptiste Prache du Tilloy	Vlc	Vlc
19	ロベール・デュ・オロンデル Robert Du Haulondel		Vlc
20	ヤン・ディースマス・ゼレンカ Jan Dismas Zelenka	Cb	Cb
21	ダーヴィット [クリスティアン]・ヴァイゲルト David [Christian] Weigelt	F1	Ob

	名前	1717年の「宮廷楽団の年俸表」	1717年頃の「宮廷音楽家の年俸表」
22	ジャン・カデ Jean Cadet	Fl&Fg	Fg
23	Pierre-Gabriel Buffardin ピエール＝ガブリエル・ビュッフアルダン	Fl	Fl
24	カール・ヘンリオン Charles Henrion	Ob	Ob
25	ヨーハン・クリスティアン・リヒター Johann Christian Richter	Ob	Ob
26	ヨーハン・マルティン・ブロッホヴィッツ Johann Martin Blochwitz	Ob	Ob
27	マルティン・ザイフェルト Martin Seyfert	Ob	Ob
28	カスパー・エルンスト・クヴァッツ Caspar Ernst Quatz	Fg	Fg
29	ヨーハン・ゴットフリート・ベーメ Johann Gottfried Böhme	Fg	Fg
30	アーダム・フランツ・ザム Adam Franz Samm	Hr	Hr
31	ヨーハン・アーダルベルト・フィッシャー Johann Adalbert Fischer	Hr	Hr
32	フランチェスコ・アリゴニ Francesco Arigoni	Lut	Lut
33	ゴットフリート・ベントレー Gottfried Bentley	Lut	Lut
34	クリスティアン・ペツォルト Christian Petzold	Org	Org
35	ヨーハン・ヴォルフガング・シュミット Johann Wolfgang Schmidt	Org	Org
36	パンタレオン・ヘーベンシュトライト Pantaleon Hebenstreit	Pan	Pan

第1章において説明したように、1717年の「宮廷楽団の年俸表」に現れる合計34名のうち、ヴァイオリン奏者プレトーリウス（13人目）以外は、1717年頃の「宮廷音楽家の年俸表」に名前が記されている。また、「宮廷音楽家の年俸表」のみに現れる者は、ヴァイオリン奏者ル・リシュ（4人目）とチェロ奏者ロベール・デュ・オロンデル（19人目）の2名のみである。このように、これらの資料に現れる奏者自体は、ほとんど変化していない。

しかし、「宮廷楽団の年俸表」において、ヴァイオリン奏者とヴィオラ奏者は1名異なるのみであったが、「宮廷音楽家の年俸表」において、その差は4名に広がっていた。「宮廷楽団の年俸表」に記載されたヴィオラ奏者は、表 3-5 の8人目から14人目に示したライン、ゴルデ、ケストナー、ライヒェル、レーナイス、プレトリーウス、ペッチュマンである。しかし、プレトリーウスは「宮廷音楽家の年俸表」に現れていなかった。さらに、ライン（8人目）はヴァイオリンに移り、ケストナー（10人目）はコントラバスに転向している。その結果、「宮廷音楽家の年俸表」においてヴィオラ奏者は4名に減少している。

「宮廷楽団の年俸表」に見られる6名のヴァイオリン奏者全員は、「宮廷音楽家の年俸表」においても、この楽器の奏者として記載されている（1人目から7人目）。「宮廷音楽家の年俸表」のヴァイオリン奏者には、さらに2名が加わっている。ヴィオラ奏者であったラインと、1717年の「宮廷楽団の年俸表」に見られなかったル・リシュである。後者は、オーボエの名手であった²⁰⁵。このように、ヴィオラ奏者は7名から4名に減少する一方、ヴァイオリン奏者は6名から8名に増加したことにより、1717年頃の「宮廷音楽家の年俸表」において、彼らの人数の差は4名に広がったのである。

「宮廷楽団の年俸表」においてフルートとファゴットの奏者は同数であったが、「宮廷音楽家の年俸表」において彼らの間には2名の差が生じていた。カデ（22人目）は、「宮廷楽団の年俸表」にフルートとファゴットの奏者として記載されているが、「宮廷音楽家の年俸表」においてファゴットのみを専門としているため、ファゴット奏者は1名増員しているのである。また、「宮廷楽団の年俸表」においてフルートを専門とする奏者は、ヴァイゲルト（21人目）とビュッフアルダン（23人目）であるが、ヴァイゲルトは「宮廷音楽家の年俸表」にオーボエ奏者として記載され、フルート奏者はビュッフアルダンのみとなっている。フルート奏者とファゴット奏者の間に2名の差が生じたことは、このことに起因している。

²⁰⁵ Bruce Haynes, *The Eloquent Oboe: A History of the Hautboy from 1640-1760* (Oxford: Oxford University Press, 2007), pp. 325-329.

第1章においては、ドレスデン宮廷楽団に所属した奏者の中に、1717年以降、演奏する楽器を変更した者がいたことを指摘した。1717年頃の「宮廷音楽家の年俸表」が1717年の「宮廷楽団の年俸表」と異なった人数配分を示したことは、このことと深く結びついているのである。

ところで、ドレスデン宮廷は1717年にイタリアから多くの音楽家を雇用していた。第1章において確認したように、ヴェネツィアから赴任した音楽家の中には、オペラ作曲家アントニオ・ロッティが含まれた。彼の名前は、ドレスデン宮廷において記された1718年8月23日付の「イタリアのオペラ関係者とその年間契約の明細」に見られ、この明細にはジローラモ・ペルズネッリの名前も書かれていた。

ロッティとペルズネッリの名前は、セルフリッジ＝フィールドによって示された、ヴェネツィアのサン＝マルコ聖堂に所属した音楽家の一覧表に現れている²⁰⁶。この表に基づくと、ロッティは1692年に第2オルガン奏者の地位に就き、1704年には主席オルガン奏者に昇格した。またペルズネッリは、1709年から1712年にかけて同聖堂に雇われている。以上のことから、ロッティとペルズネッリは、1709年から1712年にかけて、共にサン＝マルコ聖堂に所属していたことが分かる。

さらにセルフリッジ＝フィールドは、1679年から1720年にかけてサン＝マルコ聖堂に所属した奏者の数を表に示した²⁰⁷。表3-6は、この表のうち、ロッティが第2オルガン奏者の地位に就いた1692年から、彼がドレスデンに赴任した1717年までの人数を示している。

²⁰⁶ Eleanor Selfridge-Field, *Venetian Instrumental Music from Gabrieli to Vivaldi* (Oxford: Blackwell, 1975), pp. 292-308.

²⁰⁷ Eleanor Selfridge-Field, "The Viennese Court Orchestra in the Time of Caldara," in *Antonio Caldara: Essays on his Life and Times*, edited by Brian W. Pritchard (Aldershot: Scolar Press, 1987), p. 119.

表 3-6 サン=マルコ聖堂に所属した奏者の数（1692年から1717年まで）

年	VI	Vla	Vlc	Cb	Vgr ²⁰⁸	Ct	Trp	Trb	Ob	Fg	Hp ²⁰⁹	Lut	合計人数
1692	15	5	4	2	1	4	2	5		2	1	5	46
1693	14	5	4	3	1	4	2	5		2	1	5	46
1694	13	5	4	3	1	4	2	5		2	1	5	45
1695	13	4	3	3	1	3	2	5		2	1	4	41
1696	13	4	3	3	1	3	2	5		2	1	4	41
1697	12	4	3	3	1	3	2	5			1	4	38
1698	12	4	3	3	1	2	2	5	1		1	4	38
1699	12	4	3	3	1	2	2	5	1		1	4	38
1700	12	4	3	4	1	2	2	5	1		1	4	39
1701	12	5	3	3	1	2	2	4	1		1	4	38
1702	12	5	3	3	1	2	2	4	1		1	4	38
1703	12	5	3	3	1	2	2	4	1		1	4	38
1704	12	5	3	3	1	2	2	4	1		1	4	38
1705	12	5	3	3	1	2	2	4	1		1	4	38
1706	12	5	3	3	1	2	2	4	1		1	4	38
1707	12	5	3	3	1	2	2	3	1		1	4	37
1708	12	5	3	3	1	2	2	3	1		1	4	37
1709	8	4	3	3		1	2	1	1			3	26
1710	8	4	3	3		1	2	1	1			3	26
1711	8	4	3	3		1	2	1	1			3	26
1712	8	3	2	2		1	1	1	1			3	22
1713	5	3	2	2		1	1	1	1			3	19
1714	8	6	1	3		1	1	1	1			3	25
1715	8	6	1	3			1	1	1			2	23
1716	9	4	1	3			1	1	1			1	21
1717	9	4	1	3			1	1	1			1	21

ドレスデン宮廷において記された 1717 年頃の「宮廷音楽家の年俸表」において、ヴァイオリン奏者は 8 名、ヴィオラ奏者は 4 名になっていた。表 3-6 に基づくと、サン=マルコ聖堂は、ロッチェとペルヅネッリが在籍していた 1709 年から 1711 年にかけて、8 名のヴァイオリン奏者と、4 名のヴィオラ奏者を擁している。従って、「宮廷音楽家の年俸表」に見られたヴァイオリンとヴィオラの奏者の人数配分は、当時ヴェネツィアから新たに赴任した彼らによって伝えられた可能性を指摘できる。

²⁰⁸ Violone grosso

²⁰⁹ Harp

スピッツァーとザスローは、18世紀のイタリアのオーケストラを論じた際に、「給料表に『オーボエ』として記載された奏者は、フルートや、時にはファゴット、この世紀の終わりにはクラリネットをも演奏した」と説明している²¹⁰。このことから、イタリアのオーケストラにおいては、オーボエ奏者が、フルートをはじめとする他の木管楽器の奏者を兼任していたことが分かる。スピッツァーとザスローは、合計19点の資料に基づき、1709年から1799年までのイタリアの楽団に所属した奏者の数を表に示した²¹¹。彼らの表は、この19点の資料のうち、14点に2名以上のオーボエ奏者が記載されている一方、16点にフルート奏者は記されていないことを表している。イタリアの楽団においては、オーボエ奏者がフルート奏者を兼ねていた。スピッツァーとザスローによって示された楽団の人数表には、複数のオーボエ奏者が見られるが、フルート奏者は現れていないのである。

ドレスデン宮廷の記録であった1717年頃の「宮廷音楽家の年俸表」には、オーボエを含む木管楽器の奏者は複数記載されていたが、フルート奏者は僅か1名のみであった。このことは、スピッツァーとザスローによって提示されたイタリアの楽団の人数表に表れていた傾向に沿っているといえるだろう。さらに、「宮廷音楽家の年俸表」にオーボエ奏者として現れたヴァイゲルトは、元来フルート奏者であった。そのため、イタリアの楽団においてオーボエ奏者がフルート奏者を兼任したように、オーボエ奏者となったヴァイゲルトも、必要に応じてフルートを演奏したことは十分に考えられる²¹²。

このように、1717年頃の「宮廷音楽家の年俸表」は、弦楽器奏者と木管楽器奏者の両方の人数配分に、イタリアの楽団の人数表との類似を指摘できる。

²¹⁰ John Spitzer and Neal Zaslaw, *The Birth of the Orchestra: History of an Institution, 1650-1815* (Oxford: Oxford University Press, 2004), p. 143.

²¹¹ *Ibid.*, pp. 144-147.

²¹² 第1章第6節第1項において指摘したように、1717年頃の「宮廷音楽家の年俸表」にオーボエ奏者として記録されたブロッホヴィッツも、フルートを演奏した可能性がある。

第4項 1718年頃から1720年9月までの「音楽家の年俸表」

192頁から始まる表 3-1において、「音楽家の年俸表」は合計4点に上る。それらは1718年頃、1719年、1720年5月、1720年9月のものとなっている。これらの「音楽家の年俸表」において、奏者の合計人数は34名から37名までを保っているため、ほとんど変化していないといえる。この4点における弦楽器、木管楽器、その他の奏者の割合のうち、最小値と最大値を下の表 3-7に示す。この表において、弦楽器とその他の奏者の最小値と最大値の差はそれぞれ5分以下であることから明らかなように、割合はほぼ一定である。また木管楽器奏者のみは、数値の差が比較的大きい7分になっている。しかし、1718年頃以外の3点の「音楽家の年俸表」において、この割合の変動は3割2分から3割5分にとどまっている（表 3-1参照）。

表 3-7 各楽器の割合における最小値と最大値

(1718年頃から1720年9月までの「音楽家の年俸表」)

(%)	弦楽器	木管楽器	その他
最小値	51.4	27.8	11.8
最大値	55.6	35.3	16.7

表 3-1に基づくと、1718年頃から1720年5月までの3点の「音楽家の年俸表」において、ヴァイオリンとヴィオラの奏者は、それぞれ一貫して7名と6名であり、ほぼ同じ人数になっている。このことは、1709年の「オーケストラの年俸表」から1717年の「宮廷楽団の年俸表」までの資料に類似している。そして、ヴァイオリンとヴィオラの奏者が同数であることは、フランスの「王の小さなヴァイオリン」の人数表に見られた特徴であった。よって、先の3点の「音楽家の年俸表」における弦楽器奏者の配分は、フランスの楽団のものを引き継いでいるといえよう。

合計4点の「音楽家の年俸表」に記載された木管楽器奏者は、いずれもフルート1名、オーボエ4名、ファゴット3名、ホルン2名となっている。この人数は、1717年頃の「宮

廷音楽家の年俸表」に酷似しているといえよう。オーボエ奏者が1名少ないことが異なるのみだからである。1717年頃の「宮廷音楽家の年俸表」は、イタリアの楽団の人数表に似た人数配分を示していた。このことから、4点の「宮廷音楽家の年俸表」における木管楽器奏者の人数配分は、イタリアの楽団の人数表に見られたものを継承していることが分かる。

以上のように、4点の「音楽家の年俸表」には、共通する奏者の割合や人数が随所に見られる。第1章において確認したように、1717年から1720年までのドレスデン宮廷には、楽師長ヴォリュミエの下でフランスの奏法を習得していた奏者と、イタリアから赴任した音楽家が共に在籍していた。その中で、ピゼンデルをはじめ、フランスの奏法とイタリアの奏法の両方を体得した奏者が現れていた。本項の分析結果に基づくと、この時期に記された4点の「音楽家の年俸表」のうち、1720年9月以外の3点は、弦楽器奏者と木管楽器奏者の人数配分が、それぞれフランスとイタリアの楽団の人数表に表れていたものに似ていることを指摘できる。

第5項 1721年頃と1725年頃の「宮廷音楽家の年俸表」

1721年頃と1725年頃の2点の「宮廷音楽家の年俸表」に現れる奏者は、それぞれ37名と38名である。弦楽器奏者は21名ないし22名、木管楽器奏者は11名、その他の楽器の奏者は5名から構成されている。

これらの資料に見られる約20名の弦楽器奏者は、ヴァイオリン8名、ヴィオラ3名または4名、チェロ5名、「コントラバス」1名、「ヴィオロン」3名、「ヴィオロン」の見習い1名となっている。ヴァイオリンとヴィオラの人数の差が4名ないし5名に及んでいるため、この弦楽器奏者の人数配分は、1717年頃の「宮廷音楽家の年俸表」に似ているといえる。

1721年頃と1725年頃の「宮廷音楽家の年俸表」に現れる11名の木管楽器奏者は、フルート1名、オーボエ5名、ファゴット3名、ホルン2名に分けられる。これは、1717年頃の「宮廷音楽家の年俸表」のものと完全に一致している。

ドレスデン宮廷では、オペラを上演するために雇ったイタリア人の大半を1720年に解雇した後、1720年代には、再びオペラを上演するための準備が進められていた。1721年頃と1725年頃の「宮廷音楽家の年俸表」における弦楽器奏者と木管楽器奏者の両方の人数配分は、1717年頃の「宮廷音楽家の年俸表」に類似していた。1717年頃のこの年俸表は、イタリアの楽団の人数表と同じ傾向を示していたことに基づくと、オペラ上演再開の準備をしていた1721年頃や1725年頃の「宮廷音楽家の年俸表」は、イタリアの楽団の人数表から導かれた配分を継承しているといえるだろう。

第6項 1729年の「宮廷楽団の名簿」

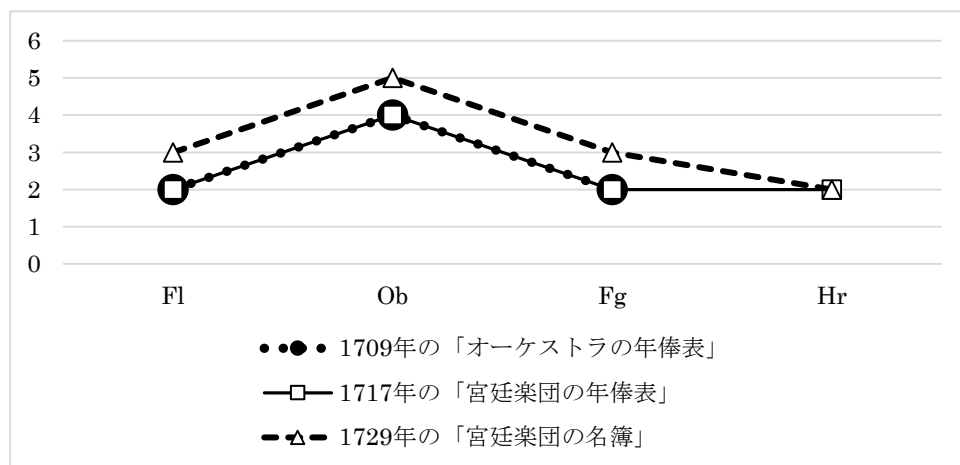
1729年の「宮廷楽団の名簿」には、合計38名の奏者が記載されている。彼らのうち弦楽器奏者は19名、木管楽器奏者は13名、その他の楽器の奏者は6名となっている。そして、19名の弦楽器奏者は、ヴァイオリン8名、ヴィオラ4名、チェロ5名、コントラバス2名から構成されており、1717年頃の「宮廷音楽家の年俸表」と同数になっている。

12名の木管楽器奏者は、フルート3名、オーボエ4名、ファゴット3名、ホルン2名に分けられる。これらの人数が、1717年頃の「宮廷音楽家の年俸表」以降の資料と酷似していることは、192頁から始まる表3-1から明らかである。しかし、これらの資料は一貫してフルート奏者が1名のみであり、このことはイタリアの楽団の人数表に通じる特徴であったが、1729年の「宮廷楽団の名簿」には、3名ものフルート奏者が記載されている。よって、1729年の「宮廷楽団の名簿」における木管楽器奏者の人数配分は、1717年頃の「宮廷音楽家の年俸表」以降の資料と異なる傾向を示しているといえる。

1729年の「宮廷楽団の名簿」を改めて確認すると、木管楽器奏者の中ではオーボエ奏者が最も多く、フルート奏者とファゴット奏者は同数である。図 3-7 から明らかなように、このことは、1709年の「オーケストラの年俸表」や1717年の「宮廷楽団の年俸表」に共通している。

図 3-7 木管楽器の人数の比較

(1709年の「オーケストラの年俸表」、1717年の「宮廷楽団の年俸表」、1729年の「宮廷楽団の名簿」)



このように、1729年の「宮廷楽団の名簿」において、弦楽器奏者の数は1717年頃の「宮廷音楽家の年俸表」を継承しており、木管楽器奏者の数は、1709年の「オーケストラの年俸表」や1717年の「宮廷楽団の年俸表」に似ていた。よって、1729年の「宮廷楽団の名簿」には、これまでに参照してきた種々の年俸表から導かれた人数配分が反映されているといえよう。

第7項 1709年から1729年までの年俸表と名簿に記載された奏者の数

本節では、1709年から1729年までの間に、ドレスデン宮廷において記された年俸表と名簿を参照し、記載された奏者の数が変化する様子を概観した。

楽師長ヴォリュミエは、フランスの宮廷に勤めた経験を持ち、ドレスデン宮廷の奏者たちに、フランスの奏法を教えていた。彼が楽師長に就任した年の「オーケストラの年俸表」には、フランスの「王の小さなヴァイオリン」の人数表の特徴が現れていた。イタリアから多くの音楽家を雇った1717年の頃に書かれたと推定された「宮廷音楽家の年俸表」は、イタリアの楽団の人数表と同じ傾向を示していた。1717年から1720年までのドレスデン宮廷には、ヴォリュミエの下でフランスの奏法を学んだ奏者と、イタリアの奏法を体得した奏者が共に在籍しており、彼らの中には、奏法が異なったフランスとイタリアの音楽の両方に対応できる者がいた。この時期に書かれた4点の「音楽家の年俸表」のうち3点には、フランスとイタリアの楽団の年俸表に関連する特徴が見られた。1720年代のドレスデン宮廷においては、オペラ上演を再開するための準備が行われ、1721年頃や1725年頃の「宮廷音楽家の年俸表」は、イタリアの楽団の人数表に見られた人数配分を受け継いでいた。

これらのことから、ドレスデン宮廷がフランスとイタリアのどちらか一方、または両方の影響を受けた時期に、この宮廷の年俸表は、これらの国において組織されていた楽団の人数表に見られる傾向を如実に示していることが分かる。このことに基づくと、ドレスデン宮廷の音楽家たちは、フランスやイタリアの奏法を学んだだけでなく、これらの国の楽団が採用していた人数配分をも受容し、状況に応じて楽団の構成を変化させた可能性が考えられる。

1709年から1729年までの年俸表や名簿からは、奏者の人数配分の類型を少なくとも四つ抽出できる。一つ目は、1709年の「オーケストラの年俸表」と1717年の「宮廷楽団の

年俸表」に見られるものであり、ヴァイオリンとヴィオラの人数が同一またはほぼ等しく、木管楽器奏者の中ではオーボエが最も多く、フルートとファゴットは同数となっている。

二つ目は、1717年頃の「宮廷音楽家の年俸表」に現れ、ヴァイオリン奏者とヴィオラ奏者の人数の差が4名であり、木管楽器奏者の中ではオーボエが最も多い一方、フルートは僅か1名になっている。これらのことは、1721年頃や1725年頃の「宮廷音楽家の年俸表」に引き継がれていた。

三つ目と四つ目は、これまでの二つの型を組み合わせている。すなわち、1718年頃から1729年5月までの3点の「音楽家の年俸表」において、一つ目の類型のようにヴァイオリンとヴィオラの奏者はほぼ同数であり、木管楽器奏者は二つ目の類型と同様に、オーボエを最多としつつ、フルートが1名になっている。反対に1729年の「宮廷楽団の名簿」においては、弦楽器奏者が二つ目の類型に似ており、ヴァイオリンとヴィオラの奏者の人数は4名異なっている。木管楽器奏者の間では、一つ目の類型のように、オーボエが最も多く、フルートとファゴットが同数になっている。

以上のように、1709年から1729年までの年俸表や名簿には、幾つもの人数配分の類型を指摘できる。よって、ヴォリュミエが楽師長を務めた時代に記録された年俸表や名簿の人数配分は、変化に富んでいるといえる。

第3節 楽師長ピゼンデルの時代の名簿に記された奏者の数

192頁から始まる表3-1において、ピゼンデルが楽師長に就任した1731年から、彼が亡くなる1755年までの資料は合計24点に及び、それらはいずれも『宮廷年鑑』に記載された「宮廷楽団の名簿」となっている。この24点において、奏者の合計人数は34名から48名の間を推移しており、特に1733年以降は常に40名以上を維持している。1709年から1729年までの年俸表や名簿における奏者の合計人数は、26名から38名までであったため、この人数は明らかに多い。

表 3-8 は、この 24 点の名簿における弦楽器、木管楽器、その他の奏者の割合それぞれが示す最小値と最大値を表している（192 頁から始まる表 3-1 と比較）。この表から明らかかなように、弦楽器奏者の数は最多であり、その次に木管楽器奏者が多く、その他の奏者は最も少ない。このことは、ヴォリュミエの時代と共通している。

表 3-8 各楽器の割合における最小値と最大値

（1735 年から 1755 年までの「宮廷楽団の名簿」）

(%)	弦楽器	木管楽器	その他
最小値	47.1	31.1	4.7
最大値	62.8	38.2	14.7

彼らのうち、その他の奏者における人数配分は、1731 年から 1755 年までほぼ一定である。1751 年まではリュート奏者 1 名、鍵盤楽器奏者 3 名、パンタレオン奏者 1 名であり、1752 年以降はオルガン奏者 3 名を維持しているのである。そのため本節では、弦楽器奏者と木管楽器奏者の人数配分の変化を詳しく検証する。

第1項 1731 年から 1735 年までの「宮廷楽団の名簿」

192 頁の表 3-1 が示すように、1731 年から 1735 年までの「宮廷楽団の名簿」において、奏者の合計人数は激しく変動している。前節において確認したように、1729 年の「宮廷楽団の名簿」には合計 38 名の奏者が記載されていた。しかし、1731 年と 1732 年に彼らは 34 名まで減少した後、1733 年から 1735 年にかけて、10 名増加して 44 名に達しているのである。

1729 年の「宮廷楽団の名簿」に現れた弦楽器奏者は、ヴァイオリン 8 名、ヴィオラ 4 名、チェロ 5 名、コントラバス 2 名であった。図 3-8 は、1735 年のこの名簿に至るまでに、これらの人数が変化した過程を表している。この図が示すように、ヴィオラとチェロの奏者は、1735 年においても、1729 年と同じ 4 名と 5 名をそれぞれ維持している。一方、コ

ントラバス奏者は1名多い3名となり、ヴァイオリン奏者は6名多い12名に上っている。本章において参照してきたドレスデン宮廷の年俸表や名簿において、ヴァイオリン奏者が12名に及んだことはなかった（192頁からの表3-1参照）。以上のことから、1735年の「宮廷楽団の名簿」における弦楽器奏者の人数配分は、1729年のものを基調としつつ、ヴァイオリン奏者を著しく増員しているといえる。

図 3-8 弦楽器の人数の推移（1729年から1735年までの「宮廷楽団の名簿」）

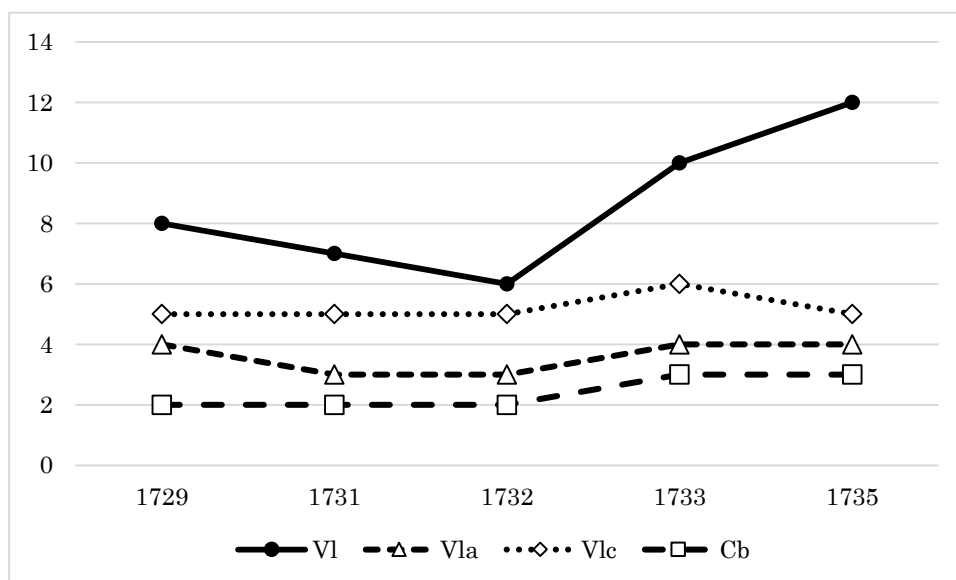
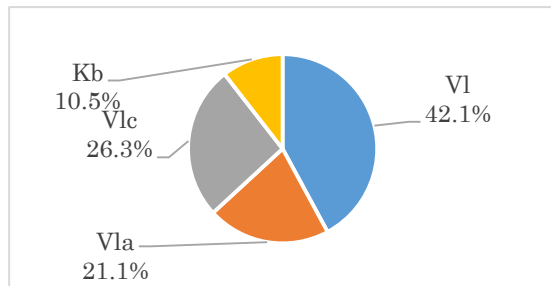


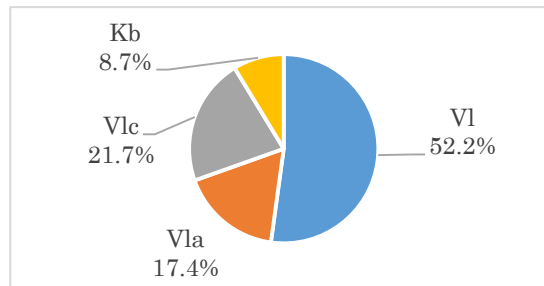
図 3-9 は、1729年と1735年の「宮廷楽団の名簿」について、弦楽器奏者全員のうちに占めるヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバスの奏者の割合を示している。この図の1729年において、すでにヴァイオリン奏者は4割を占めているため、彼らの人数が他の弦楽器の奏者よりも多いことは明らかである。さらに1735年において、彼らの割合は1割増加して5割2分となっている。このようにヴァイオリン奏者が弦楽器奏者の過半数を占めることは、1733年までの年俸表や名簿に見られなかったことである。

図 3-9 「宮廷楽団の名簿」における各弦楽器の割合

1729 年

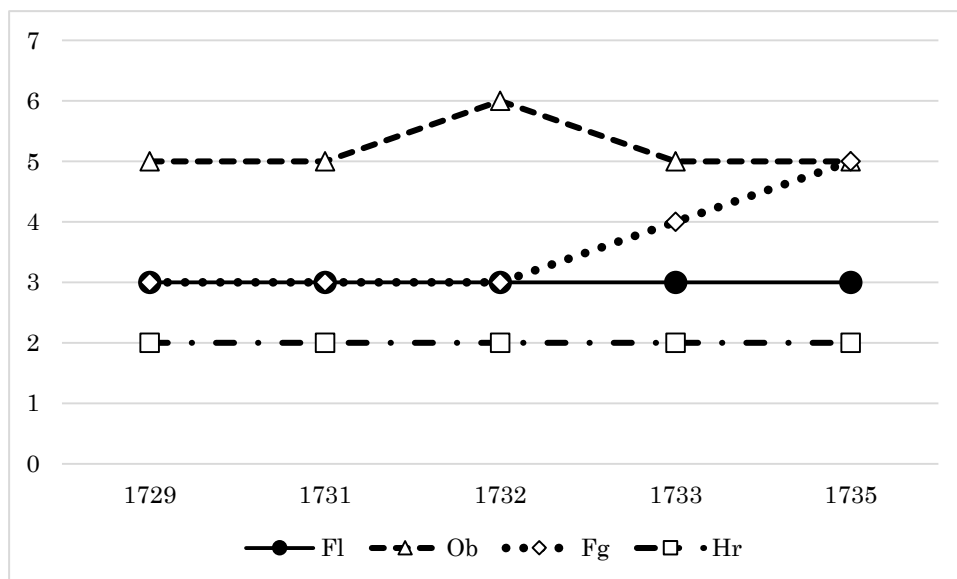


1735 年



次は、木管楽器奏者の人数の変化を確認する。図 3-10 は、1729 年から 1735 年までの「宮廷楽団の名簿」における木管楽器奏者の数の変動を表している。この図の 1729 年において、フルートは 3 名、オーボエは 5 名、ファゴットは 3 名、ホルンは 2 名である。フルートとホルンの奏者の数は 1735 年まで一定であり、オーボエ奏者も 5 名を維持している。一方、ファゴット奏者のみは 1733 年と 1735 年に 1 名ずつ増員され、5 名に達している。192 頁から始まる表 3-1 において、ファゴット奏者が 5 名を誇ることは、1735 年の「宮廷楽団の名簿」において初めて見られる。従って、この名簿における木管楽器奏者の人数配分は、1729 年のものを踏襲しつつ、ファゴット奏者の数を大きく増やしているといえる。

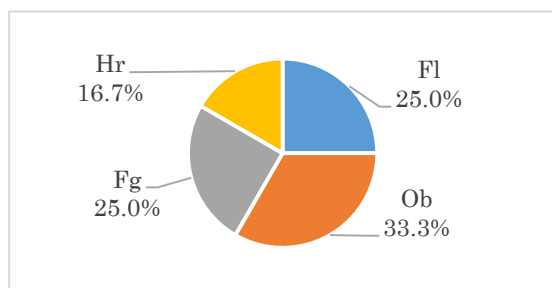
図 3-10 木管楽器の人数の推移 (1729年から1735年までの「宮廷楽団の名簿」)



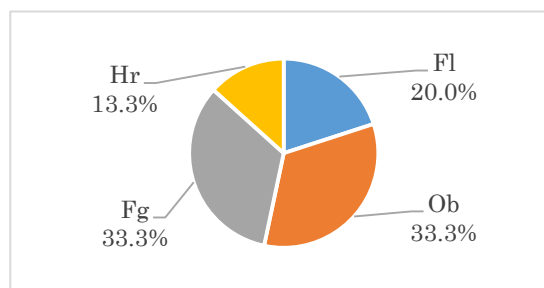
下の図 3-11 は、1729 年と 1735 年の「宮廷楽団の名簿」において、木管楽器奏者全員のうちに占める、フルート、オーボエ、ファゴット、ホルンの奏者の割合を示している。この二つの図から明らかなように、ファゴット奏者のみは割合を伸ばしている。1729 年において 2 割 5 分を占めた彼らは、1735 年に 1 割ほど多い 3 割 3 分に達しているのである。

図 3-11 「宮廷楽団の名簿」における各木管楽器の割合

1729 年



1735 年

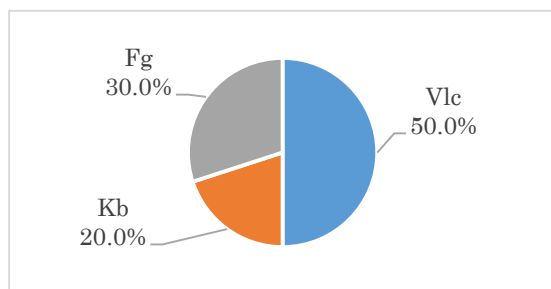


ファゴット奏者の増員は、さらに低音楽器奏者の人数配分をも変化させている。192 頁から始まる表 3-1 から明らかなように、1729 年の「宮廷楽団の名簿」において、低音楽

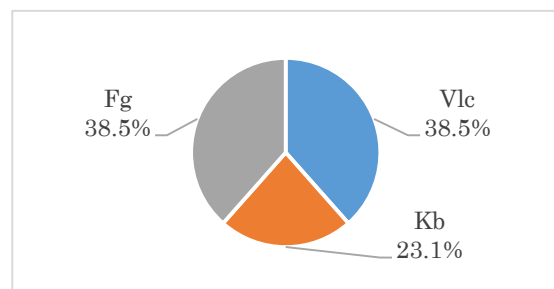
器、すなわちチェロ、コントラバス、ファゴットの奏者の中で最多の人数を誇った者は、5名のチェロ奏者である。図 3-12 の「1729年」が示すように、この名簿において、チェロ奏者は低音楽器奏者の中で半数を占めている。しかし、1735年の「宮廷楽団の名簿」においてファゴット奏者は5名となり、最多であったチェロ奏者と同数になった。ファゴット奏者はチェロ奏者と共に、低音楽器奏者の中で3割8分を占めている(図 3-12 の「1735年」参照)。このように、ファゴット奏者の数がチェロ奏者と同じになったことは、表 3-1 において 1735 年以前に見られない。

図 3-12 「宮廷楽団の名簿」における各低音楽器の割合

1729 年



1735 年

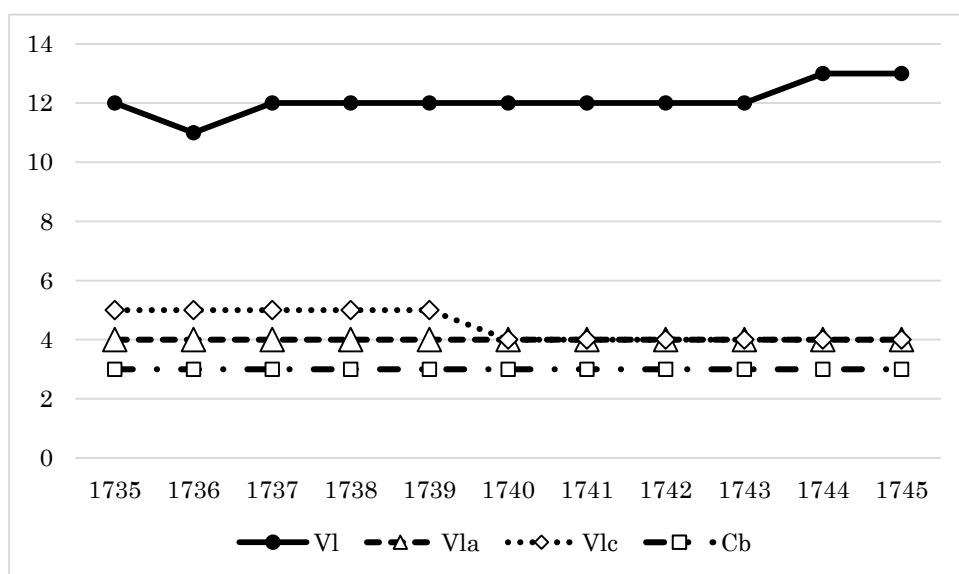


ドレスデン宮廷においては、1731年にピゼンデルが正式に楽師長に就任した後、1733年にザクセン選帝侯が交代していた。その翌年の1734年には、ハッセが正式に楽長に就任していた。これらの変化が起こっていた時期とほぼ同じ1731年から1735年までの「宮廷楽団の名簿」においては、奏者の合計人数が大きく変化しており、一旦減少した後、1733年と1735年に急増していた。そして、1735年の「宮廷楽団の名簿」は、1729年の人数配分に依拠しつつ、ヴァイオリン奏者とファゴット奏者を著しく増員していた。

第2項 1735年から1745年までの「宮廷楽団の名簿」

1735年から1745年までの「宮廷楽団の名簿」において、奏者の合計人数は39名から42名を維持しており、ほとんど変化していない（192頁から始まる表3-1参照）。図3-13は、これらの資料に記載された弦楽器奏者の人数の変化を表している。

図3-13 弦楽器の人数の推移（1735年から1745年までの「宮廷楽団の名簿」）



1735年の名簿における弦楽器奏者は、ヴァイオリン12名、ヴィオラ4名、チェロ5名、コントラバス3名であった。図3-13に基づく、これらの人数は、10年後の1745年まで、ほとんど変化していないことが分かる。なぜなら、ヴィオラとコントラバスの奏者は、それぞれ一貫して4名と3名を保っており、ヴァイオリン奏者も1736年、1744年、1745年以外は12名となっているからである。またチェロ奏者は、1740年を境に人数が変化しているが、それは5名から4名への僅か1名の減員にとどまっている。このように、1735年から1745年までの「宮廷楽団の名簿」における弦楽器奏者の人数配分はほぼ一定であり、ヴァイオリン12名、ヴィオラ4名、チェロ4名ないし5名、コントラバス3名を維持しているといえる。

図 3-14 木管楽器の人数の推移（1735年から1745年までの「宮廷楽団の名簿」）

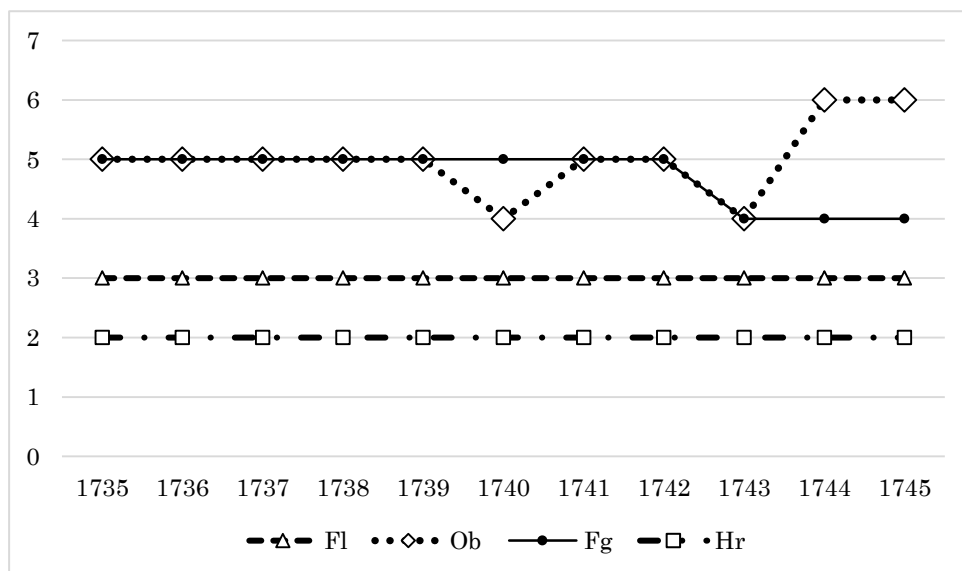


図 3-14 は、1735 年から 1745 年までの「宮廷楽団の名簿」に見られる木管楽器奏者の人数の変化を表している。この図において、1735 年はフルート 3 名、オーボエ 5 名、ファゴット 5 名、ホルン 2 名であり、オーボエ奏者が 1740 年においてのみ 4 名に減少しているが、これらの人数は 1742 年まで維持されている。しかし、1743 年にはオーボエとファゴットの奏者が共に 1 名少ない 4 名に減員した後、翌年の 1744 年にはオーボエ奏者のみ 2 名多い 6 名に増員されている。そのため、同数であったオーボエとファゴットの奏者の間には、2 名の差が生じている。これらのことに基づくと、1735 年から 1742 年までの「宮廷楽団の名簿」においては、木管楽器奏者の人数配分が固定されているといえる。それは、フルート 3 名、オーボエ 5 名、ファゴット 5 名、ホルン 2 名から成っている。

以上のように、1735 年から 1742 年までの「宮廷楽団の名簿」からは、弦楽器奏者だけでなく、木管楽器奏者も一定の人数配分を抽出できる。また 1743 年以降は、同じ人数であったオーボエとファゴットの奏者の間に 2 名の差が見られるようになったが、概ね 1742 年までの配分を維持しているといえよう。

第3項 1746年から1755年までの「宮廷楽団の名簿」

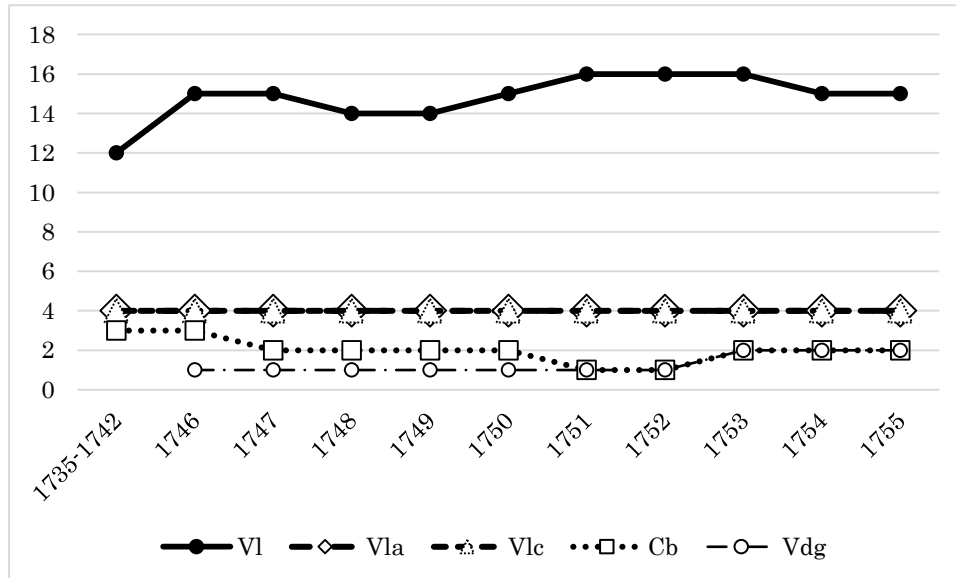
前項において確認したように、1735年から1745年までの「宮廷楽団の名簿」には、合計39名から42名の奏者が見られた。しかし、1746年のこの名簿に現れる奏者は、6名以上多い48名に増えている。この人数は、192頁から始まる表3-1において、1709年以来、最も多い。さらに、1746年から1755年までの「宮廷楽団の名簿」から算出される奏者は、合計43名から48名の間を推移している。このように、1746年以降の人数は以前よりも明らかに多い。

1735年から1742年までの「宮廷楽団の名簿」における弦楽器奏者の人数配分は、ヴァイオリン12名、ヴィオラ4名、チェロ4名または5名、コントラバス3名であった。図3-15は、これらの人数が、1755年までのこの名簿において、どのように変化したかを示している²¹³。この図から明らかなように、ヴィオラ奏者は同じ4名を維持しており、4名または5名であったチェロ奏者も4名を保っている。コントラバス奏者も1746年は3名であり、翌年の1747年から1755年まで2名であるため、ほとんど変化していないといえる。一方ヴァイオリン奏者は、1746年以降、2名以上多い14名から16名を維持している。また、1746年以降には、新たにヴィオラ・ダ・ガンバ奏者が現れている。従って、1746年から1755年までの「宮廷楽団の名簿」における弦楽器奏者の人数配分は、1735年から1742年までのものを継承しつつ、ヴァイオリン奏者を増員すると共に、ヴィオラ・ダ・ガンバ奏者を加えていると指摘できる。

²¹³ この図の1735年から1742年までの部分（「1735-1742」）は、チェロ奏者が4名の場合のみを示している。

図 3-15 弦楽器の人数の推移

(1735年から1742年及び1746年から1755年までの「宮廷楽団の名簿」)



1735年から1742年までの「宮廷楽団の名簿」における木管楽器の人数配分は、フルート3名、オーボエ5名、ファゴット5名、ホルン2名であった。図 3-16は、これらの人数と、1746年から1755年までのこの名簿から算出された木管楽器奏者の人数を示している。

図 3-16 木管楽器の人数の推移

(1735年から1742年及び1746年から1755年までの「宮廷楽団の名簿」)



この図が表すように、ホルン奏者は1748年に1名多い3名になり、フルート奏者は翌年の1749年を境に3名から1名少ない2名となり、両者はこの人数を1755年まで維持している。ファゴット奏者は、1753年に1名少ない4名に減じている。これらの増員や減員は1名にとどまっているため、1735年から1742年までの「宮廷楽団の名簿」から導かれた木管楽器奏者の人数配分は、1755年まで引き継がれているといえる。

第2章において確認したように、1740年代半ば以降のドレスデン宮廷には、演劇団を呼び寄せ、著名な演出家を雇うなど、新しい動向が見られた。この時期と同じ1746年から1755年までの「宮廷楽団の名簿」には、奏者の合計人数がそれまでの年俸表や名簿よりも多いという違いが見られた。しかし、ヴァイオリン奏者やヴィオラ・ダ・ガンバ奏者を除く弦楽器奏者や木管楽器奏者の人数配分は、1735年から1742年までのこの名簿から求められたものに沿っていることを指摘できた。

第4項 1731年から1755年までの「宮廷楽団の名簿」に記された奏者の数

ピゼンデルは、1731年から1755年まで、ドレスデン宮廷楽団の楽師長を務めていた。本節では、この期間に出版された『宮廷年鑑』に見られる合計24点の「宮廷楽団の名簿」に基づき、記載された奏者の人数とその配分を論じてきた。

ドレスデン宮廷では、ピゼンデルが楽師長に就任した後、1734年までに選帝侯や楽長が交代しており、この時期にほぼ重なる1731年から1735年までの名簿においては、奏者の合計人数が大きく変化していた。1729年の奏者は38名であったが、1731年と1732年は34名にとどまっていたのである。一方、1733年と1735年には急激な人数の増加が見られ、奏者は44名に達していた。その結果、1735年の弦楽器奏者と木管楽器奏者の人数配分は1729年のものを継承しつつ、ヴァイオリンとファゴットの奏者が著しく増員されていた。さらに1735年の配分は、1742年の「宮廷楽団の名簿」まで明確に維持されていた。

1740年代後半のドレスデン宮廷においては、著名な演劇団や演出家を招くなど、新しい動向が見られ、1746年から1755年までの名簿において、奏者の合計人数は以前よりも多くなっていた。そして、1735年から1742年の名簿に見られた一定の人数配分は引き継がれ、1746年からはこれに基づきつつ、ヴァイオリン奏者の数を増やし、ヴィオラ・ダ・ガンバ奏者が記載されるようになっていた。

これらのことを踏まえると、1735年から1742年まで維持された人数配分は、ピゼンデルが楽師長を務めた時代の「宮廷楽団の名簿」において確固とした基礎を成していると指摘できる。先述のように、1735年の「宮廷楽団の名簿」に見られた奏者の人数配分は、ヴァイオリンとファゴットの奏者の数が多いことを除き、1729年のこの名簿の人数に依拠していた。1729年の配分には、1709年の「オーケストラの年俸表」、1717年の「宮廷楽団の年俸表」、1717年頃の「宮廷音楽家の年俸表」のものが反映されていた。従って、1735年から1742年までの「宮廷楽団の名簿」に見られた一定の人数配分は、ヴォリュミエの時代の資料に見られたものを受け継いでいるといえる。その具体例として、ヴィオラ4名

とチェロ 4 名または 5 名、コントラバス 3 名が、1717 年頃の「宮廷音楽家の年俸表」に酷似していることや、フルート 3 名とオーボエ 5 名が、1709 年の「オーケストラの年俸表」や 1717 年の「宮廷楽団の年俸表」に大変に似ていることを挙げられよう。

しかし、1735 年の「宮廷楽団の名簿」においては、ヴァイオリンとファゴットの奏者がそれぞれ 12 名と 5 名に達しており、これらはヴォリュミエの時代の年俸表から算出された人数を上回っていた。そのため、1735 年から 1742 年までの「宮廷楽団の名簿」は、ヴォリュミエの時代の年俸表や名簿と比較した場合、これらの奏者が多いことを特徴にしていると指摘できる。

この 1735 年から 1742 年までの「宮廷楽団の名簿」に見られた弦楽器奏者の人数配分は、サン＝マルコ聖堂に所属した奏者のものに酷似している。この時期の「宮廷楽団の名簿」からは、ヴァイオリン奏者 12 名、ヴィオラ奏者 4 名、チェロ奏者 4 名または 5 名、コントラバス奏者 3 名が抽出された。208 頁の表 3-6 に基づくと、1697 年から 1708 年までの 12 年間、サン＝マルコ聖堂には、ヴァイオリン奏者 12 名、ヴィオラ奏者 4 名または 5 名、チェロ奏者 3 名、コントラバス奏者 3 名が在籍している。これらの人数を比較した場合、ヴァイオリン奏者とコントラバス奏者は一致しており、ヴィオラ奏者も同数または 1 名異なるのみである。また、チェロ奏者の差は 1 名ないし 2 名となっている。

1735 年から 1742 年までの「宮廷楽団の名簿」に記載されたチェロ奏者は、ジョゼフ・デュ・オロンデル、ロベール・デュ・オロンデル、アグスティーノ・アントーニオ・デ・ロッシ、ジョヴァンニ・マリーア・フェリーチェ・ピチネッティ、アルカンジェロ・カリファーンである。彼らのうち、二人のオロンデルは、フランスのカーンとベルギーのブリュッセル出身であった一方、ロッシとピチネッティはイタリア人であった。またドレスデン宮廷楽団に所属したイタリア人奏者を研究したパオラ・ポッツィは、カリファーンをイタリア出身と見なしている²¹⁴。従って、この 5 名のうちイタリア人は 3 名であった

²¹⁴ Paola Pozzi, “Il Concerto strumentale italiano alla Corte di Dresda Durante la prima metà del Settecento,” in *Intorno a Locatelli: Studi in occasione del*

と考えられ、彼らの人数は、先の 1697 年から 1708 年までのサン＝マルコ聖堂に所属したチェロ奏者のものに合致する。

この著しい類似に基づくと、「宮廷楽団の名簿」において 1733 年からヴァイオリン奏者が増員され、1735 年から 1742 年まで 12 名に設定されたことは、サン＝マルコ聖堂に倣った可能性を指摘できる。しかし、1735 年から 1742 年の「宮廷楽団の名簿」から抽出されたフルート奏者 3 名、オーボエ奏者 5 名、ファゴット奏者 5 名、ホルン奏者 3 名の配分は、サン＝マルコ聖堂に所属した奏者のものと全く異なる (208 頁の表 3-6 を参照)。従って、ヴァイオリン奏者と同様に 1733 年から 1735 年にかけて増加したファゴット奏者の人数は、この聖堂のものを模倣していないと考えられよう。

ドレスデン宮廷楽団に所属したクヴァンツは、著書『フルート奏法試論 *Versuch einer Anweisung, die Flöte traversière zu spielen*』において理想とする楽器編成を論じた際に、以下のように述べた。

ヴァイオリン 4 挺に対しては、ヴィオラ 1 挺、チェロ 1 挺、そして中くらいの大きさのコントラヴィオロン 1 挺を用いなさい。

ヴァイオリン 6 挺に対しても全く同じ、そしてさらにファゴット 1 本 [を用いなさい]。 ²¹⁵

このようにクヴァンツは、ヴァイオリン奏者を増やした際に、ファゴットを編成に追加するように勧めている。このことは、「宮廷楽団の名簿」において、特にファゴット奏者がヴァイオリン奏者と共に増員されたことが、単なる偶然ではなかったことを示唆しているといえよう。この増員の背景については、章を改めて考察する。

tricentenario della nascita di Pietro Antonio Locatelli—1695-1764, edited by Albert Dunning (Lucca: Libreria Musicale Italiana, 1995), vol. 2, p. 977.

²¹⁵ Quantz, Johann Joachim. *Versuch einer Anweisung, die Flöte traversière zu spielen*, (Berlin, 1752; reprint ed. Wiesbaden: Breitkopf & Härtel, 1988), p. 185.

第4節 オペラ上演に関する3点の「明細」と「記録」との比較

フベルトゥスブルクにおけるオペラ上演に選ばれた者の名簿は3点であり、それらは1737年と1741年の「明細」、1742年の「記録」であった。これらの資料からは、オペラを上演するために組まれたドレスデン宮廷楽団の楽器編成を把握できる。本節では、3点の「明細」や「記録」と同じ年の「宮廷楽団の名簿」を比較する。そして、この名簿から算出された奏者の数とその割合が、どの程度「明細」や「記録」のものに類似しているか、または相違しているかを示す。

ドレスデン宮廷楽団の奏者は、1737年の「明細」に25名記載されている。また1741年の「明細」と1742年の「記録」の両方において、彼らは31名に上っている。表3-9は、これらの資料それぞれから算出されたドレスデン宮廷楽団の奏者の数を、「宮廷楽団の名簿」に記載された楽器の種類に従って示している。表3-10は、表3-9に基づいて、これらの「明細」や「記録」に記載されたドレスデン宮廷楽団の奏者全員のうちに占める、各楽器の奏者の割合を示している。

1737年、1741年、1742年の「宮廷楽団の名簿」から算出された奏者の数は、すでに192頁から始まる表3-1に示した。表3-11は、これらの名簿に記載された奏者全員のうちに占める、各楽器の奏者の割合を示している。

表 3-9 3点の「明細」や「記録」に記載された奏者の数

	Vl ²¹⁶	Vla	Vlc	Cb	Fl	Ob	Fg	Hr	Key ²¹⁷	Lut	人数の合計
1737年の「明細」	8	2	2	1	2	3	2	2	2	1	25
1741年の「明細」	10	4	3	1	2	3	4	1	2	1	31
1742年の「記録」	10	3	3	1	2	4	4	2	1	1	31

表 3-10 3点の「明細」や「記録」から算出される奏者の割合

(%)	Vl	Vla	Vlc	Cb	Fl	Ob	Fg	Hr	Key	Lut
1737年の「明細」	32.0	8.0	8.0	4.0	8.0	12.0	8.0	8.0	8.0	4.0
1741年の「明細」	32.3	12.9	9.7	3.2	6.5	9.7	12.9	3.2	6.5	3.2
1742年の「記録」	32.3	9.7	9.7	3.2	6.5	12.9	12.9	6.5	3.2	3.2

表 3-11 「宮廷楽団の名簿」から算出される奏者の割合

(%)	Vl	Vla	Vlc	Cb	Fl	Ob	Fg	Hr	Key	Lut	Pan
1737年	27.3	9.1	11.4	6.8	6.8	11.4	11.4	4.5	2.3	6.8	2.3
1741年	27.9	9.3	9.3	7.0	7.0	11.6	11.6	4.7	2.3	7.0	2.3
1742年	27.9	9.3	9.3	7.0	7.0	11.6	11.6	4.7	2.3	7.0	2.3

第1項 奏者の数とその割合の比較

はじめに、1737年の「明細」と同じ年の「宮廷楽団の名簿」を比較する。この「明細」に記載された奏者は25名であり、「宮廷楽団の名簿」から抽出された奏者は19名多い44名である（表 3-1 と表 3-9 を参照）。図 3-17 は、これらの資料における各楽器の人数を

²¹⁶ ヴァイオリン奏者の数には、楽師長ピゼンデルが含まれている。

²¹⁷ 1737年と1741年の「明細」には、楽長ハッセの名前が記載されていた。第2章において確認したように、ハッセは自ら作曲した作品の上演において、チェンバロを演奏したと考えられていた。フベルトゥスブルクにおいては、1737年に《アタランテ》と《アステリア》が、1741年には《ヌマ・ポンピリウス》が上演された。これらのオペラは、いずれもハッセが作曲したものである。従って、1737年と1741年の「明細」に記載されたハッセは、チェンバロ奏者に分類できよう。そのため、この表の1737年と1741年のチェンバロ奏者は、楽長ハッセを含めた人数を示している。

折れ線グラフによって示している。この図における 2 本の折れ線がほぼ並行していることから、人数配分は類似していることが分かる。

図 3-17 各楽器の人数の比較（1737 年の「明細」と 1737 年の「宮廷楽団の名簿」）

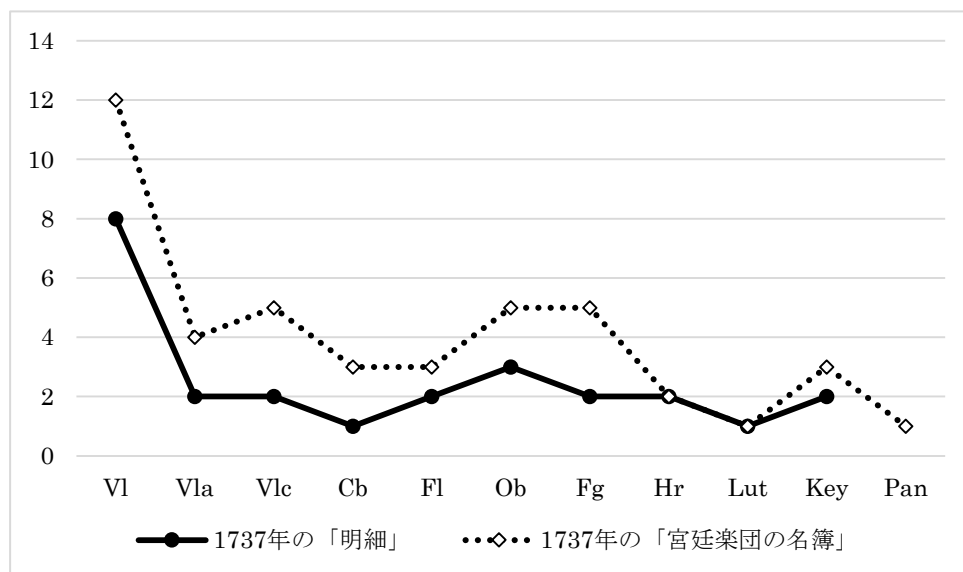


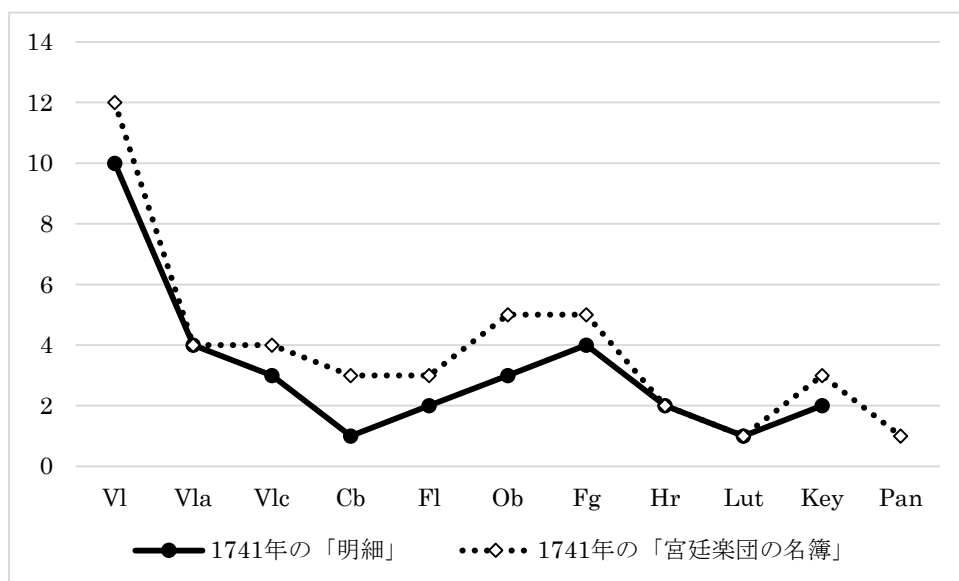
表 3-10 と表 3-11 に基づくことにより、これらの「明細」と「宮廷楽団の名簿」における奏者の割合を比較できる。表 3-12 は、表 3-10 の「1737 年の『明細』」の行に示した各数値に対する、表 3-11 の「1737 年」の行に示した各数値の差を示している。この表において、奏者の割合の差は 5 分以内であり、11 種類の楽器のうち 3 種は、割合の差が 1 分以下となっている（ヴィオラ、フルート、オーボエの列を参照）。

表 3-12 表 3-10 の「1737 年の『明細』」に対する表 3-11 の「1737 年」の数値の差 (%)

VI	Vla	Vlc	Cb	Fl	Ob	Fg	Hr	Key	Lut	Pan
-4.7	+1.1	+3.4	+2.8	-1.2	-0.6	+3.4	-3.5	-5.7	+2.8	+2.3

次は、1741年の「明細」と同じ年の「宮廷楽団の名簿」を比較する。この「明細」は31名の奏者を示す一方、「宮廷楽団の名簿」は、12名多い43名である。図3-18は、これらの資料における各楽器の人数を表している。この図における折れ線は、互いにほぼ並行しているため、人数配分は同じ傾向を示しているといえる。

図 3-18 各楽器の人数の比較（1741年の「明細」と1741年の「宮廷楽団の名簿」）



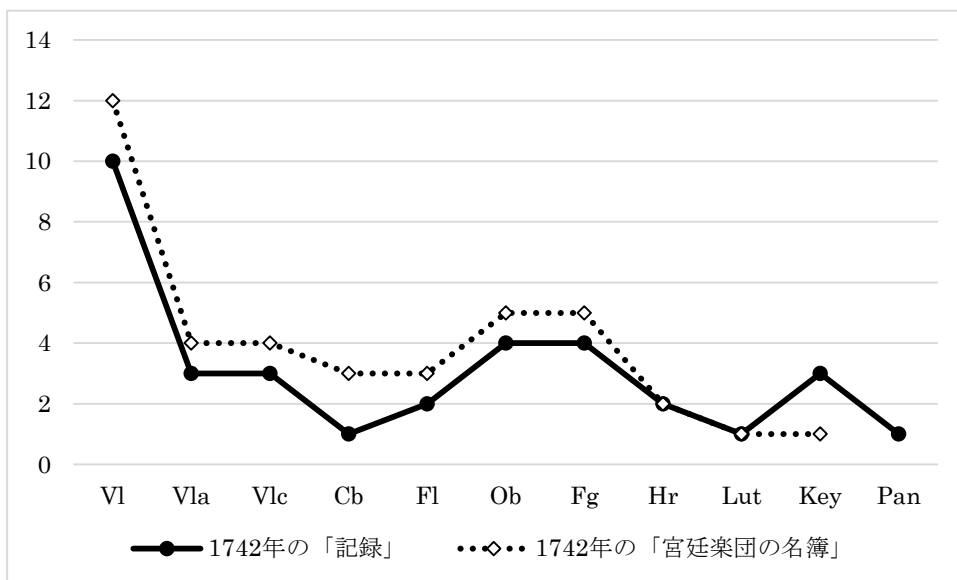
下の表3-13は、表3-10の「1741年の『明細』」に示した各数値に対する、表3-11の「1741年」の各数値の差を示している。この表が表すように、1741年の「明細」と「宮廷楽団の名簿」の奏者の割合を比較した場合、その差は4分以下となる。また割合の差が1分以下となっている奏者は、11種類の楽器のうち4種類に見られる（チェロ、フルート、ファゴット、ホルンの列を参照）。

表 3-13 表 3-10 の「1741年の『明細』」に対する表 3-11 の「1741年」の数値の差 (%)

VI	Vla	Vlc	Cb	Fl	Ob	Fg	Hr	Key	Lut	Pan
-4.4	-3.6	-0.4	3.8	0.5	2.0	-1.3	1.4	-4.1	+3.8	+2.3

最後は、1742年の「明細」とこの年の「宮廷楽団の名簿」である。この「明細」に現れる奏者31名を基準にした場合、「宮廷楽団の名簿」が示す奏者は、12名多い43名である。図3-19は、これらの資料から算出された各楽器の奏者の数を示している。この図に表した折れ線は明らかに並行しているため、人数配分は似ていると指摘できよう。

図 3-19 各楽器の人数の比較（1742年の「記録」と1742年の「宮廷楽団の名簿」）



下の表3-14は、表3-10の「1742年の『記録』」に示した各数値に対する、表3-11の「1742年」の各数値の差を示している。この表から明らかなように、1742年の「明細」と「宮廷楽団の名簿」を比較すると、各楽器の奏者の割合は差が4分以内であり、11種類の楽器のうち過半数の7種類において、割合の差は1分以下となっている（ヴィオラ、チェロ、フルート、オーボエ、ファゴット、ホルン、チェンバロの列を参照）。

表 3-14 表 3-10 の「1742 年の『記録』」に対する表 3-11 の「1742 年」の数値の差 (%)

VI	Vla	Vlc	Cb	Fl	Ob	Fg	Hr	Key	Lut	Pan
-4.4	-0.4	-0.4	+3.8	+0.5	-1.3	-1.3	-1.8	-0.9	+3.8	+2.3

第2項 比較結果に対する考察

1737 年や 1741 年の「明細」及び 1742 年の「記録」は、これらの年に、フベルトゥスブルクにおいてオペラ上演に携わった者の名前を示していた。そのため、これらの「明細」や「記録」からは、オペラ上演におけるドレスデン宮廷楽団の楽器編成を把握できた。

1737 年、1741 年、1742 年の「宮廷楽団の名簿」それぞれを、同じ年の 3 点の「明細」や「記録」と比較した結果、いずれの年も奏者の合計人数は 10 名以上異なっていたにも関わらず、各楽器の奏者の人数配分には類似を指摘できた。さらに、彼らの割合の差は 5 分以下に収まっており、その差が 1 分以下となった者も随所に確認された。従って、1737 年と 1741 年の「明細」、1742 年の「記録」、これらの年の「宮廷楽団の名簿」から算出された奏者の割合は、ほぼ同一であると指摘できる。こうした比較結果に基づくと、少なくとも、これらの年の「宮廷楽団の名簿」から求められた奏者の人数配分は、演奏においてドレスデン宮廷楽団が採用していたものに近かったと考えられる。

192 頁から始まる表 3-1 に示した 1729 年から 1755 年までの奏者の数は、それぞれの年の『宮廷年鑑』に記載された「宮廷楽団の名簿」から算出していた。これらの名簿において人名の掲載の仕方は一定であり、肩書を表す項目の下に人名が列挙されている。このように、1729 年から 1755 年までの「宮廷楽団の名簿」は出典が同一であり、かつ書式も統一されているため、資料の性質が非常に似ているといえる。これらの類似に基づくと、1737 年、1741 年、1742 年の場合と同様に、他の年の「宮廷楽団の名簿」から算出される

奏者の人数配分も、ドレスデン宮廷楽団が実際の演奏に用いた配分に類似している可能性が高いといえる。

このことを、ジャン＝ジャック・ルソーの『音楽辞典』は示唆している。この辞典に掲載された「オーケストラ Orchestre」の項目には、1754年のオペラ上演における、ドレスデン宮廷楽団の奏者の配置図が掲載されている²¹⁸。この図は、奏者が歌劇場のオーケストラ席に、一人ずつどのように配置されていたかを示している。この辞典は1754年から14年を経た1768年に出版されたため、この図の信憑性については検証の余地があるだろう。しかし、この配置図と1754年の「宮廷楽団の名簿」から算出される奏者の数は、ほぼ一致している²¹⁹。よって、この名簿が示す人数配分は、この年に実際にオペラを上演したドレスデン宮廷楽団に見出されたと考えられる。

第5節 第3章の総括

本章は、1709年から1755年までのドレスデン宮廷楽団を研究対象として、この楽団の楽器編成の特徴を指摘することを目的としていた。はじめに、先代の楽師長ヴォリュミエと彼の後任となったピゼンデルの時代の年俸表や名簿に記載された奏者の数を算出し、その人数の変化を確認した。

ヴォリュミエが楽師長に就任した1709年から、彼が亡くなった翌年の1729年までに記録された年俸表や名簿は、12点に上った。これらの年俸表には、多様な人数配分が見られ、フランスやイタリアの楽団の人数表に見られる配分との類似を指摘することができた。

²¹⁸ Jean-Jacques Rousseau, *Dictionnaire de musique* (Paris, 1768; reprint ed. Hildesheim: Georg Olms, 1969), planche G.

²¹⁹ 1754年の「宮廷楽団の名簿」から抽出された奏者の人数は、213頁から始まる表3-1に示した。ルソーの配置図から算出される奏者の人数を基準にすると、1754年の「宮廷楽団の名簿」に現れるチェロ奏者は1名多い4名、コントラバス奏者は1名少ない2名、ファゴット奏者は1名少ない4名、ホルン奏者は1名多い3名、チェンバロ奏者も1名多い3名である。その他の奏者の数は一致している。またルソーの配置図には、ヴィオラ・ダ・ガンバ奏者は見られない。

ピゼンデルの時代の「宮廷楽団の名簿」においては、1731年から1735年にかけて、奏者の合計人数に大きな変化が見られた。その後、1735年から1742年までの期間からは、一定の人数配分を抽出できた。1743年以降は、この配分に基づきつつ、ヴァイオリン奏者を増員し、ヴィオラ・ダ・ガンバ奏者を加えていた。そのため、1735年から1742年までの期間から導かれた人数配分は、ピゼンデルが楽師長を務めた時代の「宮廷楽団の名簿」において、基礎になっていると指摘できた。

この一定の配分は、ヴォリュミエの時代の年俸表や名簿に見られたものを受け継ぐ一方、ヴァイオリンとファゴットの奏者が多いことを特徴としていた。「宮廷楽団の名簿」においては、1733年から1735年にかけて、彼らのみが著しく増員されていたのである。このうちヴァイオリン奏者が12名に達したことは、サン＝マルコ聖堂に倣った可能性を指摘できたが、彼らと共にファゴット奏者が増員された要因は不明であった。そのため、彼らが増えた理由については、章を改めて考察することにした。

次に、フベルトゥスブルクにおけるオペラ上演のために選ばれた者の名簿3点に基づいて、上演のために計画された各楽器の人数を把握した。この名簿は1737年と1741年の「明細」及び1742年の「記録」であった。これらの資料と同年の「宮廷楽団の名簿」を比較した結果、各楽器の奏者の割合は類似していたため、1737年、1741年、1742年の「宮廷楽団の名簿」から算出された奏者の人数配分は、ドレスデン宮廷楽団が演奏において用いていたものに近かったと考えられた。さらに、「宮廷楽団の名簿」はいずれも出典が同じ『宮廷年鑑』であり、かつ書式なども統一されていた。こうした性質の一致に基づくと、1737年、1741年、1742年と同様に、他の年の「宮廷楽団の名簿」から導かれる奏者の人数配分も、ドレスデン宮廷楽団の演奏に用いられたものに類似した可能性が高いと考えられた。

以上のことを踏まえ、「宮廷楽団の名簿」から導かれた奏者の人数配分が持つ意味を考察する。第2章において確認したように、この名簿からは、多くの奏者の名前が抹消された

一方、大勢の奏者の名前が新たに記載されていた。それにも関わらず、1735年から1742年までの8点の「宮廷楽団の名簿」において、奏者の人数はほとんど変化していなかった。改めて192頁から始まる表3-1を参照すると、このように8点の資料に連続してほぼ同じ人数が算出されることは、1735年以前に見られない。さらに1743年以降も、その人数の大部分は継承されていた。そのため、表3-15に示した1735年から1742年にかけて見られる特徴的な一定の人数配分は、当時のドレスデン宮廷楽団において不変のものとして固守されていたと考えられる。

表 3-15 1735年から1742年までの「宮廷楽団の名簿」から導かれる奏者の人数配分

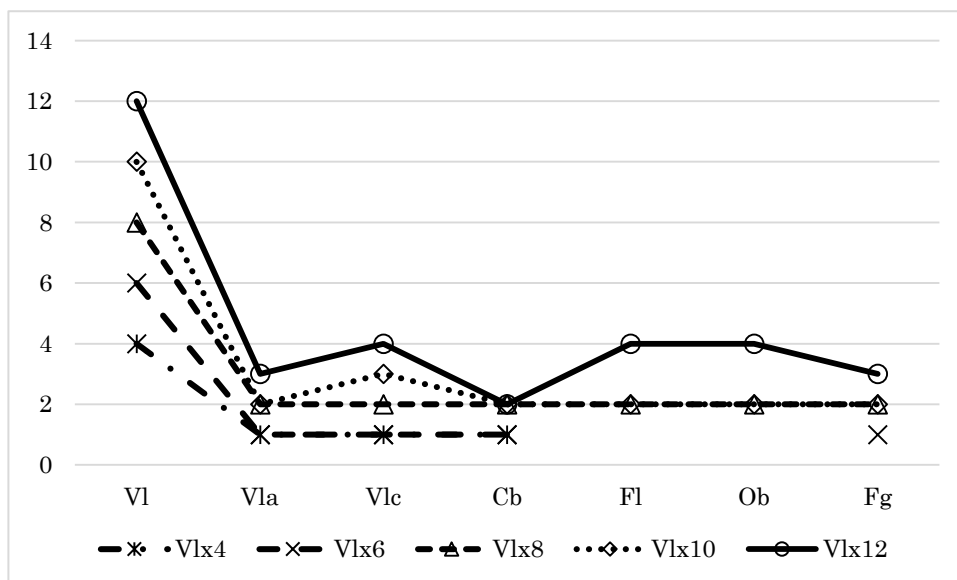
VI	Vla	Vlc	Cb	Fl	Ob	Fg	Hr	Key	Lut	Pan
12	4	4/5	3	3	5	5	2	1	3	1

1737年、1741年、1742年のこの名簿に現れた人数配分は、ドレスデン宮廷楽団が演奏した際に採用したものに近かったと考えられた。さらに表3-15に示した配分は、クヴァンツが推奨した演奏における楽器の数の配分との類似を指摘できる。『フルート奏法試論』の第17章第1節第16項において、著者のクヴァンツは、合奏団を編成する際に「十分であり、最適であろう」各楽器の数を示した。彼は、ヴァイオリンの本数に基づいて、5種類の楽器編成を記した。表3-16は、彼が勧めた楽器の本数を示し、図3-20はこれらを折れ線グラフによって表している。

表 3-16 『フルート奏法試論』に示された楽器の数

VI	Vla	Vlc	Cb	Fl	Ob	Fg
4	1	1	1			
6	1	1	1			1
8	2	2	2	2	2	2
10	2	3	2	2	2	2
12	3	4	2	4	4	3

図 3-20 『フルート奏法試論』に示された楽器の数の配分

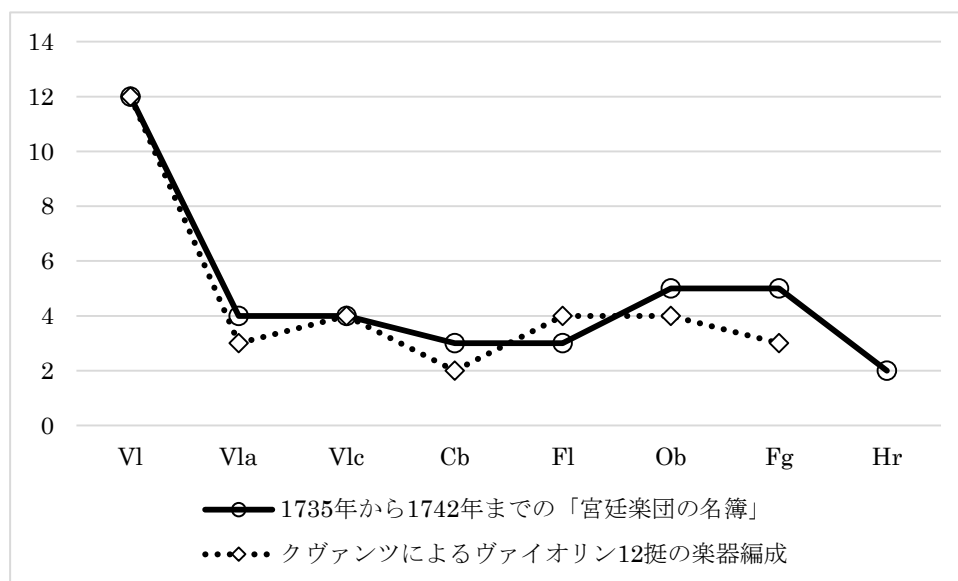


この図からは、クヴァンツによって最適と考えられた配分が、ほぼ一定であることを読み取ることができる。すなわち、12本のヴァイオリンを含む編成を起点にした場合、3本または4本のヴィオラ、チェロ、フルート、オーボエ、ファゴットは、ヴァイオリンが3分の2にあたる8本まで減少する際に、同じ3分の2から2分の1となる2本に減らされる。そして8本のヴァイオリンを半数の4本まで減らす際には、まず木管楽器を除外し、残りの弦楽器の数をも同様に半数の1本にしている。

図 3-21 は、クヴァンツが示したヴァイオリン 12 本を伴う楽器の配分と、「宮廷楽団の名簿」から導かれた一定の人数配分を折れ線グラフによって示している。この図から明らかのように、二つの配分は類似している。さらに、フベルトゥスブルクにおけるオペラ上演に選ばれた者を記録した 1737 年の「明細」は、ドレスデン宮廷楽団がヴァイオリン奏者を 8 名まで減らして演奏した場合、当時の名簿において 4 名以上を誇ったヴィオラ、チェロ、オーボエ、ファゴットの奏者が、半数程の 2 名まで減員されていたことを示して

いる（230 頁の表 3-9 と 192 頁から始まる表 3-1 を参照）。このことは、クヴァンツの配分においてヴァイオリンを 12 本から 8 本に減らした際に見られた傾向に非常に似ている。

図 3-21 「宮廷楽団の名簿」における人数配分とクヴァンツによる楽器の数の配分



またマウンダーは、1685 年から 1750 年までに筆写された協奏曲のパート譜を参照し、各パート譜を構成する楽譜の冊数に基づいて演奏に用いられた楽器の数を考察した。そして、1 冊の楽譜を 1 名が利用した場合、ピゼンデルの時代のドレスデン宮廷においては、ヴァイオリン 6 本、ヴィオラ 2 本、チェロ 2 本、コントラバス 1 本、さらに各 2 本のオーボエとファゴットによって「協奏曲は通常演奏された」と指摘した²²⁰。表 3-15 に示した人数を半減した場合、その数はマウンダーが示した楽器の本数と一致する。

ところで、表 3-15 に示した楽器のうち、パンタレオンとヴィオラ・ダ・ガンバが、ドレスデン宮廷楽団の合奏に用いられた可能性は低いといえよう。なぜなら、この楽団が演奏に用いたパート譜に、これらの楽器の楽譜は含まれていないからである。

²²⁰ Richard Maunder, *The Scoring of Baroque Concertos* (Woodbridge: Boydell Press, 2004), p. 198.

これらのことに基づくと、1735年から1742年までの「宮廷楽団の名簿」からヴィオラ・ダ・ガンバとパンタレオンを除外した人数配分は、ピゼンデルの時代のドレスデン宮廷楽団における楽器編成の基準を強く示唆していると結論付けることができる。

この名簿には、第2章において確認したように、亡くなっていた奏者の名前が数年後まで記載された場合や、この楽団に所属していたにも関わらず名前の掲載が遅れた場合が見られる。そのため、この名簿の内容は不完全であることが指摘されてきた²²¹。しかし本章における検証に基づくと、この名簿は、ドレスデン宮廷楽団の実際の演奏を考察することに用いられ得るといえる。

表 3-15 に示した人数配分においては、ヴァイオリン奏者が最も多く、弦楽器奏者は奏者全員のうち半数以上を占めている。このことは、ザスローが指摘した「オーケストラ」の第1の特徴に一致する。彼は、17世紀末から18世紀初頭の「バロック時代のオーケストラ」を論じ、「オーケストラ」を定義する七つの特徴を挙げた。その第1の特徴は、「オーケストラは、ヴァイオリン族の弦楽器に基づいて[構成されて]いる」ことになっている。

しかし表 3-15 において、木管楽器である5名のファゴット奏者は、4名ないし5名のチェロ奏者と同数、または1名多い。従って、1735年から1742年までの「宮廷楽団の名簿」から算出された奏者の人数配分において、低音楽器の中では弦楽器のチェロだけでなく、木管楽器のファゴットも多いといえる。

ルソーの『音楽辞典』に掲載された奏者の配置図は、ドレスデン宮廷楽団が1754年にオペラを上演した際、ファゴット奏者が5名であったことを表している。さらに、楽長ハッセによって作曲されたオラトリオ《十字架の下の徳 *Le virtù appiè della croce*》は、1737年にカトリック宮廷礼拝堂において初演された。その時に用いられたパート譜は現存しており、そこには3冊のファゴット譜（「第1ファゴット *Fagotto. I:*」と「第2ファゴット

²²¹ Mary A. Oleskiewicz, *Quantz and the Flute at Dresden: His Instruments, his Repertory and their Significance for the Versuch and the Bach Circle* (Ph. D. diss., Duke University, 1998), p. 7.

Fagotto. 2」及び「第3ファゴット Fagotto 3:」が含まれている²²²。この3冊のうち2冊をそれぞれ2名が利用し、残りの1冊を1名が読んだ場合、ファゴット奏者は合計5名になる。これらのことに基づくと、「宮廷楽団の名簿」に記載されたファゴット奏者全員が演奏に動員されたことは、十分に考えられるだろう。

さらに、フベルトゥスブルクにおけるオペラ上演に選出された者を記録した3点の資料のうち、1741年の「明細」と1742年の「記録」において、チェロ奏者は3名、コントラバス奏者は1名、ファゴット奏者は4名となっている。そのため、ファゴット奏者の数は、チェロ奏者とコントラバス奏者の合計に等しい。よって、ドレスデン宮廷楽団がこれらの年にフベルトゥスブルクにおいてオペラを上演した際、低音楽器の中ではファゴット奏者が最多であったと考えられる。

従って、ピゼンデルが楽師長を務めた時代のドレスデン宮廷楽団は、低音楽器の人数配分において、「オーケストラ」の第1の特徴であった「ヴァイオリン族の弦楽器に基づいて[構成されて]いる」ことに則っていないといえる。そして、ファゴットが低音楽器の中において多数に上ったことは、ピゼンデルの時代におけるドレスデン宮廷楽団の特徴といえる。

²²² Johann Adolf Hasse, *Le Virtù appiè della croce* (D-Dl, Mus.2477-D-12a), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=270000592>; Michael Koch, *Die Oratorien Johann Adolf Hasses: Überlieferung und Struktur* (Pfaffenweiler: Centaurus, 1989), p. 97; Wolfgang Hochstein, "Hasses Oratorien und ihre Fassungen," in *Musik zwischen Spätbarock und Wiener Klassik: Festschrift für Gisela Vogel-Beckmann zum 65. Geburtstag*, edited by Hanns-Werner Heister and Wolfgang Hochstein (Berlin: Weidler, 2005), pp. 69-98.

第4章 ドレスデン宮廷楽団におけるファゴットの用いられ方

本章では、1733年から1735年のドレスデン宮廷楽団において、ファゴット奏者がヴァイオリン奏者と共に増員された原因を明らかにする。

前章においては、ヴォリュミエの時代におけるドレスデン宮廷楽団と比較した場合、ピゼンデルの時代のこの楽団は、ヴァイオリンとファゴットの奏者が多かったことを明らかにした。このことは、1733年から1735年にかけて、これらの楽器の奏者のみが倍増されたことに起因していた。彼らのうち、ヴァイオリン奏者が12名に達したことは、ヴェネツィアのサン＝マルコ聖堂の奏者の数に倣った可能性を指摘できた。しかし、3名のファゴット奏者がほぼ2倍となる5名に増えた原因は、この聖堂の楽団を模倣したことによって説明できなかった。なぜなら、この聖堂に所属したファゴットを含む木管楽器奏者の数は、ドレスデン宮廷楽団と全く違っていたからである。さらに、ドレスデン宮廷楽団において、ファゴット奏者がヴァイオリン奏者と共に急増した理由を示した文章資料は、未だに見つかっていない。

しかし、楽師長ピゼンデルは器楽の演奏を統括し、その演奏のために必要なパート譜の筆写、楽器編成の決定、奏者の指導などを行い、かつ新しい奏者の雇用について宮廷や楽長ハッセに陳情していた²²³。このことに基づくと、ドレスデン宮廷楽団の演奏習慣は、新たな楽団員の雇用に影響を及ぼす場合があったと考えられる。よって、演奏におけるファゴットや他の楽器の用法を示すことは、ファゴットがヴァイオリンと共に増員された原因の解明に繋がる可能性がある。

18世紀前半の演奏におけるファゴットの用法を、アンガルヘーファーは以下のように説明した。

²²³ Kai Köpp, *Johann Georg Pisendel (1687-1755) und die Anfänge der neuzeitlichen Orchesterleitung* (Tutzing: H. Schneider, 2005), pp. 242-243; Georg Philipp Telemann, *Briefwechsel: Sämtliche erreichbare Briefe von und an Telemann*, edited by Hans Grosse (Leipzig: Dt. Verl. für Musik, 1972), p. 361.

1700年頃に、三つの楽章から成るソナタや独奏協奏曲など、器楽において新しい形式が発展したため、(四つの部分から成り四つの鍵を備えた) ファゴットにとって、自律した独奏楽器としての新しい時代が始まった。²²⁴

この説明からは、協奏曲などの曲種において、ファゴットが独奏楽器として用いられるようになったことが分かる。オッテンベルクは、18世紀前半のドレスデン宮廷において、少なくとも5曲のファゴット協奏曲が筆写されたことを明らかにした²²⁵。

同じ18世紀前半の演奏において、ファゴットは他の楽器と共に通奏低音声部を奏でる楽器として用いられる場合もあった。しかし、当時の総譜の多くにはこの声部を奏でた楽器の種類が明記されていないため、ファゴットが編成に含まれたか、また編成に含まれた場合、どの箇所においてこの楽器が演奏に加わったかを考察できない。そのためマーリンクは、演奏におけるファゴットの用法を検証することが難しいことを指摘した²²⁶。しかし、ドレスデン宮廷において筆写されたパート譜の多くには、「バソン Basson」や「バッソーノ Bassono」と題されたファゴット譜が含まれるため、ファゴットが編成に含まれ、どの部分を演奏したかを把握できると考えられる。よって本章では、これらのパート譜に基づいて、演奏におけるファゴットを中心とした各楽器の用法を検証する。

この検証に用いるパート譜は、ヴォリュミエとピゼンデルが楽師長を務めた時代にドレスデン宮廷において筆写されたものとする。ピゼンデルの時代のドレスデン宮廷楽団は、ヴォリュミエの時代の人数を基本にしつつ独自の傾向を示していたため、ピゼンデルの時

²²⁴ Günter Angerhöfer and Walther Krüger, “Fagott,” in *MGG2*, Sachteil 3, col. 287.

²²⁵ *Fünf Fagottkonzerte in Dresdner Überlieferung*, edited by Hans-Günter Ottenberg (Berlin: Ries & Erler, 2012).

²²⁶ Christoph Mahling, “Con o senza fagotto? Bemerkungen zur Besetzung des 'Bassi' (1740 bis ca. 1780),” in *Florilegium musicologicum: Hellmut Federhofer zum 75. Geburtstag*, edited by Christoph Mahling (Tutzing: Hans Schneider, 1988), pp. 197-208.

代におけるファゴットの用法も、ヴォリュミエの時代のものを継承した可能性があるからである。

ヴォリュミエとピゼンデルの時代にドレスデン宮廷において筆写されたパート譜は、オペラ、教会音楽を中心とした声楽、協奏曲をはじめとする器楽に大別される。この2種類の音楽のうち、器楽は楽器のみによって演奏されたため、声楽に比べて器楽には、ヴァイオリンとファゴットの増員に関連する楽器の用いられ方が明確に現れている可能性が高いと考えられる。先の二人の楽師長の時代にドレスデン宮廷において筆写された器楽のパート譜は、フランス、イタリア、ドイツを中心とした作曲家の作品に及んでいる²²⁷。これらの地域の音楽うち、先代の楽師長ヴォリュミエが仕えたザクセン選帝侯フリードリヒ・アウグスト1世は、フランス音楽を好んだため、ドレスデン宮廷楽団がヴォリュミエの時代に演奏した主な器楽は、フランスのものであったといえる。

これらのことを踏まえ、本章では、はじめに先代の楽師長ヴォリュミエの時代にドレスデン宮廷において筆写されたパート譜に基づき、主にフランスの器楽における各楽器の用いられ方を明らかにする²²⁸。その上で、ファゴットとヴァイオリンの増員に関連したと考えられる楽器の用法を指摘し、それがヴォリュミエの時代に続くピゼンデルの時代に継承されたかを検証する。この検証は、ピゼンデルの時代にこの宮廷で筆写されたパート譜を基に、器楽において各楽器がどのように用いられているかを明らかにすることによる。その楽器の用法がヴォリュミエからピゼンデルの時代に継承されたことを確認できた場合、この楽器の用い方に基づいて、1733年から1735年にかけてファゴットがヴァイオリンと共に増員された理由を指摘する。

²²⁷ Manfred Fechner, *Studien zur Dresdner Überlieferung von Instrumentalkonzerten deutscher Komponisten des 18. Jahrhunderts: Die Dresdner Konzert-Manuskripte von Georg Philipp Telemann, Johann David Heinichen, Johann Georg Pisendel, Johann Friedrich Fasch, Gottfried Heinrich Stölzel, Johann Joachim Quantz und Johann Gottlieb Graun* (Laaber: Laaber, 1999).

²²⁸ パート譜を構成するそれぞれの楽譜を何人の奏者が読んだかは不明である。本章では、便宜的に1冊のパート譜を一人の奏者が読んだと仮定して論述を進める。

第1節 楽師長ヴォリュミエの下におけるフランス舞曲

ドレスデン宮廷において書かれた手稿譜は、七年戦争後に、この宮廷のカトリック教会礼拝堂の「第2番書棚 Schranck No: II」に収納され、今日、ザクセン州立兼大学図書館に保管されている。ヴォスは、「第2番書棚」に収められた楽譜のうち、ヴォリュミエが楽師長を務めた時代に筆写されたパート譜を一覧表に示した²²⁹。この表には、パート譜の資料番号、パート譜に記された楽曲の作曲家の名前、曲目、パート譜を筆写した者の名前が示されている。この表に掲載されたパート譜は、合計94点に上る。

ヴォスの表からは、フランス王ルイ14世の下において、音楽の総監督を務めたリュリの楽曲が、ドレスデン宮廷において演奏されたことが分かる。この表には、彼の作品の筆写パート譜が合計16点記載されているのである。表4-1は、この16点のパート譜について、ヴォスが示した資料番号、曲目、写譜家の情報を表し、さらに、それぞれのパート譜を構成する楽譜の種類と冊数を示している。

²²⁹ Steffen Voss, “Teilsammlungen und ihre Identifizierung,” in *Schranck No: II: Das erhaltene Instrumentalmusikrepertoire der Dresdner Hofkapelle aus den ersten beiden Dritteln des 18. Jahrhunderts*, edited by Gerhard Poppe (Beeskow: Ortus Musikverlag, 2012), pp. 38-42.

表 4-1 ヴォリュミエが楽師長を務めた時代にドレスデン宮廷において筆写されたパート譜（リュリの作品のみ）

資料番号	曲目	写譜家	パート譜に含まれる楽譜の種類と冊数	
D-DI, Mus.1827-F-2	トラジェディ・リリック 《カドモスとヘルミネオ Cadmus et Hermoine》 (LWV 49) に基づく組曲	S-DI-001	第1 ヴァイオリン Violino 1	3
			オート・コントル Haute Contre	1
			ターユ Taille	1
			カント Quinte	1
			バス・ドゥ・ヴィオロン Basse de Violon	2
			通奏低音 Basse Continue	1
			第1 オーボエ Haubois 1er	1
			第2 オーボエ Haubois 2	1
			バスン Basson	1
D-DI, Mus.1827-F-6	トラジェディ・リリック 《アッティス Atys》(LWV 53) に基づく組曲	S-DI-001	ヴァイオリン Violino	5
			第1 ヴァイオリン Violino Premier, Violino 1	2
		S-DI-002	第2 ヴァイオリン Violino 2	1
			オート・コントル Haute Contre	2
			ターユ Taille	2
			カント Quinte	1
			バス・ドゥ・ヴィオロン Basse de Violon	4
			通奏低音 Basso Continuo	3
			バスン Basso	2
			ヴィオロン Violon	1
			チェンバロ Cembalo	1
			第1 オーボエ Haubois 1er, Hautbois 1	2
			第2 オーボエ Haubois 2de, Hautbois 2	2
バスン Basson	2			
D-DI, Mus.1827-F-8	トラジェディ・リリック 《テセウス Thésée》(LWV 51) による組曲	S-DI-001 写譜家 u (Schreiber u)	第1 ヴァイオリン Violino 1	3
			第2 ヴァイオリン Violino 2do	1
			オート・コントル Haute Contre	1
			ターユ Taille	1
			カント Quinte	1
			バス・ドゥ・ヴィオロン Basse de Violon	3
			通奏低音 Basse Continue	2
			第1 オーボエ Haubois 1er	1
第2 オーボエ Haubois 2de	1			

資料番号	曲目	写譜家	パート譜に含まれる楽譜の種類と冊数	
			バスン Basson	1
D-Dl, Mus.1827-F-11	トラジェディ・リリック 《プロセルピナ Proserpine》(LWV 58)、 《ファエトン Phaëton》 (LWV 61)、《ペルセウス Persée》(LWV 60) に基づ く組曲	不明 (S-Dl-017?) Johann Jacob Lindner 写譜家 u (Schreiber u)	第1 ヴァイオリン Violino 1mo	3
			第2 ヴァイオリン Violino 2do	1
			第1 ヴィオラ Viola 1	1
			第2 ヴィオラ Viola 2	1
			バスン Basso	2
			チェンバロ Cembalo	1
			第1 チェンバロ Cembalo Pri:mo	1
			第2 チェンバロ Cembalo 2do	1
			第1 オーボエ Hautbois 1mo	1
			第2 オーボエ Hautbois 2do	1
D-Dl, Mus.1827-F-13	バレ 《アモルの勝利 Le Triomphe de l'amour》 (LWV 59)に基づく組曲	Prache de Tilloy Johann Wolfgang Schmidt	第1 ヴァイオリン Premier Dessus de Violon	1
			第2 ヴァイオリン Second Dessu De Violon	1
			ヴァイオリン Dessus De Violon	1
			リピエーノ・ヴァイオリン Violons Ripienno	1
			オート・コントル Haute Contre De Violon	1
			ターユ Taille De Violon	1
			バスとバスン Basse Et Basson	2
			通奏低音 Basse Continue	2
			第1 オーボエと第1 フルート Hautbois Et Flutte 1	1
			第2 オーボエと第2 フルート Hautbois Et Flutte 2	1
D-Dl, Mus.1827-F-15	トラジェディ・リリック 《ペルセウス Persée》 (LWV 60) に基づく組曲	Johann Jacob Lindner 写譜家 u (Schreiber u)	第1 ヴァイオリン Violino Pr.mo, Violino Primo, Premier Dessus	4
			オート・コントル hautecontre, Hautecontre	2
			ターユ Taille	2
			カント Quinte	2
			バスン Basso	3
			第1 チェンバロ Cembalo Pri:mo [楽譜の中に「バスン Basson」の表記あり]	1
			第2 チェンバロ Cembalo 2do	1
			第1 オーボエ Hauboe Primo	1
			「第1 ヴァイオリンと第2 オーボエ	1

資料番号	曲目	写譜家	パート譜に含まれる楽譜の種類と冊数	
			Premier Dessus et Hautbois 2]	
D-Dl, Mus.1827-F-15a	トラジェディ・リリック 《ペルセウス Persée》 (LWV 60) に基づく組曲	Johann Jacob Lindner	第1 ヴァイオリン Violino Primo	1
			ヴァイオリン Violino	2
			第1 ヴィオラ Viola 1	1
			第2 ヴィオラ Viola 2do	1
			バスソ Basso	2
			チェンバロ Cembalo	1
			オーボエと [または] ヴァイオリン Hautb: o Violino	2
			バスソ Basson	2
D-Dl, Mus.1827-F-17	トラジェディ・リリック 《ファエトン Phaëton》 (LWV 61) に基づく組曲	Johann Jacob Lindner	ヴァイオリン Violino	4
			オート・コントル Haute Contre	1
			ターユ Taille	1
			バス・ドゥ・ヴィオロン Basse de Violon	3
			通奏低音 Basse Continuo, Basse Continue	2
			第1 オーボエ Hautbois 1	1
			第2 オーボエ Hautbois 2	1
			バスソ Basson	1
D-Dl, Mus.1827-F-21	バレ 《平和の神殿 Le temple de la paix》 (LWV 69) に基づく組曲	Johann Jacob Lindner 写譜家 u (Schreiber u)	第1 ヴァイオリン Premier Violin:o, Violino Pr:mo, Violino Primo, Violino Pr:o	4
			第2 ヴァイオリン Violino 2do	1
			第1 ヴィオラ Viola Pr:o	1
			第2 ヴィオラ Viola 2da	1
			バスソ Basso	2
			ヴィオローネ Violone	1
			通奏低音 Basso Conimo, Basso Contin	2
			第1 オーボエ Hautb: Pr.o	1
			第2 オーボエ Hautbois 2do	1
バスソ Basson	1			
D-Dl, Mus.1827-F-30	トラジェディ・リリック 《ロラン Roland》 (LWV 65) に基づく組曲	S-Dl-001 写譜家 u (Schreiber u)	ヴァイオリン Violino, Violino:	4
			オート・コントル Haute Contre	1
			ターユ Taille	1
			カント Quinte	1

資料番号	曲目	写譜家	パート譜に含まれる楽譜の種類と冊数	
			バス・ドウ・ヴィオロン Basse de Violon ¹ , Basse de Violon	3
			通奏低音 Basse Continue	2
			第1 オーボエ Haubois 1er	1
			第2 オーボエ Haubois 2de	1
			バソン Basson	1
D-DI, Mus.1827-F-31	英雄的パストラル 《アキスとガラテイ ア Acis et Galatée》 (LWV 73) に基づく組曲	Prache de Tilloy Johann Jacob Lindner 写譜家 u (Schreiber u)	第1 ヴァイオリン Premier Dessus De Violon	1
			第2 ヴァイオリン Second Dessus De Violon	1
			第3 ヴァイオリン・リピエーノ 3 ^{me} Violon ¹ Ripieno ¹	1
			ヴァイオリン・リピエーノ Violon ¹ Ripieno	1
			オート・コントル Haute Contre De Violon	1
			ターユ Taille De Violon	1
			バスとファゴット Basse Et Basson	2
			通奏低音 Basse Continue	3
			バス・ドウ・ヴィオロン Basse de Violen ¹	1
			第1 オーボエと第1 フルート Premier Dessus De Hautbois Et Flutte	1
第2 オーボエと第2 フルート Second Dessus pour Les Hautbois Et Fluttes	1			
D-DI, Mus.1827-F-33	《アモルとバックスの祝祭 Les fêtes de l'Amour et de Bacchus》(LWV 47) と英 雄的パストラル《アキスと ガラティア Acis et Galatée》(LWV 73) に基 づく組曲	Johann Jacob Lindner	第1 ヴァイオリン Violin Primro, Violino Pri ^o	3
			オート・コントル Haute Contre	2
			ヴィオラ Viola	1
			バス・ドウ・ヴィオロン Basse de Violon	1
			ヴィオローネ Violone	1
			通奏低音 Basse Continue	1
			チェンバロ Cembalo	1
			第1 オーボエ Haubois Primo	1
第2 オーボエ Hautb ¹ : 2do	1			
D-DI, Mus.1827-F-34	Armide による組曲	S-DI-001 Johann Jacob Lindner	第1 ヴァイオリン Violino 1	1
			オート・コントル Haute Contre	1
			ターユ Taille	1
			カント Quinte	1

資料番号	曲目	写譜家	パート譜に含まれる楽譜の種類と冊数	
		Johann Wolfgang Schmidt	バス Basse	2
			通奏低音 Basse Continue	2
			第1 オーボエ Haubois 1er	1
			第2 オーボエ Haubois 2de	1
			第1 ヴァイオリンと [または] 第1 オーボエ Violino Pri: o Haubois 1er	1
			第1 ヴァイオリンと第2 オーボエ Violino Primo et Haubois IIde	1
D-D1, Mus.1827-F-35	パストラル《平和の牧歌 Idylle sur la paix》(LWV 68)、バレ《平和の神殿 Le temple de la paix》(LWV 69)、器楽曲《王太子妃のための数曲のサンフォニ Plusieurs pieces de symphonie》(LWV 70) に基づく組曲	Johann Jacob Lindner	ヴァイオリン Violino	3
			第1 ヴィオラ Viola 1	1
			第2 ヴィオラ Viola 2	1
			チェロ Violoncello	1
		Johann Wolfgang Schmidt	通奏低音 Basse de Continue, Basse Continue	2
			第1 オーボエ Hautbois I	1
			第2 オーボエ Hautbois II	1
			バスン Basson	1
D-D1, Mus.1827-F-36	トラジェディ・リリック《アマデイス Amadis》(LWV 63) に基づく組曲	Johann Jacob Lindner	第1 ヴァイオリン Violino Pr.mo	2
			ヴァイオリン Violino	2
			第1 ヴィオラ Viola I	1
			第2 ヴィオラ Viola II	1
		S-D1-010 S-D1-017	バス・ドゥ・ヴィオロン Basse de Violon	1
			通奏低音ヴィオロン Basso Continuo Violon	1
			第1 通奏低音 Basso Continuo Primo	1
			第2 通奏低音 Basso Continuo 2do	1
			バスン Basso	1
			第1 オーボエ Hautbois I	1
			第2 オーボエ Hautbois II	1
バスン Basson	1			
D-D1, Mus.1827-F-37	トラジェディ・リリック《アマデイス Amadis》(LWV 63) と《イシス Isis》(LWV 54) に基づく組曲	S-D1-020	第1 ヴァイオリン Violino Primo, Violino 1	3
		S-D1-122	第1 ヴィオラ Viola Prima:	1
		S-D1-124	ターユ Taille	1
			バスン Basso	4
			チェンバロ Cembale	1

資料番号	曲目	写譜家	パート譜に含まれる楽譜の種類と冊数	
		S-D1-125	第 1 オーボエ Hautbois Pr:	1
		S-D1-126	第 2 オーボエ Hautbois Sec:	1

表 4-1 に示した合計 16 点のパート譜は、トラジェディ・リリックやバレ、パストラルからの器楽曲、あるいは器楽に編曲された曲を集めた組曲となっている。この表のパート譜の中には、オート・コントル、ターユ、カントの 3 種類のヴィオラ譜を含んだものが見られ、このことは、ヴォリュミエがドレスデン宮廷に赴任した 1709 年の「オーケストラの年俸表」において、3 種類のヴィオラの奏者が見られたことに一致する。さらに、いずれのパート譜も木管楽器のための楽譜を含んでいる。

この 16 点のパート譜のうち約半数の 9 点は、それぞれ 1 冊の「バスン」譜を含んでいる²³⁰。その上、パート譜 D-Dl, Mus.1827-F-13 とパート譜 D-Dl, Mus.1827-F-31 には、1 冊の「バスとバスン」譜が見られ、パート譜 D-Dl, Mus.1827-F-15 の「第 1 チェンバロ」譜の中には、「バスン Basson」の表記が見られる。

これらのことから、表 4-1 の合計 16 点のパート譜のうち 12 点は、編成にファゴットを含んでいることが分かる。この 12 点においては、弦楽器と木管楽器による合奏が見られ、その中でファゴットは通奏低音声部を演奏している。さらに、この 12 点のうち 9 点には、二つの木管楽器とファゴット、または二つの木管楽器とファゴット及び通奏低音声部を奏する楽器のみによって演奏される箇所が見られる。以下では、このことについて詳述しており、その結果を踏まえた考察を、276 頁から始まる第 10 項において行っている。

第1項 パート譜 D-Dl, Mus.1827-F-6

パート譜 D-Dl, Mus.1827-F-6 には、トラジェディ・リリック《アッティス Atys》(LWV 53) に基づく舞曲が収められている。表 4-2 は、各曲が記譜された楽譜を「○」印によって表している。

²³⁰ この 9 点のパート譜は、右に挙げたものである。D-Dl, Mus.1827-F-2; D-Dl, Mus.1827-F-6; D-Dl, Mus.1827-F-8; D-Dl, Mus.1827-F-15a; D-Dl, Mus.1827-F-17; D-Dl, Mus.1827-F-21; D-Dl, Mus.1827-F-30; D-Dl, Mus.1827-F-35; D-Dl, Mus.1827-F-36.

表 4-2 D-Dl, Mus.1827-F-6 に記された楽曲

		「ヴァイオリン」	「第1ヴァイオリン」	「第2ヴァイオリン」	「オート・コントル」	「ターユ」	「カント」	「バス・ドゥ・ヴィオロン」	「バス」	「通奏低音」	「ヴァイオリン」	「チェンバロ」	「第1オーボエ」	「第2オーボエ」	「バス」
	序曲 Overture ²³¹	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第1曲	エール Air	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第2曲	ガヴオット Gavotte	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第3曲	前奏曲 Prelude	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第4曲	アントレ Entrée	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第5曲	記載なし	○			○	○	○	○	○	○			○	○	○
第6曲	ソメイユ Someil	○			○	○	○	○	○	○			○	○	○
第7曲	エール Air	○			○	○	○	○	○	○			○	○	○
第8曲	エール Air	○			○	○	○	○	○	○			○	○	○
第9曲	記載なし	○			○	○	○	○	○	○			○	○	○
第10曲	前奏曲 Prelude	○			○	○	○	○	○	○			○	○	○
第11曲	前奏曲 Prelude	○			○	○	○	○	○	○			○	○	○
第12曲	エール Air	○			○	○	○	○	○	○			○	○	○
第13曲	エール Air	○			○	○	○	○	○	○			○	○	○
第14曲	エール Air	○			○	○	○	○	○	○			○	○	○
第15曲	エール Air	○			○	○	○	○	○	○			○	○	○
第16曲	エール・トリスト Air triste								○	○			○	○	○
第17曲	エール Air	○			○	○	○	○	○	○			○	○	○
第18曲	前奏曲 Prelude	○			○	○	○	○	○	○			○	○	○
第19曲	記載なし	○			○	○	○	○	○	○			○	○	○
第20曲	ガヴオット Gavotte	○			○	○	○	○	○	○			○	○	○
第21曲	メニユエ Menuet	○			○	○	○	○	○	○			○	○	○

表 4-2 に示したように、パート譜 D-Dl, Mus.1827-F-6 には序曲と 21 曲の楽曲が記されている。そしてファゴットの楽譜である「バス」譜には、「バス・ドゥ・ヴィオロン」譜や「バス」譜と同様に、「通奏低音」譜と同じ声部が記譜されている。また、このパート譜の中には、序曲から第 4 曲までのみを記譜した楽譜が含まれている。これらの楽譜を除外すると、序曲と 21 曲の楽曲は、第 16 曲「エール・トリスト」を除き、全ての楽譜に

²³¹ 次に挙げる楽譜には、序曲から第 4 曲までのみが記譜されている。5 冊の「ヴァイオリン」譜のうちの 1 冊、2 冊の「オート・コントル」譜のうちの 1 冊、2 冊の「ターユ」譜のうちの 1 冊、2 冊の「バス」譜のうちの 1 冊、2 冊の「第 1 オーボエ」譜のうちの 1 冊、2 冊の「第 2 オーボエ」譜のうちの 1 冊、2 冊の「バス」譜のうちの 1 冊。

記されている（表 4-2 参照）。従って、序曲をはじめとする大半の楽曲の編成は、ヴァイオリン、3種類のヴィオラ、「バス・ドゥ・ヴィオロン」、何らかの低音楽器（「バスン」）、「通奏低音」を奏でる楽器、さらに二つのオーボエとファゴットであったと考えられる。

一方、第 16 曲「エール・トリスト」は、全ての弦楽器の楽譜に「休止 *tacet*」の指示が記されている。残りの楽譜のうち「第 1 オーボエ」譜と「第 2 オーボエ」譜の冒頭には、「フルート *Fleutes*」の指示が見られ、「バスン」譜、「バスン」譜、「通奏低音」譜の冒頭には「ファゴット独奏 *Basson seul*」の指示が見られる。従ってこの曲は、二つのフルートとファゴットのみによって演奏され、通奏低音声部を担ったファゴットは、二重奏を奏でるフルートを単独で伴奏したと推測されよう。

図 4-1 は、第 6 曲「ソメイユ」の構造を示している²³²。この図は、各楽譜の音符が記されている小節を実線によって表しており、休符の箇所は空白によって示している²³³。この図から分かるように、第 6 曲では、全ての弦楽器の楽譜に数小節に及ぶ休符が見られる。一方、「第 1 オーボエ」譜、「第 2 オーボエ」譜、「バスン」譜、「通奏低音」譜は、これらの弦楽器が休止する小節に音符が記されている。このことから、第 6 小節から第 10 小節までをはじめとする合計五つの部分において、ファゴットは、「通奏低音」の楽器と共に、二重奏を奏でるオーボエを伴奏したと考えられよう。

²³² 図の中に示した「トリオ *trio*」と「総奏 *tous*」の指示は、「通奏低音」譜に基づいている。ただし、第 49 小節の「総奏」は、本論文の筆者が書き加えた。

²³³ 本章に提示したこれらの図において、2 小節以下の休符は省略している。

図 4-1 第 6 曲の構造 (D-DI, Mus.1827-F-6)

ト短調、3/4 拍子

小節数	1	6	11	15	21	26	30	35	40	45	49	57
		trio	tous	trio	tous	trio	tous	trio	tous	trio	[tous]	
「第 1 オーボエ」												
「第 2 オーボエ」												
「バスン」												
「ヴァイオリン」												
「オート・コントル」												
「ターユ」												
「カント」												
「バス・ドゥ・ヴィオロン」												
「バスン」												
「通奏低音」												

第2項 パート譜 D-DI, Mus.1827-F-8

トラジェディ・リリック《テセウス Thésée》(LWV 51) に基づく組曲が記されたパート譜 D-DI, Mus.1827-F-8 には、序曲と 15 曲の楽曲が見られる。表 4-3 は、各曲が記譜された楽譜を「○」印によって表している。この表に提示した楽譜の中で、ファゴットのための「バスン」譜には、「バス・ドゥ・ヴィオロン」譜と同様に、「通奏低音」譜と同じ声部が記されている。

表 4-3 D-DI, Mus.1827-F-8 に記された楽曲

		「第1ヴァイオリン」	「第2ヴァイオリン」	「オーター・ロントル」	「ターユ」	「カント」	「バス・ドゥ・ヴィオロン」	「通奏低音」	「第1オーボエ」	「第2オーボエ」	「バスン」
	序曲 Overture	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第1曲	前奏曲 Prelude	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第2曲	トリオ Trio							○	○	○	○
第3曲	戦闘 Combattans	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第4曲	[曲種の記載なし]	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第5曲	エール Air	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第6曲	トリオ Trio							○	○	○	○
第7曲	前奏曲 Prelude	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第8曲	エール Air	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第9曲	エール Air	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第10曲	前奏曲 Prelude	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第11曲	エール Air	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第12曲	トリオ Trio							○	○	○	○
第13曲	エール Air	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第14曲	エール Air	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第15曲	ジーク Gigue	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

このパート譜に記された楽曲は、第2曲、第6曲、第12曲の「トリオ」を除き、全ての楽譜に記譜されている。従って、この三つの「トリオ」を除く楽曲は、ヴァイオリン、3種のヴィオラ、「バス・ドゥ・ヴィオロン」、「ヴィオロン」、「通奏低音」を奏でる楽器、二つのオーボエとファゴットによって演奏されたと考えられよう。

しかし、第2曲と第6曲の「トリオ」は、全ての弦楽器の楽譜に「休止 Tacet」の指示が書かれており、「第1オーボエ」譜と「第2オーボエ」譜、「バスン」譜、「通奏低音」譜のみに記譜されている。よって、これらの「トリオ」は、二つのオーボエ、ファゴット、何らかの「通奏低音」を奏でる楽器のみによって演奏されたと推定される。

第 12 曲の「トリオ」も、全ての弦楽器の楽譜には「休止」の指示が見られ、「第 1 オーボエ」譜、「第 2 オーボエ」譜、「バソン」譜、「通奏低音」譜にのみ記されている（表 4-3 参照）。そして「第 1 オーボエ」譜と「第 2 オーボエ」譜には、それぞれ冒頭に「フルート Fleutes」と書かれている²³⁴。従ってこの曲は、二つのフルート、ファゴット、何らかの「通奏低音」を奏でる楽器によって演奏されたと考えられる。

図 4-2 第 1 曲の構造 (D-DI, Mus.1827-F-8)

ハ長調、3/4 拍子



図 4-2 は、第 1 曲の「前奏曲」について、先の図 4-1 と同様に、各楽譜の音符が記された小節を示している²³⁵。この図に表したように、第 1 曲の「前奏曲」が記された楽譜のうち、全ての弦楽器の楽譜にはまとまった休符が見られる。一方「第 1 オーボエ」譜、「第 2 オーボエ」譜、「バソン」譜、「通奏低音」譜に、それらの休符は全く見られない。このよ

²³⁴ D-DI, Mus.1827-F-8, pp. 68 and 75.

²³⁵ 図の中に示した「トリオ trio」と「総奏 tous」の指示は、「第 1 オーボエ」譜に基づいている。

うに第1曲には、二つのオーボエ、ファゴット、「通奏低音」のみによって演奏されたと考えられるトリオ部分がある。

さらに図4-3から明らかなように、第4曲においても、全ての弦楽器の楽譜には休符が見られるが、「第1オーボエ」譜、「第2オーボエ」譜、「バソン」譜、「通奏低音」譜に、それは見られない²³⁶。そして「第1オーボエ」譜と「第2オーボエ」譜において、この曲の冒頭には「フルートとヴァイオリン *Fleutes et Violons*」の指示がある。従って、弦楽器の楽譜に休符が記された箇所は、フルート、ヴァイオリン、ファゴット、「通奏低音」の楽器のみによって奏でられたと考えられよう。

図4-3 第4曲の構造 (D-DI, Mus.1827-F-8)

ハ長調、3/4拍子



²³⁶ 図の中に示した「トリオ trio」と「総奏 tous」の指示は、「通奏低音」譜に基づいている。

第3項 パート譜 D-DI, Mus.1827-F-13

パート譜 D-DI, Mus.1827-F-13 は、バレ《アモルの勝利 Le Triomphe de l'amour》(LWV 59)に基づく組曲の楽譜であり、表 4-4 に示したように、序曲と合計 40 曲の楽曲が記されている。このパート譜には独立したファゴット譜は含まれない一方、「バスとバソン」と題された楽譜が見られ、この楽譜には「通奏低音」譜と同じ声部が記されている。

表 4-4 に示した序曲と、それに続く合計 40 曲のうち 33 曲は、このパート譜を構成する全ての楽譜に記譜されている。従って、これらの曲の編成は、ヴァイオリン、3 種類のヴィオラ、何らかの低音楽器とファゴット、「通奏低音」を奏でる楽器、それぞれ二つのフルートとオーボエによる大規模なものであったと考えられる。

表 4-4 D-DI, Mus.1827-F-13 に記された楽曲

		「第1ヴァイオリン」	「第2ヴァイオリン」	「ヴァイオリン」	「リビエーノ・ヴァイオリン」	「オー・ト・コントル」	「タージュ」	「バスとバソン」	「通奏低音」	「第1オーボエとフルート」	「第2オーボエとフルート」
	第1序曲 Overture No. 1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第1曲	リトゥルネル Ritournelle	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第2曲	リトゥルネル Ritournelle	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第3曲	アントレ Entrée	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第4曲	メニュエ Menuet	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第5曲	メニュエ Menuet	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第6曲	前奏曲 Prelude	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第7曲	アントレ Entrée	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第8曲	ロンド Rondeau	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第9曲	サンフォニ Simphonie	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第10曲	エール Air	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第11曲	アントレ Entrée	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第12曲	エール Air	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第13曲	前奏曲 Prelude	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第14曲	アントレ Entrée	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第15曲	メニュエ Menuet	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第16曲	メニュエ Menuet	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

		「第1ヴァイオリン」	「第2ヴァイオリン」	「ヴァイオリン」	「リピエーノ・ヴァイオリン」	「オート・コントル」	「ターユ」	「バスとバスン」	「通奏低音」	「第1オーボエとフルート」	「第2オーボエとフルート」
第17曲	リトゥルネル Ritournelle	○						○	○	○	○
第18曲	クール Choeur	○	○	○		○	○	○	○	○	○
第19曲	アントレ Entrée	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第20曲	第2エール Second air	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第21曲	アントレ Entrée	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第22曲	エール Air	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第23曲	前奏曲 Prelude	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第24曲	サラバンド Sarabande	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第25曲	エール Air	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第26曲	ガヴオット Gavotte	○	○	○		○	○	○	○	○	○
第27曲	ブレ Bourée	○	○	○		○	○	○	○	○	○
第28曲	リトゥルネル Ritournelle	○							○	○	○
第29曲	アントレ Entrée	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第30曲	第2エール Deuxieme Air	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第31曲	アントレ Entrée	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第32曲	第2エール Deuxieme Air	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第33曲	ガヴオット Gavotte	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第34曲	アントレ Entrée	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第35曲	前奏曲 Prelude	○	○	○	○	○	○	○			
第36曲	エール Air	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第37曲	第2エール Second Air	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第38曲	クール Choeur	○	○	○		○	○	○	○	○	○
第39曲	アントレ Entrée	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第40曲	前奏曲 Prelude	○	○	○		○	○	○	○	○	○
第41曲	アントレ Entrée	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第42曲	アントレ Entrée	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第43曲	メニュエ Menuet	○	○	○		○	○	○	○	○	○
第44曲	シャコンヌ Chaconne	○	○	○		○	○	○	○	○	○
第45曲	クール Choeur	○	○	○		○	○	○	○	○	○

しかし、これらの楽曲の間には、非常に小さい編成の曲が挿入されている。その一つは、第17曲「リトゥルネル」である。表4-4に表したように、この曲が記された楽譜は、「第1ヴァイオリン」、「バスとバスン」、「通奏低音」、「第1オーボエとフルート」、「第2オーボエとフルート」のみとなっている。表4-5に示したように、「第1オーボエとフルート」譜や「第2オーボエとフルート」譜には、冒頭に「オーボエ」の指示があり、さらに「バ

スとバスン」譜や「通奏低音」譜には、冒頭に「バスン」の表記が見られる。これらのことから、この第 17 曲は、少なくとも二つのオーボエとファゴットによって演奏され、さらに「第 1 ヴァイオリン」も演奏した可能性があるだろう。

表 4-5 各楽譜の内容（第 17 曲）

楽譜の種類	内容
「第 1 ヴァイオリン」	記譜あり。
「バスとファゴット」	記譜あり。冒頭に「バスン Basson」と記されている。
「通奏低音」	記譜あり。冒頭に「バスン Basson」と記されている。
「第 1 オーボエとフルート」	記譜あり。冒頭に「オーボエ Hautbois」と記されている。
「第 2 オーボエとフルート」	記譜あり。冒頭に「オーボエ Hautbois」と記されている。

第 28 曲の「リトゥルネル」が記された楽譜は、「第 1 ヴァイオリン」、「第 1 オーボエとフルート」、「第 2 オーボエとフルート」、「通奏低音」のみとなっており、「通奏低音」以外の楽譜の冒頭には、「フルート・アルマンデ Flute Allemande」の指示が記されている。そのため第 28 曲は、二つのフルートと「通奏低音」を奏でる楽器のみによって演奏されたと考えられる。

図 4-4 に示したように、第 38 曲「クール」において、第 5 小節から第 8 小節、第 22 小節から第 26 小節、第 40 小節から第 47 小節は、演奏する楽器の数が減少する。そして、「第 1 オーボエとフルート」譜と「第 2 オーボエとフルート」譜には、第 5 小節、第 22 小節、第 40 小節に「オーボエ hautbois」の指示が記されており、第 9 小節、第 27 小節、第 48 小節には「総奏 tous」と記されている。図 4-4 に表したように、「バスとバスン」譜においても、これらの小節には、「バスン Basson」や「総奏 tous」の指示が見られる。従って、演奏する楽器が減少するこれらの小節は、二つのオーボエとファゴットのみによって演奏されたと推定できる。

さらに終曲（第 45 曲）「クール」においても、「第 1 オーボエとフルート」譜と「第 2 オーボエとフルート」譜には、第 33 小節と第 49 小節に「オーボエ・トリオ hautbois trio」

の指示が見られる（図 4-4 参照）。そして第 37 小節と第 57 小節には、「総奏 tous」と記されている。また「バスとバスン」譜の第 33 小節と第 49 小節には「バスン Basson」の指示が、第 37 小節と第 57 小節には「総奏 tous」の指示が、それぞれ書かれている。そのため、この「クール」も、二つのオーボエとファゴットによって演奏されるトリオ部分が設けられていたと考えられる。

図 4-4 第 38 曲の構造 (D-DI, Mus.1827-F-13)

ト長調、3/4 拍子

小節数	1	5	9	22	27	40	48	67
「第 1 オーボエとフルート」								
「第 2 オーボエとフルート」								
「バスとバスン」								
「第 1 ヴァイオリン」								
「第 2 ヴァイオリン」								
「ヴァイオリン」								
「オート・コントル」								
「ターユ」								
「通奏低音」								

図 4-5 第 45 曲の構造 (D-DI, Mus.1827-F-13)

ハ長調、3/4 拍子

小節数	1	33	37	49	57	94
「第 1 オーボエとフルート」						
「第 2 オーボエとフルート」			hautbois trio tous		hautbois trio tous	
「バスとバソン」			Basson tous		Basson tous	
「第 1 ヴァイオリン」						
「第 2 ヴァイオリン」						
「ヴァイオリン」						
「オート・コントル」						
「ターユ」						
「通奏低音」						

第4項 パート譜 D-DI, Mus.1827-F-15

トラジェディ・リリック《ペルセウス Persée》(LWV 60) に基づく組曲が記されたパート譜 D-DI, Mus.1827-F-15 には、序曲を含め合計 13 曲の楽曲が収められている（表 4-6 参照）。このパート譜には、独立したファゴット譜は含まれていないが、後述するように、「第 1 チェンバロ」譜に「バソン」の指示が見られる。そして、この「第 1 チェンバロ」譜には、「第 2 チェンバロ」譜や「バス」譜と同様に、通奏低音声部が記されている。

表 4-6 D-DI, Mus.1827-F-15 に記された楽曲

		「第1 ヴァイオリン」 ²³⁷	「オーター・コントル」	「ターユ」	「カント」	「バツソ」	「第1 チェンバロ」	「第2 チェンバロ」	「第1 オーボエ」	「第1 ヴァイオリン と第2 オーボエ」
	序曲 Overture	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第1 曲	エール Air	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第2 曲	エール Air	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第3 曲	トリオ Trio	(○)				○	○	○	○	○
第4 曲	前奏曲 Prelude	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第5 曲	アントレ Entrée	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第6 曲	行進曲 Marche	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第7 曲	エール Air	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第8 曲	トリオ Trio	(○)				○	○	○	○	○
第9 曲	前奏曲 Prelude	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第10 曲	第1 エール Air 1	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第11 曲	第2 エール Air 2	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第12 曲	第3 エール Air 3	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第13 曲	ジーク Gigue	○	○	○	○	○	○	○	○	○

表 4-6 から明らかなように、序曲以下の楽曲は、第3 曲と第8 曲の「トリオ」を除き、全ての楽譜に記譜されている。従ってこの2 曲以外は、ヴァイオリン、3 種類のヴィオラ、何らかの低音楽器、二つのチェンバロ、二つのオーボエによって演奏されたと考えられよう。

一方、第3 曲「トリオ」が記された楽譜は、それぞれ1 冊の「第1 ヴァイオリン Violino Pr.mo」と「第1 ヴァイオリン Violino Primo」、さらに「第1 チェンバロ」、「第2 チェンバロ」、「第1 オーボエ」、「第1 ヴァイオリンと第2 オーボエ」のみとなっており、その他

²³⁷ このパート譜には、合計4 冊の第1 ヴァイオリン譜が見られる。それらは、それぞれ1 冊の「第1 ヴァイオリン Violino Pr.mo」譜と「第1 ヴァイオリン Violino Primo」譜、2 冊の「第1 ヴァイオリン Premier Dessus」譜である。このうち、「第1 ヴァイオリン Violino Pr.mo」譜と「第1 ヴァイオリン Violino Primo」譜には、第3 曲と第8 曲の「トリオ」が記譜されている。しかし残りの2 冊において、これらの曲には「休止 Tacet」の指示が記されている。

の楽譜には休止の指示が記されている（表 4-6 参照）。また「バスソ」譜において、このトリオには「休止 Tace [sic]」と書かれているが、楽譜の後ろの部分にこの曲の楽譜が張り付けられている²³⁸。

表 4-7 は、第 3 曲が記された楽譜の内容を示している。この表に記したように、2 冊の「第 1 ヴァイオリン」譜には、冒頭に「オーボエ」の指示が見られるため、ヴァイオリンは休止していたと考えられよう。また「第 1 チェンバロ」譜には、冒頭に「バスソ」の指示が見られる。さらに「第 1 ヴァイオリンと第 2 オーボエ」譜の冒頭には、「第 2 オーボエ」の指示があるため、この楽譜を利用したヴァイオリン奏者は演奏しなかったと考えられる。これらのことから、第 3 曲「トリオ」は、二つのオーボエ、ファゴット、何らかの低音楽器（「バスソ」）と「通奏低音」を奏でる楽器のみによって演奏されたと推測できよう。

表 4-7 各楽譜の内容（第 3 曲が記された楽譜のみ）

楽譜の種類	内容
「第 1 ヴァイオリン Violino Pr.mo」	冒頭に「オーボエ Hautbois」の指示あり。
「第 1 ヴァイオリン Violino Primo」	冒頭に「オーボエ Hautbois」の指示あり。
「バスソ」	張り付けられた楽譜あり。
「第 1 チェンバロ」	冒頭に「バスソ Basson」の表記あり。
「第 2 チェンバロ」	特別な指示なし。
「第 1 オーボエ」	特別な指示なし。
「第 1 ヴァイオリンと第 2 オーボエ」	冒頭に「第 2 オーボエ Hautb 2」の指示あり。

第 3 曲と同様に、第 8 曲「トリオ」が記譜された楽譜も、「第 1 ヴァイオリン Violino Pr.mo」と「第 1 ヴァイオリン Violino Primo」、「バスソ」、「第 1 チェンバロ」、「第 2 チェンバロ」、「第 1 オーボエ」、「第 1 ヴァイオリンと第 2 オーボエ」のみである。これらの楽譜の内容を表 4-8 に示す。この表から明らかなように、第 8 曲が記された楽譜には、「バ

²³⁸ D-DI, Mus.1827-F-15, pp. 72, 79 and 86.

ゾン」の指示が見られない。そのため、この楽曲の編成にファゴットが含まれたかは不明である。

表 4-8 各楽譜の内容（第 8 曲が記された楽譜のみ）

楽譜の種類	内容
「第 1 ヴァイオリン Violino Pr.mo」	冒頭に「オーボエ Hautbois」の指示あり。
「第 1 ヴァイオリン Violino Primo」	冒頭に「オーボエ Hautbois」の指示あり。
「第 1 チェンバロ」	特別な指示なし。
「第 2 チェンバロ」	特別な指示なし。
「バスソ」	特別な指示なし。
「第 1 オーボエ」	特別な指示なし。
「第 1 ヴァイオリンと第 2 オーボエ」	冒頭に「第 2 オーボエ Hautb 2」の指示あり。

第5項 パート譜 D-DI, Mus.1827-F-17

パート譜 D-DI, Mus.1827-F-17 には、トラジェディ・リリック《ファエトン Phaeton》（LWV 61）に基づく組曲が記されており、序曲の後に合計 12 曲の楽曲が見られる。このパート譜において、ファゴットのための「バスソ」譜には、「バス・ドゥ・ヴィオロン」譜と同様に、「通奏低音」譜と同一の声部が記されている。

また表 4-9 に示したように、序曲と 11 曲は、このパート譜の全ての楽譜に記譜されている。従ってこれらの曲は、ヴァイオリン、オート・コントル、ターユ、「バス・ドゥ・ヴィオロン」、「通奏低音」を奏でる楽器、二つのオーボエ、ファゴットによって演奏されたと考えられよう。

表 4-9 D-DI, Mus.1827-F-17 に記された楽曲

		「ヴァイオリン」	「ホルナー・コントルト」	「ターユ」	「バス・ドゥ・ヴィオロン」	「通奏低音」	「第1オーボエ」	「第2オーボエ」	「バスン」
	序曲 Overture	○	○	○	○	○	○	○	○
第1曲	エール Air	○	○	○	○	○	○	○	○
第2曲	フルートのエール Air à fleutes					○	○	○	○
第3曲	ロンド Rondeau					○	○	○	○
第4曲	クール Choeur	○	○	○	○	○	○	○	○
第5曲	前奏曲 Prelude	○	○	○	○	○	○	○	○
第6曲	行進曲 Marche	○	○	○	○	○	○	○	○
第7曲	アントレ Entrée	○	○	○	○	○	○	○	○
第8曲	エール Air	○	○	○	○	○	○	○	○
第9曲	前奏曲 Prelude	○	○	○	○	○	○	○	○
第10曲	アントレ Entree	○	○	○	○	○	○	○	○
第11曲	エール Air	○	○	○	○	○	○	○	○
第12曲	クール Choeur	○	○	○	○	○	○	○	○

一方、第2曲は「フルートのエール」と題されており、全ての弦楽器の楽譜には休止の指示が見られ、この曲が記された楽譜は「第1オーボエ」と「第2オーボエ」、「バスン」、「通奏低音」のみとなっている（表4-9参照）。「第1オーボエ」譜と「第2オーボエ」譜の冒頭には、それぞれ「フルート Fleutes」の表記があるため、第2曲「フルートのエール」は、二つのフルートとファゴット及び「通奏低音」の楽器のみによって演奏されたと考えられよう。

また、第1曲の「エール」や第4曲の「クール」には、図4-6と図4-7に示したように、全ての弦楽器が休止する箇所が見られる²³⁹。これらの部分は、二つのオーボエ、ファ

²³⁹ 図の中に示した「トリオ Trio」と「総奏 Tous」の指示は、「通奏低音」譜に基づいている。

ゴット、「通奏低音」を奏でる楽器のみによって演奏されたと考えられるトリオ部分となっている。

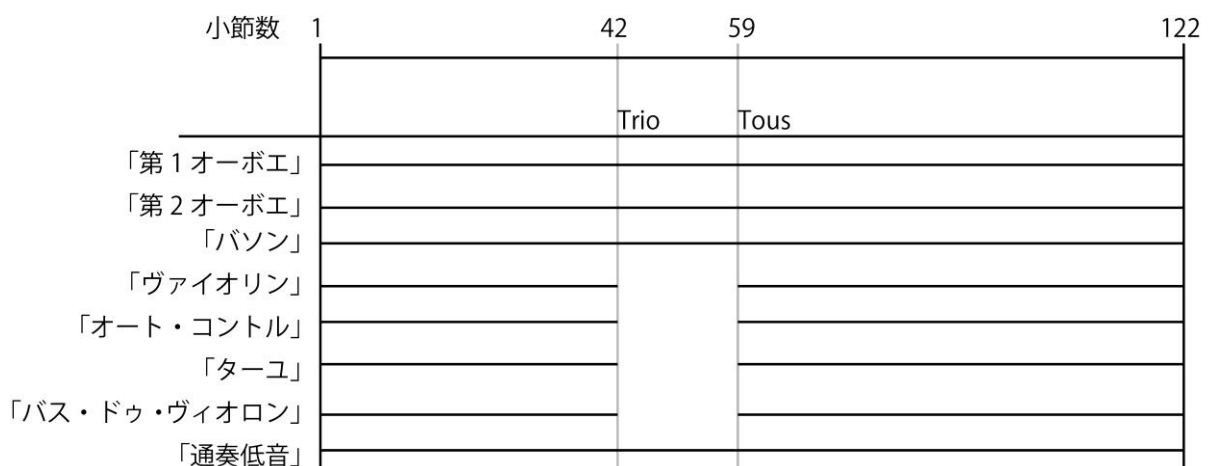
図 4-6 第 1 曲の構造 (D-DI, Mus.1827-F-17)

ハ長調、2/2 拍子



図 4-7 第 4 曲の構造 (D-DI, Mus.1827-F-17)

ハ長調、4/4 拍子



第6項 パート譜 D-DI, Mus.1827-F-21

バレ《平和の神殿 Le temple de la paix》(LWV 69) に基づく組曲が記されたパート譜 D-DI, Mus.1827-F-21 には、序曲をはじめ合計 17 曲の楽曲が見られる(表 4-10 参照)²⁴⁰。このパート譜において、ファゴットの楽譜である「バスン」譜には、「バツソ」譜、「ヴィオローネ」譜、「通奏低音」譜と同一の声部が記されている。

表 4-10 D-DI, Mus.1827-F-21 に記された楽曲²⁴¹

		「第1ヴァイオリン」	「第2ヴァイオリン」	「第1ヴィオラ」	「第2ヴィオラ」	「バツソ」	「ヴィオローネ」	「通奏低音」	「第1オーボエ」	「第2オーボエ」	「バスン」
第1曲	序曲 Overture	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第2曲	[曲種の記載なし]	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第3曲	アントレ Entrée	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第4曲	ロンド Rondeau	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第5曲	前奏曲 Prelude	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第6曲	ジューグ Gigue	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第7曲	メニュエ Menuett	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第8曲	トリオ・メニュエ Trio Menuett	○						○	○	○	○
第9曲	ルール Loure	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第10曲	アントレ Entrée	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第11曲	カナリー Canaries	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第12曲	カナリー Canaries	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第13曲	パスピエ Passepied	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第14曲	トリオ Trio	○						○	○	○	○
第15曲	エール Air	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第16曲	ロンド Rondeau	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第17曲	メニュエ Menuett	○						○	○	○	○

²⁴⁰ このパート譜においては、序曲が第1曲となっている。

²⁴¹ 合計4冊の第1ヴァイオリン譜のうちの1冊(「第1ヴァイオリン Violino Primo」)には、第1曲、第2曲、第6曲、第10曲のみが記譜されている。

このパート譜に見られる楽曲は、第 8 曲「トリオ・メニュエ」、第 14 曲「トリオ」、第 17 曲「メニュエ」を除き、全ての楽譜に記されている（表 4-10 参照）。従ってこれらの曲は、ヴァイオリン、ヴィオラ、ヴィオローネ、何らかの低音楽器（「バスソ」）、「通奏低音」を奏でる楽器、二つのオーボエ、ファゴットによって演奏されたと考えられよう。

また、第 8 曲「トリオ・メニュエ」と第 14 曲「トリオ」が記譜された楽譜は、「第 1 ヴァイオリン」、「通奏低音」、「第 1 オーボエ」、「第 2 オーボエ」、「バスソ」のみである（表 4-10 参照）。「第 1 ヴァイオリン」譜の冒頭には「オーボエ Hautb:」、「通奏低音」譜の冒頭には「バスソ Basson」の指示がある。よって、第 8 曲「トリオ・メニュエ」と第 14 曲「トリオ」は、二つのオーボエとファゴットのみによって演奏されたと考えられよう。

第 17 曲「メニュエ」も、同様に「第 1 ヴァイオリン」譜、「通奏低音」譜、「第 1 オーボエ」譜、「第 2 オーボエ」譜、「バスソ」譜のみに記譜されており、「第 1 ヴァイオリン」譜の冒頭には「オーボエ Hautb:」の指示が見られる。一方、「通奏低音」譜には、先のように「バスソ」の指示は記されていないため、この終曲の編成は、二つのオーボエ、ファゴット、「通奏低音」を奏でる楽器から成っていたと推定される。

図 4-8 に示したように、第 2 曲には、全ての弦楽器と「バスソ」が休止する箇所が見られる²⁴²。これらの部分は、二つのオーボエ、ファゴット、「通奏低音」を奏でる楽器によって演奏されたと考えられよう。

²⁴² 図の中に示した「ソリ Soli」と「総奏 Tous」の指示は、「通奏低音」譜に基づいている。

図 4-8 第 2 曲の構造 (D-DI, Mus.1827-F-21)

イ短調、2/2 拍子

小節数	1	14	27	33	43	49	58	
	S	Fin						Dal Segno
		Soli	Tous	Soli	Tous	Soli		
「第 1 オーボエ」								
「第 2 オーボエ」								
「バスン」								
「第 1 ヴァイオリン」								
「第 2 ヴァイオリン」								
「第 1 ヴィオラ」								
「第 2 ヴィオラ」								
「ヴィオローネ」								
「バスン」								
「通奏低音」								

第7項 パート譜 D-DI, Mus.1827-F-30

パート譜 D-DI, Mus.1827-F-30 には、トラジェディ・リリック《ロラン Roland》 (LWV 65) の組曲が記されており、序曲をはじめとする合計 15 曲の楽曲が見られる。そしてファゴットのための「バスン」譜には、「バス・ドゥ・ヴィオロン」譜や「通奏低音」譜と同じ声部が書かれている。

表 4-11 に示したように、このパート譜に見られる楽曲は、第 12 曲の「トリオ」を除き、全ての楽譜に記譜されている。そのためこの曲以外は、ヴァイオリン、3 種のヴィオラ、「バス・ドゥ・ヴィオロン」、「通奏低音」を奏でる楽器、二つのオーボエとファゴットによって演奏されたと考えられる。

表 4-11 D-DI, Mus.1827-F-30 に記された楽曲

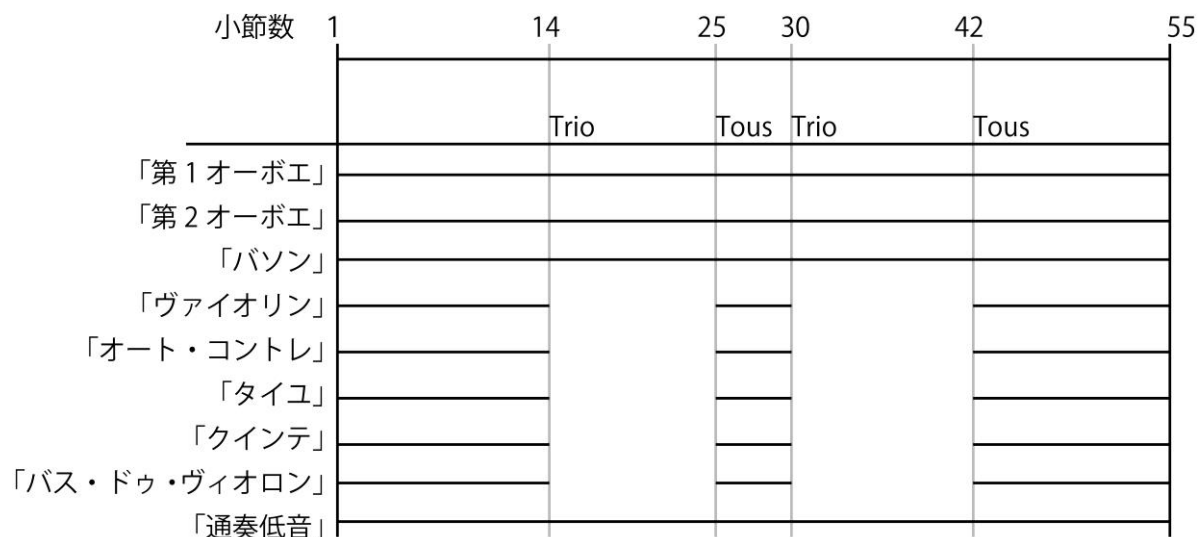
		「ヴァイオリン」	「オーボエ・コントラル」	「ターユ」	「カント」	「バス・ドゥ・ヴィオロン」	「通奏低音」	「第1オーボエ」	「第2オーボエ」	「バスン」
第1曲	序曲 Overture	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第2曲	前奏曲 Prelude	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第3曲	クール Choeur	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第4曲	ガヴォット Gavotte	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第5曲	ジーク Gique	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第6曲	行進曲 Marche	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第7曲	クール Choeur	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第8曲	ロンド Rondeau	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第9曲	行進曲 Marche	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第10曲	エール Air	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第11曲	前奏曲 Prelude	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第12曲	トリオ Trio						○	○	○	○
第13曲	前奏曲 Prelude	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第14曲	サンフォニ Simphonie	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第15曲	エール Air	○	○	○	○	○	○	○	○	○

第12曲「トリオ」が記された楽譜は、「第1オーボエ」、「第2オーボエ」、「バスン」、「通奏低音」に限定されているため、この曲の楽器編成は、二つのオーボエ、ファゴット、「通奏低音」の楽器から成っていたと推定できる。さらに図4-9から明らかなように、第3曲「クール」には、第12曲「トリオ」と同じ楽器編成によって演奏されたと考えられる箇所が見られる²⁴³。

²⁴³ 図の中に示した「トリオ Trio」と「総奏 Tous」の指示は、「通奏低音」譜に基づいている。

図 4-9 第 3 曲の構造 (D-DI, Mus.1827-F-30)

ニ短調、3/4 拍子



第8項 パート譜 D-DI, Mus.1827-F-35

パート譜 D-DI, Mus.1827-F-35 には、表 4-12 に示したように、序曲をはじめ合計 19 曲の楽曲が記されており、それらはリュリの三つの作品、すなわちパストラル《平和の牧歌 Idylle sur la paix》(LWV 68)、バレ《平和の神殿 Le temple de la paix》(LWV 69)、器楽曲《王太子妃のための数曲のサンフォニ Plusieurs pieces de symphonie》(LWV 70) に基づいている。このパート譜に見られるファゴットの楽譜(「バスーン」)には、「チェロ」譜と同じく、「通奏低音」譜と同一の声部が書かれている。

表 4-12 D-DI, Mus.1827-F-35 に記された楽曲

		「ヴァイオリン」	「第 1 ヴィオラ」	「第 2 ヴィオラ」	「チェロ」	「通奏低音」	「第 1 オーボエ」	「第 2 オーボエ」	「バスーン」
	序曲 Orverturee	○	○	○	○	○	○	○	○

		「ヴァイオリン」	「第1ヴィオラ」	「第2ヴィオラ」	「チェロ」	「通奏低音」	「第1オーボエ」	「第2オーボエ」	「バスーン」
第1曲	エール Air	○	○	○	○	○	○	○	○
第2曲	アントレ Entrée	○	○	○	○	○	○	○	○
第3曲	シャコンヌ Chaconne	○	○	○	○	○	○	○	○
第4曲	前奏曲 Prelude	○	○	○	○	○	○	○	○
第5曲	ガヴオット Gavotte	○	○	○	○	○	○	○	○
第6曲	トリオ Trio					○	○	○	○
第7曲	前奏曲 Prelude	○	○	○	○	○	○	○	○
第8曲	[曲種の記載なし]	○	○	○	○	○	○	○	○
第9曲	ジーク Gigue	○	○	○	○	○	○	○	○
第10曲	メヌエ Menuet	○	○	○	○	○	○	○	○
第11曲	メヌエ Menuet	○	○	○	○	○	○	○	○
第12曲	パスピエ Passepied	○	○	○	○	○	○	○	○
第13曲	パスピエ Passepied	○	○	○	○	○	○	○	○
第14曲	トリオ Trio					○	○	○	○
第15曲	メヌエ Menuet	○	○	○	○	○	○	○	○
第16曲	[曲種の記載なし]	○	○	○	○	○	○	○	○
第17曲	トリオ Trio					○	○	○	○
第18曲	ロンド Rondeau	○	○	○	○	○	○	○	○
第19曲	[曲種の記載なし]	○	○	○	○	○	○	○	○

パート譜 D-DI, Mus.1827-F-35 に見られる楽曲のうち、第6曲、第14曲、第17曲以外は、全ての楽譜に記されているため、これらの3曲を除く楽曲の楽器編成は、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、「通奏低音」を奏でる楽器、二つのオーボエ、ファゴットであったと考えられる（表 4-12 参照）。残りの3曲は「トリオ」と題されており、これらの曲が記譜された楽譜は、「第1オーボエ」、「第2オーボエ」、「バスーン」、「通奏低音」のみである（表 4-12 参照）。よって、この三つの「トリオ」は、いずれも二つのオーボエ、ファゴット、何らかの「通奏低音」を奏でる楽器によって演奏されただろう。

第9項 パート譜 D-DI, Mus.1827-F-36

トラジェディ・リリック《アマデイス Amadis》(LWV 63) に基づく組曲が記されたパート譜 D-DI, Mus.1827-F-36 において、序曲には合計9曲の楽曲が続いている（表 4-13 参

照)。このパート譜において、ファゴットの楽譜である「バスン」譜には、「バス・ドゥ・ヴィオロン」譜や「第1通奏低音」譜、「第2通奏低音」譜と同じ声部が記載されている。

表 4-13 D-Dl, Mus.1827-F-36 に記された楽曲

		「第1ヴァイオリン」	「ヴァイオリン」	「第1ヴィオラ」	「第2ヴィオラ」	「バス・ドゥ・ヴィオロン」	「通奏低音ヴィオロン」	「第1通奏低音」	「第2通奏低音」	「バスン」	「第1オーボエ」	「第2オーボエ」	「バスン」
第1曲	序曲 Ouverture	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第2曲	前奏曲 Prelude	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第3曲	エール Air	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第4曲	ジーク Gigue	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第5曲	クール Choeur	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第6曲	アルマンド Allemanda	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第7曲	ロンド Rondeau	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第8曲	トリオ Trio										○	○	○
第9曲	エール Air	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第10曲	エール Air	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

このパート譜に見られる楽曲のうち、第8曲「トリオ」以外の9曲は、全ての楽譜に記譜されている。よって、これらの曲の楽器編成は、ヴァイオリン、ヴィオラ、「バス・ドゥ・ヴィオロン」、何らかの低音楽器、「通奏低音」を奏でる楽器、二つのオーボエ、ファゴットであったと考えられる。

しかし、「第1オーボエ」譜と「第2オーボエ」譜において、第2曲「前奏曲」の冒頭には「フルート Fleutes」の指示が記されている。そのためこの「前奏曲」のみは、先の楽器編成に基づきつつ、二つのオーボエを二つのフルートに替えて演奏された可能性を指摘できる。

各楽譜の第 8 曲「トリオ」を確認すると、この曲が記譜された楽譜は、「第 1 オーボエ」譜、「第 2 オーボエ」譜、「バスン」譜に限定されている。よってこの「トリオ」は、二つのオーボエとファゴットのみによって演奏されたと推測できる。

第10項 組曲におけるファゴットとヴァイオリン協奏曲

ここまで、ヴォリュミエが楽師長を務めた時代に筆写されたパート譜のうち、12 点を取り上げて、ファゴットの用いられ方を確認した。それらのパート譜は、いずれもフランスの音楽家リュリの作品のものであり、12 点のうち過半数にあたる 9 点において、ファゴットは二重奏を奏でるオーボエやフルートを伴奏していた。このことに基づくと、ヴォリュミエの時代のドレスデン宮廷においてフランス音楽が演奏された際、ファゴットは、他の木管楽器を伴奏する楽器として重用されていたと考えられる。

アンガルヘーファーは、18 世紀前半のオーケストラにおけるファゴットの用いられ方を、次のように定義した。

18 世紀前半の同世代の作曲家たちは、この楽器 [ファゴット] の主な務めを、対となったフルートやオーボエ、ホルンと共に用いる中で、専ら低音楽器の役割を果たすことにあると見ており、ヘンデルやテレーマン、J. S. バッハ、Joh. D. ハイニヒェンの下において、[ファゴットは] 弦楽オーケストラの中で [響きや音量を] 補い強める低音楽器とされていた [……]。²⁴⁴

このようにアンガルヘーファーは、ファゴットの主な使い方として、対となった木管楽器を伴奏することを挙げている。先の 9 冊のパート譜において、ファゴットが二つのオーボエやフルートを伴奏したことは、この説明に合致するといえる。

²⁴⁴ Günter Angerhöfer and Walther Krüger, “Fagott,” in *MGG2*, Sachteil 3, col. 287.

また、アンガルヘーファーが指摘した「弦楽オーケストラ」におけるファゴットの用いられ方に基づくと、弦楽器が主体となった楽曲において、ファゴットは、単に響きや音量を「補い強める低音楽器」として用いられたにとどまったと推察される。しかし、ヴォリュミエの時代にドレスデン宮廷において筆写されたパート譜 D-Dl, Mus.2045-O-1 は、弦楽器が中心となるヴァイオリン協奏曲において、ファゴットが、二重奏を奏でた木管楽器を伴奏したように、独奏ヴァイオリンを伴奏したことを示している。従って、このパート譜から読み取られるファゴットの用法は、アンガルヘーファーの定義に当てはまらない。

このパート譜 D-Dl, Mus.2045-O-1 はドレスデン宮廷楽団の写譜家ヨーハン・ヤーコプ・リントナーとピゼンデルによって筆写され、ニコラ・マッテイス Nicola Matteis (1707 没?) が作曲した口長調ヴァイオリン協奏曲が記されている。

表 4-14 は、リントナーとピゼンデルによって筆写された楽譜の種類と冊数を表している。この表に示した楽譜のうちリントナーによるものは、1709 年から 1711 年の間に筆写されたと推測されており、ピゼンデルは「独奏ヴァイオリン」をはじめとする合計 4 冊の楽譜を、1715 年から 1730 年の間に筆写したと推定されている²⁴⁵。このように、リントナーとピゼンデルが楽譜を書き写した時期には隔たりがあるため、本項では、1709 年から 1711 年の間にリントナーによって書かれた 13 冊の楽譜のみを対象として、ファゴットの用いられ方をより詳しく説明する²⁴⁶。

²⁴⁵ Paola Pozzi, *Studio sul repertorio strumentale italiano alla corte di Dresda (1697-1756) con particolare attenzione al concerto* (Ph. D. diss., 1995), pp. 142 and 259; see also Nicola Matteis, *Concertos in B-Dur* (D-Dl, Mus.2045-O-1), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212001396>.

²⁴⁶ これらの 13 冊の楽譜のうち、2 冊の「独奏第 1 ヴァイオリン」のそれぞれの表紙には「ヴォリュミエ氏 Mr: Voloumier」と「フィオレッリ氏 Sig: Fiorelli」、すなわち楽師長ヴォリュミエとヴァイオリン奏者カルロ・フィオレッリの名前が記されている。さらに 2 冊の「第 1 ヴァイオリン」譜には、それぞれ「ル・グロ氏 Mons: Le Gros」と「ロッティ氏 Sig: Lotti」、すなわちシモン・ル・グロとフランチェスコ・ロッティの名前が書かれており、さらに「オーボエ」譜には「デュセ氏 Mons: D'Ucé」、「第 2 オーボエと [または] 第 2 ヴァイオリン」譜には「ル・コント氏 Mons Le Conte」と記されている。彼らは、1709 年の「オーケストラの年俸表」や 1711 年の「宮廷楽団の年俸表」に名前が記載されていた奏者たちである (33 頁の表 1-1 及び 36 頁からの表 1-3 参照)。

表 4-14 楽譜の種類と冊数 (D-DI, Mus.2045-O-1)

写譜家	楽譜の種類	冊数
ヨーハン・ヤーコブ・リントナー Johann Jacob Lindner	独奏第1 ヴァイオリン Violino I Conc:	2
	第1 ヴァイオリン Violino I	2
	第2 ヴァイオリン Violino II do	1
	ヴィオラ Viola	1
	チェロ Violoncello	1
	ヴィオロン Violon	1
	通奏低音 Basso Continuo	2
	[第1] オーボエ Hautbois	1
	第2 オーボエと [または] 第2 ヴァイオリン Hautbois o Violino II do	1
	バスン Basson	1
ヨーハン・ゲオルク・ピゼンデル	独奏ヴァイオリン Violino Concertato	1
	第2 ヴァイオリン Violino Secondo	1
	ヴィオロン Violon	1
	バスン Basso	1

表 4-15 D-DI, Mus.2045-O-1 に記された楽章

	曲種または速度標語	「独奏第1 ヴァイオリン」	「第1 ヴァイオリン」	「第2 ヴァイオリン」	「ヴィオラ」	「チェロ」	「ヴィオロン」	「通奏低音」	「[[第1] オーボエ」	「第2 オーボエと [または] 第2 ヴァイオリン」	「バスン」
第1 楽章	アレグロ Allegro	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第2 楽章	アダージョ Adagio	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第3 楽章	エール Air	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第4 楽章	サラバンド Sarabanda	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第5 楽章	アレグロ Allegro	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

表 4-15 は、パート譜 D-DI, Mus.2045-O-1 に記された楽章を示しており、各楽章が記譜されている楽譜を「○」印によって示している。このパート譜には五つの楽章が見られ、それらは全ての楽譜に記されている。従って、五つの楽章の楽器編成は共通しており、それはヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、「ヴィオロン」、「通奏低音」を奏でる楽器、一つま

たは二つのオーボエとファゴットであったと考えられる。またファゴットの楽譜である「バスン」譜には、「チェロ」譜や「ヴィオロン」譜、「通奏低音」譜と同一の声部が記されている。

このパート譜に記された第2楽章から第4楽章においては、全ての楽器が終始演奏している。一方、第1楽章と第5楽章は、全ての楽器が演奏する総奏部分と、ヴァイオリンによる独奏部分が交互に現れるリトルネッロ形式に基づいている。図4-10と図4-11は、これらの楽章の構造を示した略図であり、各楽譜の音符が記されている小節を実線によって表している²⁴⁷。

図 4-10 第1楽章の構造 (D-DI, Mus.2045-O-1)

アレグロ、変ロ長調、4/4 拍子



²⁴⁷ 図の中に示した「ヴァイオリン独奏 V[iolin]. solo」、「独奏 solo」、「総奏 tutti」の指示は、「通奏低音」譜に基づいている。

図 4-11 第 5 楽章の構造 (D-DI, Mus.2045-O-1)

アレグロ、変ロ長調、3/4 拍子

小節数	1	9	21	25	34
	solo	tutti	sol:	tutti	
「[第 1] オーボエ」					
「第 2 オーボエと [または] 第 2 ヴァイオリン」					
「バスン」					
「独奏第 1 ヴァイオリン」					
「第 1 ヴァイオリン」					
「第 2 ヴァイオリン」					
「ヴィオラ」					
「チェロ」					
「ヴィオロン」					
「通奏低音」					

図 4-10 に示したように、第 1 楽章全体は 52 小節から成っており、第 1 小節から第 27 小節までと第 34 小節から第 36 小節、第 42 小節から第 52 小節までが、全ての楽器によって演奏される総奏部分である。残りの箇所は、ヴァイオリンによる独奏部分となっている。

独奏部分に休符が記された楽譜は、「[第 1] オーボエ」と「第 2 オーボエと [または] 第 2 ヴァイオリン」、「第 1 ヴァイオリン」、「第 2 ヴァイオリン」、「ヴィオラ」、「チェロ」、「ヴィオロン」に上る。一方、「バスン」譜と「通奏低音」譜は、独奏部分に休符が見られない。そのため独奏ヴァイオリンは、同じ弦楽器であるチェロや「ヴィオロン」ではなく、木管楽器であるファゴットと「通奏低音」の楽器によって伴奏されたと考えられる。

また図 4-11 から明らかなように、合計 34 小節の第 5 楽章は、冒頭から第 8 小節までと、第 21 小節から第 24 小節までが独奏部分となっている。この二つの部分に休止の指示がない楽譜は、「第 1 独奏ヴァイオリン」の他に、「[第 1] オーボエ」、「バスン」、「通奏低

音」のみである²⁴⁸。従って、通奏低音声部を奏でるファゴットと何らかの楽器は、第1オーボエと独奏ヴァイオリンを伴奏したと考えられる。

このように、ヴァイオリン協奏曲が記されたパート譜 D-DI, Mus.2045-O-1 の第1楽章と第5楽章において、ファゴットは「通奏低音」の楽器と共に、一貫して独奏ヴァイオリンを伴奏している。一方、ヴァイオリンと同じく弦楽器であるチェロと「ヴィオロン」は、独奏部分において完全に休止しており、総奏部分において演奏するのみであった。

先述のように、アンガルヘーファーの定義によると、弦楽器が主体となる楽曲において、ファゴットは響きや音量を「補い強める」ために用いられるのみであったと考えられた。このことに基づくと、ヴァイオリン協奏曲において、ファゴットは総奏部分においてのみ演奏し、独奏ヴァイオリンは同じ弦楽器のチェロなどによって伴奏されたと推測されよう。しかし、このパート譜において、ファゴットと低音弦楽器の用いられ方は、全く反対になっていたのである。

このように、パート譜 D-DI, Mus.2045-O-1 は、独奏ヴァイオリンとファゴットの強い結び付きを示している。このことは、ファゴット奏者がヴァイオリン奏者と共に増員された背景を考察する上で、非常に興味深いといえよう。そのため節を改めて、ファゴットがヴァイオリン協奏曲においてこの楽器を伴奏したことは、ピゼンデルが楽師長を務めた時代に受け継がれたかを論じる。

第2節 ピゼンデルが監修したヴァイオリン協奏曲

ケップは、ピゼンデルが楽師長として担ったと考えられる職務を一覧表に示した²⁴⁹。この表に基づくと、ピゼンデルの職務の一つは、器楽の演奏を監督することであった。その

²⁴⁸ 「第1独奏ヴァイオリン」譜と「[第1]オーボエ」譜の独奏部分には、同一の声部が記されている。

²⁴⁹ Kai Köpp, *Johann Georg Pisendel (1687-1755) und die Anfänge der neuzeitlichen Orchesterleitung* (Tutzing: H. Schneider, 2005), p. 246.

中には、自他の作品のパート譜を筆写し、演奏のための準備を整えることも含まれていた²⁵⁰。

ドレスデン宮廷においては、この宮廷に所属しなかった音楽家によって作曲されたヴァイオリン協奏曲が筆写された。そのパート譜は多数に上り、ピゼンデルは楽譜を筆写したり、楽譜1冊ずつに強弱記号を書き込んだりしていた。これらのヴァイオリン協奏曲のパート譜群は、フェヒナーやヘラーによって編纂された楽譜の目録に示されている²⁵¹。

これらのヴァイオリン協奏曲は、ドレスデン以外の地域において活動した音楽家によって作曲されたため、その大半はドレスデン宮廷楽団による演奏を前提に作曲されなかったと考えられよう。これらの曲のパート譜には、ファゴット譜が含まれるにも関わらず、この楽器が独奏ヴァイオリンを伴奏していないものが散見される。

しかし、少なくともヴィヴァルディの《二つのヴァイオリンのための協奏曲》(RV 508)は、ピゼンデルの監修の下、パート譜が筆写された際に、独奏ヴァイオリンを伴奏するファゴットが、編成に加えられた可能性を指摘できる。ペーター・リオムが編纂したヴィヴァルディの作品目録に基づくと、この楽曲の楽器編成は二つの独奏ヴァイオリンと弦楽合奏、通奏低音であった²⁵²。しかし、ドレスデン宮廷において筆写されたパート譜 D-D1,

²⁵⁰ *Ibid.*, (Tutzing: H. Schneider, 2005), pp. 237-238.

²⁵¹ Manfred Fechner, *Studien zur Dresdner Überlieferung von Instrumentalkonzerten deutscher Komponisten des 18. Jahrhunderts: Die Dresdner Konzert-Manuskripte von Georg Philipp Telemann, Johann David Heinichen, Johann Georg Pisendel, Johann Friedrich Fasch, Gottfried Heinrich Stölzel, Johann Joachim Quantz und Johann Gottlieb Graun* (Laaber: Laaber, 1999); Karl Heller, *Die deutsche Überlieferung der Instrumentalwerke Vivaldis* (Leipzig: VEB Deutscher Verlag für Musik, 1971).

²⁵² Peter Ryom, *Antonio Vivaldi: Thematisch-systematisches Verzeichnis seiner Werke* (Wiesbaden: Breitkopf und Härtel, 2007), p. 218; see also Karl Heller, “Zwei ‘Vivaldi-Orchester’ in Dresden und Venedig,” in *Musikzentren in der ersten Hälfte des 18. Jahrhunderts und ihre Ausstrahlung: Wissenschaftliche Arbeitstagung (6.) Blankenburg/Harz, 23. bis 25. Juni 1978*, edited by Eitel-Friedrich Thom (Magdeburg: Rat des Bezirkes, 1979), pp. 57-58; Karl Heller, “Die Bedeutung Johann Georg Pisendels für die deutsche Vivaldi-Rezeption,” in *Gesellschaft für Musikforschung: Bericht über den internationalen Musikwissenschaftlichen Kongress Leipzig 1966*, edited by Carl Dahlhaus (Kassel: Bärenreiter, 1970), p. 250; Richard Maunder, *The Scoring of Baroque Concertos* (Woodbridge: Boydell Press, 2004), p. 168.

Mus.2389-O-49 には、表 4-16 に示したように、2 冊のオーボエ譜（「第 1 オーボエ」と「第 2 オーボエ」）及び 2 冊のファゴット譜（「バスン」と「バスン・リピエーノ」）が含まれる²⁵³。そして「バスン」譜は、ファゴットが独奏ヴァイオリンを伴奏したことを示している。

表 4-16 楽譜の種類と冊数 (D-DI, Mus.2389-O-49)

写譜家	楽譜の種類	冊数
ドレスデン宮廷の写譜家 A	独奏第 1 ヴァイオリン Violino Primo Concertato	1
	独奏第 2 ヴァイオリン Violino Secondo Concertato	1
	第 1 ヴァイオリン Violino Primo	1
	第 2 ヴァイオリン Violino Secondo	1
	ヴィオラ Viola	1
	チェンバロ Cembalo	1
ドレスデン宮廷の写譜家 D	第 1 ヴァイオリン Violino Primo	2
	第 1 ヴァイオリン Violino Secondo	2
	ヴィオラ Viola	1
	バスン Basso	2
	バスン・リピエーノ Basso R.	1
	バスン Basson	1
ヨーハン・ゲオルク・ピゼンデル	第 1 オーボエ Hautb: 1mo	1
	第 2 オーボエ Hautb 2do	1

また、これらのパート譜を監修したピゼンデル自身も、少なくともヴァイオリン協奏曲を 11 作品作曲した²⁵⁴。彼はドレスデン宮廷楽団に所属したため、これらの作品がこの楽団のために作曲されたことは明らかであろう。そして、ピゼンデルが作曲したヴァイオリン協奏曲のパート譜においても、各楽譜には彼自身の加筆が見られる。このパート譜は 15 点現存する。表 4-17 には、これらのパート譜の資料番号、筆写者、各パート譜を構成する楽譜の種類と冊数を示している。

²⁵³ Karl Heller, *Die deutsche Überlieferung der Instrumentalwerke Vivaldis*, pp. 81-82.

²⁵⁴ Kai Köpp, *Johann Georg Pisendel (1687-1755) und die Anfänge der neuzeitlichen Orchesterleitung* (Tutzing: H. Schneider, 2005), pp. 466-480.

この表から明らかなように、15点のうち半数近くの7点には、木管楽器のための楽譜が含まれる²⁵⁵。この7点それぞれを構成する楽譜の冊数は、パート譜 D-DI, Mus.2421-O-7bを除き12冊以上に及ぶ²⁵⁶。木管楽器のための楽譜を含まない残りの8点は、8冊以下の楽譜から構成されるにとどまっている。このように、パート譜を構成する楽譜の冊数が大きく異なることから、12冊以上から成る6点は、木管楽器を含む大規模な編成のために用意されたといえる。

木管楽器のための楽譜を含む7点のパート譜には、必ずファゴット譜が見られる。さらにこの7点のうち、パート譜 D-DI, Mus.2421-O-7b以外の6点は、後述するように、ファゴットが独奏ヴァイオリンを伴奏したことを示している。

以下では、先のヴィヴァルディの作品が記されたパート譜 D-DI, Mus.2389-O-49 と、ピゼンデルが作曲したヴァイオリン協奏曲のうち、木管楽器のための楽譜を含んだ7点について詳述する。そして、これらのパート譜において、ファゴットが独奏ヴァイオリンを伴奏したと考えられることを示す。

²⁵⁵ 木管楽器の楽譜を含む7点は、次のものである。D-DI, Mus.2421-O-1a; D-DI, Mus.2421-O-1b; D-DI, Mus.2421-O-3a; D-DI, Mus.2421-O-5a; D-DI, Mus.2421-O-6b; D-DI, Mus.2421-O-7b; D-DI, Mus.2421-O-10.

²⁵⁶ パート譜 D-DI, Mus.2421-O-7bは7冊の楽譜のみから構成されている。

表 4-17 ピゼンデルによるヴァイオリン協奏曲のパート譜

資料番号	写譜家	パート譜に含まれる楽譜の種類	冊数
D-Dl, Mus.2421-O-1a	ピゼンデル	バスソ・リピエーノ Basso Rip.	1
	ドレスデン宮廷の写譜家 A	独奏ヴァイオリン Violino Concertino	1
		第1ヴァイオリン Violino Primo	1
		第2ヴァイオリン Violino Secondo	1
		ヴィオラ Viola	1
		チェンバロ Cembalo	1
	ドレスデン宮廷の写譜家 D	第1ヴァイオリン Violino Primo	1
		第2ヴァイオリン Violino 2do:	1
		ヴィオラ Viola	1
		バスソ・リピエーノ Basso Rip.	1
		チェンバロ Cembalo	1
		バスソ Basson	1
D-Dl, Mus.2421-O-1b	ヨーハン・ゲオルク・ピゼンデル	独奏ヴァイオリン Violino Concerto	1
		第1オーボエ Oboe 1:mo	1
		第2オーボエ Oboe 2:do	1
		第1ホルン Corno 1:mo	1
		第2ホルン Corno 2:do	1
	ドレスデン宮廷の写譜家 A	第1ヴァイオリン Violino Primo	1
		第2ヴァイオリン Violino Secondo	1
		ヴィオラ Violetta	1
		チェンバロ Cembalo	1
		バスソノーノ Bassono	1
		ドレスデン宮廷の写譜家 D Johann Gottlieb Morgenstern	第1ヴァイオリン Violino Primo
	第2ヴァイオリン Violino Secondo		1
	D-Dl, Mus.2421-O-3a	ドレスデン宮廷の写譜家 D	バスソ・リピエーノ Basso R
独奏ヴァイオリン Violino Concertato			1
第1ヴァイオリン Violino Primo			2
第2ヴァイオリン Violino Secondo			2
ヴィオラ Violetta			2
バスソ Basso			2
テオルボ Tiorba			1
チェンバロ Cembalo			1
オルガン Organo	1		

資料番号	写譜家	パート譜に含まれる楽譜の種類	冊数
		第1 オーボエ Oboe Primo	1
		第2 オーボエ Oboe Secondo	1
		バスソーン Bassono	1
		バスソーン・リピーエーノ Bassono Rip:	1
	不明	独奏ヴァイオリン Violino Concertato	1
		第1 オーボエ Oboe Primo	1
		第2 オーボエ Oboe Secondo	1
D-Dl, Mus.2421-O-5a	ヨーハン・ゲオルク・ピゼンデル	独奏ヴァイオリン Violino Concerto	1
		第1 ヴァイオリン Violino Primo	2
		第2 ヴァイオリン Violino 2:do	2
		ヴィオラ Viola	2
		バスソーン・リピーエーノ Basso R	1
		チェンバロ Cembalo	1
		移調オルガン Organo trasporto	1
		第1 オーボエ Hautb 1:mier	1
		第2 オーボエ Hautb 2:do	1
		バスソーン Basson	1
	バスソーン・リピーエーノ Basson R	1	
	ヨーハン・ゲオルク・ピゼンデル	バスソーン・リピーエーノ Basso R	2
		第1 ホルン Corno Primo	1
		第2 ホルン Corno 2do	1
D-Dl, Mus.2421-O-6a	ヨーハン・ゲオルク・ピゼンデル	独奏ヴァイオリン Violino Concert:	1
D-Dl, Mus.2421-O-6b	ヨーハン・ゲオルク・ピゼンデル	独奏ヴァイオリン Violino Concert	1
	ヨーハン・ゲオルク・ピゼンデル	移調オルガン Organo trasporto	1
	ヨーハン・ゲオルク・ピゼンデル	オルガン Organo	1
	ドレスデン宮廷の写譜家 A	第1 ヴァイオリン Violino Primo	2
		第2 ヴァイオリン Violino Secondo	2
		ヴィオラ Violetta	1
		チェンバロ Cembalo	1
		第1 オーボエ Oboe Primo	1
		第2 オーボエ Oboe Secondo	1
		バスソーン Bassono	1
		バスソーン・リピーエーノ Bassono Rip:	1
		第1 ホルン Cornu 1	1
		第2 ホルン Cornu Secondo	1
	ドレスデン宮廷の写譜家 S-Dl-015	ヴィオレッタ Violetta	1

資料番号	写譜家	パート譜に含まれる楽譜の種類	冊数
D-Dl, Mus.2421-O-7a	ヨーハン・ゲオルク・ピゼンデル	独奏ヴァイオリン Violino Concerto	1
	ドレスデン宮廷の写譜家 M	第1 ヴァイオリン Violino Primo	1
		第2 ヴァイオリン Violino Secondo	1
		ヴィオラ Viola	1
		バスソ Basso	1
D-Dl, Mus.2421-O-7b	ドレスデン宮廷の写譜家 A	独奏ヴァイオリン Violino Concertino	1
		ヴィオラ Viola	1
		バスソ Basso	2
	ドレスデン宮廷の写譜家 D	第1 ヴァイオリン Violino Primo	1
		第2 ヴァイオリン Violino Secondo	1
バスソ・リピエーノ Basson R.	1		
D-Dl, Mus.2421-O-9	ドレスデン宮廷の写譜家 A	独奏ヴァイオリン Violino Concertato	1
		第1 ヴァイオリン Violino Primo	1
		第2 ヴァイオリン Violino Secondo	1
		ヴィオラ Viola	1
		バスソ Basso	1
D-Dl, Mus.2421-O-10	ドレスデン宮廷の写譜家 D	独奏ヴァイオリン Violino Concertato	1
		第1 ヴァイオリン Violino Primo	2
		第2 ヴァイオリン Violino Secondo	2
		ヴィオラ Viola	2
		バスソ・リピエーノ Basso. R	1
		通奏低音 Basso Continuo	1
		第1 オーボエ Oboe Primo	1
		第2 オーボエ Oboe Secondo	1
	バスソノーノ Bassono	1	
	ドレスデン宮廷の写譜家 n	バスソ・リピエーノ Basso. R	2
		オルガン Organo	1
D-Dl, Mus.2421-O-12a	ドレスデン宮廷の写譜家 D	独奏ヴァイオリン Violino Concertato	1
		ユニゾン・ヴァイオリン Violini Unisoni	2
		ヴィオラ Violetta	2
		バスソ Basso	1
		チェンバロ Cembalo	1
D-Dl, Mus.2421-O-13a	ヨーハン・ゲオルク・ピゼンデル	独奏ヴァイオリン Violino. Concertante	1
		ヴァイオリン Violino	1
		ヴィオラ Viola	1

資料番号	写譜家	パート譜に含まれる楽譜の種類	冊数
		バツソ Basso	2
D-Dl, Mus.2421-O-13b	ドレスデン宮廷の写譜家 A	独奏ヴァイオリン Violino Concertante	1
		ユニゾン・ヴァイオリン Violino unisoni	1
		ヴィオラ Viola	2
		バツソ Basso	2
	ドレスデン宮廷の写譜家 D	ヴァイオリン Violino	1
D-Dl, Mus.2-O-1,41a	フィリップ・トロヤー Philipp Troyer	独奏ヴァイオリン Violino Conc:	1
		第2ヴァイオリン Violino 2do	1
		オブリガート・ヴィオラ Viola obligata	1
		オルガン Organo	1
D-Dl, Mus.2-O-1,41b	ヨーハン・ゲオルク・ピゼンデル	独奏ヴァイオリン Violino Concertante	1
		第1ヴァイオリン Violino Primo	1
		第1ヴァイオリン [と] オーボエ Violino Primo 1 Hautb	1
		第2ヴァイオリン Violino Secondo	1
		ヴィオラ Viola	1
		バツソ・リピエーノ Basso Ripieno	1
		チェンバロ Cembalo	1
	ドレスデン宮廷の写譜家 S-Dl-112	バツソ・リピエーノ Basso Ripieno	1

第1項 パート譜 D-DI, Mus.2389-O-49

パート譜 D-DI, Mus.2389-O-49 には、ヴィヴァルディによる《二つのヴァイオリンのための協奏曲》(RV 508) が記されている。このパート譜は、ドレスデン宮廷の写譜家 A、ドレスデン宮廷の写譜家 D、ピゼンデルによって筆写された (283 頁の表 4-16 参照)。さらにピゼンデルは、写譜家 A と写譜家 D によって書かれた楽譜を監修し、強弱記号を加筆している。このパート譜に含まれるファゴットのための「バスン」譜と「バスン・リピーエーノ」譜には、「バスン」譜、「バスン・リピーエーノ」譜、「チェンバロ」譜と同様に、通奏低音声部が記されている。

表 4-18 D-DI, Mus.2389-O-49 に記された楽章

	速度標語	「独奏第1ヴァイオリン」	「独奏第2ヴァイオリン」	「第1ヴァイオリン」	「第2ヴァイオリン」	「ヴィオラ」	「バスン」	「バスン・リピーエーノ」	「チェンバロ」	「第1オーボエ」	「第2オーボエ」	「バスン」	「バスン・リピーエーノ」
第1楽章	アレグロ Allegro	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第2楽章	ラルゴ Largo	○	○	○	○	○							
第3楽章	アレグロ Allegro	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

この協奏曲は、急緩急の三つの楽章から構成されている。表 4-18 は、これらの楽章が記された楽譜を「○」印によって表している。この表が示すように、第1楽章と第3楽章は全ての楽譜に記譜されている。よって、これらの楽章の楽器編成は、ヴァイオリン、ヴィオラ、何らかの低音楽器、チェンバロ、それぞれ二つのオーボエ、ファゴットであったと考えられよう。一方、第2楽章は、ヴァイオリンとヴィオラの楽譜にのみ記されている。

図 4-12 第 1 楽章の構造 (D-DI, Mus.2389-O-49)

アレグロ、ハ長調、4/4 拍子

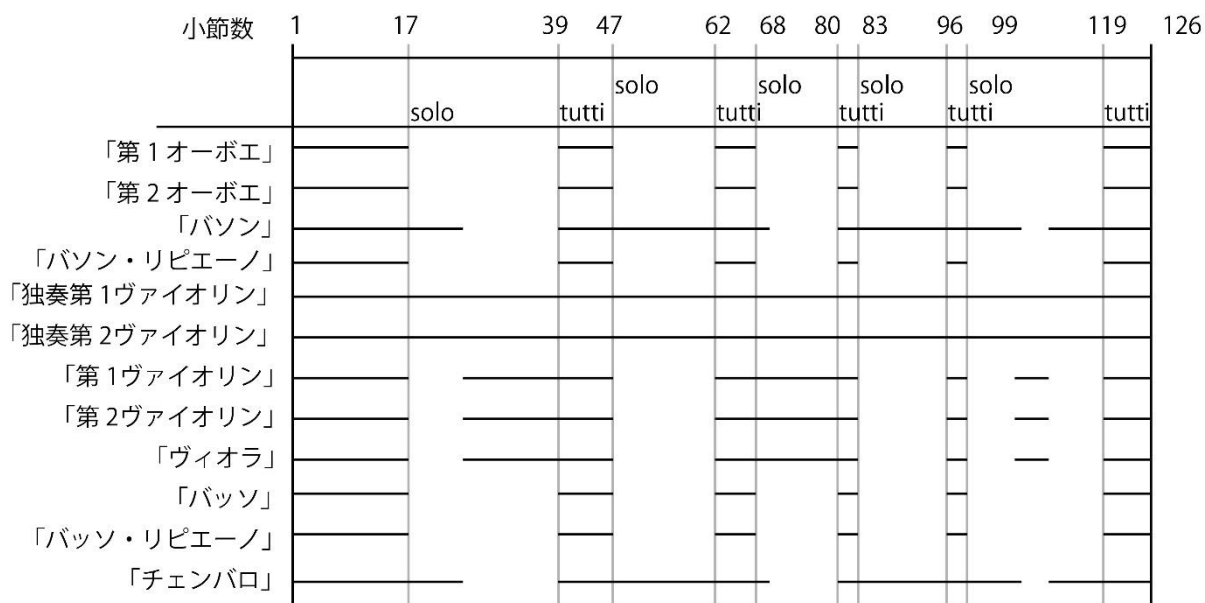


図 4-13 第 3 楽章の構造 (D-DI, Mus.2389-O-49)

アレグロ、ハ長調、3/4 拍子

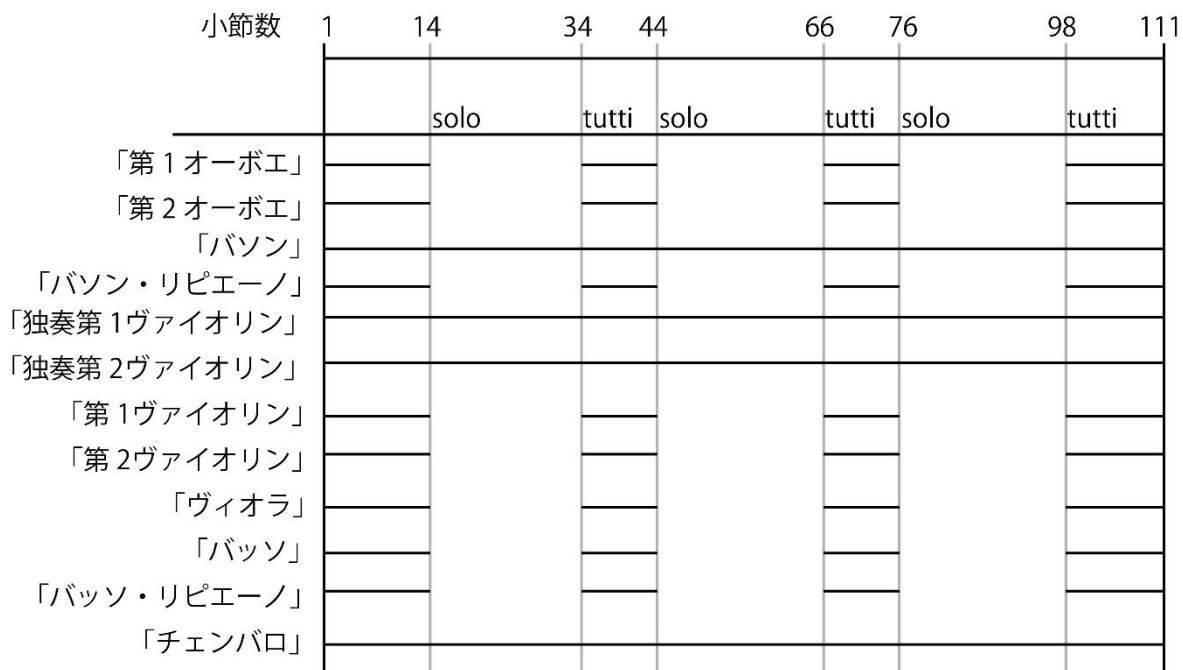


図 4-12 と図 4-13 は、ファゴットが編成に含まれる第 1 楽章と第 3 楽章の構造を示しており、各楽譜の音符が書かれている小節を実線によって示している。これらの図からは、第 1 楽章と第 3 楽章において、総奏部分と独奏部分が交互に現れる様子が分かる²⁵⁷。そして第 1 楽章には、「バスン」と「チェンバロ」のみが、二つの独奏ヴァイオリンを伴奏する部分が見られる（第 17 小節以降や第 47 小節から第 61 小節までなど）。さらに、第 3 楽章において独奏ヴァイオリンに付随する楽器は、「バスン」と「チェンバロ」のみに限定されている。

編成に追加された木管楽器を確認すると、「バスン・リピーエーノ」だけでなく、「第 1 オーボエ」と「第 2 オーボエ」も総奏部分においてのみ演奏に参加しているため、独奏部分においても演奏を続ける木管楽器は、先の「バスン」のみとなっている。また、図 4-12 と図 4-13 に見られる低音楽器は、「バスン」、「バスン・リピーエーノ」、「バスツ」、「バスツ・リピーエーノ」である。これらの低音楽器の中においても、独奏部分において演奏するものは「バスン」のみとなっている。

以上のように、ヴィヴァルディの《二つのヴァイオリンのための協奏曲》(RV 508) が記されたドレスデンのパート譜 D-DI, Mus.2389-O-49 において、第 1 楽章と第 3 楽章の楽器編成には、二つのオーボエと二つのファゴットが追加されている。そしてパート譜の内容に基づくと、二つのファゴットのうちのひとつ（「バスン」）は、他の木管楽器や低音楽器のように独奏部分において休止することなく、チェンバロと共に独奏ヴァイオリンを伴奏したと考えられる。

²⁵⁷ 図の中に示した「独奏 solo」、「総奏 tutti」などの指示は、「独奏第 1 ヴァイオリン」譜に基づいている。

第2項 パート譜 D-DI, Mus.2421-O-1a

パート譜 D-DI, Mus.2421-O-1a には、ピゼンデルのト長調ヴァイオリン協奏曲 (JunP I.4.b) が記されている。このパート譜は、285 頁から始まる表 4-17 に示したように、ドレスデン宮廷の写譜家 A と写譜家 D によって筆写された。各楽譜はピゼンデルによって監修され、強弱記号、さらに総奏や独奏の指示が補筆されている²⁵⁸。このパート譜において、ファゴットの楽譜である「バスン」譜には、「バスン・リピエーノ」譜や「チェンバロ」譜と同様に、通奏低音声部が記されている。

この曲は、表 4-19 に示したように急緩急の 3 楽章から成っており、これらの楽章は、パート譜 D-DI, Mus.2421-O-1a を構成する楽譜全てに記譜されている。従って、三つの楽章の楽器編成は、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェンバロ、低音楽器、ファゴットであったと考えられ、ファゴットは唯一の木管楽器となっている。

表 4-19 D-DI, Mus.2421-O-1a に記された楽章

	速度標語	「独奏ヴァイオリン」	「第 1 ヴァイオリン」	「第 2 ヴァイオリン」	「ヴィオラ」	「チェンバロ」	「バスン・リピエーノ」	「バスン」
第 1 楽章	アレグロ Allegro	○	○	○	○	○	○	○
第 2 楽章	ラルゴ Largo	○	○	○	○	○	○	○
第 3 楽章	アレグロ Allegro	○	○	○	○	○	○	○

²⁵⁸ Manfred Fechner, *Studien zur Dresdner Überlieferung von Instrumentalkonzerten deutscher Komponisten des 18. Jahrhunderts: Die Dresdner Konzert-Manuskripte von Georg Philipp Telemann, Johann David Heinichen, Johann Georg Pisendel, Johann Friedrich Fasch, Gottfried Heinrich Stölzel, Johann Joachim Quantz und Johann Gottlieb Graun* (Laaber: Laaber, 1999), p. 261.

三つの楽章の構造を、図 4-14 から図 4-16 に示す²⁵⁹。この図から明らかなように、総奏部分と独奏部分の交代は、全ての楽章に現れている。

これらの図に基づくと、第 1 楽章の第 30 小節から第 45 小節までは、最初の独奏部分である。この部分の第 30 小節から第 39 小節までは、「独奏ヴァイオリン」、「第 1 ヴァイオリン」、「第 2 ヴァイオリン」、「ヴィオラ」が演奏し、第 40 小節からは、「独奏ヴァイオリン」が「チェンバロ」と「バスン」によって伴奏される。また第 80 小節から 98 小節までは、再び「独奏ヴァイオリン」と「第 1 ヴァイオリン」、「第 2 ヴァイオリン」、「ヴィオラ」の組合せが見られる。

次の第 2 楽章には、二つの独奏部分が見られる。第 15 小節から第 30 小節までは、「独奏ヴァイオリン」、「第 1 ヴァイオリン」、「第 2 ヴァイオリン」、「ヴィオラ」によって演奏されるが、第 24 小節からは、「独奏ヴァイオリン」を「チェンバロ」と「バスン」が伴奏する。第 37 小節から第 50 小節においても、「独奏ヴァイオリン」の伴奏は、「チェンバロ」と「バスン」に委ねられている。

終楽章には、四つの独奏部分が見られる。第 29 小節からは、「独奏ヴァイオリン」、「第 1 ヴァイオリン」、「第 2 ヴァイオリン」、「ヴィオラ」、「チェンバロ」、「バスン」による大きい編成が見られる。しかし「第 1 ヴァイオリン」、「第 2 ヴァイオリン」、「ヴィオラ」は第 47 小節までに休止するため、この小節から第 57 小節までは「独奏ヴァイオリン」、「チェンバロ」、「バスン」のみが演奏する。

また第 80 小節から演奏する楽器も、先と同様に「独奏ヴァイオリン」、「第 1 ヴァイオリン」、「第 2 ヴァイオリン」、「ヴィオラ」、「チェンバロ」、「バスン」となっている。しかし、第 29 小節からの場合とは反対に、ここでは「チェンバロ」と「バスン」が第 87 小節

²⁵⁹ 図の中に示した「独奏 solo」と「総奏 tutti」の指示は、「独奏ヴァイオリン」譜に基づいている。ただし、第 1 楽章の第 123 小節と第 3 楽章の第 157 小節の「[総奏 tutti]」の表記は、本論文の筆者が書き加えた。

から休止するため、その後は「独奏ヴァイオリン」、「第1ヴァイオリン」、「第2ヴァイオリン」、「ヴィオラ」が演奏を続ける。

以上のことに基づくと、パート譜 D-DI, Mus.2421-O-1a に見られる独奏部分では、楽器の組合せが頻繁に変化したといえる。さらにこのパート譜は、ファゴットがチェンバロと共に独奏ヴァイオリンを伴奏した部分が、楽曲の随所にちりばめられていたことを示唆している。

図 4-14 第1楽章の構造 (D-DI, Mus.2421-O-1a)

アレグロ、ト長調、4/4 拍子

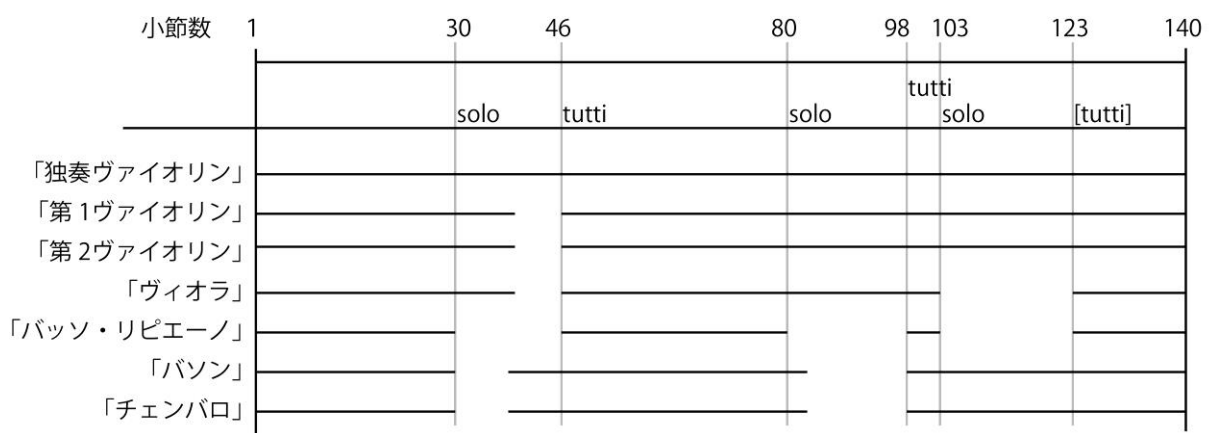


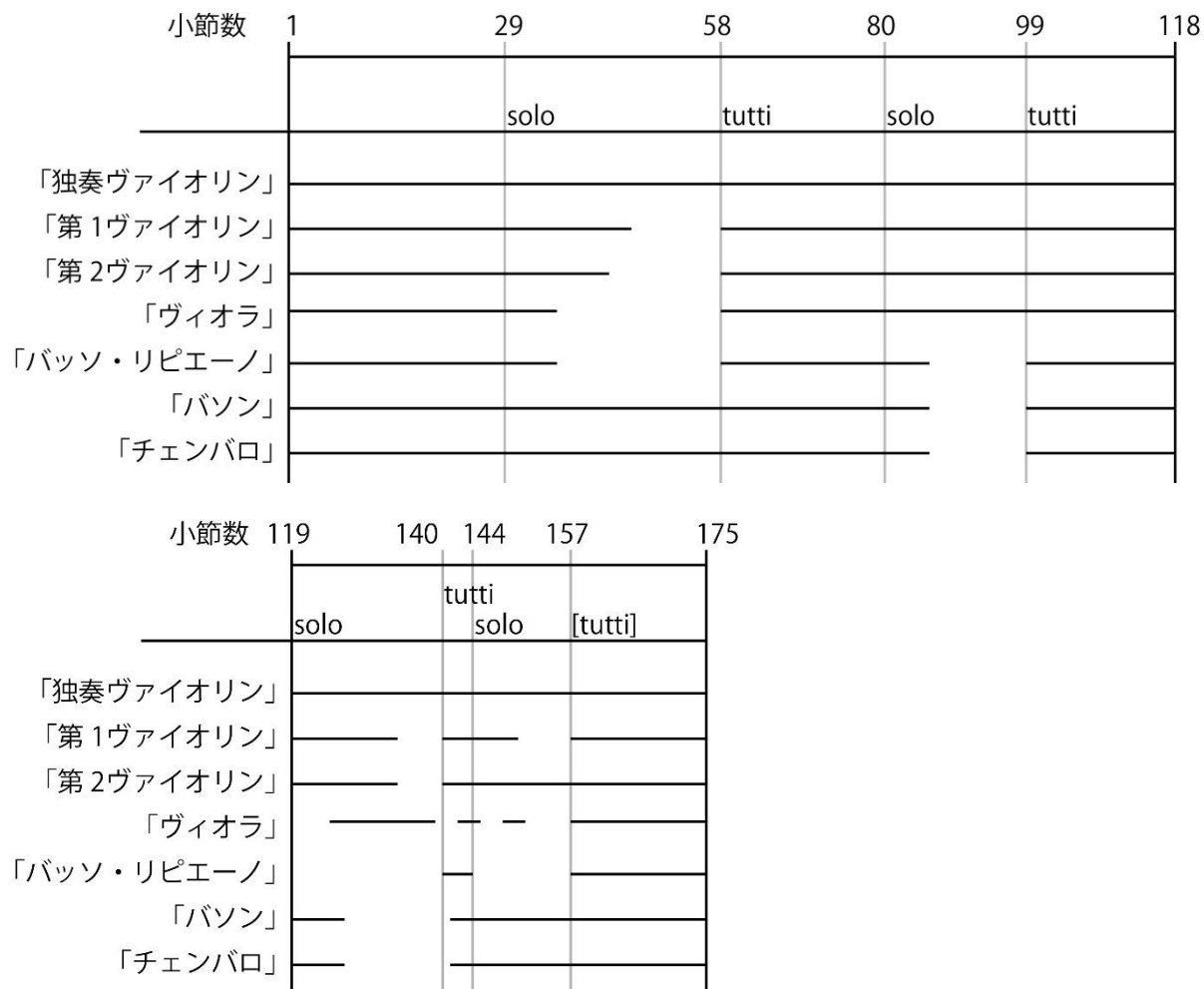
図 4-15 第2楽章の構造 (D-DI, Mus.2421-O-1a)

ラルゴ、ホ短調、3/4 拍子



図 4-16 第 3 楽章の構造 (D-Dl. Mus.2421-O-1a)

アレグロ、ト長調、3/4 拍子



第3項 パート譜 D-Dl, Mus.2421-O-1b

パート譜 D-Dl, Mus.2421-O-1b には、前項のパート譜 D-Dl, Mus.2421-O-1a と同じく、ピゼンデルのト長調ヴァイオリン協奏曲 (JunP I.6.b) が記されている。このパート譜 D-Dl, Mus.2421-O-1b を構成する楽譜は、ピゼンデル本人とドレスデン宮廷の写譜家 A 及び写譜家 D によって書かれた。ピゼンデルは、この二人の写譜家による楽譜を監修し、強弱

記号を加筆している²⁶⁰。このパート譜において、ファゴットの楽譜である「バスソーン」譜には、「バスツ・リピーエーノ」譜や「チェンバロ」譜と同様、通奏低音声部が記されている。

285 頁に示した表 4-17 を基に、パート譜 D-DI, Mus.2421-O-1a と比較すると、本項において取り上げるパート譜 D-DI, Mus.2421-O-1b には、ホルン譜（「第 1 ホルン」と「第 2 ホルン」）とオーボエ譜（「第 1 オーボエ」と「第 2 オーボエ」）が含まれるという違いが見られる。

表 4-20 D-DI, Mus.2421-O-1b に記された楽章

	速度標語	「第 1 ホルン」	「第 2 ホルン」	「第 1 オーボエ」	「第 2 オーボエ」	「バスソーン」	「独奏ヴァイオリン」	「第 1 ヴァイオリン」	「第 2 ヴァイオリン」	「ヴァイオラ」	「バスツ・リピーエーノ」	「チェンバロ」
第 1 楽章	アレグロ Allegro	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第 2 楽章	アンダンテ Andante			○	○	○	○	○	○	○	○	○
第 3 楽章	アレグロ Allegro			○	○	○	○	○	○	○	○	○

表 4-20 に示したように、このパート譜に見られる三つの楽章のうち第 1 楽章は、全ての楽譜に記譜されている。しかし、ホルン譜に第 2 楽章と第 3 楽章は記されていない。そのため楽器編成は、第 1 楽章が二つのホルン、二つのオーボエ、ファゴット、ヴァイオリン、ヴィオラ、低音楽器、チェンバロであり、第 2 楽章と第 3 楽章は、この編成から二つのホルンを外したものと推定される。

²⁶⁰ Manfred Fechner, *Studien zur Dresdner Überlieferung von Instrumentalkonzerten deutscher Komponisten des 18. Jahrhunderts: Die Dresdner Konzert-Manuskripte von Georg Philipp Telemann, Johann David Heinichen, Johann Georg Pisendel, Johann Friedrich Fasch, Gottfried Heinrich Stölzel, Johann Joachim Quantz und Johann Gottlieb Graun* (Laaber: Laaber, 1999), p. 262.

図 4-17 第 1 楽章の構造 (D-DI, Mus.2421-O-1b)

アレグロ、ト長調、4/4 拍子

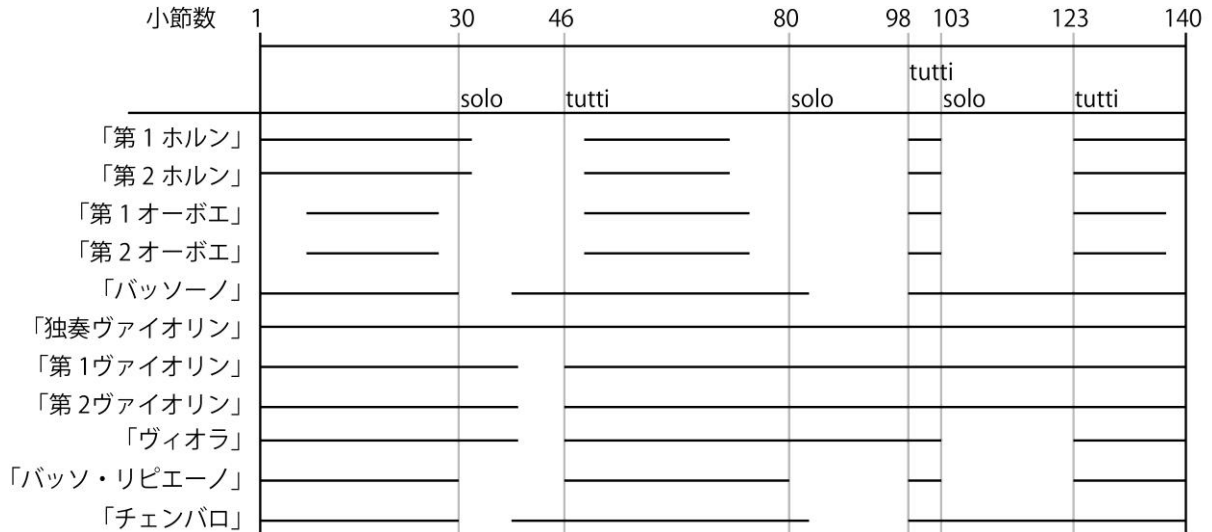


図 4-18 第 2 楽章の構造 (D-DI, Mus.2421-O-1b)

アンダンテ、ト長調、4/4 拍子

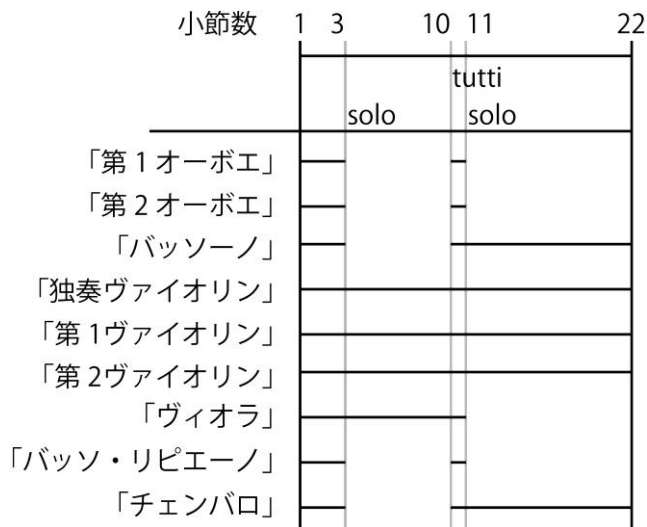


図 4-19 第 3 楽章の構造 (D-DI, Mus.2421-O-1b)

アレグロ、ト長調、3/4 拍子

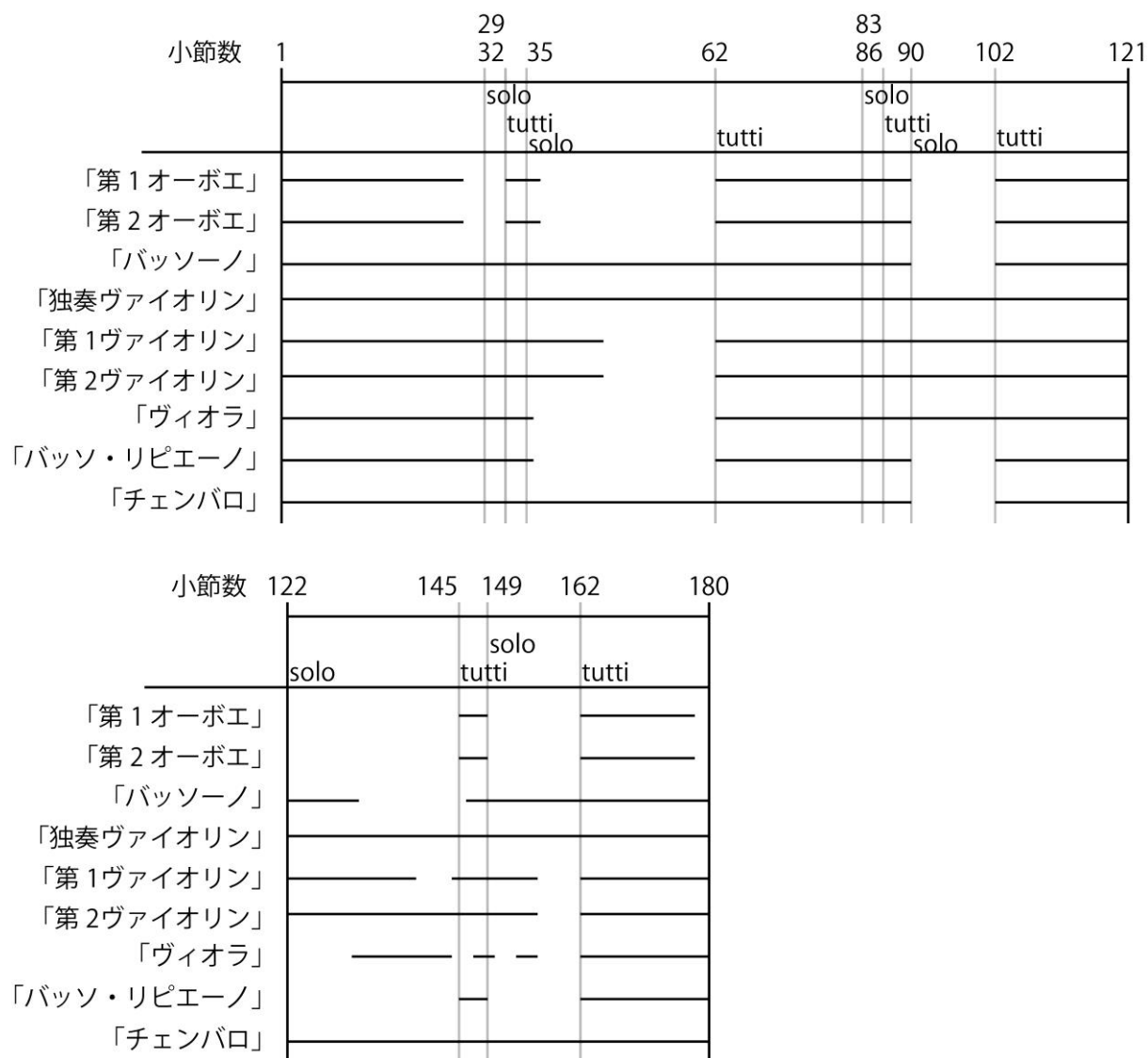


図 4-17 から図 4-19 は、三つの楽章の構造を示している²⁶¹。これらの図を 294 頁に示したパート譜 D-DI, Mus.2421-O-1a の図 4-14、図 4-15、図 4-16 と比較した場合、第 1 楽章の内容は同一であるが、第 2 楽章は全く異なっている。第 3 楽章は、楽章全体が 5 小

²⁶¹ 図の中に示した「独奏 solo」と「総奏 tutti」の指示は、「独奏ヴァイオリン」譜に基づいている。

節長く、細部も変更されている。フェヒナーは、パート譜 D-DI, Mus.2421-O-1a とパート譜 D-DI, Mus.2421-O-1b を比較し、後者に見られる写譜家 A の筆跡は、より後期のものであると指摘している。そして、前項において取り上げたパート譜 D-DI, Mus.2421-O-1a を初期稿と見なした²⁶²。

図 4-17、図 4-18、図 4-19 に基づくと、新たに編成に加えられた「第 1 ホルン」、「第 2 ホルン」、「第 1 オーボエ」、「第 2 オーボエ」は、いずれも演奏する箇所を総奏部分に限定されている。一方、同じ木管楽器であるファゴット（「バツソーノ」）は、前項のパート譜 D-DI, Mus.2421-O-1a と同様に独奏部分においても演奏し、独奏ヴァイオリンをチェンバロと共に伴奏する機会を与えられている。

第4項 パート譜 D-DI, Mus.2421-O-3a

ピゼンデルのト長調ヴァイオリン協奏曲（JunP I.6.b）が記されたパート譜は、D-DI, Mus.2421-O-3a であり、このパート譜はドレスデン宮廷の写譜家 D ともう一人の無名の写譜家によって筆写された。前者によって書かれた楽譜は、全てピゼンデルによって監修され、強弱記号や総奏、独奏の指示が加筆されている²⁶³。このパート譜において、ファゴットの楽譜である「バツソーノ」譜と「バツソーノ・リピエーノ」譜には、「バツソ」譜、「テオルボ」譜、「チェンバロ」譜、「オルガン」譜と同じく通奏低音声部が記されている。

²⁶² Manfred Fechner, *Studien zur Dresdner Überlieferung von Instrumentalkonzerten deutscher Komponisten des 18. Jahrhunderts: Die Dresdner Konzert-Manuskripte von Georg Philipp Telemann, Johann David Heinichen, Johann Georg Pisendel, Johann Friedrich Fasch, Gottfried Heinrich Stölzel, Johann Joachim Quantz und Johann Gottlieb Graun* (Laaber: Laaber, 1999), p. 262.

²⁶³ *Ibid.*, p. 265.

表 4-21 D-DI, Mus.2421-O-3a に記された楽章

	速度標語	「第1オーボエ」	「第2オーボエ」	「バスーン」	「バスーン・リピエーン」	「独奏ヴァイオリン」	「第1ヴァイオリン」	「第2ヴァイオリン」	「ヴァイオラ」	「バスーン」	「テオルゴ」	「チェンバロ」	「オルガン」
第1楽章	アダージョ Adagio	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第2楽章	アレグロ Allegro	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

このパート譜に見られる楽章は緩徐楽章と急速楽章の二つのみであり、それらは全ての楽譜に記されている（表 4-21 参照）。従って、これらの楽章の楽器編成は、二つのオーボエ、二つのファゴット、ヴァイオリン、ヴィオラ、低音楽器、テオルゴ、チェンバロ、オルガンによる大規模なものであったと推定される。楽曲が緩急の二つの楽章から成り立っていることや編成にオルガンが含まれることから、このパート譜は教会における演奏のために書かれた可能性を指摘できるだろう。

図 4-20 第 1 楽章の構造 (D-DI, Mus.2421-O-3a)

アダージョ、ト長調、3/4 拍子

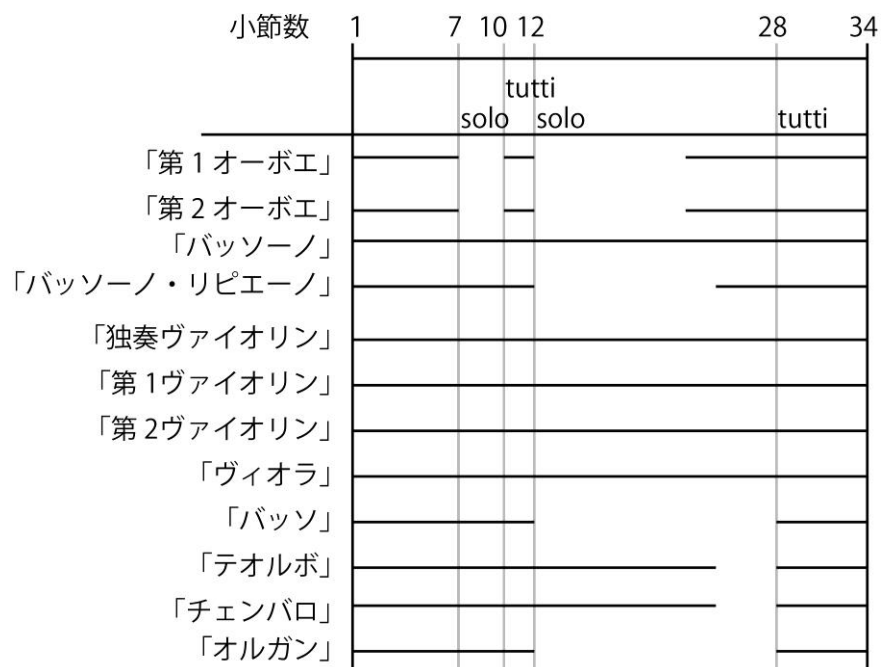
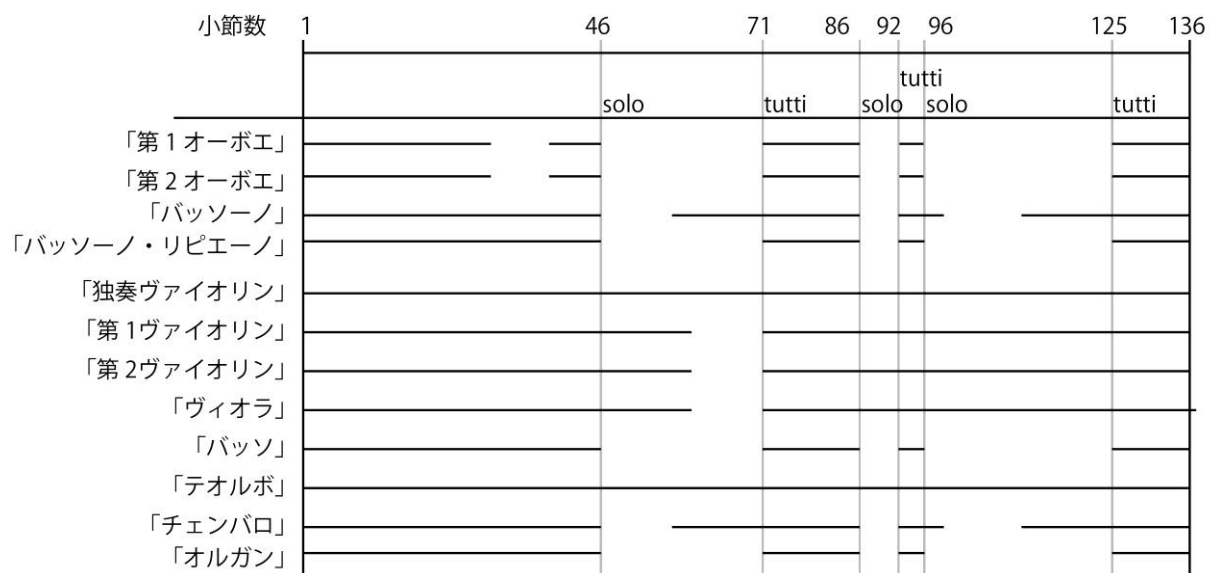


図 4-21 第 2 楽章の構造 (D-DI, Mus.2421-O-3a)

アレグロ、ト長調、2/4 拍子



	小節数		137		198		227	
	solo				tutti			
「第1オーボエ」	—	—			—	—		
「第2オーボエ」	—	—			—	—		
「バスソーン」	—							
「バスソーン・リピーエーン」		—						
「独奏ヴァイオリン」								
「第1ヴァイオリン」	—	—						
「第2ヴァイオリン」	—	—						
「ヴィオラ」	—	—						
「バスソ」								
「テオルボ」								
「チェンバロ」	—	—						
「オルガン」								

図 4-20 と図 4-21 は、二つの楽章の構造を示している²⁶⁴。木管楽器の演奏箇所を確認すると、「バスソーン・リピーエーン」だけでなく、「第1オーボエ」と「第2オーボエ」も総奏部分において演奏するのみとなっている。そして唯一「バスソーン」は、独奏部分においても演奏を続けている。

また先に確認したように、通奏低音声部の編成は「バスソーン」、「バスソーン・リピーエーン」、「バスソ」、「テオルボ」、「チェンバロ」、「オルガン」から構成されている。しかし独奏部分においても演奏する楽器は、「バスソーン」、「テオルボ」、「チェンバロ」のみである。

このように木管楽器の大半や通奏低音を奏でる楽器の半分は、演奏する箇所を総奏部分のみに限定されている。その中において、二つのファゴットのうちのひとつ（「バスソーン」）は、楽譜の内容に従うと、独奏部分においても演奏を続けている。

²⁶⁴図の中に示した「独奏 solo」と「総奏 tutti」の指示は、「独奏ヴァイオリン」譜に基づいている。ただし、「独奏ヴァイオリン」譜には、第2楽章の第92小節と第96小節にそれぞれ「独奏」と「総奏」の指示はなかった。これらの箇所の指示のみは、「バスソーン」譜に基づいている。

第5項 パート譜 D-DI, Mus.2421-O-5a

パート譜 D-DI, Mus.2421-O-5a は、ピゼンデルのニ長調ヴァイオリン協奏曲 (JunP I.5.b) の楽譜であり、ドレスデン宮廷の写譜家 D とピゼンデル自身によって筆写されている。フェヒナーは、ドレスデン宮廷の写譜家 D によって書かれた楽譜について、「明らかにこれらの楽譜は、ピゼンデルの監督と管理の下に書かれた」と指摘している²⁶⁵。このパート譜において、ファゴットの楽譜である「バスン」と「バスン・リピエーノ」には、「バスン・リピエーノ」譜、「チェンバロ」譜、「移調オルガン」譜と同様に、通奏低音声部が記譜されている。

表 4-22 D-DI, Mus.2421-O-5a に記された楽章

	速度標語	「第1ホルン」	「第2ホルン」	「第1オボーボエ」	「第2オボーボエ」	「バスン」	「バスン・リピエーノ」	「独奏ヴァイオリン」	「第1ヴァイオリン」	「第2ヴァイオリン」	「ヴァイオラ」	「バスン・リピエーノ」	「チェンバロ」	「移調オルガン」
第1楽章	ヴィヴァーチェ Vivace	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第2楽章	アンダンテ Andante			○	○	○	○	○	○	○	○		○	
第3楽章	アレグロ Allegro			○	○	○	○	○	○	○	○		○	

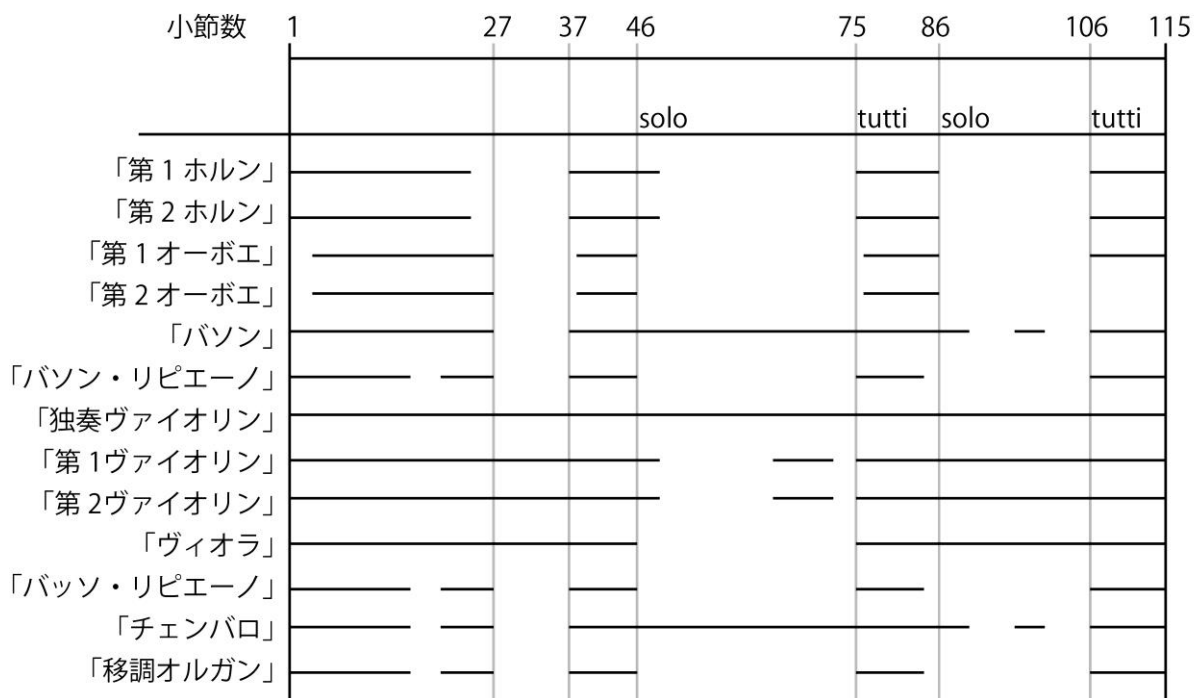
表 4-22 に示したように、このヴァイオリン協奏曲は、急緩急の三つの楽章から成っており、「第1ホルン」、「第2ホルン」、「バスン・リピエーノ」、「移調オルガン」以外の楽譜

²⁶⁵ Manfred Fechner, *Studien zur Dresdner Überlieferung von Instrumentalkonzerten deutscher Komponisten des 18. Jahrhunderts: Die Dresdner Konzert-Manuskripte von Georg Philipp Telemann, Johann David Heinichen, Johann Georg Pisendel, Johann Friedrich Fasch, Gottfried Heinrich Stölzel, Johann Joachim Quantz und Johann Gottlieb Graun* (Laaber: Laaber, 1999), p. 268.

には、全ての楽章が記譜されている。残りの楽譜には、第1楽章のみが記されている²⁶⁶。そのため第1楽章の楽器編成は、二つのホルン、二つのオーボエ、二つのファゴット、さらにヴァイオリン、ヴィオラ、何らかの低音楽器（「バスソ・リピエーノ」）、チェンバロ、オルガンから成る大編成であり、他の楽章は、この編成からホルンと何らかの低音楽器、オルガンを除いたものと考えられよう。

図 4-22 第1楽章の構造 (D-DI, Mus.2421-O-5a)

ヴィヴァーチェ、ニ長調、3/4 拍子



²⁶⁶ これらの楽譜の状況から、第1楽章のみを教会において演奏した可能性が考えられるだろう。

小節数	116	153	173
	solo	tutti	
「第1ホルン」	—		
「第2ホルン」	—		
「第1オーボエ」			
「第2オーボエ」			
「バスン」	—		
「バスン・リピーエノ」		—	—
「独奏ヴァイオリン」			
「第1ヴァイオリン」	—		
「第2ヴァイオリン」	—		
「ヴィオラ」	—		
「バスン・リピーエノ」		—	—
「チェンバロ」	—	—	—
「移調オルガン」		—	—

図 4-23 第2楽章の構造 (D-DI, Mus.2421-O-5a)

アンダンテ、ロ短調、4/4 拍子

小節数	1	6	12	14	24	28
		solo	tutti	solo	tutti	tutti
「第1オーボエ」	—		—			
「第2オーボエ」	—		—			
「バスン」	—		—			
「バスン・リピーエノ」	—		—			
「独奏ヴァイオリン」	—		—			
「第1ヴァイオリン」	—		—			
「第2ヴァイオリン」	—		—			
「ヴィオラ」	—		—	—		
「バスン・リピーエノ」	—		—			
「チェンバロ」	—	—	—	—	—	—

図 4-24 第 3 楽章の構造 (D-DI, Mus.2421-O-5a)

アレグロ、ニ長調、3/8 拍子

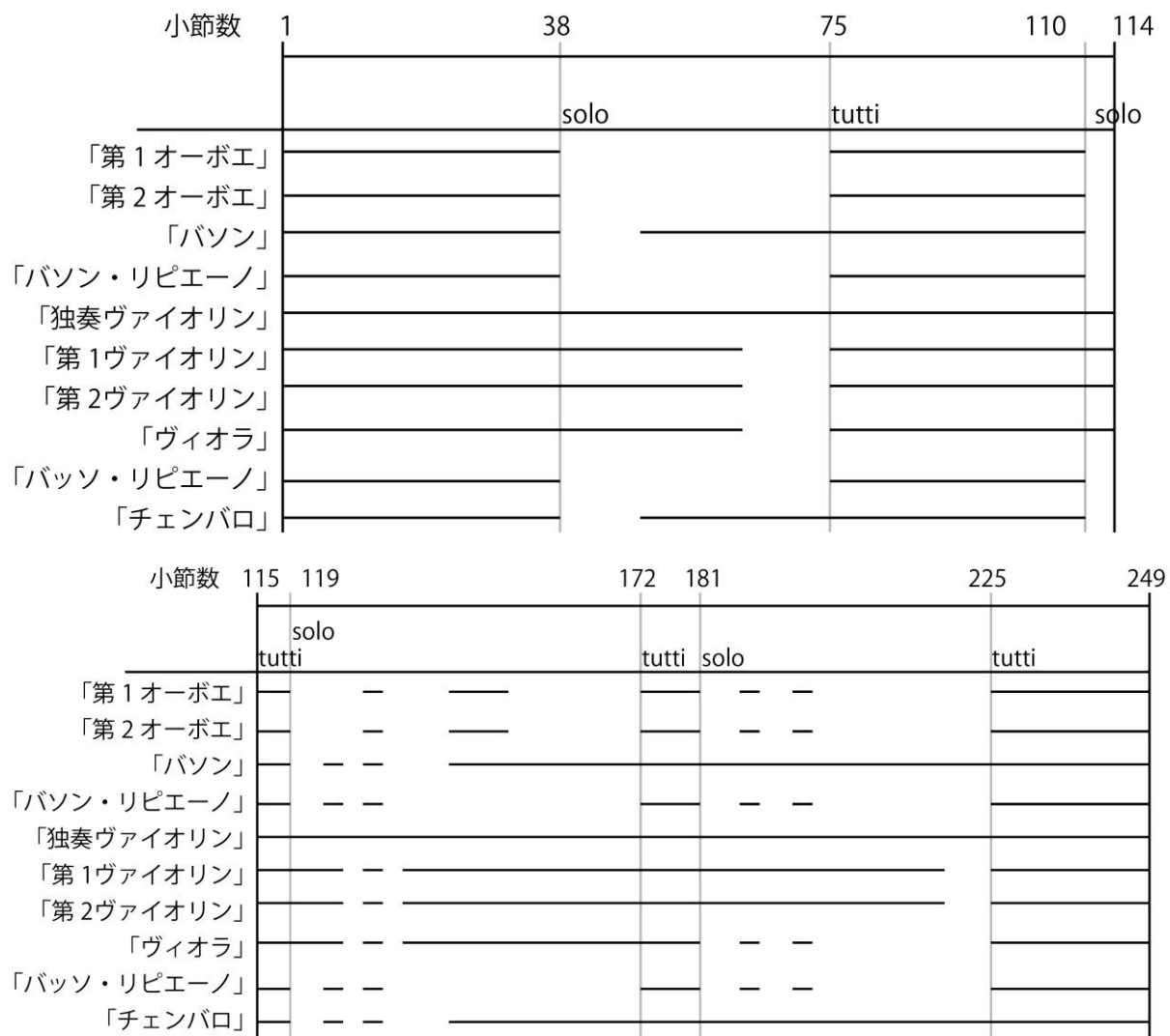


図 4-22 から図 4-24 は、三つの楽章の構造を表している²⁶⁷。この三つの図から明らか
なように、総奏部分と独奏部分の交代は全ての楽章に見られる。

²⁶⁷ 図の中に示した「独奏 solo」と「総奏 tutti」の指示は、「独奏ヴァイオリン」譜に基づいている。

第 1 楽章の編成には、それぞれ二つのホルン、オーボエ、ファゴットが含まれたと考えられた。先に提示した図に基づくと、これらの木管楽器の中で独奏部分においても演奏するものは、一つのファゴット（「バスン」）のみに限られている。

また独奏部分の中には、第 1 楽章の第 46 小節から第 74 小節や、第 3 楽章の第 38 小節から第 75 小節、さらに第 225 小節の直前に置かれたカデンツァのように、非常に小さい編成によって演奏される箇所が見られる。そこでは、「バスン」が「チェンバロ」と共に「独奏ヴァイオリン」を伴奏している。

このように、ピゼンデルのニ長調ヴァイオリン協奏曲（JunP I.5.b）のパート譜 D-DI, Mus.2421-O-5a から考えられる編成は二つのファゴットを含んでいる。そして楽譜の内容に従った場合、リピーエーノではないファゴットは、チェンバロと共に独奏ヴァイオリンを伴奏したと考えられる。

第6項 パート譜 D-DI, Mus.2421-O-6b

パート譜 D-DI, Mus.2421-O-6b には、ピゼンデルのニ長調ヴァイオリン協奏曲（JunP I.7.c）が記されている。このパート譜を構成する楽譜は、ピゼンデルとドレスデン宮廷の写譜家 A、ドレスデン宮廷の写譜家 S-DI-015 によって筆写された。そして、ドレスデン宮廷の写譜家 A によって書かれた楽譜にはピゼンデルによる加筆が見られるが、ドレスデン宮廷の写譜家 S-DI-015 によって書かれたヴィオラ譜に、ピゼンデルによる補足は見られない²⁶⁸。このパート譜において、ファゴットのための「バツオーノ」譜と「バツオーノ・リピーエーノ」譜には、「チェンバロ」譜、「移調オルガン」譜、「オルガン」譜と同様に通奏低音声部が記されている。

²⁶⁸ Manfred Fechner, *Studien zur Dresdner Überlieferung von Instrumentalkonzerten deutscher Komponisten des 18. Jahrhunderts: Die Dresdner Konzert-Manuskripte von Georg Philipp Telemann, Johann David Heinichen, Johann Georg Pisendel, Johann Friedrich Fasch, Gottfried Heinrich Stölzel, Johann Joachim Quantz und Johann Gottlieb Graun* (Laaber: Laaber, 1999), p. 271.

このヴァイオリン協奏曲は、急緩急の三つの楽章から成り立っている。表 4-23 に記したように、この三つの楽章は、ピゼンデル自身によって書かれた 2 冊の「独奏ヴァイオリン」譜のうちの 1 冊、「移調オルガン」譜、「オルガン」譜を除く全ての楽譜に記されている。この 3 冊の楽譜には、第 2 楽章と第 3 楽章のみが記されているため、フェヒナーは、第 2 楽章と第 3 楽章のみが抜粋されて、教会において演奏された可能性を指摘した²⁶⁹。

こうしたパート譜の状態から推定される楽器編成は、第 1 楽章が二つのホルン、二つのオーボエ、二つのファゴット、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェンバロであり、第 2 楽章と第 3 楽章には、さらに二つのオルガンが加わる。

表 4-23 D-DI, Mus.2421-O-6b に記された楽章

	速度標語	「第 1 ホルン」	「第 2 ホルン」	「第 1 オオーボエ」	「第 2 オオーボエ」	「バスソーン」	「バスソーン・リピエーノ」	「独奏ヴァイオリン」	「第 1 ヴァイオリン」	「第 2 ヴァイオリン」	「ヴィオラ」	「チェンバロ」	「移調オルガン」	「オルガン」
第 1 楽章	ヴィヴァーチェ Vivace	○	○	○	○	○	○	○ ²⁷⁰	○	○	○	○		
第 2 楽章	アンダンテ Andante	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第 3 楽章	アレグロ Allegro	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

図 4-25 から図 4-27 は、三つの楽章の構造を示している²⁷¹。各楽章の独奏部分を概観すると、第 1 楽章では、「独奏ヴァイオリン」、「バスソーン」、「チェンバロ」に加え、「第

²⁶⁹ *Ibid.*, p. 271.

²⁷⁰ 2 冊の「独奏ヴァイオリン」のうちの 1 冊に、第 1 楽章は記譜されていない。

²⁷¹ 図の中に示した「独奏 solo」、「総奏 tutti」などの指示は、「独奏ヴァイオリン」譜に基づいている。ただし、「[ヴィヴァーチェ Vivace]」の表記のみは、本論文の筆者が表記した。

「第 1 ヴァイオリン」、「第 2 ヴァイオリン」、「ヴィオラ」も演奏している。このように、第 1 楽章の独奏部分において、独奏ヴァイオリンは多くの楽器を従えている。さらに第 3 楽章の最後の独奏部分には、木管楽器である二つのホルンと二つのオーボエが演奏する箇所も見られ、種々の楽器の音色が聞かれるようになっている。

しかし、独奏部分の中には、僅かに「独奏ヴァイオリン」、「バスソーン」、「チェンバロ」によって演奏される箇所も見られる。それは、第 2 楽章の終わりや（第 13 小節から第 17 小節）、第 3 楽章の第 64 小節の直前、第 89 小節から第 129 小節までの独奏部分の終わりである。

このパート譜 D-DI, Mus.2421-O-6b は、弦楽器に加え、木管楽器であるホルン、オーボエ、ファゴット、さらにオルガンを伴った大規模な合奏団のために書かれていた。しかし、各楽譜の内容に基づくと、独奏ヴァイオリン、ファゴット、チェンバロのみの小編成によって演奏される箇所も挿入されていたと考えられる。

図 4-25 第 1 楽章の構造 (D-DI, Mus.2421-O-6b)

ヴィヴァーチェ、ニ長調、4/4 拍子

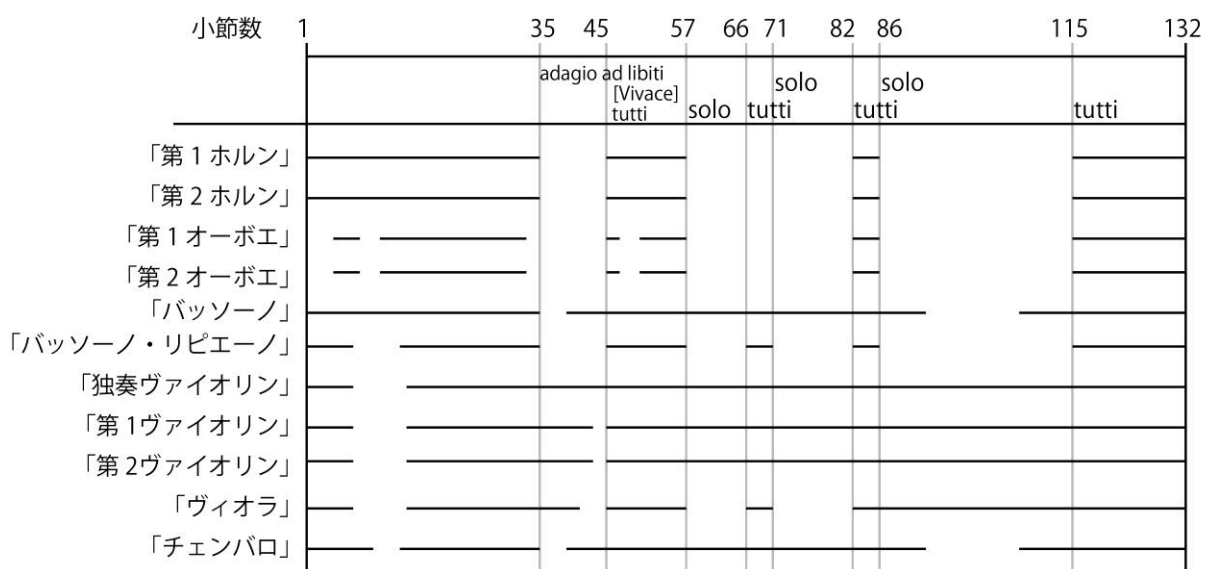


図 4-26 第 2 楽章の構造 (D-DI, Mus.2421-O-6b)

アンダンテ、ニ長調、4/4 拍子

小節数	1	4	7	8	11	13	17
		solo		solo tutti		solo tutti	
「第 1 ホルン」	—		—		—		
「第 2 ホルン」	—		—		—		
「第 1 オーボエ」	—		—		—		
「第 2 オーボエ」	—		—		—		
「バッソーン」	—		—		—		
「バッソーン・リピエーノ」	—		—		—		
「独奏ヴァイオリン」	—		—		—		
「第 1 ヴァイオリン」	—		—		—		
「第 2 ヴァイオリン」	—		—		—		
「ヴィオラ」	—		—		—		
「チェンバロ」	—		—		—		
「移調オルガン」	—		—		—		
「オルガン」	—		—		—		

図 4-27 第 3 楽章の構造 (D-DI, Mus.2421-O-6b)

アレグロ、ニ長調、3/4 拍子

小節数	1	33	64	89	130
		solo	tutti	solo	
「第 1 ホルン」	—	—	—	—	—
「第 2 ホルン」	—	—	—	—	—
「第 1 オーボエ」	—	—	—	—	—
「第 2 オーボエ」	—	—	—	—	—
「バッソーン」	—	—	—	—	—
「バッソーン・リピエーノ」	—	—	—	—	—
「独奏ヴァイオリン」	—	—	—	—	—
「第 1 ヴァイオリン」	—	—	—	—	—
「第 2 ヴァイオリン」	—	—	—	—	—
「ヴィオラ」	—	—	—	—	—
「チェンバロ」	—	—	—	—	—
「移調オルガン」	—	—	—	—	—
「オルガン」	—	—	—	—	—

	小節数 131	155	194	205
	tutti	solo	tutti	
「第1ホルン」	—			
「第2ホルン」	—			
「第1オーボエ」	—	—	—	—
「第2オーボエ」	—	—	—	—
「バスソーン」		—	—	
「バスソーン・リピーノ」	—	—	—	—
「独奏ヴァイオリン」	—	—		
「第1ヴァイオリン」	—	—		
「第2ヴァイオリン」	—	—		
「ヴィオラ」	—	—		
「チェンバロ」		—	—	
「移調オルガン」	—	—	—	—
「オルガン」	—	—	—	—

第7項 パート譜 D-DI, Mus.2421-O-7b

パート譜 D-DI, Mus.2421-O-7b には、ピゼンデルが作曲した変ホ長調ヴァイオリン協奏曲 (JunP I.3.c) が記されている。このパート譜を構成する各楽譜は、ドレスデン宮廷の写譜家 A と写譜家 D によって筆写され、ピゼンデル自身はそれらを監修し、強弱記号を書き加えた²⁷²。

²⁷² Manfred Fechner, *Studien zur Dresdner Überlieferung von Instrumentalkonzerten deutscher Komponisten des 18. Jahrhunderts: Die Dresdner Konzert-Manuskripte von Georg Philipp Telemann, Johann David Heinichen, Johann Georg Pisendel, Johann Friedrich Fasch, Gottfried Heinrich Stölzel, Johann Joachim Quantz und Johann Gottlieb Graun* (Laaber: Laaber, 1999), p. 276.

表 4-24 D-DI, Mus.2421-O-7b に記された楽章

	速度標語	「独奏ヴァイオリン」	「第1ヴァイオリン」	「第2ヴァイオリン」	「ヴィオラ」	「バスン」	「バスン・リピーエーノ」
第1楽章	アレグロ Allegro	○	○	○	○	○	○
第2楽章	アンダンテ Andante	○	○	○	○	○	○
第3楽章	アレグロ Allegro	○	○	○	○	○	○

このパート譜に見られる急緩急の三つの楽章は、全ての楽譜に記譜されている（表 4-24 参照）。よって、これらの楽章の楽器編成は、ヴァイオリン、ヴィオラ、低音楽器、ファゴット（「バスン・リピーエーノ」）であったと考えられ、ファゴットは唯一の木管楽器となっている。図 4-28 から図 4-30 は、このパート譜 D-DI, Mus.2421-O-7b に記された三つの楽章の構造を示している²⁷³。

図 4-28 第1楽章の構造 (D-DI, Mus.2421-O-7b)

アレグロ、変ホ長調、4/4 拍子

小節数	1	11	25	27	39	40	60	75	97	105
		solo	tutti	solo	tutti		tutti	solo		tutti
「独奏ヴァイオリン」	[Musical notation]									
「第1ヴァイオリン」	[Musical notation]									
「第2ヴァイオリン」	[Musical notation]									
「ヴィオラ」	[Musical notation]									
「バスン・リピーエーノ」	[Musical notation]									
「バスン」	[Musical notation]									

²⁷³ 図の中に示した「独奏 solo」、「総奏 tutti」などの指示は、「独奏ヴァイオリン」譜に基づいている。ただし、第3楽章の第215小節における「[総奏]」の指示は、本論文の筆者が記した。

図 4-29 第 2 楽章の構造 (D-DI, Mus.2421-O-7b)

アンダンテ、変ホ長調、4/4 拍子



図 4-30 第 3 楽章の構造 (D-DI, Mus.2421-O-7b)

アレグロ、変ホ長調、3/8 拍子



このパート譜を構成する各楽譜の内容に基づくと、「バスン・リピエーノ」は「バスソ」と共に通奏低音声部を奏でる。「バスソ」は総奏部分と独奏部分の両方に現れるが、「バスン・リピエーノ」が演奏に携わる箇所は総奏部分のみに厳密に限定されている。従って、総奏部分においては、弦楽器と共に木管楽器であるファゴットの音色も聞かれたが、独奏部分は弦楽合奏のみによって演奏されたと考えられよう。

このことからファゴットは、総奏部分の響きの厚みや音量を増すために用いられているといえる。従って、このパート譜におけるファゴットの用いられ方は、アンガルヘーファーが指摘した「弦楽オーケストラ」における用法に該当すると指摘できる。

第8項 パート譜 D-DI, Mus.2421-O-10

パート譜 D-DI, Mus.2421-O-10 に記譜されたピゼンデルのヴァイオリン協奏曲は、ト短調 (JunP I.1.b) のものであり、このパート譜はドレスデン宮廷の写譜家 D と写譜家 n によって書かれた。彼らによって筆写された各楽譜に対し、ピゼンデル本人は強弱記号などを書き加えた²⁷⁴。このパート譜に含まれるファゴットのための「バスソーン」譜には、「オルガン」譜や「通奏低音」譜と同じ声部が記されている。

この楽曲は、緩急緩急の四つの楽章によって構成されている(表 4-25 参照)。3冊の「バスソ・リピエーノ」譜のうち2冊には、第1楽章と第2楽章のみが記譜されており、さらに「オルガン」譜には第1楽章のみが記されている。その他の楽譜には四つの楽章全てが記されているため、第1楽章の楽器編成は、二つのオーボエ、ファゴット、ヴァイオリン、ヴィオラ、低音楽器、オルガン、「通奏低音」を奏でる楽器であり、第2楽章から第4楽章の編成は、上記のものからオルガンを外したものとなるだろう。

²⁷⁴ Manfred Fechner, *Studien zur Dresdner Überlieferung von Instrumentalkonzerten deutscher Komponisten des 18. Jahrhunderts: Die Dresdner Konzert-Manuskripte von Georg Philipp Telemann, Johann David Heinichen, Johann Georg Pisendel, Johann Friedrich Fasch, Gottfried Heinrich Stölzel, Johann Joachim Quantz und Johann Gottlieb Graun* (Laaber: Laaber, 1999), p. 280.

表 4-25 D-DI, Mus.2421-O-10 に記された楽章

	速度標語	「第1オーボエ」	「第2オーボエ」	「バスーン」	「独奏ヴァイオリン」	「第1ヴァイオリン」	「第2ヴァイオリン」	「ヴィオラ」	「バスーン・リピエーノ」 ²⁷⁵	「オルガン」	「通奏低音」
第1楽章	ラルゴ Largo	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
第2楽章	アレグロ Allegro	○	○	○	○	○	○	○	○		○
第3楽章	ラルゴ Largo	○	○	○	○	○	○	○	○		○
第4楽章	アレグロ Allegro	○	○	○	○	○	○	○	○		○

図 4-31 から図 4-34 は、四つの楽章の構成を示している²⁷⁶。これらの図の独奏部分を概観すると、規模の大きい楽器編成が見られる。その一例として、「独奏ヴァイオリン」、「第1ヴァイオリン」、「第2ヴァイオリン」、「通奏低音」、「オルガン」、「バスーン」の編成が挙げられる。これらの楽器は、第1楽章の第17小節の直前において演奏している。そして、この編成から「オルガン」を外したものは、第2楽章の第19小節以降や第75小節からの部分に現れている。また第4楽章の第64小節以降や、第147小節から第178小節までの間には、「独奏ヴァイオリン」、「第1ヴァイオリン」、「第2ヴァイオリン」、「ヴィオラ」、「通奏低音」、「バスーン」の組合せが見られる。

一方、独奏部分の中には、「独奏ヴァイオリン」と「通奏低音」の楽器、「バスーン」のみによる非常に小さい編成も見られる。これらの楽器の組合せは、第1楽章の半ばや、第2楽章の第43小節の直前、第3楽章に現れる。さらに第4楽章の第147小節以降や、

²⁷⁵ 合計3冊の「バスーン・リピエーノ」譜のうち、ドレスデン宮廷の写譜家 n によって筆写された2冊に、第1楽章と第2楽章は記譜されていない。

²⁷⁶ 図の中に示した「独奏 solo」と「総奏 tutti」の指示は、「独奏ヴァイオリン」譜に基づいている。第3章の第25小節における「総奏」の指示のみは、「通奏低音」譜に基づいている。

この楽章を閉じる総奏部分に至る第 225 小節の直前においても、「バスソーン」は「独奏ヴァイオリン」や「通奏低音」の楽器と共に演奏している。

ピゼンデルのト短調ヴァイオリン協奏曲 (JunP I.1.b) が記されたパート譜 D-DI, Mus.2421-O-10 には、様々な規模の編成によって演奏される独奏部分が見られた。各楽譜の内容に従うと、独奏部分の随所にファゴットは現れており、編成が小さい箇所において、この楽器は独奏ヴァイオリンや「通奏低音」の楽器と共に演奏していたと考えられる。

図 4-31 第 1 楽章の構造 (D-DI, Mus.2421-O-10)

ラルゴ、ト短調、3/4 拍子

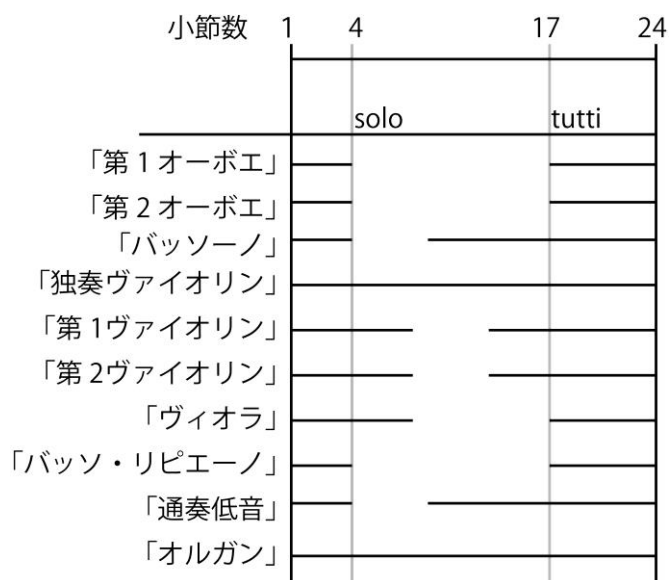


図 4-32 第 2 楽章の構造 (D-DI, Mus.2421-O-10)

アレグロ、ト短調、4/4 拍子

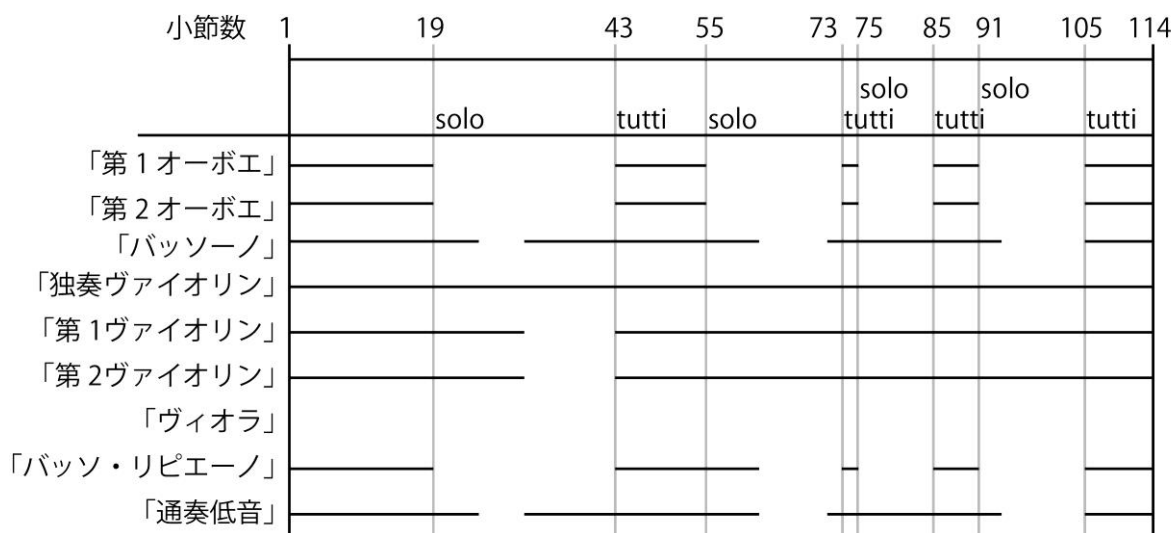


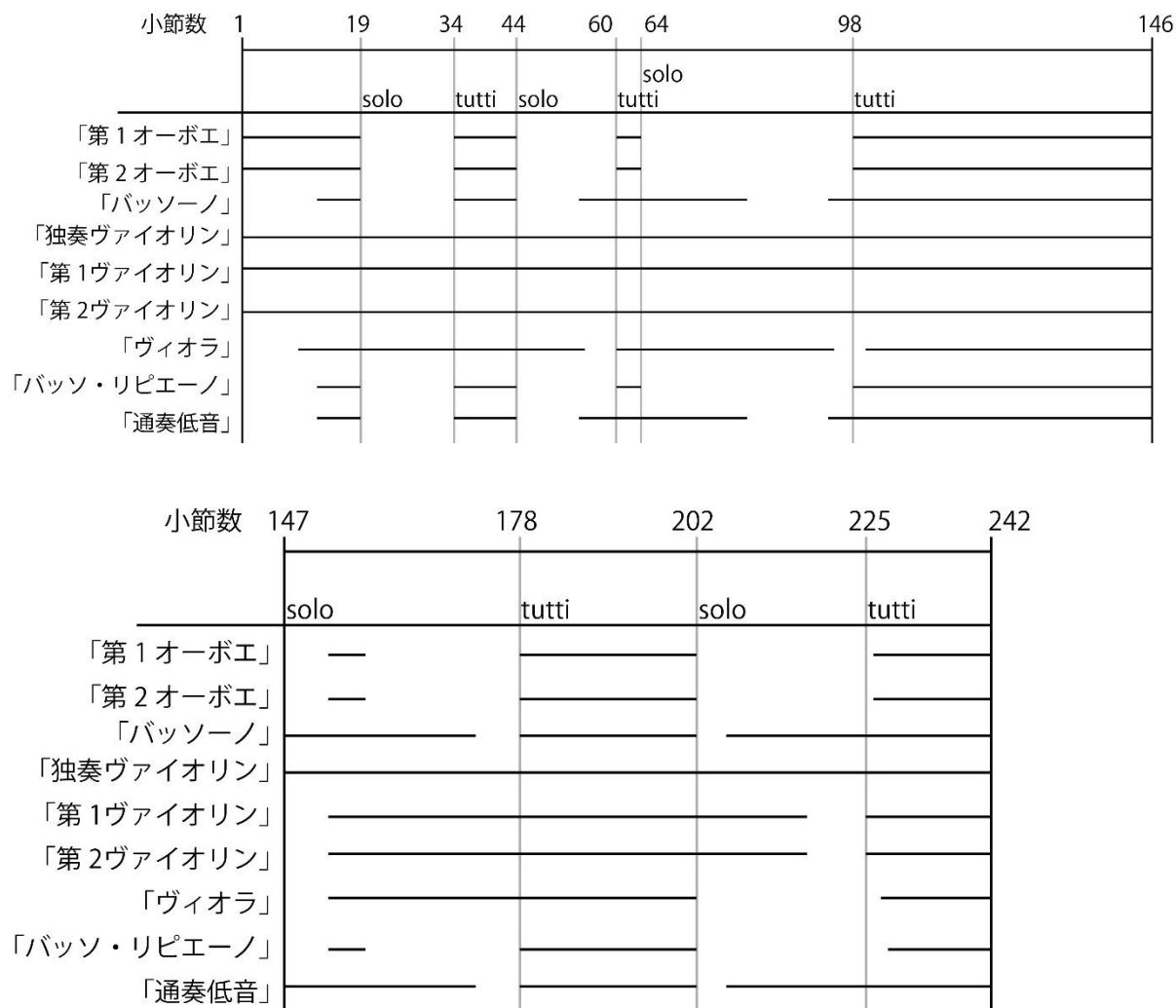
図 4-33 第 3 楽章の構造 (D-DI, Mus.2421-O-10)

ラルゴ、変ホ長調、4/4 拍子



図 4-34 第 4 楽章の構造 (D-DI, Mus.2421-O-10)

アレグロ、ト短調、3/4 拍子



第3節 第4章の総括

本章では、1733年から1735年までの「宮廷楽団の名簿」において、ファゴット奏者がヴァイオリン奏者と共に増員された背景を探るために、ヴォリュミエやピゼンデルの時代に筆写されたパート譜におけるファゴットの用いられ方を論じてきた。

楽師長ヴォリュミエの時代に筆写された、フランスの音楽家リュリの作品のパート譜は16点が現存していた。その約半数の9点において、ファゴットには、二重奏を奏するオー

ボエやフルートを伴奏する機会が与えられていた。従ってファゴットは、ドレスデン宮廷楽団がフランス音楽を演奏した際に、他の木管楽器を伴奏する楽器として重用されたと考えられた。このことは、アンガルヘーファーによって定義された 18 世紀前半の楽団におけるファゴットの用いられ方と一致していた。

しかし、この時代に筆写されたヴァイオリン協奏曲のパート譜 D-Dl, Mus.2045-O-1 は、この定義とは全く異なるファゴットの用い方を示していた。ファゴットは、二つの木管楽器を伴奏した時のように、通奏低音声部を奏でる楽器と共に独奏ヴァイオリンを伴奏していたのである。さらに、ヴァイオリンが独奏する際に、同じ弦楽器であるチェロや「ヴィオロン」は休止していた。このようにパート譜 D-Dl, Mus.2045-O-1 においては、ファゴットがヴァイオリンと確固とした対を成しており、このことは、ファゴット奏者がヴァイオリン奏者と共に増員された背景を知る上で非常に興味深かった。

ピゼンデルの監修の下に筆写された、ヴィヴァルディによる《二つのヴァイオリンのための協奏曲》(RV 508) のパート譜 D-Dl, Mus.2389-O-49 は、編成にそれぞれ二つのオーボエとファゴットが追加されたと考えられた。そしてファゴットは、チェンバロと共に独奏ヴァイオリンを伴奏していた。

ピゼンデルが作曲したヴァイオリン協奏曲が記され、彼によって監修されたパート譜は 15 点に上り、そのうち 7 点には、ファゴットを含む木管楽器のための楽譜が見られた。この 7 点のうち、僅か 7 冊から成るパート譜 D-Dl, Mus.2421-O-7b 以外の 6 点は 12 冊を超える楽譜から構成されていたため、木管楽器を含む大編成のためのパート譜であると考えられた。この 6 点には、ファゴットがチェンバロと共に独奏ヴァイオリンを伴奏したと考えられる箇所が随所に見られた。

以上のことから、ヴァイオリン協奏曲において、ファゴットが独奏ヴァイオリンを伴奏することは、ピゼンデルが楽師長を務めた時代のドレスデン宮廷楽団に受け継がれたことが分かる。本章において取り上げたヴァイオリン協奏曲のパート譜のうち、ファゴットが

独奏ヴァイオリンを伴奏したものは 8 点に上り、それらは複数の種類の木管楽器を編成に含み、かつ 12 冊以上の楽譜から構成されている²⁷⁷。このことを踏まえると、ドレスデン宮廷楽団が、複数の木管楽器を含む大編成によってヴァイオリン協奏曲を演奏した場合、ファゴットが独奏ヴァイオリンを伴奏した傾向が見えてくる。この傾向は、少なくともイタリアの作曲家ヴィヴァルディによって認知されていたようだ。なぜなら、彼が作曲した「ドレスデンのオーケストラのための *Per l'orchestra di Dresda*」協奏曲 (RV 577) は、編成にフルート、オーボエ、ファゴットを含み、かつファゴットのみが独奏ヴァイオリンを伴奏する部分が見られるからである (第 3 楽章の第 83 小節から第 94 小節)²⁷⁸。

これらのことに基づくと、ヴォリュミエやピゼンデルの時代のドレスデン宮廷楽団においては、ヴァイオリンとファゴットを対とする様式が確立されていたことが分かる。この様式に従うと、ヴァイオリンの人数が増えて楽団の中でこの楽器の音が際立つようになった場合、ヴァイオリンと対になったファゴットの音も際立たせる必要があるため、ファゴットも増員されると考えられる。従って、1733 年から 1735 年までの「宮廷楽団の名簿」において、ファゴット奏者の数がヴァイオリン奏者と共に増加したことは、これらの楽器を対と見なしたことに起因する可能性を指摘できる。

²⁷⁷この 8 点のパート譜は、次のものである。D-Dl, Mus.2045-O-1; D-Dl, Mus.2389-O-49; D-Dl, Mus.2421-O-1a; D-Dl, Mus.2421-O-1b; D-Dl, Mus.2421-O-3a; D-Dl, Mus.2421-O-5a; D-Dl, Mus.2421-O-6b; D-Dl, Mus.2421-O-10.

²⁷⁸ Antonio Vivaldi, *Concerto in Sol minore per violino, 2 flauti, 2 oboi, 2 fagotti, archi e cembalo, F. XII no. 3: "Per l'orchestra di Dresda"*, edited by Angelo Ephrikian (Milano: Ricordi, 1947).

結び

ピゼンデルは、1731年から1755年にかけて、正式にドレスデン宮廷楽団の楽師長を務めた。本論文は、この時期におけるドレスデン宮廷楽団の合奏形態、すなわち、合奏に携わった者と彼らの人数を明らかにすることにより、この楽団の特徴を解明することを目的とした。序においては、17世紀初頭から18世紀末に渡るオーケストラの黎明期において、ドレスデン宮廷楽団は18世紀前半のドイツを代表するオーケストラと位置付けられることを確認した。とりわけ、ピゼンデルが楽師長を務めた1731年から1755年までのこの楽団は、第一級の作曲家によるオペラ、教会音楽、室内楽などの種々の分野の演奏に従事していた。さらに序においては、このピゼンデルの時代におけるドレスデン宮廷楽団の特徴は、一糸乱れぬ合奏と独自の楽器編成であったと考えた。

しかし、一糸乱れぬ合奏を実現した奏者は明らかにされてこなかった。本論文では、彼らを特定するために、この楽団に所属した奏者全員を把握した上で、その奏者のうち頻繁に出張した者を確認する方法を考案した。このことは、楽団に所属した奏者の大半はこれまで不明であったことや、出張にはこの合奏に欠かせない先鋭たちが選出されたと考えられたことに基づいた。

この楽団の楽器編成を解明するために、先行研究は楽団の年俸表や名簿から奏者の数を算出してきた。しかし、スピッツァーとザスローは、当時のオーケストラの年俸表や名簿の多くには実際の演奏に携わっていなかった退職者などが含まれたため、そこから算出された人数と実際の楽器編成が大きく異なる例を提示した。そのため、ドレスデン宮廷楽団の年俸表や名簿から求められる奏者の数が、実際の楽器編成に関連したかを検証する必要が生じていた。本論文の筆者は、ドレスデン宮廷の音楽家のうち狩猟用別邸フベルトゥスブルクにおけるオペラ上演に選出された者のみを示した3点の名簿を入手した。この名簿

に基づいて各楽器の人数を数えることにより、オペラ上演のために計画された楽器編成を把握することは可能であった。

これらのことを踏まえ、本論文では、ドレスデン宮廷楽団の楽器編成を解明するために以下の研究方法を考案した。はじめに、年俸表や名簿からこの楽団に在籍した奏者の数を算出する。次に、オペラ上演に選出された者を示した3点の名簿から各楽器の人数を算出して、この上演に携わる予定であった者の数を把握する。その人数を基準として、年俸表や名簿から算出された人数が、実際の演奏における人数とどの程度類似したかを検証する。その結果を踏まえた上で、各楽器の人数の割合から、この楽団の楽器編成の特徴を指摘する。

このように奏者の特定と楽器編成の解明を試みる本論文は、ピゼンデルの時代だけでなく、先代の楽師長ヴォリュミエの時代も研究対象に含めた。なぜなら、ドレスデン宮廷楽団の一糸乱れぬ合奏はヴォリュミエによって確立されたため、彼の時代におけるこの楽団の状況を把握することによって、ピゼンデルの時代の実態をより深く理解できると考えたからである。

各章の内容の確認

第1章は、ヴォリュミエが楽師長を務めた時代のドレスデン宮廷楽団を研究対象として、乱れのない合奏に必要であった奏者を特定することを目的とした。はじめに、1709年からヴォリュミエが亡くなった翌年にあたる1729年までに記録された合計12点の年俸表や名簿に基づいて、この楽団に所属した奏者を特定した。次に、1714年にパリへ、1716年にイタリアへ、1718年にヴィーンへ、1719年にモーリツブルクへ出張した奏者を確認し、各奏者の出張回数を算出した。

当時ヴァイオリン奏者であったピゼンデルとオーボエ奏者リヒターは、4回の出張全てに選出されていたため、彼らは演奏に不可欠な奏者であるといえた。さらに1718年と1719

年の両方の出張には、ピゼンデルとリヒターに加え、ヴァイス、ビュッフアルダン、ブロッホヴィッツ、ベーメ、ライン、レーナイス、ロッシも選出されていた。このことに基づき、第 1 章では、ピゼンデルとこれらの 8 名を、ヴォリュミエの時代における一糸乱れぬ合奏に不可欠な奏者と見なした。

第 2 章は、ピゼンデルが楽師長を務めた時代のドレスデン宮廷楽団を研究対象として、彼が一糸乱れぬ合奏を実現するために必要とした奏者を特定することを目的とした。第 1 章において、ピゼンデルと共に合奏に不可欠な奏者と見なした 8 名は、ヴィオラ奏者レーナイスを除き、ヴォリュミエが亡くなった後もこの楽団に所属した。そのためレーナイスを除いた 7 名は、ピゼンデルの時代においても乱れのない合奏を実現する役割を担った可能性があった。一方、ピゼンデルの時代に新たに雇用された奏者の中からは、この合奏の一翼を担うようになる奏者が育った可能性もあった。従って、ヴォリュミエの時代からこの楽団に在籍した先の 7 名がピゼンデルの時代においても合奏に欠かせなかったか、またピゼンデルの時代に新たに雇用された奏者の中に、この合奏に必要な者があったかを本章では検証した。

はじめに、1731 年から 1755 年までの 24 点の「宮廷楽団の名簿」から、奏者と合奏に加わったと考えられた者を特定し、一覧表に示した。その上で、各奏者が狩猟用別邸フベルトゥスブルクへの出張に選出された回数を算出し、頻繁にこの別邸に遣わされた奏者を特定した。

その結果に基づくと、186 頁の表 2-27 に挙げた 9 名を合奏に不可欠な奏者と見なすことができた。彼らの中には、ヴォリュミエの時代から在籍した先の 7 名のうち、ロッシ、ビュッフアルダン、リヒター、ベーメ、ヴァイスの 5 名が含まれていた。一方、この 9 名のうちフィックラーとアーダムの 2 名は、ピゼンデルが楽師長に就任する直前の時期やその後の時期に、この楽団に在籍するようになった奏者であった。

第3章はヴォリュミエとピゼンデルが楽師長を務めた1709年から1755年までのドレスデン宮廷楽団を研究対象として、この楽団の楽器編成の特徴を指摘することを目的とした。すでに説明したように、ドレスデン宮廷楽団の年俸表や名簿から算出される奏者の数が、実際の演奏における奏者の数にどの程度類似したかを検証する必要が生じていた。本章でははじめに、第1章や第2章において参照した合計36点の年俸表や名簿から奏者と合奏に携わったと考えられた者の数を算出し、これらの資料における人数の変化を明らかにした。その結果、1735年から1742年までの「宮廷楽団の名簿」は各楽器の人数が一定であり、そのうちヴァイオリン以外の人数は1755年の「宮廷楽団の名簿」まで維持されていたことが判明した。このことに基づき、1735年から1742年までの「宮廷楽団の名簿」は、ピゼンデルが楽師長を務めた時代の「宮廷楽団の名簿」において基礎となる人数を示していると指摘した。次に、フベルトゥスブルクにおいてオペラを上演するために選ばれた者の名簿から奏者の数を算出することにより、実際のオペラ上演における奏者の数を確認した。その人数を基準として、楽団の年俸表や名簿から導かれた人数が実際の演奏における奏者の数と類似したかを検証した結果、「宮廷楽団の名簿」から導かれた奏者の人数配分は、この楽団が演奏に用いた人数配分に似ていたと考えられた。以上のことに基づき、1735年から1742年までの「宮廷楽団の名簿」から導かれた一定の人数配分は、ピゼンデルの時代のドレスデン宮廷楽団における楽器編成の基準を示していると指摘できた。さらにこの期間の「宮廷楽団の名簿」に基づくと、ピゼンデルの時代におけるドレスデン宮廷楽団の楽器編成は、低音楽器の中でファゴットが多いことを特徴としていたと指摘できた。

この特色は、1733年から1735年にかけて、ファゴット奏者がヴァイオリン奏者と共に増員されたことによって生み出されていた。これらの楽器のうちヴァイオリンが増えたことは、ドレスデン宮廷楽団がヴェネツィアのサン＝マルコ聖堂に倣ったことに起因した可能性を指摘できた。しかし、ファゴットが増員された理由はイタリアの楽団の特徴に基づいて説明できなかった。

第4章では、このようにファゴット奏者がヴァイオリン奏者と共に増員された背景を探るために、ヴォリュミエとピゼンデルの時代のドレスデン宮廷において筆写された器楽のパート譜に基づき、楽曲におけるファゴットや他の楽器の用いられ方を示した。ファゴットは、フランス音楽の演奏において、他の木管楽器を伴奏する楽器として重用されていたと考えられた。その上、ヴァイオリン協奏曲のパート譜は、木管楽器を含む大編成の場合、ファゴットが独奏ヴァイオリンを伴奏する楽器として用いられる傾向を示していた。そのため、ドレスデン宮廷楽団は、ヴァイオリンとファゴットを対とする様式を確立していたと考えられた。この様式に基づくと、ヴァイオリンが増員されることによってこの楽器の音が楽団の中で際立つようになった場合、ヴァイオリンと対になったファゴットの音も際立たせる必要が生じるため、ファゴットも増員されると考えられた。そのため、ファゴットの人数がヴァイオリンと共に増えた原因は、この二つの楽器を組み合わせる様式が、ドレスデン宮廷楽団において生み出されていたことにあった可能性を指摘した。

ドレスデン宮廷楽団の合奏形態とこの楽団の特徴

ここまで確認したように、本論文では、楽師長ピゼンデルの下における合奏に欠かせなかったと考えられた奏者を9名挙げた。彼らは、ヴァイオリン奏者フィックラー、ヴィオラ奏者ライヒェルとアーダム、チェロ奏者ロッシ、コントラバス奏者ケストナー、フルート奏者ビュッフアルダン、オーボエ奏者リヒター、ファゴット奏者ベーメ、リュート奏者ヴァイスである。また、1735年から1742年までの8年間の「宮廷楽団の名簿」からは、237頁の表3-15に示した一定の人数配分が抽出された。その配分は、ピゼンデルが楽師長を務めた時代のドレスデン宮廷楽団における楽器編成の基準を示していると考えられた。

これらのことを総合すると、先の9名が含まれ、かつ名簿から求められた一定の人数配分に基づいた合奏形態は、ピゼンデルが楽師長を務めた時代のドレスデン宮廷楽団の特徴

を成したと指摘できる²⁷⁹。第2章においては、この9名の奏者が全員揃っていた時期が1737年から1744年までであったと指摘できた。この時期とほぼ同じ1735年から1742年までの「宮廷楽団の名簿」には、一定の人数配分が現れていた。よって、1730年代半ばから1740年代半ばまでの期間は、ドイツを代表するオーケストラとして、第一級の作曲家による様々な音楽を演奏したピゼンデル時代のドレスデン宮廷楽団の特徴が、最も明確に現れた時期と位置付けられる。

序において確認したように、ビルンバウムは1738年にバッハを擁護した文章を発表し、その中でドレスデン宮廷楽団の一系乱れぬ合奏を特筆していた。1738年には先の9名が全員揃ってこの楽団に在籍していたため、ビルンバウムは、ピゼンデルやこの9名を中心とした演奏を踏まえて、この楽団の合奏に言及した可能性があるだろう。またクヴァンツは、『フルート奏法試論』の約100頁に及ぶ第17章において、合奏に必要なリピエーノ声部を奏する者について論じた²⁸⁰。そこには、クヴァンツが、ピゼンデルや先の9名との演奏や意見の交換を通して得た知識が現れている可能性を指摘できる。なぜなら、クヴァンツは1729年から1741年までドレスデン宮廷楽団に所属していたからである²⁸¹。

ドレスデン宮廷楽団が演奏に用いたパート譜は、楽長ハッセが作曲したオペラにおいて、奏者に独奏のためのオブリガート声部が与えられることは稀であり、大半のアリアにおいて、全ての奏者たちは同じリピエーノ声部を演奏していたことを示している²⁸²。この楽団

²⁷⁹ この9名の名前は、フベルトゥスブルクにおいてオペラ上演に携わった者を示した1741年の「明細」と1742年の「記録」に現れる。さらに、これらの「明細」や「記録」から求められた人数配分と、同じ年の「宮廷楽団の名簿」から算出された人数配分は互いに似ていた。これらのことは、この合奏形態が実際の演奏に採用されていたことを示唆している。

²⁸⁰ Johann Joachim Quantz, *Versuch einer Anweisung, die Flöte traversière zu spielen*, (Berlin 1752; reprint ed. Wiesbaden: Breitkopf & Härtel, 1988), pp. 175-274.

²⁸¹ フベルトゥスブルクへの出張からは、クヴァンツがこれらの音楽家と直接話し合ったことを垣間見ることができよう。なぜなら、第2章において指摘したように、クヴァンツは1736年にチェロ奏者ロッシやフルート奏者ビュッフアルダンと共にピゼンデルの馬車に同乗し、1739年にはヴァイオリン奏者フィクラーと共にピゼンデルと同じ宿泊場所を利用したからである。

²⁸² Wolfgang Hochstein, “Die Dresdner Kapelle unter Johann Adolf Hasse,” in *Der Klang der Sächsischen Staatskapelle Dresden: Kontinuität und Wandelbarkeit eines*

において筆写された協奏曲のパート譜においても、独奏者以外には独立していない同じ声部が与えられており、このことは教会音楽においても同様である。専ら独奏者のみに焦点を当てた従来の研究の視点からは、これらの声部がどのように演奏されていたかを把握することは不可能であった。本論文の研究結果は、現存する膨大な数のパート譜に見られる、こうした合奏部分の演奏の実態を解明することに貢献するだろう。

ドレスデン宮廷楽団が 1750 年代半ばに隆盛を極めたという歴史観は、繰り返し提示されてきた²⁸³。この楽団が 1753 年や 1755 年にそれぞれ初演したオペラ《スレイマン》や《アエティウス》が大変な好評を博したことに基づくと、このことは妥当であるといえよう。しかしピゼンデルは、1740 年代半ば以降、奏者や楽団の現状に不満を述べるようになっていたことが判明していた。さらに、合奏に不可欠と考えられた 9 名のうち半数近くは、1744 年から 1755 年にかけて、死亡または退職していた。これらのことに基づくと、1750 年代のドレスデン宮廷楽団は、すでにピゼンデルが理想とする楽団ではなくなっていた可能性を指摘できよう。

Phänomens, edited by Hans-Günter Ottenberg and Eberhard Steindorf (Hildesheim: Georg Olms, 2001), pp. 93-94; Roland Dieter Schmidt-Hensel, "La musica è del Signor Hasse detto il Sassone": Johann Adolf Hasses "Opere serie" der Jahre 1730 bis 1745: Quellen, Fassungen, Aufführungen (Göttingen: V & R Unipress, 2009), vol 1, pp. 149-151.

²⁸³ Ortrun Landmann, "Die Dresdener Hofkapelle zur Zeit Johann Sebastian Bachs," in *Concerto: Das Magazin für Alte Musik* 51 (March 1990): 7-10; Wolfgang Hochstein, "Die Dresdner Kapelle unter Johann Adolf Hasse," in *Der Klang der Sächsischen Staatskapelle Dresden: Kontinuität und Wandelbarkeit eines Phänomens*, edited by Hans-Günter Ottenberg and Eberhard Steindorf (Hildesheim: Georg Olms, 2001), pp. 81-88; Janice B. Stockigt, "The Court of Saxony-Dresden," in *Music at German Courts, 1715-1760: Changing Artistic Priorities*, edited by Samantha Owens et al. (Woodbridge: Boydell, 2011), pp. 17-18; Panja Mücke, *Johann Adolf Hasses Dresdner Opern im Kontext der Hofkultur* (Laaber: Laaber, 2003), pp. 39-42.

18 世紀後半のドイツの宮廷楽団へ

最後に、ドレスデン宮廷楽団に関する研究の今後の展望を記して本論文を閉じる。オーウェンスとレウルは、ドレスデン宮廷楽団、ベルリン及びマンハイムの宮廷楽団の三つを、18 世紀ドイツにおける規模の大きい宮廷楽団に分類した²⁸⁴。

1740 年から 1786 年までプロイセン王を務めたフリードリヒ 2 世 Friedrich II. (1712-1786) は、1740 年代にドレスデン宮廷楽団を手本として、ベルリンにおいて宮廷楽団を組織した²⁸⁵。「プロイセン王宮廷の収入と支出の計算書 Rechnung über Einnahme und Ausgabe bey der Königlichen Preußischen Capelle」には、「宮廷楽団員に対する支出 Ausgabe an Capell=Bediente」の項目が見られ、1765 年から 1769 年にかけて、この項目に見られる奏者の人数配分は表 5-1 のようになっている²⁸⁶。この表を 237 頁の表 3-15 と比較すると、人数配分は明らかに類似している。

表 5-1 1765 年から 1769 年の「宮廷楽団員に対する支出」における人数配分

Vl	Vla	Vlc	Cb	Fl	Ob	Fg	Hr	Lut
12	4	5	2	5	3	4	2	2

²⁸⁴ Samantha Owens and Barbara M. Reul, “Das gantze Corpus derer musicirenden Personen’: An Introduction to German Hofkapellen,” in *Music at German Courts, 1715–1760: Changing Artistic Priorities*, edited by Samantha Owens et al. (Woodbridge: Boydell, 2011), p. 13.

²⁸⁵ Panja Mücke, *Johann Adolf Hasses Dresdner Opern im Kontext der Hofkultur* (Laaber: Laaber, 2003), p. 40; see also Mary A. Oleskiewicz, “The Court of Brandenburg-Prussia,” in *Music at German Courts, 1715–1760: Changing Artistic Priorities*, edited by B. M. Reul, J. B. Stockigt and S. Owens (Woodbridge: Boydell, 2011), pp. 79-130; Christina Siegfried, “Ich bin Komponist: Friedrich II. von Preußen in seinen musikalisch-schöpferischen Kronprinzenjahren in Ruppın und Rheinsberg,” in *Die Rheinsberger Hofkapelle von Friedrich II.: Musiker auf dem Weg zum Berliner ‘Capell-Bedienten’*, edited by Ulrike Liedtke (Rheinsberg: Musikakademie Rheinsberg, 2005), pp. 51-86.

²⁸⁶ D-Bga, I. HA Rep 36 Nr. 2470, pp. 3-11; D-Bga, I. HA, Rep. 36, Nr. 2471, pp. 3-11; D-Bga, I. HA, Rep. 36, Nr. 2472, pp. 3-9; D-Bga, I. HA, Rep. 36, Nr. 2473, pp. 3-11; D-Bga, I. HA, Rep. 36, Nr. 2474, pp. 3-10.

また、プファルツ選帝侯カール・テオドール Karl Theodor (1724-1799、プファルツ選帝侯在位 1743-1777) の下に組織されたマンハイムの宮廷楽団が大きな名声を得ていたことは、当時の文献が示すところである²⁸⁷。『プファルツ選帝侯国及び宮廷年鑑 Chur-Pfältzischer Hoff- und Staats-Calender』に記載された宮廷楽団の名簿の中から、「候補者 Accessisten」などを除き、正規の弦楽器奏者のみの数を算出した場合、1773年から1777年までは、表 5-2 のようになる²⁸⁸。この人数配分は、237 頁の表 3-15 に示したものにほぼ等しい。

表 5-2 1773 年から 1777 年の『プファルツ選帝侯国及び宮廷年鑑』における弦楽器奏者の人数配分（正規の奏者のみ）

VI	Vla	Vlc	Cb
12/14	4	4	3

ドレスデン宮廷楽団の楽師長を務めたピゼンデルは、1755 年に亡くなった。翌 1756 年には七年戦争が勃発したため、この楽団に所属した音楽家の多くは、ドレスデンを去った²⁸⁹。よって、ピゼンデルが楽師長を務めた時代のドレスデン宮廷楽団は、1750 年代半

²⁸⁷ Bärbel Pelker, “The Palatine Court in Mannheim,” in *Music at German Courts, 1715–1760: Changing Artistic Priorities*, edited by Samantha Owens et al. (Woodbridge: Boydell, 2011), pp. 131-162; Bärbel Pelker, “Zur Struktur des Musiklebens am Hof Carl Theodors in Mannheim,” in *Mozart und Mannheim*, edited by Bärbel Pelker et al. (Berlin: Peter Lang, 1994), pp. 29-40; Eugene Wolf, “On the Composition of the Mannheim Orchestra, ca. 1740-1778,” in *Basler Jahrbuch für historische Musikpraxis. XVII (1993): Orchesterpraxis in klassischer Zeit*, edited by Dagmar Hoffmann-Axthelm and Peter Reidemeister (Winterthur: Amadeus, 1993), pp. 113-138.

²⁸⁸ *Kurpfälzischer Hof- und Staats- Kalender* (Mannheim, Reiss-Engelhorn-Museen, Mh Zs 95); *Almanach electoral Palatin* (Mannheim, Reiss-Engelhorn-Museen, Mh Zs 96).

²⁸⁹ Janice B. Stockigt, “The Court of Saxony-Dresden,” in *Music at German Courts, 1715–1760: Changing Artistic Priorities*, edited by Samantha Owens et al. (Woodbridge: Boydell, 2011), p. 37.

ばに終焉を迎えたといえよう。しかし、ドレスデン宮廷楽団の名簿と、18世紀後半に台頭したベルリンやマンハイムの宮廷楽団の僅か数点の資料を比較した場合においてさえ、人数配分には一致する部分が見られる。

ベルリンの宮廷楽団には、ドレスデンにおいて音楽を学んだり、当地の宮廷に勤めたりした者が多数在籍していた。1740年に、楽長と楽師長にそれぞれ就任したカール・ハイน์リッヒ・グラウン Carl Heinrich Graun (1703/04-1759) と彼の兄ヨーハン・ゴットリーブ・グラウン Johann Gottlieb Graun (1702/03-1771) は、ドレスデンの十字架教会の合唱隊員を務めていた²⁹⁰。弟はドレスデン宮廷の当時の楽長シュミットに作曲を師事し、兄はピゼンデルの下でヴァイオリンを学んだ²⁹¹。1740年からヴァイオリン奏者を務めたフランツ・ベンダ Franz Benda (1709-1786) とゲオルク・ツァルト Georg Zarth (1708-1778) は、1732年のドレスデンの『宮廷年鑑』に、「ポーランド楽団」の奏者として記載されている²⁹²。ドレスデン宮廷楽団のフルート奏者クヴァンツとチェロ奏者ツィーカは、それぞれ1741年12月と1764年にベルリンの宮廷楽団に移籍した²⁹³。

²⁹⁰ Daniel Hertz, *Music in European Capitals: The Galant Style 1720-1780* (New York: Norton, 2003), p. 360.

²⁹¹ Christoph Henzel, "Graun, Johann Gottlieb," in *MGG2*, Personenteil 7, col. 1511; Georg Philipp Telemann, *Briefwechsel: Sämtliche erreichbare Briefe von und an Telemann*, edited by Hans Grosse and Hans Rudolf Jung (Leipzig: Deutscher Verlag für Musik, 1972), p. 354; Carl Mennicke, *Hasse und Gebrüder Graun als Symphoniker* (Leipzig, 1906), p. 449; Christoph Henzel, "Graun, Carl Heinrich," in *MGG2*, Personenteil 7, col., 1507; see also Christina Siegfried, "Die Gebrüder Graun," in *Die Rheinsberger Hofkapelle von Friedrich II.: Musiker auf dem Weg zum Berliner 'Capell-Bedienten'*, edited by Ulrike Liedtke (Rheinsberg: Musikakademie Rheinsberg, 2005), pp. 147-180.

²⁹² *Königlich-Polnische und Churfürstlich-Sächsische Hoff- und Staats-Calender* (Leipzig, 1732; D-Dl, Hist.Sax.I.0179), pages without number; see also Anke Völker, "Franz Benda: Lebensstationen eines königlichen Violinisten," in *Die Rheinsberger Hofkapelle von Friedrich II.: Musiker auf dem Weg zum Berliner 'Capell-Bedienten'*, edited by Ulrike Liedtke (Rheinsberg: Musikakademie Rheinsberg, 2005), pp. 107-134; Hans D. Hoch, "Georg Czarth: Geiger und Komponist aus Böhmen," *ibid.*, pp. 135-146.

²⁹³ Ulrike Liedtke, "Johann Joachim Quantz und Friedrich II.: Eine musikalische Verbindung," *ibid.*, p. 65; Eduard Mutschelknauss, "Zyka, Zycka, Zicka, Zikka," in *MGG2*, Personenteil 17, cols. 1607-1608.

またペルカーは、マンハイム宮廷楽団の基礎を築いた音楽家として6名を挙げ、彼らの中には1741年に楽師長に就任したアレッサンドロ・トエスキ Alessandro Toeschi (ca. 1700-1758) と、1750年に器楽監督となったヨーハン・シュターミツ Johann Stamitz (1717-1757) が含まれている²⁹⁴。トエスキは変ホ長調協奏曲の総譜を記し、ピゼンデルに対する謝辞と献呈の辞を付した²⁹⁵。このことから、彼らは知り合いであったと考えられよう。シュターミツはボヘミア出身であり、この地の音楽家は、18世紀のドレスデン宮廷楽団に少なくとも22名在籍していた²⁹⁶。そのためシュターミツも、ドレスデンの音楽家と親交があった可能性を指摘できよう。さらにリュート奏者ヨハン・ヤーコブ・ヴァイス Johann Jacob Weiss (ca. 1662-1754) は、1708年頃からプファルツ選帝侯に仕え、亡くなるまでマンハイムに留まった²⁹⁷。彼の息子ジルビウス・レーオポルト・ヴァイスは、本論文において確認したように、ドレスデン宮廷楽団に所属していた。

従って、ピゼンデルの時代のドレスデン宮廷楽団において確立された奏者の人数配分は、これらの音楽家の繋がりを通して、18世紀後半のドイツの宮廷楽団へ脈々と受け継がれていった可能性があるだろう。今後は、ベルリンやマンハイムの宮廷楽団が、ドレスデン宮廷楽団の伝統に基づきつつ、どのように独自の特徴を形成していったかを検証することが期待されよう。

²⁹⁴ Bärbel Pelker, "Mannheimer Schule," in *MGG2*, Sachteil 5, col. 1655; see also Roland Würtz, *Verzeichnis und Ikonographie der kurpfälzischen Hofmusiker zu Mannheim nebst darstellendem Theaterpersonal 1723-1803* (Wilhelmshaven: Heinrichshofen, 1975).

²⁹⁵ Alessandro Toeschi, *Concertos in Es-Dur* (D-D1, Mus.2817-O-2), accessed 1 September 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212003227>; Kai Köpp, *Johann Georg Pisendel (1687-1755) und die Anfänge der neuzeitlichen Orchesterleitung* (Tutzing: H. Schneider, 2005), p. 408; Simon McVeigh and Jehoash Hirshberg, *The Italian Solo Concerto 1700-1760: Rhetorical Strategies and Style History* (Woodbridge: Boydell Press, 2004), p. 44.

²⁹⁶ Zdeňka Pilková, "Böhmische Musiker am Dresdner Hof zur Zeit Zelenkas," in *Zelenka-Studien. I*, edited by Thomas Kohlhase and Hubert Unverricht (Kassel: Bärenreiter, 1993), pp. 55-64; see also Klaus-Peter Koch, "Böhmisch-sächsische Musikbeziehungen im 18. und 19. Jahrhundert," in *Musikkulturelle Wechselbeziehungen zwischen Böhmen und Sachsen*, edited by Jörn Peter Hiekel (Saarbrücken: Pfau-Verlag, 2007), pp. 29-31.

²⁹⁷ Frank Legl, "Weiss, Johann Jacob," in *MGG2*, Personenteil 17, cols. 720-721.

参考資料表

1. 一次資料

1-1. 手書き資料

- D-Bga, I. HA, Rep. 36 Nr. 2470 (Rechnung über Einnahme und Außgabe bey der Königlichen Preuß: Capelle imgleichen Tántzer und Commödieanten Vom 1. Junio).
- D-Bga, I. HA, Rep. 36, Nr. 2471 (Rechnung über Einnahme und Außgabe bey der Königlichen Preußischen Capelle imgleichen Tántzer und Commodianten Vom 1ten Junio 1766 Bis ultimo May 1767).
- D-Bga, I. HA, Rep. 36, Nr. 2472 (Rechnung über Einnahme und Ausgabe bey der Königl: Preuß: Capelle imgleichen Tántzer und Commeödianten vom 1ten Juny 1767. Bis Ultimo May 1768).
- D-Bga, I. HA, Rep. 36, Nr. 2473 (Rechnung über Einnahme und Ausgabe bey der Königlichen Preußischen Capelle imgleichen Tántzer und Commodianten Vom 1ten Junio 1768 Bis Ultimo May 1769).
- D-Bga, I. HA, Rep. 36, Nr. 2474 (Rechnung über Einnahme und Ausgabe bey der Kiönigl: Preußischen Capelle imgleichen Tántzer und Tántzerinnen pro Trinitatis [17]69 1770).
- D-Dla, Geheimer Rat, Gemeimes Archiv, Loc. 10291/17 (Hertzog Friedrich August I zu Sachsen Hochfürst: Durch: Reise in fremde Lande. Ao 1686.-95).
- D-Dla, 10006 Oberhofmarschallamt G, Nr. 18 (Divertissements in Moritzburg gehalten worden Mense Octobr: 1719).
- D-Dla, 10006 Oberhofmarschallamt I, Nr. 49a (Königl: Reise von Dreßden nach Hubertusburg 1736. Vol: I).
- D-Dla, 10006 Oberhofmarschallamt I, Nr. 53a, (Herbstreise beider Königlicher Majestäten und des Kurprinzen sowie des Prinzen Xaver und der Prinzessinnen Amalia und Maria Anna nach Hubertusburg 1737).
- D-Dla, 10006 Oberhofmarschallamt I, Nr. 66b (Hr: Königl: Majt: von Pohlen und Churfürstl: Durch: Zu Sachßen Herrns Friderici Augusti III. und Dero Frau gemahlin Kö[ni]gl: Majt:Herbst=Reise, von Dreßden nach Hubertusburg 1739. Vol: II).
- D-Dla, 10006 Oberhofmarschallamt I, Nr. 83a (Königl. Herbst=Reise von Dreßden nach Hubertsburg Anno 1741).
- D-Dla, 10006 Oberhofmarschallamt I, Nr. 91a (Königl. Herbst: Reise von Dreßden nach Hubertusburg. 1742).
- D-Dla, 10006 Oberhofmarschallamt I, Nr. 97 (Herbst Jagdt=Reise und Jagdt=Lager zur Hubertusburg 1743. von 30. Aug. bis 28. Nov: [Vol.] 1).
- D-Dla, 10006 Oberhofmarschallamt I, Nr. 118 (Königl: Reise von Dreßden nach Hubertsburg und Hof Lager daselbst, Mens. Aug. Sept. Oct. et Nov. 1747. Vol. 1).
- D-Dla, 10006 Oberhofmarschallamt I, Nr. 124 (Königl: Reise von Dreßden nach Hubertsburg und Hof=Lager daselbst Mens. August: Sept: Oct: et Novembr 1749).
- D-Dla, 10006 Oberhofmarschallamt I, Nr. 131 (Königl: Reise von Dreßden nach Hubertsburg und Hof=Lager daselbst Mens. Aug. Sept. Octobr. Nov. 1751).
- D-Dla, 10006 Oberhofmarschallamt I, Nr. 142 (Königl: Herbst=Reise nach Hubertsburg. 1753. [Vol.] 1).
- D-Dla, 10006 Oberhofmarschallamt I, Nr. 150 (Königl: Herbst=Reise nach Hubertsburg 1755. Vol. 1).
- D-Dla, 10006 Oberhofmarschallamt, K II, Nr. 4 (Hof=Bücher de annis 1680. 1690. 1694. et 1712).

- D-Dla, 10006 Oberhofmarschallamt, K II, Nr. 5 (Königl: Poln: und Churfürst Sächß: Hof=Buch von 1717 biß 1720).
- D-Dla, 10006 Oberhofmarschallamt, K II, Nr. 6 (Königl. pohlnisches und kurfürstl. Sächßisches Hoff-Buch von 1721 usg 1725).
- D-Dla, 10026 Geheimes Kabinett, Loc. 383/2 (Acta Die Engagements einiger zum Theater gehöriger Personen).
- D-Dla, 10026 Geheimes Kabinett, Loc. 383/4 (Die Bande französischer Comoedianten und Orchestra).
- D-Dla, 10026 Geheimes Kabinett, Loc. 383/5 (Franzöische Comoedianten und Orchestra).
- D-Dla, 10026 Geheimes Kabinett, Loc. 907/3 (Die Operisten, Musicos, Sänger und andere zur Opera gehörige Personen betr: ao 1717, 18, 19, [17]20).
- D-Dla, 10026 Geheimes Kabinett, Loc. 907/4 (Die Italiänischen Sänger und Sängerinnen, das Orchestre, die Tänzer und Tänzerinnen, auch andere zur Opera gehörige Personen betr. Ao 1733. 1739).
- D-Dla, 10026 Geheimes Kabinett, Loc. 907/5 (Die italiänischen Sänger und Sängerinnen, das Orchestre, die Tänzer und Tänzerinnen, auch andre zu der Ope[r] gehörige Personen, betr. ao 1740).
- D-Dla, 10026 Geheimes Kabinett, Loc. 910/1 (Das Churfurst: Orchestre und deßen Unterhaltung).
- D-Dla, 10077 Kollektion Schmid Amt Dresden Vol. XIb Nr. 306 (Verzeichniß des Gehalt der Königlichen Sänger, Tänzer, Komödianten und Musicker, im Jahr 1720).

1-2. 出版物

- Almanach electoral Palatin Pour l' Année.* Mannheim: Impr. Electorale, 1750-1777 (Mannheim, Reiss-Engelhorn-Museen, Mh Zs 96).
- Churfürstlicher Sächsischer Hof=und Staats=Calender.* Leipzig: Weidmann und Reich, 1765-1788 (D-Dl, Hist.Sax.I.0616).
- Königlich-Polnischer und Churfürstlich-Sächsischer Hoff- und Staats-Calender.* Leipzig, 1728-1757 (D-Dl, Hist.Sax.I.0179).
- Kurpfälzischer Hof= und Staats= Kalender.* Mannheim: Kurfürstl. Hof-Buchdr., 1748-1778 (Mannheim, Reiss-Engelhorn-Museen, Mh Zs 95).
- Neu-eröffnete historische Correspondenz von alten und neuen Curiosis Saxonis.* Dresden: Mohrenthal, 1745-1761 (D-Dl, Eph.hist.0362.a).
- Bach, Carl Philipp Emanuel. "Biographische Mitteilungen über Johann Sebastian Bach." (Hamburg, 1775) *In Dokumente zum Nachwirken Johann Sebastian Bachs*, pp. 288-290. Edited by Hans-Joachim Schulze. Kassel: Bärenreiter, 1972.
- Birnbaum, Johann Abraham. "Verteidigung Bachs gegen Scheibes Angriffe." (Leipzig, 1738) *In Fremdschriftliche und gedruckte Dokumente zur Lebensgeschichte Johann Sebastian Bachs 1680-1750*, pp. 296-306. Edited by Bach-Archiv Leipzig. Leipzig: Deutscher Verlag für Musik, 1969.
- Hiller, Johann Adam. *Lebensbeschreibungen berühmter Musikgelehrten und Tonkünstler neuerer Zeit.* (Leipzig, 1784) Reprint ed. Leipzig: Edition Peters, 1975.
- Hiller, Johann Adam ed. *Wöchentliche Nachrichten und Anmerkungen die Musik betreffend*, 4 vols. (Leipzig, 1766-1770) Reprint ed. Hildesheim: Georg Olms, 1970.
- Quantz, Johann Joachim. "Hrn. Johann Joachim Quantzens Lebenslauf, von ihm selbst entworfen," in Friedrich Wilhelm Marpurg, *Historisch-kritische Beyträge zur*

- Aufnahme der Musik.* (Berlin, 1755) Reprint ed. Hildesheim: Georg Olms, 1970, vol. 1, pp. 197-266.
- Quantz, Johann Joachim. *Versuch einer Anweisung, die Flöte traversière zu spielen.* (Berlin, 1752) Reprint ed. Wiesbaden: Breitkopf & Härtel, 1988. [クヴァンツ、ヨーハン・ヨアヒム『フルート奏法』(改訂版) 荒川恒子訳、東京: 全音楽譜出版社、2017年。]
- Rousseau, Jean-Jacques. *Dictionnaire de musique.* (Paris, 1768) Reprint ed. Hildesheim: Georg Olms, 1969.
- Telemann, Georg Philipp. *Briefwechsel: Sämtliche erreichbare Briefe von und an Telemann.* Edited by Hans Grosse. Leipzig: Dt. Verl. für Musik, 1972.
- Tosi, Pier Francesco. *Opinioni de' cantori antichi, E Moderni O Sieno osservazioni sopra il canto Figurato.* Bologna: dalla Volpe, 1723.
- Tosi, Pier Francesco. *Anleitung zur Singkunst.* (Originally published as: *Opinioni de' cantori antichi, E Moderni O Sieno osservazioni sopra il canto Figurato*, Bologna, 1723) Translated by Johann Friedrich Agricola. Berlin: George Ludewig Winter, 1757. [トージ、ピエール・フランチェスコ『歌唱芸術の手引き』東川清一訳、東京: 春秋社、2005。]
- Trömer, Johann Christian. *Jean Chretien Toucement des Deutsch François Schrifften: mit viel schön Kuffer Stick Kanß Complett mit den zweiten Theil vermehrt.* Nürnberg: 1772.
- Wilhelmine, Friederike Sophie and Friedrich II. *Friedrich der Große und Wilhelmine von Baireuth: Briefe der Königezeit 1740-1758*, 2 vols. Edited by G. B. Volz. Leipzig: Koehler, 1926.

1-3. 手稿譜

- Hasse, Johann Adolf. *Didone abbandonata* (D-Dl, Mus.2477-F-35a), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=270000687>.
- Hasse, Johann Adolf. *Le Virtù appiè della croce* (D-Dl, Mus.2477-D-12a), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=270000592>.
- Hasse, Johann Adolf. *Numa pompilio* (D-Dl, Mus.2477-F-28a), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=270000672>.
- Heinichen, Johann David. *Serenata di Moritzburg* (D-Dl, Mus.2398-L-3), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212006383>.
- Heinichen, Johann David. *Serenata di Moritzburg* (D-Dl, Mus.2398-L-3a), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212006384>.
- Lully, Jean-Baptiste. *Acis et Galatée* (D-Dl, Mus.1827-F-31), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212001130>.
- Lully, Jean-Baptiste. *Amadis* (D-Dl, Mus.1827-F-36), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212001152>.
- Lully, Jean-Baptiste. *Armide* (D-Dl, Mus.1827-F-34), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212001180>.
- Lully, Jean-Baptiste. *Atys* (D-Dl, Mus.1827-F-6), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212001100>.
- Lully, Jean-Baptiste. *Cadmus et Hermione* (D-Dl, Mus.1827-F-2), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212001102>.
- Lully, Jean-Baptiste. *Le temple de la paix* (D-Dl, Mus.1827-F-21), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212001117>.
- Lully, Jean-Baptiste. *Le Triomphe de l'amour* (D-Dl, Mus.1827-F-13), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212001099>.
- Lully, Jean-Baptiste. *Roland* (D-Dl, Mus.1827-F-30), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212001114>.

- Lully, Jean-Baptiste. *Persée* (D-Dl, Mus.1827-F-15), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212001104>.
- Lully, Jean-Baptiste. *Persée* (D-Dl, Mus.1827-F-15a), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212001115>.
- Lully, Jean-Baptiste. *Phaëton* (D-Dl, Mus.1827-F-17), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212001103>.
- Lully, Jean-Baptiste. *Suites* (D-Dl, Mus.1827-F-11), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212001116>.
- Lully, Jean-Baptiste. *Suites* (D-Dl, Mus.1827-F-33), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212001162>.
- Lully, Jean-Baptiste. *Suites* (D-Dl, Mus.1827-F-35), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212001129>.
- Lully, Jean-Baptiste. *Suites* (D-Dl, Mus.1827-F-37), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212001153>.
- Lully, Jean-Baptiste. *Thésée* (D-Dl, Mus.1827-F-8), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212001101>.
- Matteis, Nicola. *Concertos in B-Dur* (D-Dl, Mus.2045-O-1), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212001396>.
- Pisendel, Johann Georg. *Concertos in B-Dur* (D-Dl, Mus.2421-O-12a), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212003104>.
- Pisendel, Johann Georg. *Concertos in D-Dur* (D-Dl, Mus.2421-O-5a), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212003116>.
- Pisendel, Johann Georg. *Concertos in D-Dur* (D-Dl, Mus.2421-O-6a), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212003106>.
- Pisendel, Johann Georg. *Concertos in D-Dur* (D-Dl, Mus.2421-O-6b), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212003105>.
- Pisendel, Johann Georg. *Concertos in Es-Dur* (D-Dl, Mus.2421-O-7a), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212003110>.
- Pisendel, Johann Georg. *Concertos in Es-Dur* (D-Dl, Mus.2421-O-7b), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212002908>.
- Pisendel, Johann Georg. *Concertos in Es-Dur* (D-Dl, Mus.2421-O-9), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212002911>.
- Pisendel, Johann Georg. *Concertos in F-Dur* (D-Dl, Mus.2421-O-13a), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212003111>.
- Pisendel, Johann Georg. *Concertos in F-Dur* (D-Dl, Mus.2421-O-13b), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212002912>.
- Pisendel, Johann Georg. *Concertos in G-Dur* (D-Dl, Mus.2421-O-1a), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212003112>.
- Pisendel, Johann Georg. *Concertos in G-Dur* (D-Dl, Mus.2421-O-1b), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212003113>.
- Pisendel, Johann Georg. *Concertos in G-Dur* (D-Dl, Mus.2421-O-3a), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212003127>.
- Pisendel, Johann Georg. *Concertos in e-Moll* (D-Dl, Mus.2-O-1,41a), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212003238>.
- Pisendel, Johann Georg. *Concertos in e-Moll* (D-Dl, Mus.2-O-1,41b), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212003239>.
- Pisendel, Johann Georg. *Concertos in g-Moll* (D-Dl, Mus.2421-O-10), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212003117>.
- Toeschi, Alessandro. *Concertos in Es-Dur* (D-Dl, Mus.2817-O-2), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212003227>.
- Vivaldi, Antonio. *Concertos in C-Dur* (D-Dl, Mus.2389-O-49), accessed September 1, 2017, <https://opac.rism.info/search?id=212000210>.

2. 二次資料

2-1. 出版物

- Angerhöfer, Günter and Walther Krüger. "Fagott." In *MGG2*, Sachteil 3, cols. 270-306.
- Bardet, Bernard. "Violons, Petits." In *Dictionnaire de la musique en France aux XVIIe et XVIIIe siècles*, p. 724. Edited by M. Benoit. Paris: Fayard, 1992.
- Biesold, Sebastian. "Experiment Musikerprotektion: Die Geschwister Maria Santina und Francesco Maria Cattaneo am sächsisch-polnischen Hof im 18. Jahrhundert." In *Venedig-Dresden: Begegnung zweier Kulturstädte*, pp. 154-175. Edited by A. Henning und B. Marx. Leipzig: Seemann Henschel, 2010.
- Czok, Karl. *August der Starke und seine Zeit: Kurfürst von Sachsen, König in Polen*. München: Piper, 2012.
- Drescher, Thomas and Heinz von Loesch. "Violoncello." In *MGG2*, Sachteil 9, cols. 1686-1703.
- Fechner, Manfred. *Studien zur Dresdner Überlieferung von Instrumentalkonzerten deutscher Komponisten des 18. Jahrhunderts: Die Dresdner Konzert-Manuskripte von Georg Philipp Telemann, Johann David Heinichen, Johann Georg Pisendel, Johann Friedrich Fasch, Gottfried Heinrich Stölzel, Johann Joachim Quantz und Johann Gottlieb Graun*. Laaber: Laaber, 1999.
- Fürstenau, Moritz. *Beiträge zur Geschichte der königlich-sächsischen musikalischen Kapelle: Großentheils aus archivalischen Quellen*. Dresden: Meser, 1849.
- Fürstenau, Moritz. *Zur Geschichte der Musik und des Theaters am Hofe zu Dresden*. (Dresden, 1861-1862, in 2 vols.) Reprint ed. Leipzig: Peters, 1971 in 1 vol.
- Hammitzsch, Martin. *Der moderne Theaterbau: Der höfische Theaterbau, Der Anfang der modernen Theaterbaukunst, ihre Entwicklung und Betätigung zur Zeit der Renaissance des Barock und des Rokoko*. Berlin: Wasmuth, 1906.
- Hansell, Sven and David J. Nichols. "Hasse, Johann Adolf." In *NG2*, vol. 11, pp. 96-117.
- Härtwig, Dieter. "Volumier, Jean Baptiste." In *NG 2*, vol. 26, pp. 890-891.
- Haynes, Bruce. *The Eloquent Oboe: A History of the Hautboy 1640-1760*. Oxford: Oxford University Press, 2001.
- Haynes, Bruce. *A History of Performing Pitch: The Story of "A"*. Lanham: Scarecrow Press, 2002.
- Heartz, Daniel. "Hasse at the Crossroads: Artaserse (Venice, 1730), Dresden, and Vienna." In *The Opera Quarterly* 16/1 (Winter, 2000): 24-33.
- Heartz, Daniel. *Music in European Capitals: The Galant Style 1720-1780*. New York: Norton, 2003.
- Helen, Watanabe-O'Kelly. "Religion and the Consort: Two Electresses of Saxony and Queens of Poland (1697-1757)." In *Queenship in Europe 1660-1815: The Role of the Consort*, pp. 252-275. Edited by C. C. Orr. Cambridge: Cambridge University Press, 2004.
- Heller, Karl. "Die Bedeutung Johann Georg Pisendels für die deutsche Vivaldi-Rezeption." In *Gesellschaft für Musikforschung: Bericht über den Internationalen Musikwissenschaftlichen Kongress Leipzig 1966*, pp. 247-251. Edited by C. Dahlhaus. Kassel: Bärenreiter, 1970.
- Heller, Karl. *Die deutsche Überlieferung der Instrumentalwerke Vivaldis*. Leipzig: VEB Deutscher Verlag für Musik, 1971.
- Heller, Karl. "Zwei 'Vivaldi-Orchester' in Dresden und Venedig." In *Musikzentren in der ersten Hälfte des 18. Jahrhunderts und ihre Ausstrahlung: Wissenschaftliche Arbeitstagung (6.) Blankenburg/Harz, 23. bis 25. Juni 1978*, pp. 56-63. Edited by E.-F. Thom. Magdeburg: Rat des Bezirkes, 1979.
- Henzel, Christoph. "Graun, Carl Heinrich." In *MGG2*, Personenteil 7, cols., 1506-1511.

- Henzel, Christoph. "Graun, Johann Gottlieb." In *MGG2*, Personenteil 7, cols. 1511-1512.
- Hoch, Hans D. "Georg Czarth: Geiger und Komponist aus Böhmen." In *Die Rheinsberger Hofkapelle von Friedrich II.: Musiker auf dem Weg zum Berliner 'Capell-Bedienten'*, pp. 135-146. Edited by U. Liedtke. Rheinsberg: Musikakademie Rheinsberg, 2005.
- Hochstein, Wolfgang. "Die Dresdner Kapelle unter Johann Adolf Hasse." In *Der Klang der Sächsischen Staatskapelle Dresden: Kontinuität und Wandelbarkeit eines Phänomens*, pp. 81-94. Edited by H.-G. Ottenberg and E. Steindorf. Hildesheim: Georg Olms, 2001.
- Hochstein, Wolfgang. "Hasses Beiträge zur Hofkirchenmusik in Dresden." In *Hasse-Studien. IV (1998)*, pp. 51-87. Edited by W. Hochstein and R. Wiesend. Stuttgart: Carus-Verlag, 1999.
- Hochstein, Wolfgang. "Hasses Oratorien und ihre Fassungen." In *Musik zwischen Spätbarock und Wiener Klassik: Festschrift für Gisela Vogel-Beckmann zum 65. Geburtstag*, pp. 69-98. Edited by H.-W. Heister and W. Hochstein. Berlin: Weidler, 2005.
- Horn, Wolfgang. *Die Dresdner Hofkirchenmusik, 1720-1745: Studien zu ihren Voraussetzungen und ihrem Repertoire*. Stuttgart: Carus-Verlag, 1987.
- Jung, Hans Rudolf. *Johann Georg Pisendel: 1687-1755: Leben und Werk: Ein Beitrag zur Geschichte der Violinmusik der Bach-Zeit*. Ph. D. diss. Jena, 1956.
- Koch, Klaus-Peter. "Böhmisch-sächsische Musikbeziehungen im 18. und 19. Jahrhundert." In *Musikkulturelle Wechselbeziehungen zwischen Böhmen und Sachsen*, pp. 29-40. Edited by J. P. Hiekel. Saarbrücken: Pfau-Verlag, 2007.
- Koch, Michael. *Die Oratorien Johann Adolf Hasses: Überlieferung und Struktur*. Pfaffenweiler: Centaurus, 1989.
- Köpp, Kai. *Handbuch historische Orchesterpraxis: Barock, Klassik, Romantik*. Kassel: Bärenreiter, 2009.
- Köpp, Kai. *Johann Georg Pisendel (1687-1755) und die Anfänge der neuzeitlichen Orchesterleitung*. Tutzing: H. Schneider, 2005.
- Köpp, Kai. "Vom Ensemble zum Soloinstrument: Das Violoncello." In *Bachs Orchester und Kammermusik: Das Handbuch*, pp. 253-263. Edited by R. Siegbert. Laaber: Laaber, 2013.
- Landmann, Ortrun. "Die Dresdener Hofkapelle zur Zeit Johann Sebastian Bachs." In *Concerto: Das Magazin für Alte Musik*. 51 (March 1990): 7-16.
- Landmann, Ortrun. "Französische Elemente in der Musikpraxis des 18. Jahrhunderts am Dresdener Hof." In *Der Einfluss der französischen Musik auf die Komponisten der ersten Hälfte des 18. Jahrhunderts: Konferenzbericht der 9. Wissenschaftlichen Arbeitstagung Blankenburg/Harz, 26. Juni bis 28 Juni 1981*, pp. 48-56. Magdeburg: Rat der Stadt, 1981.
- Landmann, Ortrun. "Musikpflege in der Herbstresidenz Hubertusburg." In *Schloß Hubertusburg: Werte einer sächsischen Residenz*, pp. 59-66. Edited by Vereins für sächsische Landesgeschichte. Dresden: Vereins für sächsische Landesgeschichte, 1997.
- Landmann, Ortrun. *Namenverzeichnisse der sächsischen Staatskapelle Dresden: Eigene Benennungen, Namen der Administratoren, der Musicalischen Leiter und der ehemaligen Mitglieder von 1548 bis 2013, in systematisch-chronologischer Folge*, accessed September 5, 2017, http://www.staatskapelle-dresden.de/fileadmin/home/pdf/diverses/Historische_Verzeichnisse__Stand_Juli_2017.pdf.
- Lasock, David. "La Riche [Le Richel], François." In *NG2*, vol. 14, pp. 273-274.
- Legl, Frank. "Weiss, Johann Jacob." In *MGG2*, Personenteil 17, cols. 720-721.

- Liedtke, Ulrike. "Johann Joachim Quantz und Friedrich II.: Eine musikalische Verbindung." In *Die Rheinsberger Hofkapelle von Friedrich II.: Musiker auf dem Weg zum Berliner 'Capell-Bedienten'*, pp. 51-86. Edited by U. Liedtke. Rheinsberg: Musikakademie Rheinsberg, 2005.
- Mahling, Christoph-Hellmut. "Con o senza fagotto? Bemerkungen zur Besetzung des 'Bassi' (1740 bis ca. 1780)." In *Florilegium musicologicum: Hellmut Federhofer zum 75. Geburtstag*, pp. 197-208. Edited by C. Mahling. Tutzing: Hans Schneider, 1988.
- Maunder, Richard. *The Scoring of Baroque Concertos*. Woodbridge: Boydell Press, 2004.
- McVeigh, Simon and Jehosh Hirshberg. *The Italian Solo Concerto, 1700-1760: Rhetorical Strategies and Style History*. Woodbridge: Boydell Press, 2004.
- Mellace, Raffaele. *Johann Adolf Hasse*. (Originally published as *Johann Adolf Hasse*, Palermo, 2004) Translated by Juliane Riepe. Beeskow: Ortus Musikverlag, 2016.
- Mennicke, Carl. *Hasse und die Brüder Graun als Symphoniker: Nebst Biographien und thematischen Katalogen*. Leipzig: Breitkopf & Härtel, 1906.
- Mücke, Panja. "Die Festopern im Jagdschloß Hubertusburg: J. A. Hasses Ipermestra am 7.10.1751." In *Johann Adolf Hasse in seiner Zeit: Bericht über das Symposium vom 23. bis 26. März 1999 in Hamburg*, pp. 97-104. Edited by R. Wiesend. Stuttgart: Carus-Verlag, 2006.
- Mücke, Panja. *Johann Adolf Hasses Dresdner Opern im Kontext der Hofkultur*. Laaber: Laaber, 2003.
- Mücke, Panja. "Kulturtransfer und Sängermigration zur Dresdner Oper um 1730." In *Venedig-Dresden: Begegnung zweier Kulturstädte*, pp. 140-153. Edited by A. Henning und B. Marx. Leipzig: Seemann Henschel, 2010.
- Mutschelknauss, Eduard. "Zyka, Zycka, Zicka, Zikka." In *MGG2*, Personenteil 17, cols. 1607-1608.
- Nagler, Alois M. "J. N. Servandoni und F. Bouchers Wirken an der Pariser Oper." In *Bühnenformen-Bühnenräume-Bühnendekorationen: Beiträge zur Entwicklung des Spielorts*, pp. 64-76. Edited by R. Badenhausen and H. Zielske. Berlin: Schmidt, 1974.
- Oleskiewicz, Mary A. *Quantz and the Flute at Dresden: His Instruments, his Repertory and their Significance for the Versuch and the Bach Circle*. Ph. D. diss. Duke University, 1998.
- Oleskiewicz, Mary A. "The Court of Brandenburg-Prussia." In *Music at German Courts, 1715-1760: Changing Artistic Priorities*, pp. 79-130. Edited by Samantha Owens et al. Woodbridge: Boydell, 2011.
- Oleskiewicz, Mary A. "The Flute at Dresden: Ramifications for Eighteenth-century Woodwind Performance in Germany." In *From Renaissance to Baroque: Change in Instruments and Instrumental Music in the Seventeenth Century*, pp. 145-165. Edited by J. P. Wainwright and P. Holman. Aldershot: Ashgate, 2005.
- Owens, Samantha and Barbara M. Reul. "Das gantze Corpus derer musicirenden Personen': An Introduction to German Hofkapellen." In *Music at German Courts, 1715-1760: Changing Artistic Priorities*, pp. 1-14. Edited by Samantha Owens et al. Woodbridge: Boydell, 2011.
- Pape, Winfried and Wolfgang Boettcher. *Das Violoncello: Geschichte, Bau, Technik, Repertoire*. Mainz: Schott, 1996.
- Pelker, Bärbel. "Mannheimer Schule." In *MGG2*, Sachteil 5, cols. 1645-1662.
- Pelker, Bärbel. "Musikalische Akademien am Hof Carl Theodors in Mannheim." In *Die Mannheimer Hofkapelle im Zeitalter Carl Theodors*, pp. 49-58. Edited by L. Finscher. Mannheim: Palatium, 1992.

- Pelker, Bärbel. "The Palatine Court in Mannheim." In *Music at German Courts, 1715–1760: Changing Artistic Priorities*, pp. 131-162. Edited by Samantha Owens et al. Woodbridge: Boydell, 2011.
- Pelker, Bärbel. "Zur Struktur des Musiklebens am Hof Carl Theodors in Mannheim." In *Mozart und Mannheim*, pp. 29-40. Edited by L. Finscher et al. Berlin: Peter Lang, 1994.
- Pilková, Zdeňka. "Böhmische Musiker am Dresdner Hof zur Zeit Zelenkas." In *Zelenka-Studien. I*, pp. 55-64. Edited by T. Kohlhase and H. Unverricht. Kassel: Bärenreiter, 1993.
- Poppe, Gerhard. "Kontinuität oder Neubeginn: Zur Anfangssituation der Ära Hasse in Dresden." In *Johann Adolf Hasse in seiner Zeit: Bericht über das Symposium vom 23. bis 26. März 1999 in Hamburg*, pp. 305-315. Edited by R. Wiesend. Stuttgart: Carus-Verlag, 2006.
- Pozzi, Paola. "Il concerto strumentale italiano alla Corte di Dresda durante la prima metà del settecento." In *Intorno a Locatelli: Studi in occasione del tricentenario della nascita di Pietro Antonio Locatelli—1695-1764*, vol. 2, pp. 953-1037. Edited by A. Dunning. Lucca: Libreria Musicale Italiana, 1995.
- Pozzi, Paola. *Studio sul repertorio strumentale italiano alla corte di Dresda (1697-1756) con particolare attenzione al concerto*. Ph. D. diss. 1995.
- Reich, Wolfgang. "Jan Dismas Zelenka als Schüler von Johann Joseph Fux: Belege und Vermutungen." In *J. J. Fux-Symposium Graz '91: Bericht*, pp. 121-132. Edited by R. Flotzinger. Austria: Akademische Druck- und Verlagsanstalt, 1992.
- Reich, Wolfgang. *Jan Dismas Zelenka: Thematisch-systematisches Verzeichnis der musikalischen Werke (ZWV)*, 2 vols. Dresden: Sächsische Landesbibliothek, 1985.
- Reich, Wolfgang. *Zwei Zelenka-Studien*. Dresden: Sächsische Landesbibliothek, 1987.
- Reilly, Edward R. "Quantz, Johann Joachim." In *New Grove Dictionary of Music and Musicians*, vol. 15, pp. 495-497. Edited by S. Sadie. London: Macmillan Publishers: 1980.
- Ryom, Peter. *Antonio Vivaldi: Thematisch-systematisches Verzeichnis seiner Werke*. Wiesbaden: Breitkopf & Härtel, 2007.
- Schmidt-Hensel, Roland Dieter. *"La musica è del Signor Hasse detto il Sassone": Johann Adolf Hasses "Opere serie" der Jahre 1730 bis 1745: Quellen, Fassungen, Aufführungen*. 2 vols. Göttingen: V & R Unipress, 2009.
- Schneider, Herbert. *Chronologisch-thematisches Verzeichnis sämtlicher Werke von Jean-Baptiste Lully (LWV)*. Tutzing: Schneider, 1981.
- Schreiber, Andreas. *Von der churfürstlichen Cantorey zur Sächsischen Staatskapelle Dresden: Ein biographisches Mitgliederverzeichnis: 1548-2003*. Dresden, 2003.
- Seibel, Gustav Adolph. *Das Leben des Königl. Polnischen und Kurfürstl. Sächs. Hofkapellmeisters Johann David Heinichen: Nebst chronologischem Verzeichnis seiner Opern*. Leipzig: Breitkopf & Härtel, 1913.
- Seifert, Herbert. "Zelenka in Wien." In *Zelenka-Studien. II*, pp. 183-192. Edited by G. Gattermann and W. Reich. Sankt Augustin: Academia, 1997.
- Selfridge-Field, Eleanor. "The Viennese Court Orchestra in the Time of Caldara." In *Antonio Caldara: Essays on his Life and Times*, pp. 115-152. Edited by B. W. Pritchard. Aldershot: Scholar Press, 1987.
- Selfridge-Field, Eleanor. *Venetian Instrumental Music from Gabrieli to Vivaldi*. Oxford: Blackwell, 1975.
- Siegfried, Christina. "Die Gebrüder Graun." In *Die Rheinsberger Hofkapelle von Friedrich II.: Musiker auf dem Weg zum Berliner 'Capell-Bedienten'*, pp. 147-180. Edited by U. Liedtke. Rheinsberg: Musikakademie Rheinsberg, 2005.

- Siegfried, Christina. “Ich bin Komponist: Friedrich II. von Preußen in seinen musikalisch-schöpferischen Kronprinzenjahren in Ruppin und Rheinsberg.” In *Die Rheinsberger Hofkapelle von Friedrich II.: Musiker auf dem Weg zum Berliner 'Capell-Bedienten'*, pp. 51-86. Edited by U. Liedtke. Rheinsberg: Musikakademie Rheinsberg, 2005.
- Smith, Douglas Alton. “A Biography of Silvius Leopold Weiss.” In *Journal of the Lute Society of America* 31 (1998): 1-48.
- Spitzer, John and Neal Zaslaw. *The Birth of the Orchestra: History of an Institution, 1650-1815*. Oxford: Oxford University Press, 2004.
- Stockigt, Janice B. “Bach’s Missa BWV 232¹ in the Context of Catholic Mass Settings in Dresden.” In *Exploring Bach's B-minor Mass*, pp. 39-53. Edited by R. A. Leaver et al. Cambridge: Cambridge University Press, 2013.
- Stockigt, Janice B. *Jan Dismas Zelenka: A Bohemian Musician at the Court of Dresden*. Oxford: Oxford University Press, 2000.
- Stockigt, Janice B. “The Court of Saxony-Dresden.” In *Music at German Courts, 1715–1760: Changing Artistic Priorities*, pp. 17-49. Edited by Samantha Owens et al. Woodbridge: Boydell, 2011.
- Thöming, Anja-Rosa. *Metastasio's Ezio in den Opernfassungen von Johann Adolf Hasse*. In *Händel-Jahrbuch* 45 (1999): 165-172.
- Völker, Anke. “Franz Benda: Lebensstationen eines königlichen Violinisten.” In *Die Rheinsberger Hofkapelle von Friedrich II.: Musiker auf dem Weg zum Berliner 'Capell-Bedienten'*, pp. 107-134. Edited by U. Liedtke. Rheinsberg: Musikakademie Rheinsberg, 2005.
- Voss, Steffen. “Teilsammlungen und ihre Identifizierung.” In *Schranck No: II: Das erhaltene Instrumentalmusikrepertoire der Dresdner Hofkapelle aus den ersten beiden Dritteln des 18. Jahrhunderts*, pp. 31-52. Edited by G. Poppe. Beeskow: Ortus Musikverlag, 2012.
- Wolf, Eugene. “On the Composition of the Mannheim Orchestra, ca. 1740-1778.” In *Basler Jahrbuch für historische Musikpraxis. XVII (1993): Orchesterpraxis in klassischer Zeit*, pp. 113-138. Edited by D. Hoffmann-Axthelm and P. Reidemeister. Winterthur: Amadeus, 1993.
- Würtz, Roland. *Verzeichnis und Ikonographie der kurpfälzischen Hofmusiker zu Mannheim nebst darstellendem Theaterpersonal 1723-1803*. Wilhelmshaven: Heinrichshofen, 1975.
- Zaslaw, Neal. “When is an Orchestra not an Orchestra?” In *Early Music* 16/4 (Nov. 1988): 483-495.
- Żórawska-Witkowska, Alina. “Das Ensemble der italienischen Oper von Antonio Lotti am Hof des Königs von Polen und Kurfürsten von Sachsen August II. Des Starken (1717-1720).” In *Musica Antiqua* 9/1 (1991): 477-504.
- Żórawska-Witkowska, Alina. “Federico Cristiano in Italia: Esperienze musicali di un principe reale polacco.” In *Musica e storia* 4 (1996): 277-323.
- Żórawska-Witkowska, Alina. “The Saxon court of the Kingdom of Poland.” In *Music at German Courts, 1715–1760: Changing Artistic Priorities*, pp. 51-77. Edited by Samantha Owens et al. Woodbridge: Boydell, 2011.
- 荒川恒子、「ザクセン選帝侯国における 1719 年の音楽事情に関する考察—皇太子フリードリヒ・アウグスト 2 世の結婚祝典行事を通じて」、『山梨大学教育人間科学部紀要』第 13 巻 20 号、2011 年、288～301 頁。
- 荒川恒子、「ザクセン選帝侯フリードリヒ・アウグスト 1 世宮廷における音楽事情」、『山梨大学教育人間科学部紀要』第 12 巻 19 号、2010 年、126～134 頁。
- 荒川恒子、「ザクセン選帝侯フリードリヒ・アウグスト 2 世宮廷における音楽事情」、『山梨大学教育人間科学部紀要』第 12 巻 19 号、2010 年、135～143 頁。

クヴァンツ、ヨハン・ヨアヒム『フルート奏法』(Johann Joachim Quantz. *Versuch einer Anweisung, die Flöte traversière zu spielen*. Berlin, 1752) 荒川恒子訳、東京：全音楽譜出版社、2017。

2-2. 楽譜

Ottenberg, Hans-Günter ed. *Fünf Fagottkonzerte: in Dresdner Überlieferung*. Berlin: Ries & Erler, 2012.

Vivaldi, Antonio. *Concerto in Sol minore per violino, 2 flauti, 2 oboi, 2 fagotti, archi e cembalo, F. XII no. 3: "Per l'orchestra di Dresda"*. Edited by A. Ephrikian. Milano: Ricordi, 1947.

謝辞

本論文を執筆するための研究において、惜しめないご指導とご助力を賜りました、指導教官である大角欣矢教授に心より感謝申し上げます。また、指導教員会議や研究発表において貴重なご指摘をして下さった、副指導教官の荒川恒子山梨大学名誉教授、土田英三郎教授、福中冬子教授、西間木真准教授、退官された片山千佳子教授に、謹んで感謝の意を表します。繰り返し草稿の内容の確認と助言を下さいました荒川教授に、重ねて御礼申し上げます。

2014年から2016年にかけて、ドイツのドレスデン工科大学に留学した際には、ハンス＝ギュンター・オッテンベルク Hans-Günter Ottenberg 教授に、一次資料の研究方法を指導して頂きました。オルトルン・ラントマン Ortrun Landmann 博士からはフベルトゥスブルクの資料に関するご意見を、ゲルハルト・ポッペ Gerhard Poppe 教授からは「第2番書棚」に関する知識を、アリーナ・ゾラウスカ＝ヴィトコヴスカ Alina Żórawska-Witkowska 教授からはドレスデン宮廷におけるイタリア人の雇用の情報を、ジャニス・ストックイト Janice B. Stockigt 教授からはドレスデン宮廷楽団の奏者の履歴に関連する知識を、カイ・ケップ Kai Köpp 博士からは楽師長ピゼンデルの筆跡鑑定についてのご助言を賜りました。厚く御礼申し上げます。

ドレスデン中央公文書館のロミー・ハルトマン Romy Hartmann 氏及びザビーネ・エングラー Sabine Engler 氏、ザクセン州立兼大学図書館のバルバラ・ヴィールマン Barbara Wiermann 博士をはじめとする音楽部門の研究者及び司書の皆様は、ドレスデン宮廷楽団に関する興味深い資料を多数紹介して下さいました。ライス・エンゲルホルン博物館附属図書館のディーター・デュマス Dieter Dümas 氏、ベルリン公文書館のシュテファン・ウトパーテル Stephan Utpatel 氏には、ベルリンやマンハイムの宮廷楽団に関する資料の情報を提供して頂きました。狩猟用別邸フベルトゥスブルク観光係のマルティーナ＝エルヴィーラ・ロットマン Martina-Elvira Lotzmann 氏は、開館日ではなかったにも関わら

ず、当別邸を特別に案内して下さり、貴重な情報や資料を提示して下さいました。謹んで感謝申し上げます。

最後に、研究にご協力下さいました全ての方々に心より御礼申し上げますと共に、筆者を支えてくれた友人と家族に感謝致します。

2017年10月

新林 一雄